日汉对照
全译本

こころ

心

[日] 夏目漱石 著　林少华 注译

日本近代文坛巨匠、一代文豪夏目漱石的“后期三部曲”之一。

一场关于人性的戏剧演绎，人性深处的原始悲怆，令人沉思和震撼。

结构严谨、行文流畅、简洁自然，伏笔纵横交错、悬念迭见。通过小说的艺术感染力、细腻的人物心理刻画、死亡的震撼力，加之社会、宗教、伦理和道德等问题的穿插结合，将一个个孤独的灵魂活脱脱地跃然纸上，使人感觉有血有肉，真实可信。



中国宇航出版社

VISIT...

LANZAROTE Caliente.com

日汉对照
全译本

こころ

心

[日] 夏目漱石 著　林少华 注译

日本近代文坛巨匠、一代文豪夏目漱石的“后期三部曲”之一。

一场关于人性的戏剧演绎，人性深处的原始悲怆，令人沉思和震撼。

结构严谨、行文流畅、简洁自然，伏笔纵横交错、悬念迭见。通过小说的艺术感染力、细腻的人物心理刻画、死亡的震撼力，加之社会、宗教、伦理和道德等问题的穿插结合，将一个个孤独的灵魂活脱脱地跃然纸上，使人感觉有血有肉，真实可信。

中国宇航出版社

こころ

心

日汉对照全译本

[日]夏目漱石　著
林少华　注译

中国宇航出版社

版权所有　侵权必究

图书在版编目（CIP）数据

心：日汉对照全译本：日汉对照/（日）夏目漱石著；林少华注译．--北京：中国宇航出版社，2013.6

（世界文学经典珍藏馆）

ISBN 978-7-5159-0438-2

I．①心…　II．①夏…②林…　III．①日语—汉语—对照读物②长篇小说—日本—现代　IV．①H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字（2013）第128388号

策划编辑　于　慧

封面设计　文道思

责任编辑　刘　莹　刘东雪

责任校对　满新茹　郭晓晓

出　版
发　行　中国宇航出版社

社　址　北京市阜成路8号

邮　编　100830

（010）68768548

网　址　www.caphbook.com

经　销　新华书店

发行部　（010）68371900　（010）88530478（传真）

（010）68768541　（010）68767294（传真）

零售店　读者服务部　北京宇航文苑

（010）68371105　（010）62529336

承　印　北京中科印刷有限公司

版　次　2013年6月第1版　2013年6月第1次印刷

规　格　880×1230

开　本　1/32

印　张　17.5

字　数　420千字

书　号　ISBN 978-7-5159-0438-2

定　价　36.80元

本书如有印装质量问题，可与发行部联系调换

夏目漱石和他的作品
（译序）

林少华

除了对职业教师，日本人一般不以“先生”称呼别人，对文学家也是这样。但对夏目漱石是个例外，习惯上称为“漱石先生”，大约同我们中国人习惯上称鲁迅为“鲁迅先生”相若。较之客气，这里边显然含有尊之为师的敬意。实际上，夏目漱石在日本人心目中的地位也同鲁迅在中国人心目中的地位差不多。但鲁迅研究，无论在中国还是在日本都属于显学。不仅《鲁迅全集》被一篇不少地译成了日文，《故乡》还被收入了日本中学“国语”（语文）教科书——不知道鲁迅先生的日本人估计占不到多数。但相比之下，夏目漱石在中国就没有那么幸运了（当然个中原因多多，很难单纯比较）。人们或许知晓川端康成和大江健三郎，但知道漱石的，除了大学中文、外文系师生和文学爱好者，恐怕不会有多少人。

然而毫无疑问，漱石是日本近代文学史上一座卓然特立的高峰。他活跃的二十世纪初期（明治与大正之交），日本文坛可谓群星灿烂。就小说家来说就有森鸥外、岛崎藤村（亦是诗人）、田山花袋、正宗白鸟、永井荷风等人。但作品至今仍为人津津乐道的，说得夸张些，恐怕唯漱石一人而已。难怪被日本人称为“国民大作家”，其头像赫然印在日本千元纸钞的正面，人们几乎无日不同这位大作家“打交道”。

夏目漱石，原名夏目金之助，一八六七年（庆应三年）生于江户（现东京）一小吏家庭，十四岁入二松学舍系统学习“汉籍”（中国古

籍），浸润了东方美学观念和儒家伦理思想，奠定了日后文学观和人生观的基础。写“汉诗”（汉语古诗）是其终生爱好和精神寄托。“漱石”之名，即出自《晋书·孙楚传》中“漱石枕流”之句。二十一岁就读于第一高等中学本科，二十三岁入东京帝国大学（现东京大学）英文专业学习。其间因痛感东西方文学观的巨大差异而陷入极度的精神苦闷之中。一八九五年赴爱媛县松山中学任教，为日后《哥儿》的创作积累了素材。翌年转赴熊本县任高等中学讲师。一八九九年赴英国留学三年，学习英国文学和教学法。回国后先后在东京第一高等中学和东京帝大讲授英文，同时开始文学创作，发表了长篇小说《我是猫》，并一举成名。一九〇七年进入朝日新闻社任小说专栏作家，为《朝日新闻》写连载小说，一直笔耕不辍，直至一九一六年（大正五年）因胃溃疡去世。是年仅四十九岁。

漱石从事文学创作的时间并不很长，从三十八岁发表《我是猫》到四十九岁去世，也就是十年多一点时间，却给世人留下了大量有价值的作品。他步入文坛之时，自然主义文学已开始在日本流行，很快发展成为文坛主流。不过日本的自然主义不完全同于以法国作家左拉为代表的欧洲自然主义，缺乏波澜壮阔的社会场景，缺乏直面现实的凌厉气势，缺乏粗犷遒劲的如椽文笔，而大多囿于个人生活及其周边环境的狭小天地，乐此不疲地直接暴露其中阴暗丑恶的部位和不无龌龊的个人心理，开后来风靡文坛（直至今日）的“私小说”“心境小说”的先河。具有东西方高度文化素养的漱石从一开始便同自然主义文学背道而驰，而以更广阔的视野、更超拔的高度、更有责任感而又游刃有余的态度对待世界和人生，同森鸥外一并被称为既反自然主义又有别于“耽美派”和“白桦派”的“高踏派”“余裕派”，是日本近代文学真正的确立者和一代文学翘楚。随着漱石一九一六年去世及其《明暗》的中途绝笔，日本近代文学也就落下了帷幕。

以行文风格和主要思想倾向划线，作品可分为明快、“外向”型和沉郁、“内向”型两类。前者集中于创作初期，以《我是猫》

（1905）、《哥儿》（1906）为代表，旁及《草枕》（1906）和《虞美人草》（1907）。在这类作品中，作者主要从理性和伦理的角度对现代文明提出质疑和批评。犀利的笔锋直触“文明”的种种弊端和人世的般般丑恶。语言如风行水上，流畅明快；幽默如万泉自涌，酣畅淋漓；妙语随机生发，警句触目皆是，颇有嬉笑怒骂皆成文章之势。后者则分布于创作中期和后期，主要作品有《三四郎》《其后》《门》（前期三部曲）和《彼岸过迄》《行人》《心》（后期三部曲），以及绝笔之作《明暗》。在这类作品中，作者收回伸向社会的笔锋，转而指向人的内心，发掘近代人内心世界的不安、烦恼和苦闷，尤其注重剖析近代知识分子的“自我”、无奈与孤独，竭力寻觅超越“自我”、自私而委身于“天”的自在和谐之境（“则天去私”），表现出一个作家应有的社会责任感和执著、严肃的人生态度。

这里，从两类作品中各选一部代表作。《哥儿》通过一个不谙世故、坦率正直的鲁莽哥儿踏入社会后同周围俗物展开的种种戏剧性冲突，辛辣而巧妙地讽刺了社会上的丑恶现象，鞭挞了卑鄙、权术和虚伪，赞美了正义、直率和纯真。行文流畅，节奏明快，形象鲜明。通篇如坂上走丸，一气流注，而寓庄于谐，妙趣横生，至今仍是脍炙人口的作品，实为日本近代文学作品中不可多得的佳作。《心》则多少带有现今所说的推理色彩。“我”认识了一位“先生”，后来接得“先生”一封长信（其时“先生”已不在人世），信中讲述了“先生”在大学时代同朋友K一同爱上房东漂亮的独生女儿。“先生”设计使K自杀，自己如愿以偿。但婚后时常遭受良心和道义的谴责，最后也自杀而死。小说以徐缓沉静而又撼人心魄的笔致，描写了爱情与友情的碰撞、利己之心与道义之心的冲突，凸现了日本近代知识分子矛盾、怅惘、无助、无奈的精神世界，同时提出了一个严肃的人生课题。这部长篇可以说是漱石最为引人入胜的作品，至今仍跻身于日本中学生最喜欢读的十部作品之列。说得极端一点，假如没有《哥儿》和《心》，漱石能否“活”到今天还真是个疑问。

日本小说家中，较之诺贝尔文学奖获得者川端康成和大江健三郎，我更喜欢另外两个人：一个就是夏目漱石，一个是当代的村上春树。差不多二十年前在北国读研究生的时候，漱石全集便读了一集又一集；而村上的小说，近年来则译了一本又一本。粗想之下，两人之间虽时隔八十余年，但确有若干共同点。一是态度的认真与坦诚。两人都认真对待人生和社会，不伪善，不矫情，不故弄玄虚，不掩饰自己。二是笔调的幽默和机警。一些作品都富于理性的、机智的、有教养的幽默感。外国有人称村上春树为“当代的夏目漱石”，想必主要着眼于这一点。三是描写对象大多都是都市里的小人物尤其是知识分子，都以传达其孤独、无奈、充满失落感的心态见长，而且两人同样是游离于文坛主流而独树一帜、别开生面的作家。

正因为喜欢，多年来一直想将适合日语专业大学生课外阅读的《哥儿》和《心》这两篇以日汉对译形式另行付梓。而今承蒙中国宇航出版社好意，终于得遂夙愿。人生快事，教师之乐，莫过于此。

关于注释，主要根据本科三四年级的学力就词汇和语法之偏难者附以底注。释义参考了角川书店昭和49年版“日本近代文学大系”之《夏目漱石集》中的注释和有关辞书，亦多少有我个人的理解。包括译文在内，未必精当，谨资参考，欢迎指正。

最后我想说的是，此书二〇〇八年出了平装本，转眼五年过去。今天您手中的精装本无论译注内容还是版式设计都较平装本有了明显改进。尤其译注方面，责任编辑刘东雪的一丝不苟使之避免了不少疏漏或欠妥之处，在此谨致诚挚的谢意。如果说一本书是一只小船，那么出版社就是一座码头。现在，小船终于离开码头扬帆起航了。但愿这只小船带给您一丝惊喜、一分收获。

2013年3月25日于窥海斋

时青岛垂柳初绿迎春花开

目录

夏目漱石和他的作品（译序）

上　先生と私

中　両親と私

下　先生と遺書

上　先生与我

中　双亲与我

下　先生与遗书

上　先生と私

1

私わたくしはその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚はばかる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記き憶おくを呼び起すごと[1]に、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執とっても心持は同じ事である。よそよそしい[2]頭かしら文も字じ[3]どはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌かま倉くらである。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端は書がきを受け取ったので、私は多少の金を工く面めん[4]して、出掛ける事にした。私は金の工面に二に、三さん日ちを費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電でん報ぽうを受け取った。電報には母が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強しいられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝かん心じん[5]の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼は固もとより帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大だい分ぶ日ひ数かずがあるので鎌倉におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留とまる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に

不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に恰かっ好こうな宿を探す面倒ももたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺へん鄙ぴな方角にあった。玉たま突つきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い畷なわてを一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別べっ荘そうはそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至し極ごく(6)便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻くすぶり返った藁わら葺ぶきの間あいだを通り抜けて磯いそへ下りると、この辺へんにこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭せん湯とうのように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裹つつまれて、砂の上に寝ねそべってみたり、膝ひざ頭がしらを波に打たしてそこいらを跳はね廻まわるのは愉快であった。

私は実に先生をこの雑ざっ沓とうの間あいだに見付け出したのである。その時海岸には掛かけ茶ぢゃ屋やが二軒あった。私はふとした機会はずみから(7)その一軒の方に行き慣なれていた。長は谷せ辺へんに大きな別荘を構えている人と違って、各自めいめいに専有の着き換がえ場ばを拵こしらえていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といった風ふうなものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外ほかに、ここで海かい水すい着ぎを洗濯させたり、ここで鹹しおはゆい身体からだを清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあったので、私は海へはいるたびに

その茶屋へ一切を脱ぬぎ棄すてる事にしていた。

2

私わたくしがその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところ[(8)]であった。私はその時反対に濡ぬれた身体からだを風に吹かして[(9)]水から上がって来た。二人の間あいだには目を遮さえぎる幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り[(10)]、私はついに先生を見み逃のがしたかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放ほう漫まんであったにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴つれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮ひ膚ふの色が、掛茶屋へ入るや否いなや、すぐ私の注意を惹ひいた。純粋の日本の浴衣ゆかたを着ていた彼は、それを床しょう几ぎの上にすぽりと放ほうり出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿はく猿さる股また一つの外ほか何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不ふ思し議ぎだった。私はその二日前に由井ゆいが浜はままで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻しりをおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍わきがホテルの裏口になっていたので、私の凝じっとしている間あいだに、大だい分ぶ多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股ももは出していなかった。女は殊こと更さら肉を隠しがちであった。大抵は頭に護ゴ謨ム製せいの頭ず巾きんを被かぶって、海え老び茶ちゃや紺こんや藍あいの色を波間に浮かしていた。そういう有様を目もく撃げきしたばかりの私の眼めには、猿股一つで済まして皆みんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一ひと言こと二ふた言こと何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手て拭ぬぐいを拾い上げているところ[(11)]であったが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であった。

私は単に好こう奇き心しんのために、並んで浜辺を下りて行く二人の後うしろ姿すがたを見守っていた。すると彼らは真まっ直すぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠とお浅あさの磯いそ近ちかくにわいわい騒いでいる多た人にん数ずの間あいだを通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一いっ直ちょく線せんに浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行った後あと、私はやはり元の床しょう几ぎに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった[(12)]。しかしどうしてもいつどこで会った人か想おもい出せずにしまった。

その時の私は屈くっ托たく[(13)]がないというよりむしろ無ぶ聊りょうに苦しんでいた。それで翌あくる日ひもまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛かけ茶ぢゃ屋やまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦むぎ藁わら帽ぼうを被かぶってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手て拭ぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴よく客かくの中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追い掛けたくなった。私は浅い水を頭の上まで跳はねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目め標じる

しに抜ぬき手でを切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧こ線せんを描えがいて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸おかへ上がって雫しずくの垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

3

私わたくしは次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超ちょう然ぜんとして来て、また超然と帰って行った。周囲がいくら賑にぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初いっしょに来た西洋人はその後ごまるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。

或ある時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぬぎ棄すてた浴衣ゆかたを着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振ふるった。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙すき間まから下へ落ちた。先生は白しろ絣がすりの上へ兵へ児こ帯おびを締めてから、眼鏡の失なくなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰こし掛かけの下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといって、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後あとにつづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ちょう[14]ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼あおい海の

表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外ほかになかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充みちた筋肉を動かして海の中で躍おどり狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已やめて仰向けになったまま浪なみの上に寝た。私もその真ま似ねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛つう烈れつな色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿し勢せいを改めた先生は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快こころよく[15]答えた。そうして二人でまた元の路みちを浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇こん意い[16]になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中なか二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛かけ茶ぢゃ屋やで出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大だい分ぶ長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄たくわえていなかった。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極きまりが悪くなった。「先生は?」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境けい内だいにある別べっ荘そうのような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解わかった。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口くち癖くせだといって弁解した。私はこの間の西

洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風ふう変がわり[17]のところや、もう鎌かま倉くらにいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交つき際あいをもたないのに、そういう外国人と近ちか付づきになったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持っていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈ちん吟ぎんしたあとで、「どうも君の顔には見み覚おぼえがありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失しつ望ぼうを感じた。

4

私わたくしは月の末に東京へ帰った。先生の避ひ暑しょ地ちを引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜よござんすか」と聞いた。先生は単たん簡かんに[18]ただ「ええいらっしゃい」といっただけであった。その時分の私は先生とよほど懇こん意いになったつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かかったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷いためた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽けい微びな失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺うごかされるたびに、もっと前へ進みたくなった。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思った。私は若かった。けれどもすべての人間に対

して、若い血がこう素す直なおに働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解わからなかった。それが先生の亡くなった今こん日にちになって、始めて解って来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかったのである。先生が私に示した時々の素そっ気けない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする[19]不快の表現ではなかったのである。傷いたましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止よせという警告を与えたのである。他ひとの懐かしみに応じない先生は、他ひとを軽けい蔑べつする前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日ひ数かずがあるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経たつうちに、鎌かま倉くらにいた時の気分が段々だんだん薄くなって来た。そうしてその上に彩いろどられる大都会の空気が、記憶の復ふっ活かつに伴う強い刺し戟げきと共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊きん張ちょうとを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛たるみができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室へやの中を見み廻まわした。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなった。

始めて先生の宅うちを訪ねた時、先生は留守であった。二度目に行ったのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁しみ込むように感ぜられる好いい日ひ和よりであった。その日も先生は留守であった。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大たい抵てい宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出し

て、理わ由けもない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかった。下げ女じょの顔を見て少し躊ちゅう躇ちょしてそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内うちへはいった。すると奥さんらしい人が代って出て来た。美しい奥さんであった。

私はその人から鄭てい寧ねいに先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑ぞう司しヶが谷やの墓地にある或ある仏へ花を手た向むけ[20]に行く習慣なのだそうである。「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気きの毒どくそうにいってくれた。私は会え釈しゃくして外へ出た。賑かな町の方へ一丁ちょうほど歩くと、私も散歩がてら[21]雑ぞう司しヶが谷やへ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好こう奇き心しんも動いた。それですぐ踵きびすを回めぐらした[22]。

5

私わたくしは墓地の手前にある苗なえ畠ばたけの左側からはいって、両方に楓かえでを植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端はずれに見える茶ちゃ店みせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡の縁ふちが日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森しん閑かんとした昼の中うちに異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応こたえられなくなった。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈しずんでいた。けれどもその表情の中うちには判はっ然きりいえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得とく心しん[23]したらしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解わからなかった。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依イ撒サ伯ベ拉ラ何なに々なに[24]の墓だの、神しん僕ぼくロギンの墓だのという傍かたわらに、一いっ切さい衆しゅ生じょう悉しつ有う仏ぶっ生しょうと書いた塔とう婆ばなどが建ててあった。全権公使何々というのもあった。私は安得烈と彫ほり付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしょう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といって先生は苦く笑しょうした。

先生はこれらの墓標が現わす人ひと種さま々ざまの様式に対して、私ほどに滑こっ稽けいもアイロニー[25]も認めてないらしかった。私が丸い墓はか石いしだの細長い御み影かげの碑ひだのを指して、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまいに「あなたは死という事実をまだ真ま面じ目めに考えた事がありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何

ともいわなくなった。

　墓地の区切り目に、大きな銀い杏ちょうが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、「もう少しすると、綺き麗れいですよ。この木がすっかり黄こう葉ようして、ここいらの地面は金きん色いろの落葉で埋うずまるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

　向うの方で凸でこ凹ぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鍬くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

　これからどこへ行くという目あ的てのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行った。先生はいつもより口数を利きかなかった。それでも私はさほどの窮きゅう屈くつを感じなかったので、ぶらぶらいっしょに歩いて行った。

　「すぐお宅へお帰りですか」

　「ええ別に寄る所もありませんから」

　二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

　「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利きき出だした。

　「いいえ」

　「どなたのお墓があるんですか。——ご親しん類るいのお墓ですか」

　「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちょうほど歩いた後あとで、先生が不意にそこへ戻って来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかった。

6

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在ざい宅たくであった。先生に会う度ど数すうが重なるにつれて、私はますます繁しげく[26]先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になったその後のちも、あまり変りはなかった。先生は何時いつも静かであった。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであった。私は最初から先生には近づきがたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいられないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後のちになって事実の上に証しょう拠こ立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬ば鹿かげていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉しく思っている。人間を愛し得うる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところに入いろうとするものを、手をひろげて抱だき締しめる事のできない人、——これが先生であった。

今いった通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇くもりがその顔を横切る事があった。窓に黒い鳥影が射さすように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉み間けんに認めたのは、雑ぞう司しヶが谷やの墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であった。私はその異い様ようの瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮ちょう流りゅうをちょっと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結けっ滞たいに過ぎなかった。私の心は五分と経たたないうちに平へい素その弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小こ春はる[27]の尽きるに間まのない或ある晩の事であった。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀い杏ちょうの大たい樹じゅを眼めの前に想おもい浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例れいとして墓参に行く日が、それからちょうど三日目に当っていた。その三日目は私の課業が午ひるで終おえる楽な日であった。私は先生に向かってこういった。

「先生雑ぞう司しヶが谷やの銀杏はもう散ってしまったでしょうか」

「まだ空から坊ぼう主ずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守った。そうしてそこからしばし眼を離さなかった。私はすぐいった。

「今度お墓はか参まいりにいらっしゃる時にお伴ともをしても宜よござんすか。私は先生といっしょにあすこいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすったらちょうど好いいじゃありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といって、どこまでも墓ぼ参さんと散歩を切り離そうとする風ふうに見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いいからいっしょに伴つれて行って下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉まゆがちょっと曇った。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌けん悪おとも畏怖いふとも片付けられない微かすかな不安らしいものであった。私は忽たちまち(28)雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があって、他ひとといっしょにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さいさえまだ伴れて行った事がないのです」

7

私わたくしは不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅うちへ出で入いりをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊たっとむべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交つき際あいができたのだと思う。もし私の好奇心が幾いく分ぶんでも先生の心に向かって、研究的に働き

掛けたなら、二人の間を繋つなぐ同情の糸は、何の容よう赦しゃ[29]もなくその時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞっとする[30]。先生はそれでなくても、冷たい眼まなこで研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅うちへ行くようになった。私の足が段々繁しげくなった時のある日、先生は突然私に向かって聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でといって、そんな特別な意味はありません。――しかしお邪じゃ魔まなんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷めい惑わくという様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極きわめて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃ころ東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座ざ敷しきで同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆みんな私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋さびしい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといって聞いたのです」

「そりゃまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の

顔を見て「あなたは幾歳いくつですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不ふ得とく要よう領りょうのものであったが、私はその時底そこまで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否いなや(31)笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外ほかの人からこういわれたらきっと癪しゃく(32)に触さわったろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癪に触らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は淋さびしい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによると(33)あなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくっても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょう。動けるだけ動きたいのでしょう。動いて何かに打ぶつかりたいのでしょう……」

「私はちっとも淋さむしくはありません」

「若いうちほど淋さむしいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅うちへ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰くり返かえされた。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋さびしい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根ね元もとから引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外ほかの

方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういって淋しい笑い方をした。

8

幸さいわいにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私わたくしは、この予言の中うちに含まれている明白な意義さえ了解し得なかった[(34)]。私は依然として先生に会いに行った。その内うちいつの間にか先生の食卓で飯めしを食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経けい過かして来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが源げん因いんかどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かって多く働くだけであった。先生の奥さんにはその前玄げん関かんで会った時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれといってとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかったのだと解かい釈しゃくする方が正当かも知れない。しかし私はいつでも先生に付ふ属ぞくした一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除のければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じ

も残っていない。

　ある時私は先生の宅うちで酒を飲まされた。その時奥さんが出て来て傍そばで酌しゃくをしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑のみ干した盃さかずきを差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後あと、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺き麗れいな眉を寄せて、私の半分ばかり注ついで上げた盃を、唇の先へ持って行った。奥さんと先生の間に下しものような会話が始まった。

「珍らしい事。私に呑めとおっしゃった事は滅めっ多たにないのにね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀たまには飲むといいよ。好いい心持になるよ」

「ちっともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは大変ご愉ゆ快かいそうね、少しご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好いから」

　先生の宅うちは夫婦と下げ女じょだけであった。行くたびに大

たい抵ていはひそり[35]としていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或ある時は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同どう情じょうも起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「一人貰もらってやろうか」と先生がいった。

「貰もらいッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経たったってできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天てん罰ばつだからさ」といって高く笑った。

9

私わたくしの知る限り先生と奥さんとは、仲の好いい夫婦の一いっ対ついであった。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解わからなかったけれども、座敷で私と対たい坐ざしている時、先生は何かのついでに、下げ女じょを呼ばないで、奥さんを呼ぶ事があった。（奥さんの名は静しずといった）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなはだ素直であった。ときたまご馳ち走そうになって、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間あ

いだに描えがき出されるようであった。

先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの[36]芝居だのに行った。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あった。私は箱はこ根ねから貰った絵え端は書がきをまだ持っている。日にっ光こうへ行った時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰った。

当時の私の眼に映った先生と奥さんの間あいだ柄がらはまず[37]こんなものであった。そのうちにたった一つの例外があった。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋じん常じょうの談話でなくって、どうも言い逆さかいらしかった。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になっているので、格こう子しの前に立っていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分った。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まって来る男の方の声で解った。相手は先生よりも低い音おんなので、誰だか判はっ然きりしなかったが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあった。私はどうしたものだろうと思って玄関先で迷ったが、すぐ決心をしてそのまま下げ宿しゅくへ帰った。

妙に不安な心持が私を襲おそって来た。私は書物を読んでも呑のみ込む能力を失ってしまった。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといって、下から私を誘った。先さっ刻き帯の間へ包くるんだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであった。私は帰ったなりまだ袴はかまを着けていた。私はそれなり[38]すぐ表へ出た。

その晩私は先生といっしょに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であった。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒ぼう険けんのできない人であっ

た。

「今日は駄目だめです」といって先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先さっ刻きの事が引ひっ懸かかっていた。肴さかなの骨が咽の喉どに刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よかろうかと思い直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下くだらない神経を昂こう奮ふんさせてしまったんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤ご解かいするのです。それを誤解だといって聞かせても承しょう知ちしないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及およば

ない問題であった。

10

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁ちょうも二丁もつづいた。その後あとで突然先生が口を利きき出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻さいはさぞ[39]心配をしているだろう。考えると女は可か哀わいそうなものですね。私わたくしの妻などは私より外ほかにまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちょっとそこで途と切ぎれたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移って行った。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑こっ稽けいだが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中ちゅう位ぐらいに見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無む言ごんで歩き出した。

先生の宅うちへ帰るには私の下宿のつい[40]傍そばを通るのが順路であった。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気がした。「ついでにお宅たくの前までお伴ともしましょうか」といった。先生は忽たちまち手で私を遮さえぎった。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も早く帰ってやるんだから、妻さい君くんのために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にそ

の時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安あん心しんして寝る事ができた。私はその後ごも長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかった。

先生と奥さんの間に起った波は瀾らんが、大したものでない事はこれでも解わかった。それがまた滅めっ多たに起る現象でなかった事も、その後絶えず出で入いりをして来た私にはほぼ推すい察さつができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一いっ対ついであるべきはずです」

私は今前後の行ゆき掛がかり[41]を忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判はっ然きりいう事ができない。けれども先生の態度の真ま面じ目めであったのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響ひびいた[42]のは、「最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断わったのか。私にはそれだけが不ふ審しんであった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事実はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中うちで疑うたぐらざるを得なかった。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬ほうむられてしまった。

私はそのうち先生の留守に行って、奥さんと二人差さし向むかいで話をする機会に出合った。先生はその日横よこ浜はまを出

しゅっ帆ぱんする汽船に乗って外国へ行くべき友人を新しん橋ばしへ送りに行って留守であった。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃ころの習慣であった。私はある書物について先生に話してもらう必要があったので、あらかじめ先生の承しょう諾だくを得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に来た友人に対する礼れい義ぎとしてその日突然起った出来事であった。先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているようにといい残して行った。それで私は座敷へ上がって、先生を待つ間、奥さんと話をした。

11

その時の私わたくしはすでに大学生であった。始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとずっと成人した気でいた。奥さんとも大だい分ぶ懇意になった後のちであった。私は奥さんに対して何の窮きゅう屈くつも感じなかった。差さし向むかいで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでたった一つ私の耳に留まったものがある。しかしそれを話す前に、ちょっと断ことわっておきたい事がある。

先生は大学出身[(43)]であった。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ帰って少し経たってから始めて分った。私はその時どうして遊んでいられるのかと思った。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であった。だから先生の学問や思想については、先生と密みっ切せつの関係をもっている私より外ほかに敬意を払うもののあるべきはずがなかった。それを私は常に惜おしい事だといった。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利きいては済まない」と答えるぎりで、取り

合わなかった。私にはその答えが謙けん遜そん過ぎてかえって世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生は時々昔の同級生で今著名になっている誰だれ彼かれを捉とらえて、ひどく無ぶ遠えん慮りょな批評を加える事があった。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云うんぬんしてみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである。その時先生は沈しずんだ調子で、「どうしても私は世間に向かって働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」といった。先生の顔には深い一種の表ひょう情じょうがありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解わからなかったけれども、何しろ二の句の継げない[44]ほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかった。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄だ目めですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下くだらない事だと悟っていらっしゃるんでしょうか」

「悟るの悟らないのって、――そりゃ女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいてできないんです。だから気きの毒どくですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解わからないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同どう情じょうがあった。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真ま面じ目めだった。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっしゃったんですか」

奥さんは急に薄うす赤あかい顔をした。

12

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは「本当いうと合あいの子こなんですよ」といった。奥さんの父親はたしか鳥とっ取とりかどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸といった時じ分ぶんの市いちヶが谷やで生れた女なので、奥さんは冗談半分そういったのである。ところが先生は全く方角違いの新にい潟がた県人であった。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の

関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

　先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情じょう操そうに触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何ものも聞き得なかった。私は時によると、それを善ぜん意いに解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶なまめかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎つつしんでいるのだろうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因いん襲しゅうのうちに成人したために、そういう艶つやっぽい問題になると、正直に自分を開かい放ほうするだけの勇気がないのだろうと考えた。もっともどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮か定ていしていた。

　私の仮定ははたして誤らなかった。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描えがき得たに過ぎなかった。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲ひ劇げきを持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見み惨じめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破は壊かいする前に、まず自分の生命を破壊してしまった。

　私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先さっ刻きいった通りであった。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。奥さんは慎つつしみのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或ある時花はな時じ分ぶんに私は先生といっしょに上うえ野のへ行った。そうしてそこで美しい一いっ対ついの男なん女にょを見た。彼らは睦むつまじそうに寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙そばだてている人が沢山あった。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲が好よさそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかった。二人の男女を視線の外ほかに置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷ひや評かしました[45]ね。あの冷ひや評かしのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不ふ快かいの声が交まじっていましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもっと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪ざい悪あくですよ。解わかっていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

13

我々は群ぐん集しゅうの中にいた。群集はいずれも嬉しそうな顔をしていた。そこを通とおり抜ぬけて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私わたくしがその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気ごきは前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとっくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案あん外がいに空虚であった。思いあたる(46)ようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上のぼる楷かい段だんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があって、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実じっ際さいお気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳みみを貸かさなかった(47)。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛しばられた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦もう朧ろうとしてよく解わからなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪悪という意味をもっと判はっ然きりいって聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判はん然ぜん解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真ま実ことを話している気でいた。ところが実際は、あなたを焦じ慮らしていたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯うぐいす渓だにの方角に静かな歩調で歩いて行った。垣の隙すき間まから広い庭の一部に茂る熊くま笹ざさが幽ゆう邃すいに見えた。

「君は私がなぜ毎月雑ぞう司しヶが谷やの墓地に埋うまっている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であった。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承しょう知ちしていた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこういった。

「また悪い事をいった。焦じ慮らせるのが悪いと思って、説明しようとすると、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止やめましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神しん聖せいなものですよ」

私には先生の話がますます解わからなくなった。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかった。

14

年の若い私わたくしはややともすると[48]一いち図ずになりやすかった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有ゆう益えきなのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まり

[49]をいえば、教壇に立って私を指し導どうしてくれる偉い人々よりもただ独ひとりを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。

「あんまり逆の上ぼせちゃいけません」と先生がいった。

「覚さめた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯うけがってくれなかった。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽けい薄はくに思われているんですか。それほど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぽたぽた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があった。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生いけ垣がきの向うで金魚売りらしい声がした。その外ほかには何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁ちょうも深く折れ込んだ小こう路じは存ぞん外がい静かであった。家うちの中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間まに奥さんのいる事

を知っていた。黙って針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避さけた。

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっているのです。自分を呪のろうより外ほかに仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょう」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなったんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどって行きたかった。すると襖ふすまの陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちょっと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起ったのか、私には解わからなかった。それを想像する余よ裕ゆうを与えないほど早く先生はまた座敷へ帰って来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後こう悔かいするから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復ふく讐しゅうをするようになるものだから」

「そりゃどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとするのです。私

は未来の侮ぶ辱じょくを受けないために、今の尊敬を斥しりぞけたい[(50)]と思うのです。私は今より一層淋さびしい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我が慢まんしたいのです。自由と独立と己おのれとに充みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚かく悟ごをもっている先生に対して、いうべき言葉を知らなかった。

15

その後ご私わたくしは奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対しても始終こういう態たい度どに出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極きめようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接せっ触しょくする機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋じん常じょうであったから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅めっ多たに顔を合せなかったから。

私の疑ぎ惑わくはまだその上にもあった。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内ない省せいしたり現代を観察したりした結果なのだろうか。先生は坐すわって考える質たちの人であった。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐って世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷れい却きゃくし切った石せき造ぞう家屋の輪りん廓かくとは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏まとめ上げた主義の裏には、強い事実が織おり込こまれているらしかった。自分と切り離された他

人の事実でなくって、自分自身が痛つう切せつに味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推すい測そくするがものはない[51]。先生自身すでにそうだと告こく白はくしていた。ただその告白が雲の峯みねのようであった。私の頭の上に正しょう体たい[52]の知れない恐ろしいものを蔽おおい被かぶせた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解わからなかった。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震ふるわせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或ある強烈な恋愛事件を仮か定ていしてみた。（無論先生と奥さんとの間に起った）。先生がかつて恋は罪悪だといった事から照てらし合あわせて見ると、多少それが手て掛がかりにもなった。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭えん世せいに近い覚悟が出ようはずがなかった。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとする」といった先生の言葉は、現代一般の誰たれ彼かれについて用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようでもあった。

雑ぞう司しヶが谷やにある誰だか分らない人の墓、――これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨さまたげる魔物のようであった。

　そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならない時機が来た。その頃ころは日の詰つまって行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌はだ寒さむの季節であった。先生の附ふ近きんで盗難に罹かかったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵よいの口くち[53]であった。大したものを持って行かれた家うちはほとんどなかったけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは気味きみ[54]をわるくした。そこへ先生がある晩家を空あけなければならない事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉ほう職しょくしているものが上京したため、先生は外ほかの二、三名と共に、ある所でその友人に飯めしを食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

16

　私わたくしの行ったのはまだ灯ひの点つくか点かない暮れ方であったが、几き帳ちょう面めんな先生はもう宅うちにいなかった。「時間に後おくれると悪いって、つい今しがた出掛けました」といった奥さんは、私を先生の書しょ斎さいへ案内した。

　書斎には洋机テーブルと椅子の外に、沢山の書物が美しい背せ皮がわを並べて、硝子ガラス越ごしに電でん燈とうの光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座ざ蒲ぶ団とんの上へ私を坐すわらせて、「ちっとそこいらにある本でも読んでいて下さい」と断って出て行った。私はちょうど主人の帰りを待まち受うける客のような気がして済まなかった。私は畏かしこまったまま烟草タバコを飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下げ女じょに話している声が聞こえた。書斎は茶の間の縁えん側がわを突き当って折れ曲った角かどにあるので、棟むねの位置からいうと、座敷よりもかえって掛け離れた静かさを領りょうしていた。ひとしきり[55]で奥さんの話

し声が已やむと、後あとはしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝じっとしながら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書しょ斎さいの入口へ顔を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿しか爪つめらしく(56)控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮きゅう屈くつでしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退たい屈くつでしょう」

「いいえ。泥どろ棒ぼうが来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅こう茶ちゃ茶ぢゃ碗わんを持ったまま、笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好よくありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもっと真中へ出て来て頂ちょう戴だい。ご退たい屈くつだろうと思って、お茶を入れて持って来たんですが、茶の間で宜よろしければあちらで上げますから」

私は奥さんの後あとに尾ついて書斎を出た。茶の間には綺き麗れいな長なが火ひ鉢ばちに鉄てつ瓶びんが鳴っていた。私はそこで茶と菓子のご馳ち走そうになった。奥さんは寝ねられないといけないといって、茶碗に手を触れなかった。

「先生はやっぱり時々こんな会へお出で掛かけになるんです

か」

「いいえ滅多めったに出た事はありません。近ちか頃ごろは段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」

こういった奥さんの様子に、別段べっだん[57]困ったものだという風ふうも見えなかったので、私はつい大胆になった。

「それじゃ奥さんだけが例れい外がいなんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりゃ嘘です」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになったから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方かただけあって、なかなかお上じょう手ずね。空からっぽな理り屈くつを使いこなす事が。世の中が嫌いになったから、私までも嫌いになったんだともいわれるじゃありませんか。それと同おんなじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空からの盃さかずきでよくああ飽きずに献けん酬しゅうができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手て痛ひどかった。しかしその言葉の耳みみ障ざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭

ず脳のうのある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見み出いだすほどに奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもっと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

17

私わたくしはまだその後あとにいうべき事をもっていた。けれども奥さんから徒いたずらに議論を仕掛ける男のように取られては困ると思って遠えん慮りょした。奥さんは飲み干した紅こう茶ちゃ茶ぢゃ碗わんの底を覗のぞいて黙っている私を外そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？一つ？二ッつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるというほどではなかったけれども、先刻さっきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛あい嬌きょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙だまり込こんじまったのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱しかり付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒いと口くちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先さっ刻きの続きをもう少しいわせて下さいませんか。奥さんには空からな理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上うわの空そらでいってる事じゃないんだから」

「じゃおっしゃい」

「今奥さんが急にいなくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりゃ分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真ま面じ目めですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいって私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺うかがいます」

「何もそんな事を開き直って[58]聞かなくっても好いいじゃありませんか」

「真面目くさって聞くがものはない。分り切ってるとおっしゃるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠ちゅう実じつなあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるで

しょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりゃ私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己おの惚ぼれ[(59)]になるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思おもい込こんでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好よく映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近ちか頃ごろでは人間が嫌いになっているんでしょう。だからその人間の一いち人にんとして、私も好かれるはずがないじゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやっと私に呑のみ込めた。

18

私わたくしは奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺し戟げきを与えた。それで奥さんはその頃流行はやり始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交つき際あいをした経験のない迂う闊

かつ[60]な青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧どう憬けいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺ながめるような心持で、ただ漠ばく然ぜんと夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨のぞんでかえって変な反はん撥ぱつ力りょくを感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかった。普通男なん女にょの間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠せい実じつなる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだろうといって、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじゃなかったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々だんだんああなって来たのよ」

「奥さんはその間あいだ始終先生といっしょにいらしったんでしょう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう変って行かれる源げん因いんがちゃんと解わ

かるべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛つらいんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何なん遍べんあの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りゃしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取とり合あってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切とぎらした。下げ女じょ部べ屋やにいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいって下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「これでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなんです」

「そりゃ先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保ほ証しょうします」

奥さんは火鉢の灰を掻かき馴ならした。それから水みず注さしの水を鉄てつ瓶びんに注さした。鉄瓶は忽たちまち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛しん防ぼうし切れなくなって、先生に聞きま

した。私に悪い所があるなら遠慮なくいって下さい、改められる欠けっ点てんなら改めるからって、すると先生は、お前に欠点なんかありゃしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなって仕様がないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中うちに涙をいっぱい溜ためた。

19

始め私わたくしは理解のある女にょ性しょうとして奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変って来た。奥さんは私の頭脳に訴うったえる代りに、私の心臓ハートを動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠わだかまり[61]もない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開あけて見み極きわめようとすると、やはり何なんにもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭えん世せい的てきだから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断だん言げんしておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭いやになったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突つき留とめて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人おっとらしかった。親切で優しかった。疑いの塊かたまりをその日その日の情じょう合あいで包んで、そっと胸の奥にしまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思って？」と聞いた。「私からああなったのか、それともあなたのいう人じん世せい観かんとか何とかいうものか

ら、ああなったのか。隠さずいって頂ちょう戴だい」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれな表情をその咄とっ嗟さ(62)に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらっしゃらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐つかない方かたでしょう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになった源げん因いんについてですか」

「ええ。もしそれが源因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい渋って膝ひざの上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱られないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑のみ込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いいお友達が一人あったのよ。その方かたがちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私ささ語やくような小さな声で、「実は変へん死ししたんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であった。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があってから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、雑ぞう司しヶが谷やにあるのは」

「それもいわない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾かたむいていた。

20

私わたくしは私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰なぐさめようとした。奥さんもまたできるだけ私によって慰められたそ

うに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合った。けれども私はもともと事の大おお根ねを攫つかんでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉すっ皆かりは私に話す事ができなかった。したがって慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚おぼ束つかない[(63)]私の判断に縋すがり付こうとした。

十時頃ごろになって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわっている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格こう子しを開ける先生をほとんど出で合あい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行った。下げ女じょだけは仮うたた寝ねでもしていたとみえて、ついに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまった涙の光と、それから黒い眉まゆ毛げの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷センチメントを玩もてあそぶためにとくに私を相手に拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊ゆう戯ぎと取れない事もなかった。もっともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝かがやいて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦く労ろうさま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張はり合あいが抜

けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会え釈しゃくした。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくって気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういいながら、先刻さっき出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂たもとへ入れて、人通りの少ない夜よ寒さむの小こう路じを曲折して賑にぎやかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひき抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子を貰もらって帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌よく日じつ午ひる飯めしを食いに学校から帰ってきて、昨ゆう夜べ机の上に載のせて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗った鳶とび色いろのカステラを出して頬ほお張ばった。そうしてそれを食う時に、必ひっ竟きょうこの菓子を私にくれた二人の男なん女にょは、幸福な一いっ対ついとして世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅うちへ出ではいりをするついでに、衣服の洗あらい張はりや仕し立たて方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで繻じゅ絆ばんというものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねる[64]ようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退たい屈くつ凌しのぎになって、結けっ句く[65]身体からだの薬だぐらいの事をいっていた。

「こりゃ手て織おりね。こんな地じの好いい着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪にくいのよそりゃあ。まるで針が立

たないんですもの。お蔭かげで針を二本折りましたわ」

　こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面めん倒どうくさいという顔をしなかった。

21

　冬が来た時、私わたくしは偶然国[66]へ帰らなければならない事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経けい過かが面白くない様子を書いて、今が今[67]という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

　父はかねてから腎じん臓ぞうを病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病やまいは慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑うたがわなかった。現に父は養生のお蔭かげ一つで、今こん日にちまでどうかこうか凌しのいで来たように客が来ると吹ふい聴ちょうしていた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機はずみに突然眩め暈まいがして引ッ繰り返った。家か内ないのものは軽症の脳のう溢いっ血けつと思い違えて、すぐその手当をした。後あとで医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎じん臓ぞう病びょうとを結び付けて考えるようになったのである。

　冬休みが来るにはまだ少し間まがあった。私は学期の終りまで待っていても差さし支つかえあるまいと思って一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗なめた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手て数かずと時間を省くため、私は暇いとま乞ごいかたがた

先生の所へ行って、要いるだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

　先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆おっ劫くうだといって、私をその書斎に通した。書斎の硝子ガラス戸どから冬に入いって稀まれに見るような懐かしい和やわらかな日光が机つくえ掛かけの上に射さしていた。先生はこの日あたりの好いい室へやの中へ大きな火鉢を置いて、五ご徳とくの上に懸けた金かな盥だらいから立ち上あがる湯ゆ気げで、呼い吸きの苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いいが、ちょっとした風邪などはかえって厭いやなものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

　先生は病気という病気[68]をした事のない人であった。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなった。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病気は真まっ平ぴらです。先生だって同じ事でしょう。試みにやってご覧らんになるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹かかりたいと思ってる」

　私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無む心しんを申し出た。

「そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持って行きたまえ」

　先生は奥さんを呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶ちゃ箪だん笥すか何かの抽ひき出だしから出して来た奥さんは、白い半紙[69]の上へ鄭てい寧ねいに重ねて、「そ

りゃご心配ですね」といった。

「何なん遍べんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。――そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いいが。――嘔はき気けはあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大おお方かたないんでしょう」

「吐はき気けさえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

22

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じっとしている。なにもう起きても好いいのさ」といった。しかしその翌よく日じつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。母は不ふ承しょう無ぶ性しょうに太ふと織おりの蒲ふ団とんを畳みながら「お父さんはお前が帰っ

て来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。私わたくしには父の挙きょ動どうがさして虚きょ勢せいを張はっているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事がある場合でなければ、容易に父ちち母ははの顔を見る自由の利きかない男であった。妹は他国へ嫁とついだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母のいい付け通り学校の課業を放ほうり出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足であった。

「これしき[70]の病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰ぎょう山さんな手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆ぶり回かえすといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極きわめて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要よう心じんさえしていれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩め暈まいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないので、私たちは格別それを気に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩おん借しゃくの礼を述べた。正月上京する時に持じ参さんするからそれまで待ってくれるようにと断

わった。そうして父の病状の思ったほど険けん悪あくでない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔はき気けも皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一いち言ごんの見舞を附つけ加えた。私は先生の風邪を実際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂うわさなどをしながら、遥はるかに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎しい茸たけでも持って行ってお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞを食うかしら」

「旨うまくはないが、別に嫌いな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちょっと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切ずく(71)で、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大たい層そうな喜びになった。もっともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相そう違いなかったが。

第一というと私と先生の間に書信の往おう復ふくがたびたびあったように思われるが、事実は決してそうでない事をちょっと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰もらっていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛あてで書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎つつしまなければならないので、床を上げてからも、ほとんど戸外そとへは出なかった。一度天

気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を気き遣づかって、私が引き添うように傍そばに付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑って応じなかった。

23

私わたくしは退屈な父の相手としてよく将しょう碁ぎ盤ばん[(72)]に向かった。二人とも無精な性た質ち[(73)]なので、炬こ燵たつにあたったまま、盤を櫓やぐらの上へ載せて、駒こまを動かすたびに、わざわざ手を掛かけ蒲ぶ団とんの下から出すような事をした。時々持もち駒ごまを失なくして、次の勝しょう負ぶの来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付みつけ出して、火ひ箸ばしで挟はさみ上げるという滑こっ稽けいもあった。

「碁ごだと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬こ燵たつの上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好いいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将しょう碁ごを差したがる男であった。始めのうちは珍しいので、この隠いん居きょじみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経たつに伴つれて、若い私の気力はそのくらいな刺し戟げきで満足できなくなった。私は金きんや香きょう車しゃ[(74)]を握った拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓こ動どうを聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められている

ように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人おとなしい男であった。他ひとに認められるという点からいえばどっちも零れいであった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往ゆき来きをした覚えのない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷ひややか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといっても、血のなかに先生の命が流れているといっても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳ちん腐ぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一様に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓もて待なされるのに、その峠を定てい規き通どおり通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有っても無くっても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔でいうと、儒じゅ者しゃの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持って帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留とまった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった。

父の病気は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎しん重ちょうに診察してもらってもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極きめた出しゅっ立たつの日を動かさなかった。

24

東京へ帰ってみると、松まつ飾かざり[75]はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた[76]景気はなかった。

私わたくしは早さっ速そく先生のうちへ金を返しに行った。例の椎しい茸たけもついでに持って行った。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあった。鄭てい寧ねいに礼を述べた奥さんは、次の間まへ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりゃ何の御お菓か子し」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極きわめて淡たん泊ぱくな小こ供どもらしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛け念ねんの問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容よう体だいを聞くと、今が今どうという事もない

ようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」

　先生は腎じん臓ぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹かかっていながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士し官かんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細さい君くんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちょっと苦しいといって、細君を起したぎり、翌あくる朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

　今まで楽天的らくてんてきに傾いていた私は急に不安になった。

「私の父おやじもそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者は到底とても治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いいでしょう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱らん暴ぼうな軍人なんだから」

　私はやや安心した。私の変化を凝じっと見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆もろいものですね。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らな

いから」

「先生もそんな事を考えてお出いでですか」

「いくら丈夫の私でも、満まん更ざら考えない事もありません」

先生の口くち元もとには微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあっと思う間まに死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解わからないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭かげですね」

「殺される方はちっとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってからも父の病気はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後あとは何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾いく度たびか手を着けようとしては手を引っ込めた卒業論文を、いよいよ本ほん式しきに書き始めなければならないと思い出した。

25

その年の六月に卒業するはずの私わたくしは、ぜひともこの論

文を成せい規き通どおり四月いっぱいに書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘かん定じょうして見た時、私は少し自分の度胸を疑うたぐった。他ほかのものはよほど前から材料を蒐あつめたり、ノートを溜ためたりして、余よ所そ目めにも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改あらたまったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽たちまち動けなくなった。今まで大きな問題を空くうに描えがいて、骨組みだけはほぼでき上っているくらいに考えていた私は、頭を抑おさえて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏まとめる手数を省はぶくために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちょっと付け加える事にした。

私の選せん択たくした問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いいでしょうといった。狼ろう狽ばいした気味の私は、早さっ速そく先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快こころよく私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫ごうも[77]私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近ちか頃ごろはあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であったが、その後ごどういう訳か、前ほどこの方面に興味が働かなくなったようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなったのでしょう。まあ早くいえば老おい込こんだのです」

先生の言葉はむしろ平静であった。世間に背中を向けた人の苦く味みを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手て応ごたえもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰った。

それからの私はほとんど論文に祟たたられた[78]精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一いち人にんは締しめ切きりの日に車で事務所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたといった。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持って行ったため、危あやうく跳はね付けられようとしたところを、主任教授の好こう意いでやっと受理してもらったといった。私は不安を感ずると共に度胸を据すえた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書しょ庫こにはいって、高い本棚のあちらこちらを見み廻まわした。私の眼は好こう事ず家かが骨こっ董とうでも掘り出す時のように背せ表びょう紙しの金文字をあさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向むきを南へ更かえて行った。

それが一ひと仕し切きり経つと、桜の噂うわさがちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬ば車しゃ馬うまのように正面ばかり見て、論文に鞭むちうたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨またがなかった。

26

私わたくしの自由になったのは、八や重え桜ざくらの散った枝にいつしか青い葉が霞かすむように伸び始める初夏の季節であった。私は籠かごを抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一ひと目めに見渡しながら、自由に羽はば搏たきをした。私はすぐ先生の家うちへ行った。枳から殻たちの垣が黒ずんだ枝の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘ざく榴ろの枯れた幹から、つやつやしい茶ちゃ褐かっ色しょくの葉が、柔らかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結けっ構こうですね」といった。私は「お蔭かげでようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事がすでに結けつ了りょうして、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴はれやかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりに(79)その内容を喋々ちょうちょうした。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですか」とかいってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊いささか拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因いん循じゅ

んらしく見える先生の態度に逆ぎゃく襲しゅうを試みるほどに生々いきいきしていた。私は青く蘇よみ生がえろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好いい心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴つれて郊外へ出たかった。

一時間の後のち、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛あてもなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉をもぎ取って芝しば笛ぶえを鳴らした。ある鹿か児ご島しま人じんを友達にもって、その人の真似まねをしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖とざされたように蓊こん欝もりした小高い一ひと構かまえの下に細い路みちが開ひらけた。門の柱に打ち付けた標ひょう札さつに何々園とあるので、その個人の邸てい宅たくでない事がすぐ知れた。先生はだらだら上のぼりになっている入口を眺めて、「はいってみようか」といった。私はすぐ「植うえ木き屋やですね」と答えた。

植うえ込こみの中を一ひとうねりして奥へ上ると左側に家うちがあった。明け放った障しょう子じの内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒のき先さきに据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいっても構かまわないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅つつじが燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺かば色いろの丈たけの高いのを指して、「これは霧きり島しま(80)でしょう」といった。

芍しゃく薬やくも十と坪つぼ(81)あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠ばたけの傍そばにある古びた縁えん台だいのようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼あおい透すき徹とおるような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪うばわれていた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗の頂いただきに投げ被かぶせてあった先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

27

私わたくしはすぐその帽子を取り上げた。所ところ々どころに着いている赤土を爪つめで弾はじきながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体からだを半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のままで、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家うちには財産がよっぽどあるんですか」

「あるというほどありゃしません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田でん地ぢが少しあるぎりで、金なんかまるでないんでしょう」

先生が私の家いえの経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑うたぐった。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかった。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思っていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもっていらっしゃるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服な装りをしていた。それに家か内ないは小こ人にん数ずであった。したがって住宅も決して広くはなかった。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであった。要するに先生の暮しは贅ぜい沢たくといえないまでも、あたじけなく(82)切きり詰つめた無弾力性のものではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりゃそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃ

ありません。財産家ならもっと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上って、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真まっ直すぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独ひとり言ごとのようであった。それですぐ後あとに尾ついて行き損なった私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかった。むしろ不ぶ調ちょう法ほう(83)で答えられなかったのである。すると先生がまた問題を他よそへ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくれる為か替わせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手しゅ蹟せきであったが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかった。その上書体も確かであった。この種の病人に見る顫ふるえが少しも筆の運はこびを乱していなかった。

「何ともいって来ませんが、もう好いいんでしょう」

「好よければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってる(84)んでしょう。何ともいって来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋たずねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思って聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無む論ろんそこに気が付くはずがなかった。

28

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰もらうものはちゃんと貰っておくようにしたらどうですか。万一の事があったあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

私わたくしは先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無む口くちにした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言こと葉ば遣づかいをするのが気に触さわったら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口こう気きは珍しく苦々しかった。

「そんな事をちっとも気に掛けちゃいません」と私は弁べん解かいした。

「君の兄弟は何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人にん数ずを聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじや叔母おばの様子を問いなどした。そうして最後にこういった。

「みんな善いい人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもいないようです。大抵田舎いなか者ものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追つい窮きゅうに苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余よ裕ゆうさえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親しん戚せきなぞの中うちに、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鋳い型かたに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間ま際ぎわに、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油ゆ断だんができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後うしろの方で犬が急に吠ほえ出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍そばに、熊くま笹ざさが三み坪つぼほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十とおぐらいの小こ供どもが馳かけて来て犬を叱しかり付けた。小供

は徽き章しょうの着いた黒い帽子を被かぶったまま先生の前へ廻まわって礼をした。

「叔父さん、はいって来る時、家うちに誰もいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおっかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日こんちはって、断ってはいって来ると好よかったのに」

先生は苦笑した。懐ふと中ころから蟇がま口ぐちを出して、五銭の白はく銅どうを小供の手に握らせた。

「おっかさんにそういっとくれ。少しここで休まして下さいって」

小供は怜り悧こうそうな眼に笑わらいを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥せっ候こう長ちょう(85)になってるところなんだよ」

小供はこう断って、躑躅つつじの間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻しっ尾ぽを高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けていった。

先生の談話は、この犬と小供のために、結けつ末まつまで進行する事ができなくなったので、私はついにその要領を得ないでしまった。先生の気にする財産云うんぬんの掛け念ねんはその時の私わたくしには全くなかった。私の性質として、また私の境遇からいって、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩なやます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨のぞまないためでもあったろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかったのは、人間がいざという間際[86]に、誰でも悪人になるという言葉の意味であった。単なる言葉としては、これだけでも私に解わからない事はなかった。しかし私はこの句についてもっと知りたかった。

犬と小こ供どもが去ったあと、広い若葉の園は再び故もとの静かさに帰った。そうして我々は沈黙に鎖とざされた人のようにしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失って来た。眼の前にある樹きは大概楓かえでであったが、その枝に滴したたるように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなって行くように思われた。遠い往来を荷に車ぐるまを引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁えん日にちへでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑めい想そうから呼息いきを吹き返した人のように立ち上がった。

「もう、そろそろ帰りましょう。大だい分ぶ日が永くなったようだが、やっぱりこう安あん閑かんとしているうちには、いつの間にか暮れて行くんだね」

先生の背中には、さっき縁台の上に仰あお向むきに寝た痕あとがいっぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとう。脂やにがこびり着いてやしませんか」

「綺き麗れいに落ちました」

「この羽織はつい此間こないだ拵こしらえたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難う」

二人はまただらだら坂ざかの中途にある家うちの前へ来た。はいる時には誰もいる気け色しきの見えなかった縁えんに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大きな金魚鉢の横から、「どうもお邪じゃ魔まをしました」と挨拶した。お上さんは「いいえお構かまい申しも致しませんで」と礼を返した後、先さっ刻き小供にやった白はく銅どうの礼を述べた。

門かど口ぐちを出て二、三町ちょう来た時、私はついに先生に向かって口を切った。

「さきほど先生のいわれた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」

「意味といって、深い意味もありません。——つまり事実なんですよ。理り屈くつじゃないんだ」

「事実で差さし支つかえありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時じ機きの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風ふうに。

「金かねさ君。金を見ると、どんな君くん子しでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つまらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍ひょう子し抜ぬけの気味であった。私は澄ましてさっさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになった。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だって、私の返事一つですぐ変るじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立たち留どまった私の顔を見て、先生はこういった。

30

その時の私わたくしは腹の中で先生を憎らしく思った。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こだわる様子を見せなかった。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払った歩ほ調ちょうをすまして運んで行くので、私は少し業ごう腹はらになった。何とかいって一つ先生をやっ付けてみたくなって来た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさっき少し昂こう奮ふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅めっ多たに見た事がないんですが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかった。私はそれを手て応ごたえのあったようにも思った。また的まとが外はずれたようにも感じた。仕方がないから後あとはいわない事にした。すると先生がいきなり道の端はじへ寄って行った。そうして綺き麗れいに刈り込んだ生いけ垣がきの下で、裾すそをまくって小便をした。私は先生が用ようを足たす間ぼんやりそこに立っていた。

「やあ失敬」

先生はこういってまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑にぎやかになった。今までちらほらと見えた広い畠はたけの斜面や平ひら地ちが、全く眼に入いらないように左右の家いえ並なみが揃そろってきた。それでも所ところ々どころ宅地の隅などに、豌えん豆どうの蔓つるを竹にからませたり、金かな網あみで鶏にわとりを囲い飼いにしたりするのが閑かん静せいに眺められた。市中から帰る駄だ馬ばが仕切りなく擦すれ違って行った。こんなものに始終気を奪とられがちな私は、さっきまで胸の中にあった問題をどこかへ振り落してしまった。先生が突然そこへ後あと戻もどりをした時、私は実際それを忘れていた。

「私は先刻さっきそんなに昂奮したように見えたんですか」

「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

「いや見えても構わない。実際昂こう奮ふんするんだから。私は財産の事をいうときっと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執しゅう念ねん深ぶかい[87]男なんだから。人から受けた屈くつ辱じょくや損害は、十年たっても二十年たっても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたの

は、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴うったえる意味そのものであった。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執しゅう着じゃく力りょくをいまだかつて想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処ところに、私の懐かしみの根を置いていた。一時の気分で先生にちょっと盾たてを突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこういった。

「私は他ひとに欺あざむかれたのです。しかも血のつづいた親しん戚せきのものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であったらしい彼らは、父の死ぬや否いなや許しがたい不徳義漢に変ったのです。私は彼らから受けた屈辱と損そん害がいを小こ供どもの時から今日きょうまで背負しょわされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事ができないんだから。しかし私はまだ復ふく讐しゅうをしずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎にくむばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思う」

私は慰い藉しゃの言葉さえ口へ出せなかった。

31

その日の談話もついにこれぎりで発展せずにしまった。私わたくしはむしろ先生の態度に畏い縮しゅくして、先へ進む気が起らなかったのである。

二人は市の外はずれから電車に乗ったが、車内ではほとんど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかっ

た。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月までは一番気き楽らくな時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精せい出だして遊びたまえ」といった。私は笑って帽子を脱とった。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと疑うたぐった。その眼、その口、どこにも厭えん世せい的てきの影は射さしていなかった。

私は思想上の問題について、大いなる利り益えきを先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間ま々ま[88]あったといわなければならない。先生の談話は時として不ふ得とく要よう領りょうに終った。その日二人の間に起った郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏うちに残った。

無ぶ遠えん慮りょな私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこういった。

「頭が鈍にぶくて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解わかってるくせに、はっきりいってくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していらっしゃいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏まとめ上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉ことごとくあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂たましいの吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風ふうに、私の顔を見た。巻まき烟草タバコを持っていたその手が少し顫ふるえた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真ま面じ目めなんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を訐あばいてもですか」

訐く(89)という言葉が、突然恐ろしい響ひびきをもって、私の耳を打った。私は今私の前に坐すわっているのが、一人の罪ざい人にんであって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼あおかった。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因いん果がで、人を疑うたぐりつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いいから、他ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なってくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」

私の声は顫ふるえた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増しかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適てき当とうの時機が来なくっちゃ話さないんだから」

私は下宿へ帰ってからも一種の圧あっ迫ぱくを感じた。

32

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴かび臭くさくなった古い冬服を行こう李りの中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚あつ羅ラ紗シャの下に密封された自分の身体からだを持て余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体はだかになった。下宿の二階の窓をあけて、遠とお眼め鏡がねのようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見み渡わたした。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室へやの真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧かえりみた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切くぎりを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御ご馳ち走そうに招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩ばん餐さんはよそで喰くわずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であった。

食卓は約束通り座敷の縁えん近くに据えられてあった。模様の織り出された厚い糊のりの硬こわい卓テーブル布クロースが美しくかつ清らかに電燈の光を射い返かえしていた。先生のうちで飯めしを食うと、きっとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸はしや茶ちゃ碗わんが置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真まっ白しろなものに限られていた。

「カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを用いるくらいなら、一いっ層そ始はじめから色の着いたものを使うが好いい。白ければ純白でなくっちゃ」

こういわれてみると、なるほど先生は潔けっ癖ぺきであった。書斎なども実に整然きちりと片付いていた。無む頓とん着じゃくな私には、先生のそういう特色が折々おりおり[90]著しく眼に留まった。

「先生は癇かん性しょう[91]ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があった。それを傍そばに聞いていた先生は、「本当をいうと、私は精神的に癇性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬ば鹿か馬ば鹿かしい性しょう分ぶんだ」といって笑った。精神的に癇性という意味は、俗にいう神経質という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解わからなかった。奥さんにも能よく通じないらしかった。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓たく布ふの前に坐すわった。奥さんは二人を左右に置いて、独ひとり庭の方を正面にして席を占めた。

「お目出とう」といって、先生が私のために杯さかずきを上げてくれた。私はこの盃さかずきに対してそれほど嬉しい気を起さな

かった。無論私自身の心がこの言葉に反はん響きょうするように、飛び立つ嬉しさをもっていなかったのが、一つの源げん因いんであった。けれども先生のいい方も決して私の嬉しさを唆そそる浮うき々うきした[92]調子を帯びていなかった。先生は笑って杯さかずきを上げた。私はその笑いのうちに、些ちっとも意地の悪いアイロニーを認めなかった。同時に目出たいという真情も汲くみ取る事ができなかった。先生の笑いは、「世間はこんな場合によくお目出とうといいたがるものですね」と私に物語っていた。

　奥さんは私に「結構ね。さぞお父とうさんやお母かあさんはお喜びでしょう」といってくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行って見せてやろうと思った。

　「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

　「どうしたかね。——まだどこかにしまってあったかね」と先生が奥さんに聞いた。

　「ええ、たしかしまってあるはずですが」

　卒業証書の在あり処どころは二人ともよく知らなかった。

33

　飯めしになった時、奥さんは傍そばに坐すわっている下げ女じょを次へ立たせて、自分で給きゅう仕じの役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕し来きたり[93]らしかった。始めの一、二回は私わたくしも窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶ちゃ碗わんを奥さんの前へ出すのが、何でもなくなった。

　「お茶？ご飯はん？ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切って遠慮のない事をいうことがあった。しかしその日は、時じ候こうが時候なので、そんなに調戯からかわれるほど食欲が進まなかった。

「もうおしまい。あなた近ちか頃ごろ大変小しょう食しょくになったのね」

「小食になったんじゃありません。暑いんで食われないんです」

奥さんは下げ女じょを呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水みず菓が子しを運ばせた。

「これは宅うちで拵こしらえたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振ふる舞まうだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更かえてもらった。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷しき居い際ぎわで背中を障しょう子じに靠もたせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的あてもなかった。返事にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役やく人にん？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいちどれが善いいか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解わからないんだから、選択に困る訳だと思います」

「それもそうね。けれどもあなたは必ひっ竟きょう財産があるからそんな呑のん気き[94]な事をいっていられるのよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんのいう事実を認みとめた。しかしこういった。

「少し先生にかぶれたんでしょう」

「碌ろくなかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構かまわないから、その代りこの間いった通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでないと決して油断はならない」

私は先生といっしょに、郊外の植うえ木き屋やの広い庭の奥で話した、あの躑躅つつじの咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途みちに、先生が昂こう奮ふんした語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄すごい言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹てっ底ていしない言葉でもあった。

「奥さん、お宅たくの財産はよッぽどあるんですか」

「何だってそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしょう」

「でもどのくらいあったら先生のようにしていられるか、宅うちへ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして[95]烟草タバコを吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。

「どのくらいってほどありゃしませんわ。まあこうしてどうかこうか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりゃどうでも宜いいとして、あなたはこれから何か為なさらなくっちゃ本当にいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちょっと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

34

私わたくしはその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになっていたので、座を立つ前に私はちょっと暇いとま乞ごいの言葉を述べた。

「また当分お目にかかれませんから」

「九月には出ていらっしゃるんでしょうね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴き重ちょうな時間というものがなかった。

「まあ九月頃ごろになるでしょう」

「じゃずいぶんご機き嫌げんよう。私たちもこの夏はことによるとどこかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そうだから。行ったらまた絵え端は書がきでも送って上げましょう」

「どちらの見当です。もしいらっしゃるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。

「何まだ行くとも行かないとも極きめていやしないんです」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいって来ない以上、悪くはないのだろうくらいに考えていた。

「そんなに容た易やすく考えられる病気じゃありませんよ。尿にょう毒どく症しょうが出ると、もう駄だ目めなんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解わからなかった。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかった。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいった。「毒が脳へ廻まわるようになると、もうそれっきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」

無む経けい験けんな私は気味を悪がりながらも、にやにやしていた。

「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したって仕方がありません」

「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」

奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さんの事でも憶おもい出したのか、沈んだ調子でこういったなり下を向いた。私も父の運命が本当に気きの毒どくになった。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静しず、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己おれの方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦だん那なが先で、細さい君くんが後へ残るのが当り前のようになってるね」

「そう極きまった訳でもないわ。けれども男の方ほうはどうしても、そら年が上でしょう」

「だから先へ死ぬという理り屈くつなのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩わずらった例ためしがないじゃありませんか。そりゃどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「え、きっと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするって……」

奥さんはそこで口くち籠ごもった[96]。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちょっと奥さんの胸を襲おそったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老ろう少しょう不ふ定じょうっていうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑じょう談だんらしくこういった。

35

私わたくしは立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固もとより私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極きまった年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父とうさんやお母さんなんか、ほとんど同おんなじよ、あなた、亡くなったのが」

「亡くなられた日がですか」

「まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だって続いて亡くなっちまったんですもの」

この知識は私にとって新しいものであった。私は不思議に思った。

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮さえぎった。

「そんな話はお止よしよ。つまらないから」

先生は手に持った団うち扇わをわざとばたばたいわせた。そうしてまた奥さんを顧みた。

「静しず、おれが死んだらこの家うちをお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面は他ひとのものだから仕方がない。その代りおれの持ってるものは皆みんなお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰もらっても仕様がないわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになって」

先生はいくらともいわなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥

さんの前に起るものと仮か定ていされていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感かん傷しょう的てきな女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何なん遍べんおっしゃるの。後ご生しょう[97]だからもう好いい加か減げんにして、おれが死んだらは止よして頂ちょう戴だい。縁えん喜ぎでもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」

先生は庭の方を向いて笑った。しかしそれぎり奥さんの厭いやがる事をいわなくなった。私もあまり長くなるので、すぐ席を立った。先生と奥さんは玄関まで送って出た。

「ご病人をお大だい事じに」と奥さんがいった。

「また九月に」と先生がいった。

私は挨拶をして格こう子しの外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木もく犀せいの一ひと株かぶが、私の行ゆく手てを塞ふさぐように、夜や陰いんのうちに枝を張っていた。私は二、三歩動き出しながら、黒ずんだ葉に被おおわれているその梢こずえを見て、来たるべき秋の花と香を想おもい浮べた。私は先生の宅うちとこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、いっしょに記憶していた。私が偶然その樹きの前に立って、再びこの宅の玄関を跨またぐべき次の秋に思いを馳はせた時、今まで格子の間から射さしていた玄関の電燈がふっと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいったらしかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかった。国へ帰る前に調ととのえる買物もあったし、ご馳ち走そうを詰めた胃袋にくつろぎを与える必要

もあったので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行った。町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男なん女にょがぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにがしに会った。彼は私を無理やりにある酒場バーへ連れ込んだ。私はそこで麦酒ビールの泡のような彼の気きえんを聞かされた。私の下宿へ帰ったのは十二時過ぎであった。

36

私わたくしはその翌よく日じつも暑さを冒おかして、頼まれものを買い集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆おっ劫くう[98]に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭ふきながら、他ひとの時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田い舎なか者ものを憎らしく思った。

私はこの一ひと夏なつを無む為いに過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履り行こうするに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸まる善ぜん[99]の二階で潰つぶす覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点てん検けんして行った。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半はん襟えりであった。小僧にいうと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価あたいが極きわめて不定であった。安かろうと思って聞くと、非常に高かったり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえって大変安かったりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差さ違いが出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられ

た。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わずらわさなかったかを悔いた。

私は鞄かばんを買った。無論和製の下等な品に過ぎなかったが、それでも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威お嚇どかすには充分であった。この鞄を買うという事は、私の母の注文であった。卒業したら新しい鞄を買って、そのなかに一いっ切さいの土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料りょう簡けんが解わからないというよりも、その言葉が一種の滑こっ稽けいとして訴えたのである。

私は暇いとま乞ごいをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立って国へ帰った。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならない地位にありながら、どういうものか、それが大たいして[100]苦にならなかった。私はむしろ父がいなくなったあとの母を想像して気の毒に思った。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違いなかった。九州にいる兄へやった手紙のなかにも、私は父の到底とても故もとのような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあろうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年とし寄よりが二人ぎりで田舎にいるのは定さだめて心こころ細ぼそいだろう、我々も子として遺い憾かんの至いたり[101]であるというような感傷的な文句さえ使った。私は実際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽けい薄はくもののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想おもい浮べた。こ

とに二、三日前晩ばん食めしに呼ばれた時の会話を憶おもい出した。

「どっちが先へ死ぬだろう」

私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事ができないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判はっ然きり分っていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外ほかに仕方がないだろうと思った。（死に近づきつつある父を国元に控ひかえながら、この私がどうする事もできないように）。私は人間を果敢はかない[102]ものに観じた。人間のどうする事もできない持って生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。

---

(1) ごと：（接尾）接于名词和动体连体形之后。每，每当，每次，每回。

(2) よそよそしい：生分的，见外的，有隔阂的，疏远的，冷淡的。

(3) 頭文字：第一个字母，第一个字。

(4) 工面：设法安排、筹措（钱款等）；经济状况，手头是否宽裕。

(5) 肝心：极重要的，关键的，宝贝性质的。

(6) 至極：（副）极，极其，最，最为。

(7) から：（接助）此处表示原因。出于，基于，由于。

(8) ところ：～しようとするところ，就要，正要，将要，即将。

(9) 吹かして：未然形＋す，同未然形＋せる·させる，表示使役。让，使，叫。

(10) 限り：～しない限り，只要，除非。

(11) ところ：～しているところ，正，正在。

(12) てならなかった：（连语）～て·で·してならない，……得不得了，……受不了，非常。

(13) 屈托：忧虑，担心，烦恼，厌倦。

(14) 二丁：正确写法为「二町」。町，这里为长度单位，约109m。

(15) 快く：こころよい。高兴，愉快；痛快，爽快。

(16) 懇意：要好，亲密；亲切，恳切，好意。

(17) 風変り：奇特，古怪，另类，与众不同。

(18) 単簡に：同簡単に。

(19) 遠ざけようとする：遠ざける，使之远离，疏离，疏远。

(20) 手向け：手向ける，供奉，上供，供，献。

(21) がてら：接在体言和动词连用形后面，借……之机，顺便。

(22) 踵を回らした：踵，脚后跟。转弯，向后转，往回走。亦作踵を回す。

(23) 得心：领会，领悟，明白，理解。

(24) 依撒伯拉：西班牙女性常用名字，英文写作Isabela。

(25) アイロニ—：irony，讽刺，嘲讽，奚落，挖苦。

(26) 繁く：（副）频繁，频频，屡屡，每每。→しげしげ。

(27) 小春：指阴历十月（因温暖如春之故）。

(28) 忽ち：（副）忽然，一会儿，很快，片刻，倏然。

(29) 容赦：饶恕，宽恕；迁就，宽容。

(30) ぞっとする：害怕，发抖，战栗，毛骨悚然，不寒而栗。

(31) や否や：动词基本形＋や否や，马上，顿时，一下子。

(32) 癪：剧痛，绞痛；生气，恼火。～にさわる，生气，发火，恼怒。

(33) ことによると：（连语）说不定，没准，或许，有可能。

(34) 得なかった：～し得ない，不能；～し得る，能，能够。

(35) ひそり：（副·サ变自）正确写法为ひっそり。安静，寂静，静悄

悄，悄无声息。

(36) だの：（副助）表示列举。类似的有とか、やら。

(37) まず：（副）此处意为“大致、大体、基本”。

(38) それなり：（名·副）就此，就那样，直接；相应的，恰当的。

(39) さぞ：（副）想必，大概，有可能。

(40) つい：（副）此处表示距离之近，就……

(41) 行き掛かり：此处意为“情由”，有别于一般含义。

(42) 響いた：ひびく，听起来好像，回响，回荡；影响。

(43) 大学出身：此处特指东京帝国大学毕业的学士。

(44) 二の句の継げない：令人目瞪口呆，瞠目结舌，无言以对。

(45) 冷評しました：ひやかす，一般写作冷やかす。嘲弄，冷嘲热讽；只问价而不买。

(46) 思いあたる：想到，想起，意识到，心有所觉。

(47) 耳を貸さなかった：耳を貸す，听，听取，倾听。

(48) ややもすると：（副）亦作ややもすれば，时不时，动不动，动辄，很容易。

(49) とどの詰まり：一般作副词用，归终，结果，归根结底，说到底。

(50) 斥けたい：しりぞける，拒绝，排斥，斥退，击退，使之后退。

(51) 推測するがものはない：直译应为“没有推测的必要”。漱石常以「がもの」代替「必要」使用。

(52) 正体：真面目，原形，真相；意识，神志。

(53) 宵の口：天刚黑，入夜时分。

(54) 気味：方言亦作きび。此处意为“心情、心绪、情绪”。

(55) ひとしきり：（副）一时，一阵，一阵子，一些时候。

(56) 鹿爪らしく：しかつめらしい，拘谨，一本正经，煞有介事，装腔作势，装模作样。

(57) 別段：（副）（下接否定式）不那么，不怎么，不特别。

(58) 開き直って：ひらきなおる，忽然严肃起来，忽然正色。

(59) 己惚：一般写作うぬぼれ，自作多情，自以为是，自高自大。

(60) 迂闊：粗心，糊涂，不拘小节；说话兜圈子，啰嗦。

(61) 蟠まり：わたかまる，隔阂，别扭；盘踞。

(62) 咄嗟：倏忽，瞬间，刹那间，即刻。

(63) 覚束ない：不可靠的，模模糊糊的；令人不安的。

(64) 按习惯，「繻絆」应穿在和服下面，而“我”因是学生，便以「書生流儀」套在衬衣外面。

(65) 結句：此处作副词用。最终，结果，归根结底。

(66) 国：故乡，老家。

(67) 今が今：迫在眉睫，十分火急，刻不容缓。

(68) 病気という病気：大凡病症。Aという A，大凡……，举凡……，所有……

(69) 半紙：一种长24～26cm，宽32～35cm大小的日本纸，白色。

(70) これしき：一点点，无所谓，不值一提。

(71) ずく：（接尾）接在名词后，全靠，全凭，仅凭，只因。

(72) 将碁：日本象棋。

(73) 性質：一般写作質，品质，禀性，脾性。

(74) 金や香車：日本象棋的棋子名。

(75) 松飾：日本过新年（元旦）时正门上装饰的青松枝。

(76) 正月めいた：めく（接尾），接在名词后面，像……的样子，有……的气息，带有……迹象。

(77) 毫も：（副）（下接否定式）丝毫，毫不，全然。

(78) 祟られた：たたる，作祟，遭殃，恶报。

(79) しきりに：（副）不断，不厌其烦，再三再四；非常。

(80) 霧島：指雾岛杜鹃，主要生长在日本九州雾岛山附近。

(81) 坪：日本土地面积单位，1坪约合3.306平方米。

(82) あたじけなく：あたじけない，小气的，吝啬的，寒碜的。

(83) 不調法：不周密，不得法。

(84) 持ち合ってる：相持不下，势均力敌，保持平衡。此处指病情稳定（体力和病情处于均衡状态）。

(85) 斥候長：侦察小分队的队长。这里，孩子们在做打仗游戏，其中一个当“斥候长”。

(86) いざという間際：或いざという時，关键时候，紧急关头，一旦有事。

(87) 執念深い：执拗的，执著的，固执的，一门心思。

(88) 間々：偶尔，偶然；往往，每每。

(89) 訐く：一般写作暴く、発く。挖掘，揭发，揭露。

(90) 折々：时时，时不时，每每；有时，时而。

(91) 癇性：一般指脾气暴躁，动不动就发火。这里则同上面的無頓着相反，意为格外讲究，有洁癖。

(92) 浮々した：うきうき（と）する，高兴，欣喜，乐颠颠，兴冲冲，喜气洋洋，喜不自胜，乐不可支。

(93) 仕来り：习惯，惯例，常规，规矩。

(94) 呑気：无忧无虑，不慌不忙，悠哉游哉；满不在乎，不以为然。

(95) 澄まして：すます，装模作样，装得若无其事；澄清；聚精会神。此处意为前者。

(96) 口籠った：くちごもる，吞吞吐吐，支支吾吾，嗫嚅。

(97) 後生：来生，来世；（恳求用语）求求你，求你行行好。此处意为后者。

(98) 臆劫：消极，不来劲儿，没情绪，懒得，嫌麻烦。

(99) 丸善：全称为“丸善株式会社”，主要经营日文和外文书籍以及文具等等。总店今天位于东京中央区日本桥一带。

(100) 大して：（后接否定式）并不那么，并不怎么，不甚，不太。

(101) 至り：~の至り，……之至，……至极，极其。

(102) 果敢ない：无常，脆弱，虚幻。

中　両親と私

1

宅うちへ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。

「ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だった。ちょっとお待ち、今顔を洗って来るから」

父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦むぎ藁わら帽ぼうの後ろへ、日ひ除よけのために括くくり付けた薄うす汚ぎたないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻まわって行った。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私わたくしは、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐きょう縮しゅくした。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何なん遍べんも繰り返した。私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家うちの食卓で、「お目出とう」といわれた時の先生の顔かお付つきとを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもないものを珍しそうに嬉うれしがる父よりも、かえって高尚に見えた。私はしまいに父の無知から出る田舎いなか臭くさいところに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だってあります」

私はついにこんな口の利ききようをした。すると父が変な顔を

した。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は結構に違いないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解わかっていてくれさえすれば、……」

私は父からその後あとを聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこういった。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三み月つきか四よ月つきぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕し合あわせか、今日までこうしている。起たち居いに不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せっかく丹たん精せいした息子が、自分のいなくなった後あとで卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高たかが[(1)]大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」

私は一いち言ごんもなかった。詫あやまる以上に恐縮して俯うつ向むいていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思い定めていたとみえる。その卒業が父の心にどのくらい響ひびくかも考えずにいた私は全く愚おろかものであった。私は鞄かばんの中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに圧おし潰つぶされて、元の形を失っていた。父はそれを鄭てい寧ねいに伸のした。

「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ」

「中に心しんでも入れると好よかったのに」と母も傍かたわらから注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起たって床とこの間の所へ行って、誰の目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私ならすぐ何とかいうはずであったが、その時の私はまるで平へい生ぜいと違っていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかった。私はだまって父の為なすがままに任せておいた。一いっ旦たん癖のついた鳥とりの子こ紙がみ[(2)]の証書は、なかなか父の自由にならなかった。適当な位置に置かれるや否いなや、すぐ己おのれに自然な勢いきおいを得て倒れようとした。

2

私わたくしは母を蔭かげへ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大おお方かた好くおなりなんだろう」

母は案あん外がい平気であった。都会から懸かけ隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であった。それにしてもこの前父が卒そっ倒とうした時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを[(3)]、と私は心のうちで独り異いな感じを抱いだいた。

「でも医者はあの時到底とてもむずかしいって宣告したじゃありませんか」

「だから人間の身体からだほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手て重おもくいったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思ってたんだがね。それ、あの気き性しょう[4]だろう。養生はしなさるけれども、強ごう情じょうでねえ。自分が好いいと思い込んだら、なかなか私わたしのいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前帰った時、無理に床とこを上げさして、髭ひげを剃そった父の様子と態度とを思い出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰ぎょう山さん[5]過ぎるからいけないんだ」といったその時の言葉を考えてみると、満まん更ざら母ばかり責める気にもなれなかった。「しかし傍はたでも少しは注意しなくっちゃ」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかった。ただ父の病やまいの性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やっぱり同おんなじ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方かたは」などと聞いた。

私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった。父は私の注意を母よりは真ま面じ目めに聞いてくれた。「もっともだ。お前のいう通りだ。けれども、己おれの身体からだは必ひっ竟きょう己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能よく心得ているはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それご覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでいるのも、全まったくそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思ったのが、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだっ

て、お父さんは自分でそういっていましたぜ」

「そりゃ、お前、口でこそそうおいいだけれどもね。お腹なかのなかではまだ大丈夫だと思ってお出いでのだよ」

「そうでしょうか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もっとも時々はわたしにも心こころ細ぼそいような事をおいいだがね。おれもこの分じゃもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」

私は急に父がいなくなって母一人が取り残された時の、古い広い田い舎なか家やを想像して見た。この家から父一人を引き去った後あとは、そのままで立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何というだろうか。そう考える私はまたここの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰もらうものは、分けて貰って置けという注意を、偶然思い出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬっていう人に死んだ試ためしはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬっていいながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙ってる丈夫の人の方が剣けん呑のん(6)さ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳ちん腐ぷなような母の言葉を黙もく然ねんと聞いていた。

3

私わたくしのために赤い飯めしを炊たいて客をするという相談が父と母の間に起った。私は帰った当日から、あるいはこんな事に

なるだろうと思って、心のうちで暗あんにそれを恐れていた。私はすぐ断わった。

「あんまり仰ぎょう山さんな事は止よしてください」

私は田舎いなかの客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いいといった風ふうの人ばかり揃そろっていた。私は子供の時から彼らの席に侍じするのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛はいっそう甚はなはだしいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野や鄙ひな人を集めて騒ぐのは止せともいいかねた。それで私はただあまり仰ぎょう山さんだからとばかり主張した。

「仰山仰山とおいいだが、些ちっとも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当り前だよ。そう遠慮をお為しでない」

母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰もらったと同じ程度に、重く見ているらしかった。

「呼ばなくっても好いいが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であった。父は彼らの陰かげ口ぐちを気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であった。

「東京と違って田舎は蒼蠅うるさいからね」

父はこうもいった。

「お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我がを張る[7]訳にも行かなかった。どうでも二人の都合の好いいようにしたらと思い出した。

「つまり私のためなら、止よして下さいというだけなんです。陰で何かいわれるのが厭いやだからというご主しゅ意いなら、そりゃまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強いて主張したって仕方がありません」

「そう理屈をいわれると困る」

父は苦い顔をした。

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義ぎ理りぐらいは知っているだろう」

母はこうなると女だけにしどろもどろな事をいった。その代り口数からいうと、父と私を二人寄せてもなかなか敵かなうどころではなかった。

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」

父はただこれだけしかいわなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平へい生ぜいから私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角かど張ばったところに気が付かずに、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜よまた気を更かえて、客を呼ぶなら何日いつにするかと私の都合を聞いた。都合の好いいも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝ね起おきしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であった。私はこの穏やかな父の前に拘泥こだわらない頭を下げた。私は父と相談の上招しょう待だいの日取りを極きめた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明めい治じ天てん皇のうのご病気の報知であった。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡ったこの事件は、一軒の田舎いなか家やのうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払った。

「まあ、ご遠慮申した方がよかろう」

眼め鏡がねを掛けて新聞を見ていた父はこういった。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行ぎょう幸こうになった陛下を憶おもい出したりした。

4

小こ勢ぜいな人にん数ずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私わたくしは行こう李りを解いて書物を繙ひもとき始めた。なぜか私は気が落ち付かなかった。あの目め眩まぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくって行く方が、気に張りがあって心持よく勉強ができた。

私はややともすると机にもたれて仮うたた寝ねをした。時にはわざわざ枕さえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあった。眼が覚めると、蝉せみの声を聞いた。うつつ(8)から続いているようなその声は、急に八や釜かましく耳の底を掻かき乱した。私は凝じっとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いだいた。

私は筆を執とって友達のだれかれに短い端は書がきまたは長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信たよりの届かない

のもあった。私は固もとより先生を忘れなかった。原稿紙へ細さい字じで三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つづったのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかと疑うたぐった。先生が奥さんといっしょに宅うちを空あける場合には、五十恰がっ好こうの切きり下さげの女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になっていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思い違えていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷きょう里りにいる続きあいの人々と、先生は一いっ向こう音信の取とり遣やりをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親しん戚せきであった。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行ったあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆ばあさんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの気き転てんと親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は能よく承知していた。ただ私は淋さびしかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。

　父はこの前の冬に帰って来た時ほど将しょう棋ぎを差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜たまったまま、床とこの間まの隅に片寄せられてあった。ことに陛下のご病気以後父は凝じっと考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読よみがらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。

　「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」

　父は陛下のことを、つねに天子さまといっていた。

「勿もっ体たいない話だが、天子さまのご病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」

こういう父の顔には深い掛け念ねんの曇くもりがかかっていた。こういわれる私の胸にはまた父がいつ斃たおれるか分らないという心配がひらめいた[9]。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下くだらないものでも、まだこうしていられるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己おのれに落ちかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病気を怖こわがってるんですよ。お母さんのおっしゃるように、十年も二十年も生きる気じゃなさそうですぜ」

母は私の言葉を聞いて当とう惑わくそうな顔をした。

「ちょっとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭ふいた。

5

父の元気は次第に衰えて行った。私わたくしを驚かせたハンケチ付きの古い麦むぎ藁わら帽ぼう子しが自然と閑かん却きゃくされるようになった。私は黒い煤すすけた棚の上に載のっているその帽子を眺ながめるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎つつしんでくれたらと心配した。父が凝じっと坐すわり込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起った。私は父の健康についてよく母と話

し合った。

「まったく気のせいだよ」と母がいった。母の頭は陛下の病やまいと父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。

「気じゃない。本当に身体からだが悪かないんでしょうか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」

私はこういって、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思し案あんした。

「今年の夏はお前も詰つまらなかろう。せっかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの身体からだもあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いっその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かったんだよ」

私が帰ったのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといいだしたのは、それから一週間後ごであった。そうしていよいよと極きめた日はそれからまた一週間の余も先になっていた。時間に束そく縛ばくを許さない悠ゆう長ちょう(10)な田舎いなかに帰った私は、お蔭かげで好もしくない社交上の苦痛から救すくわれたも同じ事であったが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかった。

崩ほう御ぎょの報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「ああ、ああ」といった。

「ああ、ああ、天子様もとうとうおかくれになる。己おれも……」

父はその後あとをいわなかった。

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗はた竿ざおの球たまを包んで、それで旗竿の先へ三寸ずん幅はばのひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来おうらいへさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅うちの古い門の屋根は藁わらで葺ふいてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所ところ々どころの凸でこ凹ぼこさえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地じと、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺ながめた。それが薄うす汚きたなない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大だい分ぶ趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあった。また先生に見せるのが恥ずかしくもあった。

私はまた一人家のなかへはいった。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有あり様さまを想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしている(11)なかに、一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦うずの中に、自然と捲まき込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯ひもまたふっと消えてしまうべき運命を、眼めの前に控えているのだとは固もとより気が付かなかった。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思って、筆を執とりかけた。私はそれを十行ばかり書いて已やめた。書いた所は寸すん々ずんに引き裂いて屑くず籠かごへ投げ込んだ。(先生に宛あてててそういう事を書いても仕方がないとも思ったし、前例に徴

ちょうしてみると、とても返事をくれそうになかったから）。私は淋さびしかった。それで手紙を書くのであった。そうして返事が来れば好いいと思うのであった。

6

八月の半なかばごろになって、私わたくしはある朋ほう友ゆうから手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな位地を探し廻まわる男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もっと好いい地方へ相談ができたので、余った方を私に譲ゆずる気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、ずいぶん骨を折って、教師の職にありつきたがっているものがあるから、その方へ廻まわしてやったら好よかろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異い存ぞんはないようであった。

「そんな所へ行かないでも、まだ好いい口があるだろう」

こういってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂う闊かつな父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。

「相当の口って、近ちか頃ごろじゃそんな旨うまい口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってく

れなくっちゃこっちも困る。人からあなたの所のご二じ男なんは、大学を卒業なすって何をしてお出いでですかと聞かれた時に返事ができないようじゃ、おれも肩かた身みが狭せまい[12]から」

父は渋しゅう面めんをつくった。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰だれ彼かれから、大学を卒業すればいくらぐらい月げっ給きゅうが取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円ぐらいなものだろうかといわれたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇き体たいな人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々おりおり起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸けん隔かくの甚はなはだしい父と母の前に黙もく然ねんとしていた。

「お前のよく先生先生という方にでもお願いしたら好いいじゃないか。こんな時こそ」

母はこうより外ほかに先生を解釈する事ができなかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰もらえと勧める人であった。卒業したから、地位の周しゅう旋せんをしてやろうという人ではなかった。

「その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。

「何にもしていないんです」と私が答えた。

私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告つげたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものだがね」

父はこういって、私を諷ふうした。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必ひっ竟きょうやくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。

「おれのような人間だって、月給こそ貰っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうもいった。私はそれでもまだ黙っていた。

「お前のいうような偉い方なら、きっと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも好いいからお出しな」

「ええ」

私は生なま返へん事じをして席を立った。

7

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者の来るたびに蒼蠅うるさい質問を掛けて相手を困らす質たちでもなかった。医者の方でもまた遠慮して何ともいわなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。

「小供に学問をさせるのも、好よし悪あしだね。せっかく修業をさせると、その小供は決して宅うちへ帰って来ない。これじゃ手もなく親子を隔かく離りするために学問させるようなものだ」

学問をした結果兄は今遠えん国ごくにいた。教育を受けた因果で、私わたくしはまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚ぐ痴ちはもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎いなか家やの中に、たった一人取り残されそうな母を描えがき出す父の想像はもとより淋さびしいに違いなかった。

わが家は動かす事のできないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事のできないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たった一人伽が藍らん堂どう(13)のわが家に取り残すのもまた甚はなはだしい不安であった。それだのに、東京で好いい地位を求めろといって、私を強しいたがる父の頭には矛盾があった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのお蔭かげでまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力で求めつつあるごとくに装おわなくて(14)はならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精くわしく述べた。もし自分の力でできる事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いながらこの手紙を書いた。また取とり合あうつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事もできまいと思いながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきっと来るだろうと思って書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向かっていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおっしゃった通り。ちょっと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかった。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他ひとが気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。

「しかし手紙じゃ用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなって、私が東京へ出てからでなくっちゃ」

「そりゃそうかも知れないけれども、またひょっとして、どんな好いい口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はない[15]よ」

「ええ。とにかく返事は来るに極きまってますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几き帳ちょう面めん[16]な先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外はずれた。先生からは一週間経たっても何の音信たよりもなかった。

「大おお方かたどこかへ避暑にでも行っているんでしょう」

私は母に向かって言いい訳わけらしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強しいても何かの事情を仮定して先生の態度を弁べん護ごしなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いっそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかった。私は

ついに先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎた。

8

九月始めになって、私わたくしはいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向かって当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「ここにこうしていたって、あなたのおっしゃる通りの地位が得られるものじゃないですから」

私は父の希望する地位を得うるために東京へ行くような事をいった。

「無論口の見付かるまでで好いいですから」ともいった。

私は心のうちで、その口は到とう底てい私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。

「そりゃ僅わずかの間あいだの事だろうから、どうにか都合してやろう。その代り永くはいけないよ。相当の地位を得え次第[17]独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他ひとの世話になんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」

父はこの外ほかにもまだ色々の小こ言ごとをいった。その中には、「昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。それらを私はただ黙って聞いていた。

小言が一通り済んだと思った時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好よかった。

「お母さんに日を見てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私は父の前に存ぞん外がいおとなしかった。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。父はまた私を引ひき留とめた。

「お前が東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いいが、この様子じゃいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾いく度たびか繰り返し眺めた。私はその時また蝉せみの声を聞いた。その声はこの間あいだ中じゅう聞いたのと違って、つくつく法ぼう師しの声であった。私は夏郷里に帰って、煮にえ付つくような蝉の声の中に凝じっと坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈はげしい音ねと共に、心の底に沁しみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰みつめていた。

私の哀愁はこの夏帰き省せいした以後次第に情調を変えて来た。油あぶら蝉ぜみの声がつくつく法師の声に変るごとくに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪りん廻ねのうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋さびしそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶おもい浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点におい

て、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上のぼりやすかった。

私はほとんど父のすべても知り尽つくしていた。もし父を離れるとすれば、情じょう合あいの上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解わかっていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通とおり越こして、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらって、東京へ立つ日取りを極きめた。

9

私わたくしがいよいよ立とうという間ま際ぎわになって、（たしか二日前の夕方の事であったと思うが、）父はまた突然引ひっ繰くり返かえった。私はその時書物や衣類を詰めた行こう李りをからげていた。父は風呂へ入ったところであった。父の背中を流しに行った母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体はだかのまま母に後ろから抱かれている父を見た。それでも座敷へ伴つれて戻った時、父はもう大丈夫だといった。念のために枕まくら元もとに坐って、濡ぬれ手て拭ぬぐいで父の頭を冷ひやしていた私は、九時頃になってようやく形かたばかりの夜食を済ました。

翌よく日じつになると父は思ったより元気が好よかった。留とめるのも聞かずに歩いて便所へ行ったりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かっていったと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいった通りまあ大丈夫であっ

た。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思った。しかし医者はただ用心が肝かん要よう[18]だと注意するだけで、念を押しても判はっ然きりした事を話してくれなかった。私は不安のために、出しゅっ立たつの日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。

「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背せ戸どへ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉もんだりした[19]。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が聞いた。

「ええ、少し延ばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちょっと躊ちゅう躇ちょした。そうだといえば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過か敏びんにしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。

「気の毒だね」といって、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいって、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差さし支つかえないように、堅く括くくられたままであった。私はぼんやりその前に立って、また縄を解こうかと考えた。

私は坐ったまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また

三、四日を過ごした。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安あん臥がを命じた。

「どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私にいった。母の顔はいかにも心細そうであった。私は兄と妹いもとに電報を打つ用意をした。けれども寝ている父にはほとんど何の苦く悶もんもなかった。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であった。その上食欲は不断よりも進んだ。傍はたのものが、注意しても容易にいう事を聞かなかった。

「どうせ死ぬんだから、旨うまいものでも食って死ななくっちゃ」

私には旨いものという父の言葉が滑こっ稽けいにも悲ひ酸さんにも聞こえた。父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかったのである。夜よに入いってかき餅もちなどを焼いてもらってぼりぼり噛かんだ。

「どうしてこう渇かわくのかね。やっぱり心しんに丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していいところにかえって頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使わない渇くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父おじが見舞に来たとき、父はいつまでも引ひき留とめて帰さなかった。淋さむしいからもっといてくれというのが重おもな理由であったが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴うったえるのも、その目的の一つであったらしい。

父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。私わたくしはその間に長い手紙を九州にいる兄宛あてで出した。妹いもとへは母から出させた。私は腹の中で、おそらくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信たよりだろうと思った。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書かき込こめた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であった。だから父の危険が眼の前に逼せまらないうちに呼び寄せる自由は利かなかった。といって、折角せっかく都合して来たには来たが、間に合わなかったといわれるのも辛かった。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。

「そう判然はっきりした事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承しょう知ちしていて下さい」

停車場ステーションのある町から迎えた医者は私にこういった。私は母と相談して、その医者の周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕まくら元もとへ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹かかっている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかった。

「今に癒なおったらもう一いっ返ぺん東京へ遊びに行ってみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」

母は仕方なしに「その時は私もいっしょに伴つれて行って頂きましょう」などと調子を合せていた。

時とするとまた非常に淋さみしがった。

「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」

私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かって何なん遍べんもそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁えん喜ぎでもない[20]と耳を塞ふさいだ奥さんの様子とを憶おもい出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学まなぶ事ができなかった。しかし口の先では何とか父を紛まぎらさなければならなかった。

「そんな弱い事をおっしゃっちゃいけませんよ。今に癒なおったら東京へ遊びにいらっしゃるはずじゃありませんか。お母さんといっしょに。今度いらっしゃるときっと吃びっ驚くりしますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増ふえていますからね。電車が通るようになれば自然町まち並なみも変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝じっとしている時は、まあ二に六ろく時じ中ちゅう一分もないといっていいくらいです」

私は仕方がないからいわないでいい事まで喋しゃ舌べった。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

病人があるので自然家いえの出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらいの割で代かわる代がわる[21]見舞に来た。中には比較的遠くにいて平へい生ぜい疎遠なものもあった。「どうかと思ったら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちっとも瘠やせていないじゃないか」などといって帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移って行くばかりであった。私は母や伯父おじと相談して、とうとう兄と妹いもとに電報を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知しらせがあった。妹はこの前懐かい妊にんした時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねていい越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかった。

11

こうした落ち付きのない間にも、私わたくしはまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶たまには書物を開けて十頁ページもつづけざまに読む時間さえ出て来た。一いっ旦たん堅く括くくられた私の行こう李りは、いつの間にか解かれてしまった。私は要いるに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極きめた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三さんが一いちにも足らなかった。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思った通り仕事の運ばない例ためしも少なかった。これが人の世の常だろうと思いながらも私は厭いやな気持に抑おさえ付けられた。

私はこの不快の裏うちに坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後あとの事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なった二人の面影を眺ながめた。

私が父の枕まくら元もとを離れて、独り取り乱した書物の中に腕組みをしているところへ母が顔を出した。

「少し午ひる眠ねでもおしよ。お前もさぞ草臥くたびれるだろう」

母は私の気分を了解していなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。私は単たん簡かんに礼を述べた。母はまだ室へやの入口に立っていた。

「お父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然はいって来て私の傍そばに坐った。

「先生からまだ何ともいって来ないかい」と聞いた。

母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきっと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得があって[22]母を欺あざむいたと同じ結果に陥おちいった[23]。

「もう一いっ遍ぺん手紙を出してご覧な」と母がいった。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰い安あんになるなら、手数を厭いとうような私ではなかった。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であった。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遥はるかに恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰もらえないのも、あるいはそうした訳からじゃないかしらという邪じゃ推すいもあった。

「手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒らちは明きません[24]よ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻まわらなくっちゃ」

「だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」

「だから出やしません。癒なおるとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」

「そりゃ解わかり切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ほうちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐あわれんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解できなかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のあるごとくに、母も眼の前の病人を忘れて、外ほかの事を考えるだけ、胸に空すき地まがあるのかしらと疑うたぐった。その時「実はね」と母がいい出した。

「実はお父さんの生きてお出いでのうちに、お前の口が極きまったらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥たしかなら気も慥かなんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」

憐れな私は親おや孝行こうこうのできない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。

12

兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平へい生ぜいから何を措おいても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床とこについてからは、退屈のため猶なお更さらそれを読みたがった。母も私わたくしも強しいては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。

「そういう元気なら結構なものだ。よっぽど悪いかと思って来たら、大変好いいようじゃありませんか」

兄はこんな事をいいながら父と話をした。その賑にぎやか過ぎる調子が私にはかえって不調和に聞こえた。それでも父の前を外はずして私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「新聞なんか読ましちゃいけなかないか」

「私もそう思うんだけれども、読まないと承知しないんだから、仕様がない」

兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「よく解わかるのかな」といった。兄は父の理解力が病気のために、平生よりはよっぽど鈍にぶっているように観察したらしい。

「そりゃ慥たしかです。私はさっき二十分ばかり枕まくら元もとに坐すわって色々話してみたが、調子の狂ったところは少しもないです。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」

兄と前後して着いた妹いもとの夫の意見は、我々よりもよほど楽観的であった。父は彼に向かって妹の事をあれこれと尋ねていた。「身体からだが身体だからむやみに汽車になんぞ乗って揺ゆれない方が好い。無理をして見舞に来られたりすると、かえってこっちが心配だから」といっていた。「なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差さし支つかえない」ともいっていた。

乃の木ぎ大だい将しょう[25]の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知った。

「大変だ大変だ」といった。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚おどろかされた。

「あの時はいよいよ頭が変になったのかと思って、ひやりとした」と後で兄が私にいった。「私わたしも実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであった。

その頃ころの新聞は実際田舎いなかものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあった。私は父の枕元に坐って鄭てい寧ねいにそれを読んだ。読む時間のない時は、そっと自分の室へやへ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官かん女じょみたような服装なりをしたその夫人の姿を忘れる事ができなかった。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹きや草を震わせている最さい中ちゅうに、突然私は一通の電報を先生から受け取った。洋服を着た人を見ると犬が吠ほえるような所では、一通の電報すら大事件であった。それを受け取った母は、はたして驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。

「何だい」といって、私の封を開くのを傍そばに立って待っていた。

電報にはちょっと会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあった。私は首を傾けた。

「きっとお頼たのもうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私もあるいはそうかも知れないと思った。しかしそれにしては少し変だとも考えた。とにかく兄や妹いもとの夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打うち遣やって、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。できる

だけ簡略な言葉で父の病気の危き篤とくに陥りつつある旨むねも付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委い細さい手紙として、細かい事情をその日のうちに認したためて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切った母は、「本当に間まの悪い時は仕方のないものだね」といって残念そうな顔をした。

13

私わたくしの書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とかいって来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛あてで届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。

「大おお方かた手紙で何とかいってきて下さるつもりだろうよ」

母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとばかり解釈しているらしかった。私もあるいはそうかとも考えたが、先生の平生から推おしてみると、どうも変に思われた。「先生が口を探してくれる」。これはあり得うべからざる[26]事のように私には見えた。

「とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」

私は母に向かってこんな分り切った事をいった。母はまたもっともらしく思し案あんしながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。

その日はちょうど主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣かん腸ちょうなどをして帰って行った。

父は医者から安あん臥がを命ぜられて以来、両便とも寝たまま他ひとの手で始末してもらっていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚はなはだしくそれを忌いみ嫌ったが、身体からだが利かないので、やむを得ずいやいや床とこの上で用を足した。それが病気の加か減げんで頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経ふるに従って、無精な排はい泄せつを意としないようになった。たまには蒲ふ団とんや敷布を汚して、傍はたのものが眉を寄せるのに、当人はかえって平気でいたりした。もっとも尿の量は病気の性質として、極めて少なくなった。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰おとろえた。たまに何か欲しがっても、舌が欲しがるだけで、咽の喉どから下へはごく僅わずかしか通らなかった。好きな新聞も手に取る気力がなくなった。枕の傍にある老ろう眼がん鏡きょうは、いつまでも黒い鞘さやに納められたままであった。子供の時分から仲の好かった作さくさんという今では一里り[27]ばかり隔たった所に住んでいる人が見舞に来た時、父は「ああ作さんか」といって、どんよりした眼を作さんの方に向けた。

「作さんよく来てくれた。作さんは丈夫で羨うらやましいね。己おれはもう駄目だ」

「そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病気になったって、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるしさ、子供はなしさ。ただこうして生きているだけの事だよ。達者だって何の楽しみもないじゃないか」

浣かん腸ちょうをしたのは作さんが来てから二、三日あとの事

であった。父は医者のお蔭かげで大変楽になったといって喜んだ。少し自分の寿命に対する度胸ができたという風ふうに機嫌が直った。傍そばにいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に気力を付けるためか、先生から電報のきた事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあったように話した。傍そばにいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮さえぎる訳にもゆかないので、黙って聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。

「そりゃ結構です」と妹いもとの夫もいった。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更いまさらそれを否定する勇気を失った。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立った。

14

父の病気は最後の一撃を待つ間ま際ぎわまで進んで来て、そこでしばらく躊ちゅう躇ちょするようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日下くだるか、今日下るかと思って、毎夜床とこにはいった。

父は傍はたのものを辛つらくするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいずつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自めいめいの寝床へ引き取って差さし支つかえなかった。何かの拍ひょう子しで眠れなかった時、病人の唸うなるような声を微かすかに聞いたと思い誤った私わたくしは、一遍半よ夜なかに床を抜け出して、念のため父の枕まくら元もとまで行ってみた事があった。その夜よは母が起きている番に当っていた。しかしその母は父の横に肱ひじを曲げて枕としたなり寝入っていた。父も深い

眠りの裏うちにそっと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寝床へ帰った。

　私は兄といっしょの蚊か帳やの中に寝た。妹いもとの夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入いって休んだ。

「関せきさんも気の毒だね。ああ幾日も引っ張られて帰れなくっちゃあ」

　関というのはその人の苗みょう字じであった。

「しかしそんな忙しい身体からだでもないんだから、ああして泊っていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなっちゃ」

「困っても仕方がない。外ほかの事と違うからな」

　兄と床とこを並べて寝る私は、こんな寝ね物もの語がたり(28)をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあった。どうせ助からないものならばという考えもあった。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚はばかった。そうしてお互いにお互いがどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。

「お父さんは、まだ治る気でいるようだな」と兄が私にいった。

　実際兄のいう通りに見えるところもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うといって承知しなかった。会えばきっと、私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかったのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已やめになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ッついた。私はアルコールに煽あおられたその時の乱らん雑ざつな有様を想おもい出して苦笑した。飲むものや食うものを強しいて廻まわる父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好いい兄弟ではなかった。小ちさいうちは好よく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へはいってからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺ながめて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったので、また懸け隔へだたった遠くにいたので、時からいっても距離からいっても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優やさしい心持がどこからか自然に湧わいて出た。場合が場合なのもその大きな源げん因いんになっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕まくら元もとで、兄と私は握手したのであった。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当けんとうの違った質問を兄に掛けた。

「一体家うちの財産はどうなってるんだろう」

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産っていったところで金としては高たかの知れた[29]ものだろう」

母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしていた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したじゃないか」と私わたくしは答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他ひとの説明を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必ひっ竟きょう聞いても解わからないというのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらう必要はなかった。けれども腹は立った。また例の兄らしい所が出て来たと思った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察すいさつしていた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何もできないから遊んでいるのだと速断そくだんするのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰つまらん人間に限るといった風ふうの口吻こうふんを洩もらした。

「イゴイスト[30]はいけないね。何もしないで生きていようというのは横着おうちゃく[31]な了りょう簡けん[32]だからね。人は自分のもっている才能をできるだけ働かせなくっちゃ嘘だ」

私は兄に向かって、自分の使っているイゴイストという言葉の意味がよく解わかるかと聞き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭かげで地位ができればまあ結構だ。お父とうさんも喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明めい瞭りょうな手紙

の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、またそう口に出す勇気もなかった。それを母の早はや呑のみ込こみでみんなにそう吹ふい聴ちょうしてしまった今となってみると、私は急にそれを打うち消けす訳に行かなくなった。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕ひんしている父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他た妹いもとの夫だの伯父おじだの叔お母ばだのの手前、私のちっとも頓とん着じゃくしていない事に、神経を悩まさなければならなかった。

　父が変な黄色いものを嘔はいた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

　兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者が帰り際に兄に向っていった事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。

　「お前ここへ帰って来て、宅うちの事を監理する気がないか」と兄が私を顧かえりみた。私は何とも答えなかった。

　「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまたいった。兄は私を土の臭においを嗅かいで朽ちて行っても惜しくないように見ていた。

　「本を読むだけなら、田舎いなかでも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いいだろう」

　「兄さんが帰って来るのが順ですね」と私がいった。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一ひと口くちに斥しりぞけた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充みち満みちていた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどっちかで引き取らなくっちゃなるまい」

「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後あとについて、こんな風に語り合った。

16

父は時々囈うわ語ことをいうようになった。

「乃の木ぎ大たい将しょうに済まない。実に面めん目ぼく次し第だいがない[33]。いえ私もすぐお後あとから」

こんな言葉をひょいひょい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕まくら元もとへ集めておきたがった。気のたしかな時は頻しきりに淋さびしがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室へやの中うちを見廻して母の影が見えないと、父は必ず「お光みつは」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私わたくしはよく起たって母を呼びに行った。「何かご用ですか」と、母が仕し掛かけた用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰みつめるだけで何もいわない事があった。そうかと思うと、まるで懸かけ離はなれた話をした。突然「お光お前まえにも色々世話になったね」などと優やさしい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきっと涙ぐんだ。そうした後ではまた

きっと丈夫であった昔の父をその対照として想おもい出すらしかった。

「あんな憐あわれっぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷ひどかったんだよ」

母は父のために箒ほうきで背中をどやされた時の事などを話した。今まで何なん遍べんもそれを聞かされた私と兄は、いつもとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念かたみのように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺ゆい言ごんらしいものを口に出さなかった。

「今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。

「そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好よし悪あしだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父おじに相談をかけた。伯父も首を傾けた。

「いいたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、といって、こっちから催さい促そくするのも悪いかも知れず」

話はとうとう愚ぐ図ず愚ぐ図ずになってしまった。そのうちに昏こん睡すいが来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思い違えてかえって喜んだ。「まあああして楽に寝られれば、傍はたにいるものも助かります」といった。

父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先さっ刻きまでそこに坐すわっていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇やみを縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するよう

にみえた。母が昏睡こんすい状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。

そのうち舌が段々縺もつれて[34]来た。何かいい出しても尻しりが不ふ明めい瞭りょうに了おわるために、要領を得ないでしまう事が多くあった。そのくせ話し始める時は、危き篤とくの病人とは思われないほど、強い声を出した。我々は固もとより不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。

「頭を冷やすと好いい心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水みず枕まくらを取り更かえて、それから新しい氷を入れた氷ひょう嚢のうを頭の上へ載のせた。がさがさに割られて尖とがり切った氷の破片が、嚢ふくろの中で落ちつく間、私は父の禿はげ上った額の外はずれでそれを柔らかに抑おさえていた。その時兄が廊ろう下か伝づたいにはいって来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空あいた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不ふ審しんを起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並なみの状じょう袋ぶくろにも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭てい寧ねいに糊のりで貼はり付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書かき留とめである事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちょっとそれを懐ふところに差し込んだ。

17

　その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私わたくしが厠かわやへ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は「どこへ行く」と番兵のような口調で誰すい何かした。

「どうも様子が少し変だからなるべく傍そばにいるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。

　私もそう思っていた。懐かい中ちゅうした手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれは誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯うなずいた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々お世話になります」

　父はこういった。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕まくら辺べを取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中うちの一人が立って次の間まへ出た。するとまた一人立った。私も三人目にとうとう席を外はずして、自分の室へやへ来た。私には先さっ刻き懐ふところへ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易にできる所しょ作さには違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一ひと息いきにそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偸ぬすんでそれに充あてた。

　私は繊せん維いの強い包み紙を引き掻くように裂さき破った。中から出たものは、縦たて横よこに引いた罫けいの中へ行儀よく書いた原稿様ようのものであった。そうして封じる便宜のために、四よつ折おりに畳たたまれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に

折り返して読みやすいように平たくした。

私の心はこの多量の紙と印イン気キが、私に何事を語るのだろうかと思って驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がこのかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきっとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父おじからか、呼ばれるに極きまっている[35]という予よ覚かくがあった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁ページを読んだ。その頁は下しものように綴つづられていた。

「あなたから過去を問いただされた時、答える事のできなかった勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失うしなわれてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。したがって、それを利用できる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験けいけんとして教えて上げる機会を永久に逸いっするようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口でいうべきところを、筆で申し上げる事にしました」

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事ができた。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気き遣づかいはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執とることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろう。先生はなぜ私の上じょう京きょうするまで待っていられないだろう。

「自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならない」

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後あとを読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を馳かけ抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚かく悟ごした。

18

病室にはいつの間にか医者が来ていた。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣かん腸ちょうを試みるところであった。看護婦は昨ゆう夜べの疲れを休めるために別室で寝ていた。慣れない兄は起たってまごまごしていた。私わたくしの顔を見ると、

「ちょっと手をお貸かし」といったまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油あぶら紙がみを父の尻しりの下に宛あてがったりした。

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕まくら元もとに坐すわっていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来るといって、帰って行った。帰り際ぎわに、もしもの事があったらいつでも呼んでくれるようにわざわざ断っていた。

私は今にも変へんがありそうな病室を退しりぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛ゆっくりした気分になれなかった。机の前に坐るや否いなや、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれれば、それが最後だという畏い怖ふが私の手を顫ふるわした。私は先生の手紙をただ無意味に頁ページだけ剥は繰ぐって行った。私の眼は几き帳ちょう面めんに枠わくの中に篏はめられた字じ画かくを見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚おぼ束つかなかっ

た。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳たたんで机の上に置こうとした。その時ふと結けつ末まつに近い一句が私の眼にはいった。

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」

私ははっと思った。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝ぎょう結けつしたように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句ぐらいずつの割で倒さかさに読んで行った。私は咄とっ嗟さの間あいだに、私の知らなければならない事を知ろうとして、ちらちらする文もん字じを、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安あん否ぴだけであった。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取って、全く無用であった。私は倒さかさまに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自じ烈れったそうに[36]畳んだ。

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕まくら辺べは存ぞん外がい静かであった。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐っている母を手て招まねぎして、「どうですか様子は」と聞いた。母は「今少し持ち合ってるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯うなずいた。父ははっきり「有難う」といった。父の精神は存外朦もう朧ろうとしていなかった。

私はまた病室を退しりぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二に、三さん日ち保もつだろうか、そこのところを判はっ然きり

り聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生あい憎にく留守であった。私には凝じっとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。心の落おち付つきもなかった。私はすぐ俥くるまを停車場ステーションへ急がせた。

　　私は停車場の壁へ紙かみ片ぎれを宛あてがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断ことわらないで走るよりまだ増しだろうと思って、それを急いで宅うちへ届けるように車しゃ夫ふに頼んだ。そうして思い切った勢いきおいで東京行きの汽車に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、ようやく始めからしまいまで眼を通した。

---

(1) 高が：（副）顶多，至多，充其量，不外乎。

(2) 鳥の子紙：一种用雁皮和黄瑞香树为原料制成的一种上等日本纸。

(3) ものを：（接助）然而，却。一般用来表示遗憾、怨恨和惋惜之情。

(4) 気性：脾气，天性，禀性，天生的性格。

(5) 仰山：（副·形动）夸张，夸大；很多，极多。

(6) 剣呑：危险，有问题。

(7) 我を張る：坚持，固执己见，一意孤行。

(8) うつつ：神志清醒的状态，现实。

(9) ひらめいた：ひらめく［閃く］，闪，闪烁，闪过，闪念；飘动。

(10) 悠長：悠闲，慢慢悠悠，不慌不忙，悠然自得。

(11) ざわざわしている：嘈杂，喧闹，吵吵嚷嚷。

(12) 肩身が狭い：感到丢人，觉得丢脸，脸上无光，没面子。

(13) 伽藍堂：空空荡荡，空洞，空虚。一般不写汉字。

(14) 装おわなくて：よそおう［装う］，假装，装扮，装饰，装潢。

(15) 越した事はない：～に越した事はない，胜过，再没有比……更好的了。

(16) 几帳面：守规矩，规规矩矩，循规蹈矩，一丝不苟。

(17) 得次第：动词连用形＋次第，一……立即……

(18) 肝要：重要，至关重要。要紧，关键。

(19) 気を揉んだりした：気を揉む，坐立不安，放心不下，牵肠挂肚。

(20) 縁喜でもない：不吉利，凶多吉少。

(21) 代る代る：（副）轮流，轮班，交替。

(22) 心得があって：心得がある，故意，有意，存心。

(23) 陥った：［陥る］，陷入，陷进。

(24) 埒は明きません：らちがあく［埒が明く］，得到解决，落实，有进展。

(25) 乃木大将：乃木希典（1849—1912），日本陆军大将。日俄战争中曾任第三军司令官，指挥围攻旅顺。

(26) あり得べからざる：不会有的、不应该有的。相当于あり得るべきではない。

(27) 里：日本长度单位，一里约合3.927km。

(28) 寝物語：一起躺着说话。多指夫妇或情人间躺着说的私房话，枕边儿话。

(29) 高の知れた：高が知れる，没什么了不起的，不过如此罢了，不过尔尔。

(30) イゴイスト：egoist，亦作エゴイスト，利己主义者，我行我素之人。

(31) 横着：偷懒；厚颜无耻。

(32) 了簡：想法，主意，打算；心胸。

(33) 面目次第がない：或面目次第もない，羞愧至极，没脸见人。

(34) 縺れて：もつれる［縺れる］，不灵活；纠缠，纠结；混乱。

(35) 極っている：~にきまる，必定，一定，肯定。

(36) 自烈たそうに：じれったい的词干じれった＋样态助动词そう，似乎很焦躁地。

下　先生と遺書

1

「……私わたくしはこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜よろしく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入いったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何なんとかしたいと思ったのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自じ白はくすると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかったのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたった一人で暮しているといった方が適てき切せつなくらいの私には、そういう努力をあえてする余地が全まったくないのです。しかしそれは問題ではありません。実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いいのかと思い煩わずらっていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞっとしました。馳かけ足あしで絶壁の端はじまで来て、急に底の見えない谷を覗のぞき込んだ人のように。私は卑ひ怯きょうでした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩はん悶もんしたのです。遺い憾かんながら、その時の私には、あなたというものがほとんど存在していなかったといっても誇こ張ちょうではありません。一歩進めていうと、あなたの地位、あなたの糊こ口こうの資し、そんなものは私にとってまるで無意味なのでした。どうでも構わなかったのです。私はそれどころ[(1)]の騒ぎでなかったのです。私は状じょう差さしへあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅うちに相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といって藻も掻がき廻まわるのか。私はむしろ苦々にがにがしい気分で、遠くにいるあなたにこんな一いち瞥べつを与えただけでした。私は返事を上げなけ

れば済まないあなたに対して、言いい訳わけのためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無ぶ躾しつけ[2]な言葉を弄ろうするのではありません。私の本意は後あとをご覧になればよく解わかる事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後ご私はあなたに電報を打ちました。有あり体ていにいえば[3]、あの時私はちょっとあなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛かけて、今東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺ながめていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったとみえて、また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出しゅっ京きょうできない事情がよく解わかりました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退のけにして、何であなたが宅うちを空あけられるものですか。そのお父さんの生しょう死しを忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京にいる頃ころには、難なん症しょうだからよく注意しなくってはいけないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳のう髄ずいよりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我がを認めています。あなたに許してもらわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執とりかけましたが、一行も書かずに已やめました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そう

してこの手紙を書くにはまだ時機が少し早はや過すぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再ふたたび打ったのは、それがためです。

2

「私わたくしはそれからこの手紙を書き出しました。平へい生ぜい筆を持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、あなたに対する私のこの義務を放ほう擲てきするところでした。しかしいくら止よそうと思って筆を擱おいても、何にもなりませんでした。私は一時間経たたないうちにまた書きたくなりました。あなたから見たら、これが義務の遂すい行こうを重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否いなみません。私はあなたの知っている通り、ほとんど世間と交渉のない孤こ独どくな人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見み廻まわしても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれをできるだけ切きり詰つめた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭えい敏びん過ぎて刺し戟げきに堪えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦いったん約束した以上、それを果たさないのは、大変厭いやな心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱おいた筆をまた取り上げなければならないのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といっても差さし支つかえないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむしろ

私の経験を私の生命いのちと共に葬ほうむった方が好いいと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間かん接せつにも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といる日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真ま面じ目めだから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投なげかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じっと見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫つかみなさい。私の暗いというのは、固もとより倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫りん理り的てきに育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大だい分ぶ違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損そん料りょう着ぎではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分いくぶん[4]か参考になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解わかっているでしょう。私はあなたの意見を軽けい蔑べつまでしなかったけれども、決して尊敬を払い得うる程度にはなれなかった。あなたの考えには何らの背景もなかったし、あなたは自分の過去をもつには余りに若過ぎたからです。私は時々ときどき笑った。あなたは物足りなそうな顔をちょいちょい私に見せた。その極きょくあなたは私の過去を絵え巻まき物もののように、あなたの前に展開してくれと逼せまった。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無ぶ遠えん慮りょに私の腹の中から、或ある生きたものを捕つらまえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、

温かく流れる血潮を啜すすろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭いやであった。それで他た日じつを約して、あなたの要求を斥しりぞけてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴あびせかけようとしているのです。私の鼓こ動どうが停とまった時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

3

「私が両親を亡なくしたのは、まだ私の廿歳はたちにならない時分でした。いつか妻さいがあなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不ふ審しん(5)を起させた通り、ほとんど同時といっていいくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸ちょう窒チ扶フ斯スでした。それが傍そばにいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅うちには相当の財産があったので、むしろ鷹おう揚よう(6)に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどっちか、片方で好いいから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたろうにと思います。

私は二人の後あとに茫ぼう然ぜんとして取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいる事ができませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覚さとっていたか、または傍はたのもののいうごとく、実際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分りません。母はただ

叔父おじに万事を頼んでいました。そこに居い合あわせた私を指さすようにして、「この子をどうぞ何なに分ぶん」といいました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになっていましたので、母はそれもついでにいうつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後を引き取って、「よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得うる体質の女なんでしたろうか、叔父は「確しっかりしたものだ」といって、私に向って母の事を褒ほめていました。しかしこれがはたして母の遺言であったのかどうだか、今考えると分らないのです。母は無論父の罹かかった病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきっとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑うたがう余地はまだいくらでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通った明らかなものにせよ、一いっ向こう記憶となって母の頭に影さえ残していない事がしばしばあったのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風ふうに物を解きほどいてみたり、またぐるぐる廻まわして眺めたりする癖くせは、もうその時分から、私にはちゃんと備そなわっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえって役に立ちはしないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性しょう分ぶんが倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後こう来らいますます他ひとの徳義心を疑うようになったのだろうと思うのです。それが私の煩はん悶もんや苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥たしかですから覚えていて下さい。

　話が本ほん筋すじ(7)をはずれると、分り悪にくくなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くの

に、私と同じ地位に置かれた他ほかの人と比べたら、あるいは多少落ち付いていやしないかと思っているのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響ひびきももう途と絶だえました。雨戸の外にはいつの間にか憐あわれな虫の声が、露の秋をまた忍しのびやかに思い出させるような調子で微かすかに鳴いています。何も知らない妻さいは次の室へやで無邪気にすやすや寝入ねいっています。私が筆を執とると、一字一劃かくができあがりつつペンの先で鳴っています。私はむしろ落ち付いた気分で紙に向っているのです。不馴ふなれのためにペンが横へ外それるかも知れませんが、頭が悩のう乱らんして筆がしどろ[8]に走るのではないように思います。

4

「とにかくたった一人取り残された私わたくしは、母のいい付け通り、この叔父おじを頼るより外ほかに途みちはなかったのです。叔父はまた一いっ切さいを引き受けて凡すべての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取とり計はからってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺さつ伐ばつで粗野でした。私の知ったものに、夜中よる職人と喧嘩をして、相手の頭へ下げ駄たで傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚あげ句くの事なので、夢中に擲なぐり合いをしている間あいだに、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱ひし形がたの白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照しょう会かいされるところでした。しかし友達が色々と骨を折って、ついに表おもて沙ざ汰たにせずに済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育そだったあな

た方に聞かせたら、定めて馬ば鹿か馬ば鹿かしい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質しつ朴ぼくな点をその代りにもっていたのです。当時私の月々叔父から貰もらっていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥はるかに少ないものでした（無論物価も違いましょうが）。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨うらやましがる憐あわれな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしょう。というのは、私は月々極きまった送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、および臨りん時じの費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費する事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父おじを信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましょう、政党にも縁えん故こがあったように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父とはまるで違った方へ向いて発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤とく実じつ一いっ方ぽうの男でした。楽しみには、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書しょ画が骨こっ董とうといった風ふうのものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎いなかにありましたけれども、二里りばかり隔たった市し、——その市には叔父が住んでいたのです、——その市から時々道具屋が懸かけ物ものだの、香こう炉ろだのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父は一口ひとくちにいうと、まあマン·オフ·ミーンズ[(9)]とでも評したら好いいのでしょう。比較的上品な嗜し好こうをもった田舎紳士だったのです。だから気き性しょうからいうと、闊かっ達たつ

[10]な叔父とはよほどの懸けん隔かくがありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かったのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥はるかに働きのある頼もしい人のようにいっていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材さい幹かんが鈍にぶる、つまり世の中と闘たたかう必要がないからいけないのだともいっていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむしろ私の心得になるつもりで、それをいったらしく思われます。「お前もよく覚えているが好いい」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒ほめられたりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならない私には、もう単たんなる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になっていたのです。

5

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住すま居いには、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外ほかに仕方がなかったのです。

叔父はその頃ころ市にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合からいえば、今までの居きょ宅たくに寝ね起おきする方が、二里も隔へだたった私の家に移るより遥かに便利だといって笑いました。これは私の父母が亡くなった後、どう邸やしきを始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩もれた言葉であります。私の家は旧ふるい歴史をもっているので、少しはその界かい隈わいで人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事

だろうと思いますが、田舎では由ゆい緒しょのある家を、相続人があるのに壊したり売ったりするのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家うちはそのままにして置かなければならず、はなはだ所しょ置ちに苦しんだのです。

　叔お父じは仕方なしに私の空あき家やへはいる事を承諾してくれました。しかし市しの方にある住すま居いもそのままにしておいて、両方の間を往いったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。私に固もとより異議のありようはずがありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好いいくらいに考えていたのです。

　子供らしい私は、故ふる郷さとを離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固もとよりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅たび人びとの心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあったのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

　私の留守の間、叔父はどんな風ふうに両方の間を往ゆき来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家いえの内に集まっていました。学校へ出る子供などは平へい生ぜいおそらく市の方にいたのでしょうが、これも休暇のために田舎いなかへ遊び半分といった格かくで引き取られていました。

　みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえって賑にぎやかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりました。叔父はもと私の部屋になっていた一ひと間まを占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数か

ずも少なくないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞じ退たいしたのですけれども、叔父はお前の宅うちだからといって、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外ほかに、何の不愉快もなく、その一ひと夏なつを叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃そろえて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然はっきり断りました。三度目にはこっちからとうとうその理由を反はん問もんしなければならなくなりました。彼らの主意は単たん簡かんでした。早く嫁よめを貰もらってここの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇やすみになって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰もらう、両方とも理屈としては一ひと通とおり聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解わかります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったのでしょう。しかし東京へ修しゅ業ぎょうに出たばかりの私には、それが遠とお眼め鏡がねで物を見るように、遥はるか先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。

6

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲ぐるりを取り捲まいている青年の顔を見ると、世しょ帯たい染じみたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉ことごとく単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中うちにも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に余儀なく[11]されて、すでに

妻を迎えていたものがあったかも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺あたりに気き兼がね[12]をして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内うち輪わの話はしないように慎んでいたのでしょう。後から考えると、私自身がすでにその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行こう李りを絡からげて、親の墓のある田舎いなかへ帰って来ました。そうして去年と同じように、父ちち母はははのいたわが家の中で、また叔父おじ夫婦とその子供の変らない顔を見ました。私は再びそこで故ふる郷さとの匂いを嗅かぎました。その匂いは私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破やぶる変化としても有難いものに違いなかったのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂いの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父のいう所は、去年の勧かん誘ゆうを再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧すすめられた時には、何らの目的物がなかったのに、今度はちゃんと肝かん心じんの当人を捕つらまえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹いとこに当る女でした。その女を貰もらってくれれば、お互いのために便宜である、父も存ぞん生しょう中ちゅうそんな事を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風ふうな話をしたというのもあり得うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覚さとっていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解わかりまし

た。私は迂う闊かつなのでしょうか。あるいはそうなのかも知れませんが、おそらくその従妹に無む頓とん着じゃくであったのが、おもな源げん因いんになっているのでしょう。私は小こ供どものうちから市しにいる叔父の家うちへ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかったのです。あなたもご承知でしょう、兄きょう妹だいの間に恋の成立した例ためしのないのを。私はこの公認された事実を勝手に布ふ衍えんしている(13)かも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男なん女にょの間には、恋に必要な刺し戟げきの起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香こうをかぎ得うるのは、香を焚たき出した瞬間に限るごとく、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹せつ那なにあるごとく、恋の衝動にもこういう際きわどい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴なれれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻ま痺ひして来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹いとこを妻にする気にはなれませんでした。

　叔お父じはもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいといいました。けれども善は急げという諺ことわざもあるから、できるなら今のうちに祝しゅう言げんの盃さかずきだけは済ませておきたいともいいました。当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭いやな顔をしました。従妹は泣きました。私に添われないから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛つらかったからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取とっ付つき[14]でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故ふる郷さとがそれほど懐かしかったからです。あなたにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の匂においも格別です、父や母の記憶も濃こまやかに漂ただよっています。一年のうちで、七、八の二ふた月つきをその中に包くるまれて、穴に入った蛇のように凝じっとしているのは、私に取って何よりも温かい好いい心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭なものは断る、断ってさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲まげなかったにもかかわらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に屈くっ托たくした覚えもなく、相あい変かわらずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように好いい顔をして私を自分の懐ふところに抱だこうとしません。それでも鷹おう揚ように育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔お母ばも妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業[15]へはいるつもりだといって、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性しょう分ぶんとして考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変ったのだろう。いやどうして向うがこう変ったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍にぶい私の眼を洗って、急に世の中が判然はっきり見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世にいなくなった後でも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じてい

たのです。もっともその頃でも私は決して理に暗い質たちではありませんでした。しかし先祖から譲ゆずられた迷信の塊かたまりも、強い力で私の血の中に潜ひそんでいたのです。今でも潜んでいるでしょう。

私はたった一人山へ行って、父母の墓の前に跪ひざまずきました。半なかばは哀あい悼とうの意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握にぎられてでもいるような気分で、私の運命を守るべく(16)彼らに祈りました。あなたは笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌たなごころを翻すように変りました。もっともこれは私に取って始めての経験ではなかったのです。私が十六、七の時でしたろう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはっと驚きました。何なん遍べんも自分の眼を疑うたぐって、何遍も自分の眼を擦こすりました。そうして心の中うちでああ美しいと叫びました。十六、七といえば、男でも女でも、俗にいう色いろ気けの付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも気の付かなかった異性に対して、盲め目くらの眼が忽たちまち開あいたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔お父じの態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄が然ぜんとして心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映うつったのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行ゆく先さきがどうなるか分らないという気になりました。

8

「私は今まで叔父任まかせにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父ちち母ははに対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体からだだと自称するごとく、毎晩同じ所に寝ね泊とまりはしていませんでした。二日家うちへ帰ると三日は市しの方で暮らすといった風ふうに、両方の間を往ゆき来きして、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉を口くち癖くせのように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮ひ肉にくにも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛かかる話をしようという目的ができた眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口こう実じつとしか受け取れなくなって来たのです。私は容易に叔父を捕つらまえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾めかけをもっているという噂うわさを聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であったある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪あやしむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外ほかにも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかっていたように他ひとから思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。

私はとうとう叔お父じと談判を開きました。談判というのは少し不ふ穏おん当とうかも知れませんが、話の成なり行ゆきからいうと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の

調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜さい疑ぎの眼で叔父に対しています。穏おだやかに解決のつくはずはなかったのです。

遺い憾かんながら私は今その談判の顛てん末まつ[17]を詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、もっと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿たどりつきたがっているのを、漸やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会って静かに話す機会を永久に失った私は、筆を執とる術すべに慣れないばかりでなく、貴たっとい時間を惜おしむという意味からして、書きたい事も省はぶかなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないといった事を。あの時あなたは私に昂こう奮ふんしていると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一ひと口くち金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎ぞう悪おと共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかったかも知れません、陳ちん腐ぷだったかも知れません。けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷ひややかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きていると信じています。血の力で体たいが動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっ

と強く働き掛ける事ができるからです。

9

「一ひと口くちでいうと、叔父は私わたくしの財産を胡ご魔ま化かしたのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容た易やすく行われたのです。すべてを叔父任まかせにして平気でいた私は、世間的にいえば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純なる尊たっとい男とでもいえましょうか。私はその時の己おのれを顧みて、なぜもっと人が悪く生れて来なかったかと思うと、正直過ぎた自分が口く惜やしくって堪たまりません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵ちりに汚れた後の私です。きたなくなった年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物ぶっ質しつ的てきに私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔お父じは策略で娘を私に押おし付つけようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下げ卑びた利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹いとこを愛していないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断ったのが私には多少の愉快になると思います。胡ご魔ま化かされるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載のせられ方からいえば、従妹を貰もらわない方が、向うの思い通りにならないという点から見て、少しは私の我がが通った事になるのですから。しかしそれはほとんど問題とするに足りない些さ細さいな事柄です。ことに関係のないあなたにいわせたら、さぞ[18]馬ば鹿か気げた意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他たの親しん戚せきのものがはいりました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵てき視していました。私は叔父が私を欺あざむいたと覚さとると共に、他ほかのものも必ず自分を欺くに違いないと思い詰めました。父があれだけ賞ほめ抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理ロジックでした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一いっ切さいのものを纏まとめてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遥はるかに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公おおやけ沙ざ汰たにするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤いきどおりました。また迷いました。訴訟にすると落らく着ちゃくまでに長い時間のかかる事も恐れました。私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市しにおる中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形かたちに変えようとしました。旧友は止よした方が得だといって忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故こ郷きょうを離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓ちかったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もっともそれは私が東京へ着いてからよほど経った後のちの事です。田舎いなかで畠はた地ちなどを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏ふみ倒たおされる恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐ふところにして家を出た若干の公債

と、後からこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固もとより非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実をいうと私はそれから出る利り子しの半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥おとし入れたのです。

10

「金に不自由のない私わたくしは、騒そう々ぞうしい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆ばあさんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅うちを留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちょくらちょいと[19]実行する事は覚おぼ束つかなく見えたのです。ある日私はまあ宅うちだけでも探してみようかというそぞろ心ごころ[20]から、散歩がてらに本ほん郷ごう台だいを西へ下りて小こ石いし川かわの坂を真まっ直すぐに伝でん通ずう院いんの方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいましたが、その頃は左手が砲ほう兵へい工こう廠しょうの土ど塀べいで、右は原とも丘ともつかない空くう地ちに草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何なに心ごころなく向うの崖がけを眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣おもむき[21]が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅うちはないだろうかと思いました。それで直すぐ草くさ原はらを横切って、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好いい町になり切れないで、がたぴししているあの辺へんの家いえ並なみは、その時分の事

ですからずいぶん汚ならしいものでした。私は露次ろじを抜けたり、横よこ丁ちょうを曲まがったり、ぐるぐる歩き廻まわりました。しまいに駄だ菓が子し屋やの上かみさんに、ここいらに小ぢんまり[22]した貸かし家やはないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」といって、少しば時らく首をかしげていましたが、「かし家やはちょいと……」と全く思い当らない風ふうでした。私は望のぞみのないものと諦あきらめて帰り掛けました。すると上さんがまた、「素しろ人うと下げ宿しゅくじゃいけませんか」と聞くのです。私はちょっと気が変りました。静かな素しろ人うと屋やに一人で下宿しているのは、かえって家うちを持つ面倒がなくって結構だろうと考え出したのです。それからその駄だ菓が子し屋やの店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

　それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日にっ清しん戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり前までは、市いちヶが谷やの士し官かん学校の傍そばとかに住んでいたのだが、厩うまやなどがあって、邸やしきが広過ぎるので、そこを売り払って、ここへ引っ越して来たけれども、無ぶ人にんで淋さむしくって困るから相当の人があったら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未び亡ぼう人じんと一人娘と下げ女じょより外ほかにいないのだという事を確かめました。私は閑静で至し極ごく好かろうと心の中うちに思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行ったところで、素す性じょう[23]の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛け念ねんもありました。私は止よそうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服な装りはしていませんでした。それから大学の制帽を被かぶっていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだといって。けれどもその頃の大学生は今と違って、大だい分ぶ世間に信用のあったものです。私は

その場合この四角な帽子に一種の自信を見み出いだしたくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わった通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家うちを訪ねました。

　私は未び亡ぼう人じんに会って来らい意いを告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握にぎったのでしょう、いつでも引っ越して来て差さし支つかえないという挨拶を即そく坐ざに与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判はっ然きりした人でした。私は軍人の妻さい君くんというものはみんなこんなものかと思って感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気き性しょうでどこが淋さむしいのだろうと疑いもしました。

11

「私は早さっ速そくその家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅うち中じゅうで一番好い室へやでした。本ほん郷ごう辺へんに高等下宿といった風ふうの家がぽつぽつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間まの様子を心得ていました。私の新しく主人となった室は、それらよりもずっと立派でした。移った当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

　室の広さは八畳でした。床とこの横に違い棚があって、縁えんと反対の側には一いっ間けんの押おし入いれが付いていました。窓は一つもなかったのですが、その代り南みなみ向むきの縁に明るい日がよく差しました。

　私は移った日に、その室の床とこに活いけられた花と、その横に立て懸かけられた琴ことを見ました。どっちも私の気に入りませ

んでした。私は詩や書や煎せん茶ちゃを嗜たしなむ父の傍そばで育ったので、唐からめいた[24]趣味を小こ供どものうちからもっていました。そのためでもありましょうか、こういう艶なまめかしい装飾をいつの間にか軽けい蔑べつする癖が付いていたのです。

私の父が存ぞん生しょう中ちゅうにあつめた道具類は、例の叔お父じのために滅め茶ちゃ滅め茶ちゃにされてしまったのですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預あずかってもらいました。それからその中うちで面白そうなものを四、五幅ふく裸にして行こう李りの底へ入れて来ました。私は移るや否いなや、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴と活花いけばなを見たので、急に勇気がなくなってしまいました。後から聞いて始めてこの花が私に対するご馳ち走そうに活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もっとも琴は前からそこにあったのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立たて懸かけてあったのでしょう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠かすめて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪じゃ気きが予備的に私の自然を損そこなったためか、または私がまだ人ひと慣なれなかったためか、私は始めてそこのお嬢じょうさんに会った時、へどもど[25]した挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未び亡ぼう人じんの風ふう采さいや態度から推おして、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取ってあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻さい君くんだからああなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々だんだん延びて行きまし

た。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉ことごとく打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかった異性の匂においが新しく入って来ました。私はそれから床の正面に活いけてある花が厭いやでなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋しおれる頃ころになると活け更かえられるのです。琴も度々たびたび鍵の手に折れ曲がった筋すじ違かいの室へやに運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬ほお杖づえを突きながら、その琴の音ねを聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解わからないのです。けれども余り込こみ入いった[26]手を弾ひかないところを見ると、上手なのじゃなかろうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨うまい方ではなかったのです。

それでも臆おく面めんなく色々の花が私の床を飾ってくれました。もっとも活いけ方かたはいつ見ても同じ事でした。それから花か瓶へいもついぞ変った例ためしがありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりももっと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一いっ向こう肉声を聞かせないのです。唄うたわないのではありませんが、まるで内ない所しょ話ばなしでもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱しかられると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそうな琴の音ねに耳を傾けました。

12

「私の気分は国を立つ時すでに厭えん世せい的てきになってい

ました。他ひとは頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染しみ込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔お父じだの叔お母ばだの、その他たの親しん戚せきだのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈ちん鬱うつでした。鉛を呑のんだように重苦おもくるしくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがってしまったのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな源げん因いんになっているように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構かまえてみる気にもなったのだといえばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懐ふと中ころに余裕ができても、好んでそんな面倒な真ま似ねはしなかったでしょう。

私は小こ石いし川かわへ引き移ってからも、当分この緊張した気分に寛くつろぎを与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥ずかしいほど、きょときょと[27]周囲を見み廻まわしていました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなって来ました。私は家うちのものの様子を猫のようによく観察しながら、黙って机の前に坐すわっていました。時々は彼らに対して気の毒だと思うほど、私は油断のない注意を彼らの上に注そそいでいたのです。おれは物を偸ぬすまない巾きん着ちゃく切きり[28]みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭いやになる事さえあったのです。

あなたは定さだめて[29]変に思うでしょう。その私がそこのお嬢じょうさんをどうして好すく余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活いけ花ばなを、どうして嬉しがって眺ながめる余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕がある

か。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるというより外ほかに仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一いち言ごん付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑うたぐったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他ひとから見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未び亡ぼう人じんの事を常に奥さんといっていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんといいます。奥さんは私を静かな人、大人おとなしい男と評しました。それから勉強家だとも褒ほめてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きょときょとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解わかりませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹おう揚ような方かただといって、さも(30)尊敬したらしい口の利きき方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真ま面じ目めに説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅うちへ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐ざ敷しきを貸す料りょう簡けんで、近所のものに周しゅう旋せんを頼んでいたらしいのです。俸給が豊ゆたかでなくって、やむをえず素しろ人うと屋やに下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいっていたのでしょう。奥さんは自分の胸に描えがいたその想像のお客と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だといって褒ほめるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気き性しょうの問題ではありませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないのと

一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推おし広げて、同じ言葉を応用しようと力つとめるのです。

13

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどきょろ付かなくなりました(31)。自分の心が自分の坐すわっている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家うちのものが、僻ひがんだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしょう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風ふうに取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、実際私を鷹おう揚ようだと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかったようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡ご魔ま化かされていたのかも解わかりません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑じょう談だんをいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室へやへ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこっちへ招まねいたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖ふえたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰つぶされる事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一いっ向こう邪魔にならなかったのです。奥さんはもとより閑ひま人じんでした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定さだめて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも

時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まって、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲って、私の室へやの前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖ふすまの影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちょっと留とまります。それからきっと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍はたで見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし実際をいうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁ページの上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行って、こっちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部へ屋やは茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕し切きりがあっても、ないと同じ事で、親子二人が往いったり来たりして、どっち付かずに占せん領りょうしていたのです。私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきっと奥さんでした。お嬢さんはそこにいても滅めっ多たに返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があって私の室へはいったついでに、そこに坐すわって話し込むような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒おかされて来るのです。そうして若い女とただ差さし向むかいで坐っているのが不安なのだとばかりは思えませんでした。私は何だかそわそわ[32]し出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚さらう

のに声さえ碌ろくに出せなかったあの女かしらと疑うたがわれるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解わかっていました。よく解るように振舞って見せる痕こん迹せきさえ明らかでした。

14

「私はお嬢さんの立ったあとで、ほっと一ひと息いきするのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持になるのです。私は女らしかったのかも知れません。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなものだったのです。

奥さんは滅めっ多たに外出した事がありませんでした。たまに宅うちを留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能よく観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或ある場合には、私に対して暗あんに警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々ときどき心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどっちかに片かた付づけてもらいたかったのです。頭の働きからいえば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔お父じに欺あざむかれた記憶のまだ新しい私は、もう一歩踏み込んだ疑いを挟さしはさまずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度のどっちかが本当で、どっちかが偽いつわりだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断

に迷うばかりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑のみ込めなかったのです。理わ由けを考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗なすり付けて我慢した事もありました。必ひっ竟きょう女だからああなのだ、女というものはどうせ愚ぐなものだ。私の考えは行き詰つまればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見み縊くびっていた[33]私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事ができなかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為なさないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応おう用ようするのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気け高だかい[34]気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両りょう端はじがあって、その高い端はじには神聖な感じが働いて、低い端には性せい欲よくが動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕つらまえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭においを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱いだくと共に、子に対して恋愛の度を増まして行ったのですから、三人の関係は、下げ宿しゅくした始めよりは段々複雑になって来ました。もっともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひょっとした機会から、今まで奥さんを誤ご解かいしていたのではなかろうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、

どっちも偽いつわりではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互たがい違いに奥さんの心を支配するのでなくって、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接せっ近きんさせようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻ひるがえすのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌いむのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌きざさなかった私は、その時入いらぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりました。

15

「私は奥さんの態度を色々綜そう合ごうして見て、私がここの家うちで充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他ひとを疑うたぐり始めた私の胸には、この発見が少し奇き異いなくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだろうと思いました。同時に、女が男のために、欺だまされるのもここにあるのではなかろうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直ちょっ覚かくを強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他ひとを信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかったのです。ことに今度の事件については何もいわなかったのです。私はそれを念ねん頭とうに浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべ

く奥さんの方の話だけを聞こうと力つとめました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好いい事をしたと思いました。私は嬉しかったのです。

　私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。それからは私を自分の親戚みよりに当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜さい疑ぎ心しんがまた起って来ました。

　私が奥さんを疑うたぐり始めたのは、ごく些さ細さいな事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑ぎ惑わくは段々と根を張って来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔お父じと同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力つとめるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡こう猾かつな策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々にがにがしい唇を噛かみました。

　奥さんは最初から、無ぶ人にんで淋さむしいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇こん意いになって色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊ゆたかだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の関係をつけるのは、先方に取って決して損ではなかったのです。

　私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくら

いの強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲ちょう笑しょうしました。馬鹿だなといって、自分を罵ののしった事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策さく略りゃく家ではなかろうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだろうと思うと、私は急に苦しくって堪たまらなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命ぜったいぜつめい[35]のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途と中ちゅうに立って、少しも動く事ができなくなってしまいました。私にはどっちも想像であり、またどっちも真実であったのです。

16

「私は相あい変かわらず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸しみ渡らないうちに烟けむのごとく消えて行くのです。私はその上無む口くちになりました。それを二、三の友達が誤解して、冥めい想そうに耽ふけってでもいるかのように、他たの友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好いい仮面を人が貸してくれたのを、かえって仕し合あわせとして喜びました。それでも時々は気が済まなかったのでしょう、発作的に焦は燥しゃぎ廻まわって彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人ひと出で入いりの少ない家うちでした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありましたが、極きわめて小さな声で、いるのだかいないのだか分

らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅うちの人に気き兼がねをするほどな男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人あるじのようなもので、肝かん心じんのお嬢さんがかえって食いそう客ろう[36]の位地いちにいたと同じ事です。

　しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構かまわない点です。ただそこにどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室へやで、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂こう奮ふんを与えるのです。私は坐っていて変にいらいら[37]し出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年ねん輩ぱいの人だろうかと思案してみるのです。坐っていてそんな事の知れようはずがありません。そうかといって、起たって行って障しょう子じを開けて見る訳にはなおいきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きっと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極きわめて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追つい窮きゅうする勇気をもっていなかったのです。権利は無論もっていなかったのでしょう。私は自分の品格を重んじなければならないという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏うら切ぎりしている物欲しそうな顔かお付つきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲ちょう笑しょうの意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見み出いだし得ないほど落

おち付つきを失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃなかろうかと、何なん遍べんも心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体からだでした。たとい学校を中途で已やめようが、またどこへ行ってどう暮らそうが、あるいはどこの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切って奥さんにお嬢さんを貰もらい受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもそのたびごとに私は躊ちゅう躇ちょして、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方ほう角がくの違った場所に立って、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇気は出せば出せたのです。しかし私は誘おびき寄せられるのが厭いやでした。他ひとの手に乗るのは何よりも業ごう腹はら(38)でした。叔お父じに欺だまされた私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。

17

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵こしらえろといいました。私は実際田舎いなかで織った木も綿めんものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹いとの入はいった着物を肌に着けませんでした。私の友達に横よこ浜はまの商あき人んどか何かで、宅うちはなかなか派出はでに暮しているものがありましたが、そこへある時羽は二ぶた重えの胴どう着ぎが配達で届いた事があります。すると皆みんながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしがって色々弁解しましたが、折せっ角かくの胴着を行こう李りの底へ放ほうり込んで利用しないのです。それをまた大勢が

寄ってたかって、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨しらみがたかりました。友達はちょうど幸さいわいとでも思ったのでしょう、評判の胴どう着ぎをぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根ね津づの大きな泥ど溝ぶの中へ棄すててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立って笑いながら友達の所しょ作さを眺ながめていましたが、私の胸のどこにも勿もっ体たいないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大だい分ぶ大人になっていました。けれどもまだ自分で余よそ所ゆ行きの着物を拵こしらえるというほどの分ふん別べつは出なかったのです。私は卒業して髯ひげを生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要いるが着物は要らないといいました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中うちには字引きもありますが、当然眼を通すべきはずでありながら、頁ページさえ切ってないのも多少あったのですから、私は返事に窮きゅうしました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下もとに、お嬢さんの気に入るような帯か反たん物ものを買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違った空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしょに歩き廻まわる習慣をもっていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊ちゅう躇ちょしましたが、思い切って出掛けました。

お嬢さんは大層たいそう[39]着飾っていました。地じ体たいが

色の白いくせに、白おし粉ろいを豊富に塗ったものだからなお目立ちます。往来の人がじろじろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきっとその視し線せんをひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日に本ほん橋ばしへ行って買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変るので、思ったより暇ひまがかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするのです。時々反たん物ものをお嬢さんの肩から胸へ竪たてに宛あてておいて、私に二、三歩遠とお退のいて見てくれろというのです。私はそのたびごとに、それは駄目だめだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛かかって帰りは夕ゆう飯めしの時刻になりました。奥さんは私に対するお礼に何かご馳走するといって、木き原はら店だなという寄よ席せのある狭い横よこ丁ちょうへ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家うちも狭いものでした。この辺の地理を一いっ向こう心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜よに入いって家うちへ帰りました。その翌あくる日ひは日曜でしたから、私は終日室へやの中うちに閉じ籠こもっていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戯からかわれました。いつ妻さいを迎えたのかといってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細さい君くんは非常に美人だといって賞ほめるのです。私は三人連づれで日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見られたものとみえます。

18

「私は宅うちへ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。

奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうといって私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風ふうにして、女から気を引いて見られるのかと思いました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもっていたのです。私はその時自分の考えている通りを直ちょく截せつに打ち明けてしまえば好かったかも知れません。しかし私にはもう狐こ疑ぎという薩さっ張ぱりしない塊かたまりがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひょいと留とまりました。そうして話の角度を故意に少し外そらしました。

私は肝かん心じんの自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探ったのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告つげました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大だい分ぶ重きを置いているらしく見えました。極きめようと思えばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外ほかに子供がないのも、容易に手離したがらない源げん因いんになっていました。嫁にやるか、聟むこを取るか、それにさえ迷っているのではなかろうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いっしたと同様の結果に陥おちいってしまいました。私は自分について、ついに一いち言ごんも口を開く事ができませんでした。私は好いい加減なところで話を切り上げて、自分の室へやへ帰ろうとしました。

さっきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいって笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行って、背中をこっちへ向けていました。私は立とうとして振り返った時、その後うしろ姿す

がたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐っていました。その戸棚の一尺ばかり開あいている隙すき間まから、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間の端はじに、一昨日おととい買った反たん物ものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんのも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった(40)調子になって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解わからないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判はっ然きりした時、私はなるべく緩ゆっくらな方がいいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入いり込まなければならない事になりました。その男がこの家庭の一員となった結果は、私の運命に非常な変化を来きたしています。もしその男が私の生活の行こう路ろを横切らなかったならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかったでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅うちへ引ひっ張ぱって来たのです。無論奥さんの許きょ諾だくも必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止よせといいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立った理屈はまるでなかったのです。だから私は私の善いいと思うところを強しいて断行してしまいました。

19

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小こ供どもの時からの仲なか好よしでした。小供の時からといえば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があったのです。Kは真しん宗しゅう[41]の坊さんの子でした。もっとも長男ではありません、次男でした。それである医者の所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本ほん願がん寺じ派は[42]の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他ほかのものに比べると、物質的に割が好かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があって、その女の子が年とし頃ごろになったとすると、檀だん家かのものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐ふところから出るのではありません。そんな訳で真しん宗しゅう寺でらは大抵有ゆう福ふくでした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があったかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まとまったものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の家うちへ養子に行ったのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教きょう場じょうで先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変っていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰もらって東京へ出て来たのです。出て来たのは私といっしょでなかったけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室へやによく二人も三人も机を並べて寝ね起おきしたものです。Kと私も二人で同じ間まにいました。山で生いけ捕どられた動物が、檻おりの中で抱き合いながら、外を睨にらめるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏おそれました。それで

いて六畳の間まの中では、天下を睥へい睨げいするような事をいっていたのです。

しかし我々は真ま面じ目めでした。我々は実際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かったのです。寺に生れた彼は、常に精しょう進じんという言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉ことごとくこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏い敬けいしていました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解わかりません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥はるかに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養よう家かでは彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに[43]頑固な彼は医者にはならない決心をもって、東京へ出て来たのです。私は彼に向って、それでは養父母を欺あざむくと同じ事ではないかと詰なじりました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をしても構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解っていなかったでしょう。私は無論解ったとはいえません。しかし年の若い私たちには、この漠ばく然ぜんとした言葉が尊たっとく響いたのです。よし解らないにしても気け高だかい心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こうとする意い気き組ぐみ[44]に卑いやしいところの見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKにとってどのくらい有力であったか、それは私も知りません。一いち図ずな彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いなかろうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしそ

の時にそれだけの覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至し当とうになるくらいな語気で私は賛成したのです。

20

「Kと私わたくしは同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあったものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒こま込ごめのある寺の一ひと間まを借りて勉強するのだといっていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大おお観がん音のん(45)の傍そばの汚い寺の中に閉とじ籠こもっていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室へやでしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなって行くのを認めたように思います。彼は手て頸くびに珠じゅ数ずを懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真ま似ねをして見せました。彼はこうして日に何なん遍べんも珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解わかりません。円い輪になっているものを一粒ずつ数えてゆけば、どこまで数えていっても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪つま繰ぐる手を留めたでしょう。詰つまらない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経きょう

の名を度々たびたび彼の口から聞いた覚えがありますが、基督キリスト教きょうについては、問われた事も答えられた例ためしもなかったのですから、ちょっと驚きました。私はその理わ由けを訊たずねずにはいられませんでした。Kは理由はないといいました。これほど人の有あり難がたがる書物なら読んでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があったら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰っても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家うちでもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一いっ向こう外部へは通じていません。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているので、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っているはずだと思い過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしょう、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいっしょでしたから、汽車へ乗るや否いなやすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎まい年とし家へ帰って何をするのだというのです。彼はまた踏み留とどまって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波は瀾らんに富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽ゆう欝うつと孤独の淋さびしさとを一つ胸に抱いだいて、九月に入いっ

てまたKに逢あいました。すると彼の運命もまた私と同様に変へん調ちょう[46]を示していました。彼は私の知らないうちに、養よう家か先さきへ手紙を出して、こっちから自分の詐いつわりを白状してしまったのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今いま更さら仕方がないから、お前の好きなものをやるより外ほかに途みちはあるまいと、向うにいわせるつもりもあったのでしょうか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺あざむき通す気はなかったらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。

21

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙だますような不ふ埒らち[47]なものに学資を送る事はできないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私わたくしに見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書しょ翰かんも見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰きっ責せきの言葉がありました。養よう家か先さきへ対して済まないという義理が加わっているからでもありましょうが、こっちでも一いっ切さい構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他たに妥協の道を講じて、依然養家に留とどまるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならないのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜や学がっ校こうの教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存ぞん外がい世の中が寛くつろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払ふっ底てい[48]でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背そむいて、自

分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといって手を拱こまぬいている訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳はね付けました。彼の性格からいって、自活の方が友達の保護の下もとに立つより遥はるかに快よく思われたのでしょう。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ男でないような事をいいました。私は私の責任を完まっとうするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜おしむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛つらかったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちっとも緩ゆるめずに、新しい荷を背負しょって猛進したのです。私は彼の健康を気き遣づかいました。しかし剛ごう気き[(49)]な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がらがって来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛てん末まつを詳しく聞かずにしまいましたが、解決のますます困難になってゆく事だけは承知していました。人が仲に入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促うながしたのですが、Kは到底駄だ目めだといって、応じませんでした。この剛ごう情じょうなところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒いかりも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効きき果めもありませんでした。私の手紙は一ひと言ことの返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ち

ました。今までも行ゆき掛がかり上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてもKの味方をする気になりました。

　最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉でいえば、まあ勘かん当どうなのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継けい母ぼに育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔へだたりができずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧そう侶りょでした。けれども義理堅い点において、むしろ武さむ士らいに似たところがありはしないかと疑われます。

22

　「Kの事件が一段落ついた後で、私わたくしは彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

　手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰もらいたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついだ兄よりも、他家たけへ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉きょう弟だいですけれども、この姉とKとの間には大だい分ぶ年とし歯の差があったのです。それでKの小こ供どもの時分には、継まま母ははよりもこの姉の方が、かえって本当の母らし

く見えたのでしょう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があっても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかったのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中うちに、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固もとより私の一いち存ぞん(50)でした。Kの行ゆく先さきを心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽けい蔑べつしたとより外ほかに取りようのない彼の実家や養よう家かに対する意地いじ(51)もあったのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中なか頃ごろになるまで、約一年半の間、彼は独力で己おのれを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅うるさい問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的センチメンタルになって来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負しょって立っているような事をいいます。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横よこたわる光こう明みょうが、次第に彼の眼を遠とお退のいて行くようにも思って、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもって、新しい旅に上のぼるのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍のろいのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になっていますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮あ

せり方はまた普通に比べると遥はるかに甚はなはだしかったのです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専せん一いちだと考えました。

私は彼に向って、余計な仕事をするのは止よせといいました。そうして当分身体からだを楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛ごう情じょうなKの事ですから、容易に私のいう事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、実際いい出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養って強い人になるのが自分の考えだというのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔すい興きょう[52]です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちっとも強くなっていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかっているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向って至し極ごく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向って、人生を進むつもりだったとついには明言しました。（もっともこれは私に取ってまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があったのですから）。最後に私はKといっしょに住んで、いっしょに向上の路みちを辿たどって行きたいと発ほつ議ぎしました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪ひざまずく事をあえてしたのです。そうして漸やっとの事で彼を私の家に連れて来ました。

23

「私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上がって私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならないのだから、実用の点から見ると、至し極

ごく不便な室へやでした。私はここへKを入れたのです。もっとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくっても一人でいる方が好いいといって、自分でそっちのほうを択えらんだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止よした方が好いいというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいというと、世話は焼けないでも、気き心ごころ(53)の知れない人は厭いやだと答えるのです。それでは今厄やっ介かいになっている私だって同じ事ではないかと詰なじると、私の気心は初めからよく分っていると弁解して已やまないのです。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更かえます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止よせといい直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だって強しいてKといっしょにいる必要はなかったのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきっとそれを受け取る時に躊ちゅう躇ちょするだろうと思ったのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅うちへ置いて、二人ふたり前まえの食料を彼の知らない間まにそっと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一いち言ごんも奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云うん々ぬんしました。一人で置くとますます人間が偏へん屈くつになるばかりだからといいました。それに付け足して、Kが養よう家かと折おり合あいの悪かった事や、実家と離れてしまった事や、色々話して聞かせました。私は溺おぼれかかった人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、

Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒を見てやってくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々ようよう奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛てん末まつをまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足に思って、のっそり引き移って来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何なにかをしてくれました。すべてそれを私に対する好こう意いから来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむっちり(54)した様子をしているにもかかわらず。

私がKに向って新しい住すま居いの心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一いち言げん悪くないといっただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭においのする汚い室へやでした。食くい物ものも室相そう応おうに粗末でした。私の家へ引き移った彼は、幽ゆう谷こくから喬きょう木ぼくに移った(55)趣があったくらいです。それをさほどに思う気け色しきを見せないのは、一つは彼の強ごう情じょうから来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養やしなわれた彼は、衣食住についてとかくの贅ぜい沢たくをいうのをあたかも不道徳のように考えていました。なまじい(56)昔の高僧だとか聖徒セーントだとかの伝でんを読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭べん撻たつすれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあったのかも知れません。

私はなるべく彼に逆さからわない方針を取りました。私は氷を日ひ向なたへ出して溶とかす工夫をしたのです。今に融とけて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機じきが来るに違いないと思ったのです。

24

「私は奥さんからそういう風ふうに取り扱われた結果、段々快活になって来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試こころみたのです。Kと私とが性格の上において、大だい分ぶ相違のある事は、長く交つき際あって来た私によく解わかっていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角かどが取れたごとく、Kの心もここに置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持って生れた頭の質たちが私よりもずっとよかったのです。後では専門が違いましたから何ともいえませんが、同じ級にいる間あいだは、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があったくらいです。けれども私が強しいてKを私の宅へ引ひっ張ぱって来た時には、私の方がよく事理を弁わきまえている[57]と信じていました。私にいわせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくにあなたのために付け足しておきたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なりすべて我々の能力は、外部の刺し戟げきで、発達もするし、破壊されもするでしょうが、どっちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分はもちろん傍はたのものも気が付かずにいる恐れが生じてきます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥かゆばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化こなす力がいつの間にかなくなってしまうのだそうです。だから何でも食う稽けい古こをしておけと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなかろうと思います。次第に刺戟を増すに従って、次第に営養えいよう機能の抵抗力

が強くなるという意味でなくてはなりますまい。もし反対に胃の力の方がじりじり[58]弱って行ったなら結果はどうなるだろうと想像してみればすぐ解わかる事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと極きめていたらしいのです。艱かん苦くを繰り返せば、繰り返すというだけの功く徳どくで、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂めぐり逅あえるものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきっと反抗されるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引ひき合あいに持って来るに違いないと思いました。そうなれば私だって、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首うけ肯がってくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまでゆくと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛かかります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気き性しょうをよく知った私はついに何ともいう事ができなかったのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹かかっていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪たえなかった自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭いやでした。それで私は彼が宅うちへ引き移ってからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見

る事にしたのです。

25

「私は蔭かげへ廻まわって、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をするように頼みました。私は彼のこれまで通って来た無言生活が彼に祟たたっている[59]のだろうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆さびが出ていたとしか、私には思われなかったのです。

奥さんは取り付き把はのない人だといって笑っていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持って来きようというと、要いらないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきません。気の毒だから、何とかいってその場を取り繕つくろって[60]おかなければ済まなくなります。もっともそれは春の事ですから、強しいて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないといわれるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になって、女二人とKとの連絡をはかるように力つとめました。Kと私が話している所へ家うちの人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室へやに落ち合った所へ、Kを引っ張り出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとって、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起たって室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無む駄だ話ばなしをしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中うちでは、Kがそのために私を

軽けい蔑べつしていることがよく解わかりました。

私はある意味から見て実際彼の軽蔑に価あたいしていた[(61)](#)かも知れません。彼の眼の着け所は私より遥はるかに高いところにあったともいわれるでしょう。私もそれを否いなみはしません。しかし眼だけ高くって、外ほかが釣り合わないのは手もなく不具かたわです。私は何を措おいても[(62)](#)、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像イメジで埋うずまっていても、彼自身が偉くなってゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍そばに彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝さらした上、錆さび付きかかった彼の血液を新しくしようと試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まとまって来き出だしました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟ってゆくようでした。彼はある日私に向って、女はそう軽けい蔑べつすべきものでないというような事をいいました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われます。今までの彼は、性によって立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男なん女にょを一様に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもっともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になっている頃ころでしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしょう。しかし裏面の消息は彼には一ひと口くちも打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠こもっていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取って何

よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜き悦えつを感ぜずにはいられなかったのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思った通りを話しました。二人も満足の様子でした。

26

「Kと私わたくしは同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空くう室しつを通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨あい拶さつをして自分の部屋へはいるのを例にしていました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖ふすまを開ける私をちょっと見ます。そうしてきっと今帰ったのかといいます。私は何も答えないで点頭うなずく事もありますし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神かん田だに用があって、帰りがいつもよりずっと後おくれました。私は急ぎ足に門前まで来て、格こう子しをがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥たしかにKの室へやから出たと思いました。玄関から真まっ直すぐに行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間ま取どりなのですから、どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄やっ介かいになっている[63]私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでいるうち、—私はその時分からハイカラで手て数かずのかかる編あみ上あげを穿はいていたのですが、—私がこごんでその靴くつ紐ひもを解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疳かん違ちがい[64]かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開

けると、そこに二人はちゃんと坐すわっていました。Kは例の通り今帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐ったままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬かたいように聞こえました。どこかで自然を踏み外はずしているような調子として、私の鼓こ膜まくに響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

　奥さんははたして留守でした。下げ女じょも奥さんといっしょに出たのでした。だから家うちに残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちょっと首を傾けました。今まで長い間世話になっていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅うちを空けた例ためしはまだなかったのですから。私は何か急用でもできたのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だといえばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不ふ断だんの表情に帰りました。急用ではないが、ちょっと用があって出たのだと真ま面じ目めに答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

　私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰って来ました。やがて晩ばん食めしの食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳ぜんを運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯めし時どきには向うへ呼ばれて行く習慣になっていたのです。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極きめました。その代り私は薄い板で造った足の畳たたみ込める華きゃ奢しゃな食卓を奥さんに寄き附ふしま

した。今ではどこの宅うちでも使っているようですが、その頃ころそんな卓の周囲に並んで飯を食う家族はほとんどなかったのです。私はわざわざ御お茶ちゃの水みずの家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上あげさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に肴さかな屋やが来なかったので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかったのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それももっともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱しかられてすぐ已やめました。

27

「一週間ばかりして私わたくしはまたKとお嬢さんがいっしょに話している室へやを通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否いなや笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったのでしょう。それをつい黙だまって自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障しょう子じを開けて茶の間へ入ったようでした。

夕ゆう飯めしの時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨にらめるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝でん通ずう院いんの裏手から植物園の通りをぐるりと廻まわってまた富とみ坂ざかの下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間あいだに話した事は極きわめて少なかったのです。性質からいうと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかったの

です。しかし私は歩きながら、できるだけ話を彼に仕し掛かけてみました。私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかったのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見み分わけの付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得ないくせに、極きわめて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。もっともそれは二学年目の試験が目の前に逼せまっている頃ころでしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょう。その上彼はシュエデンボルグ[65]がどうだとかこうだとかいって、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ましました時、二人とももう後あと一年だといって奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯ゆい一いつの誇ほこりとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていたのです。Kは私に向って、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽けい古こしている縫ぬい針はりだの琴だの活いけ花ばなだのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂う闊かつを笑ってやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反はん駁ばくもしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を軽けい蔑べつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数かずとも思っていないらしかったからです。今から回かい顧こすると、私のKに対する嫉しっ妬とは、その時にもう充分萌きざしていた[66]のです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口くち振ぶりを見せました。無論彼は自分の自由意志

でどこへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行っても差さし支つかえない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅うちで書物を読んだ方が自分の勝かっ手てだというのです。私が避暑地へ行って涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行ったらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなって行くのを見ているのが、余り好いい心持ではなかったのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。果はてしのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしょに房ぼう州しゅう(67)へ行く事になりました。

28

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私わたくしにも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田ほたとかいいました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第だ一いちどこもかしこも(68)腥なまぐさいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦すり剥むくのです。拳こぶしのような大きな石が打ち寄せる波に揉もまれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いいとも悪いともいいません。少なくとも顔かお付つきだけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪け我がをしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富とみ浦うらに行きました。富浦からまた那な古こに移りました。すべてこの沿岸

はその時分から重おもに学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちょうど手て頃ごろの海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐って、遠い海の色や、近い水の底を眺ながめました。岩の上から見み下おろす水は、また特別に綺き麗れいなものでした。赤い色だの藍あいの色だの、普通市場に上のぼらないような色をした小こ魚うおが、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽ふけっているのか、景色に見み惚とれているのか、もしくは好きな想像を描えがいているのか、全く解わからなかったのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一ひと口くち答えるだけでした。私は自分の傍そばにこうじっとして坐っているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐っているのではないかしらと忽こつ然ぜん疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭いやになります。私は不意に立ち上あがります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒ど鳴なります。纏まとまった詩だの歌だのを面白そうに吟ぎんずるような手て緩ぬるい事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えり頸くびを後ろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうするといってKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちょうど好いい、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑おさえた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大だい分ぶよくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたので

す。私は自分より落ち付いているKを見て、羨うらやましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気け色しきを見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです。私の疑うたがいはもう一歩前へ出て、その性質を明あきらめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光こう明みょうを再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲が斐い[69]があったのを嬉しく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素そ振ぶりに全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振ふる舞まいませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけると鈍にぶい人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があったので、彼をわざわざ宅うちへ連れて来たのです。

29

「私は思い切って自分の心をKに打ち明けようとしました。もっともこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手て際ぎわでは旨うまくゆかなかったのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った[70]話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種たねをもたないのも大だい分ぶいたでしょうが、たといもっていても黙っているのが普通のようでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあ

なたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道どう学がくの余よ習しゅうなのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶たまには愛とか恋とかいう問題も、口に上のぼらないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅めっ多たには話題にならなかったのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくってもこう堅くなった日には、突然調子を崩くずせるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思い立ってから、何なん遍べん歯がゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一カ所を突き破って、そこから柔らかい空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたがたから見て笑しょう止し千せん万ばん[71]な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅うちにいた時と同じように卑ひ怯きょうでした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかったのです。私にいわせると、彼の心臓の周囲は黒い漆うるしで重あつく塗り固められたのも同然でした。私の注そそぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉ことごとく弾はじき返されてしまうのです。

或ある時はあまりKの様子が強くて高いので、私はかえって安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫わびました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭いやな心持になるのです。しかし少しば時らくすると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが

私には不利益でした。容よう貌ぼうもKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間まが抜けていて[72]、それでどこかに確しっかりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学がく力りきになれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いいところだけがこう一度に眼め先さきへ散らつき出すと、ちょっと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭いやならひとまず東京へ帰ってもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れません。二人は房ぼう州しゅうの鼻を廻まわって向う側へ出ました。我々は暑い日に射いられながら、苦しい思いをして、上かず総さのそこ一いち里り[73]に騙だまされながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解わからなかったくらいです。私は冗じょう談だん半分Kにそういいました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入って行こうといって、どこでも構わず潮しおへ漬つかりました。その後あとをまた強い日で照り付けられるのですから、身体からだが倦だ怠るくてぐたぐたになりました。

30

「こんな風ふうにして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体からだの調子が狂って来るものです。もっとも病気とは違います。急に他ひとの身体の中へ、自分の霊魂が宿やど替がえをしたような気分になるのです。私わたくしは平へい生ぜいの通りKと口を利ききながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅りょ中ちゅう限かぎりという特別な性質

を帯おびる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮しおのため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事ができたのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行ぎょう商しょうのようなものでした。いくら話をしてもいつもと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚ちょう子しまで行ったのですが、道中たった一つの例外があったのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小こ湊みなとという所で、鯛たいの浦うらを見物しました。もう年ねん数すうもよほど経たっていますし、それに私にはそれほど興味のない事ですから、判はん然ぜんとは覚えていませんが、何でもそこは日にち蓮れん[74]の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾び磯いそに打ち上げられていたとかいう言いい伝つたえになっているのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至ったのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟を傭やとって、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一いち図ずに波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかった鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかったものとみえます。彼は鯛よりもかえって日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちょうどそこに誕たん生じょう寺じという寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽が藍らんでした。Kはその寺に行って住じゅう持じに会ってみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装なりをしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅すげ笠がさを買って被かぶっていました。着物は固もとより双方とも垢あかじみた上に汗で臭くさくなっていました。私は坊さんなどに会うのは止よそうといいました。Kは強ご

う情じょうだから聞きません。厭いやなら私だけ外に待っていろというのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきっと断られるに違いないと思っていました。ところが坊さんというものは案外丁てい寧ねいなもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会ってくれました。その時分の私はKと大だい分ぶ考えが違っていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでしたが、Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草そう日にち蓮れんといわれるくらいで、草そう書しょが大変上手であったと坊さんがいった時、字の拙まずいKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知りたかったのでしょう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境けい内だいを出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云うん々ぬんし出しました。私は暑くて草臥くたびれて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好いい加減な挨拶をしていました。それも面倒になってしまいには全く黙ってしまったのです。

たしかその翌あくる晩の事だと思いますが、二人は宿へ着いて飯めしを食って、もう寝ようという少し前になってから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私が取り合わなかったのを、快く思っていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何だか私をさも[75]軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠わだかまっていますから、彼の侮ぶ蔑べつに近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出しゅっ立たつ点てんがすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないというのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういった時、彼はただ自分の修養が足りないから、他ひとにはそう見えるかも知れないと答えただけで、一いっ向こう私を反はん駁ばくしようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうといって悵ちょう然ぜんとしていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐しいたげたり、道のために体たいを鞭むちうったりしたいわゆる難なん行ぎょう苦く行ぎょうの人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解わからないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌あくる日からまた普通の行ぎょう商しょうの態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々みちみち[76]その晩の事をひょいひょいと思い出しました。私にはこの上もない好いい機会が与えられたのに、知らない振ふりをしてなぜそれをやり過ご

したのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直ちょく截せつで簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かったと思い出したのです。実をいうと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸じょう溜りゅうして拵こしらえた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原もとの形かたちそのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれができなかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自おのずから一種の惰性があったため、思い切ってそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎた[77]といっても、虚栄心が祟たたったといっても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になって東京へ帰りました。帰った時は私の気分がまた変っていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小こ理り屈くつはほとんど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿っていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺ながめました。それから両りょう国ごくへ来て、暑いのに軍しゃ鶏も[78]を食いました。Kはその勢いきおいで小こ石いし川かわまで歩いて帰ろうというのです。体力からいえばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅うちへ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなったばかりでなく、むやみに歩いていたうちに大変瘠やせてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったといって賞ほめてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしい

といってまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

32

「それのみならず[79]私わたくしはお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久しぶりで旅から帰った私たちが平へい生ぜいの通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後あと廻まわしにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合によってはかえって不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所しょ作さはその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかったのです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持もち前まえの親切を余分に私の方へ割り宛あてててくれたのです。だからKは別に厭いやな顔もせずに平気でいました。私は心の中うちでひそかに彼に対する凱がい歌かを奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中なか頃ごろから我々はまた学校の課業に出席しなければならない事になりました。Kと私とは各てん自でんの時間の都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後おくれて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室へやに認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰ったのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寝ね坊ぼうをした結果、日に本ほん服ふくのまま急いで学校へ出た事があります。穿はき物も

のも編あみ上あげなどを結んでいる時間が惜しいので、草ぞう履りを突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格こう子しをがらりと開けたのです。するといないと思っていたKの声がひょいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手て数かずのかかる靴を穿はいていないから、すぐ玄関に上がって仕し切きりの襖ふすまを開けました。私は例の通り机の前に坐すわっているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室へやから逃のがれ出るように去るその後うしろ姿すがたをちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室にはいってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといって私に挨あい拶さつをしました。私は笑いながらさっきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌さばけた[80]男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立って縁えん側がわ伝づたいに向うへ行ってしまいました。しかしKの室の前に立ち留まって、二ふた言こと三み言こと内と外とで話をしていました。それは先さっ刻きの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいっしょに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆっくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるのですから、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならないのでしょうが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当

然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあったくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引ひっ張ぱって来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

33

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私わたくしは外がい套とうを濡ぬらして例の通り蒟こん蒻にゃく閻えん魔まを抜けて細い坂さか路みちを上あがって宅うちへ帰りました。Kの室は空がらん虚どうでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳かざそうと思って、急いで自分の室の仕し切きりを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火ひ種だねさえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より後おくれて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大おお方かた用事でもできたのだろうといっていました。

私はしばらくそこに坐すわったまま書しょ見けんをしました。宅の中がしんと静まって、誰の話し声も聞こえないうちに、初はつ冬ふゆの寒さと佗わびしさとが、私の身体からだに食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと

賑にぎやかな所へ行きたくなったのです。雨はやっと歇あがったようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇じゃの目めを肩に担かついで、砲ほう兵へい工こう廠しょうの裏手の土ど塀べいについて東へ坂を下おりました。その時分はまだ道路の改正ができない頃ころなので、坂の勾こう配ばいが今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真まっ直すぐではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞ふさがっているのと、放みず水はきがよくないのとで、往来はどろどろ[81]でした。ことに細い石橋を渡って柳やなぎ町ちょうの通りへ出る間が非道ひどかったのです。足あし駄だでも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路みちの真中に自然と細長く泥が掻かき分けられた所を、後ご生しょう大だい事じ[82]に辿たどって行かなければならないのです。その幅は僅わずか一、二尺しゃくしかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞ふさがったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kはちょっとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替かわせました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後あとで、その女の顔を見ると、それが宅うちのお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心こころ持もち[83]薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束そく髪はつは今と違って廂ひさしが出ていないのです、そうして頭の真まん中なかに蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路みちを譲らなければならないの

だという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ふん込ごみました。そうして比較的通りやすい所を空あけて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いいか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛は泥ねの上がるのも構わずに、糠ぬかる海みの中を自暴やけにどしどし歩きました。それから直すぐ宅へ帰って来ました。

34

「私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真まさ砂ご町ちょうで偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくなりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中あててみろとしまいにいうのです。その頃の私はまだ癇かん癪しゃく持もち[(84)]でしたから、そう不ふ真ま面じ目めに若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無む邪じゃ気きにやるのか、そこの区別がちょっと判はん然ぜんしない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方ほうでしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉しっ妬とに帰きしていいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見み傚なしてしかるべ

きものか、ちょっと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏り面めんにこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣さ事じに、この感情がきっと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余よ事じですが、こういう嫉しっ妬とは愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

　私はそれまで躊ちゅう躇ちょしていた自分の心を、一ひと思おもいに相手の胸へ擲たたき付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉くれろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行ったのです。そういうと私はいかにも優ゆう柔じゅうな男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったためではありません。Kの来ないうちは、他ひとの手に乗るのが厭いやだという我慢が私を抑おさえ付けて、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後のちは、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなかろうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かかせられるのが辛つらいなどというのとは少し訳が違います。こっちでいくら思っても、向うが内心他ほかの人に愛の眼まなこを注そそいでいるならば、私はそんな女といっしょになるのは厭なのです。世の中では否いや応おうなしに[85]自分の好いた女を嫁に貰もらって嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑のみ込めない鈍どん物ぶつのする事と、当時の私

は考えていたのです。一度貰ってしまえばどうかこうか落ち付くものだぐらいの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にもっとも迂う遠えんな愛の実際家だったのです。

肝かん心じんのお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいっしょにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気き兼がねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇気に乏しいものと私は見込んでいたのです。

35

「こんな訳で私わたくしはどちらの方面へ向っても進む事ができずに立ち竦すくんでいました。身体からだの悪い時に午ひる睡ねなどをすると、眼だけ覚さめて周囲のものが判はっ然きり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありましょう。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。

その内うち年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌か留る多たをやるから誰か友達を連れて来ないかといった事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのものは多少ありましたが、それらだって決して歌留多などを取る柄がらではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかといい直しましたが、私も生あい憎にくそんな陽気な遊びを

する心持になれないので、好いい加減な生なま返へん事じをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩になってKと私はとうとうお嬢さんに引っ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々うちうちの小こ人にん数ずだけで取ろうという歌留多ですからすこぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐ふところ手でをしている人と同様でした。私はKに一体百ひゃく人にん一いっ首しゅ[(86)]の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大おお方かたKを軽けい蔑べつするとでも取ったのでしょう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になって私に当るという有様になって来ました。私は相手次第では喧けん嘩かを始めたかも知れなかったのです。幸いにKの態度は少しも最初と変りませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経った後のちの事でしたろう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くといって宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだったので、ただ漠然と火鉢の縁ふちに肱ひじを載せて凝じっと顋あごを支えたなり考えていました。隣の室へやにいるKも一いっ向こう音を立てませんでした。双方ともいるのだかいないのだか分らないくらい静かでした。もっともこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかったのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になって、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見み合あわせました。彼は敷居の上に立ったまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。

もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食っ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回めぐって、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで朧おぼろ気げ(87)に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。私はすぐ両りょう肱ひじを火鉢の縁から取り除のけて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうというのです。私は大方叔お母ばさんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細さい君くんだと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過すぎだのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうと質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外ほかに仕方がありませんでした。

36

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已やめませんでした。しまいには私わたくしも答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変っているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫ふるえるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平へい生ぜいから何かいおうとすると、いう前に

よく口のあたりをもぐもぐさせる癖くせがありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容た易やすく開あかないところに、彼の言葉の重みも籠こもっていたのでしょう。一いっ旦たん声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺ながめた時、私はまた何か出て来るなとすぐ疳かん付づいた[88]のですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみて下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊かたまりといいましょうか、または苦しさの塊りといいましょうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後のちに、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失し策まったと思いました。先せんを越されたなと思いました。

しかしその先さきをどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋わきの下から出る気味のわるい汗が襯シャ衣ツに滲しみ透とおるのを凝じっと我慢して動かずにいました。Kはその間あいだいつもの通り重い口を切っては、ぽつりぽつりと[89]自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくって堪たまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判はっ然きりした字で貼はり付けられてあったろうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一いっ

切さいを集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍のろい代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻かき乱されていましたから、細こまかい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌きざし始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こっちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかったのです。またいう気にもならなかったのです。

午ひる食めしの時、Kと私は向い合せに席を占めました。下げ女じょに給仕をしてもらって、私はいつにない不ま味ずい飯めしを済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだか分りませんでした。

37

「二人は各自めいめいの室へやに引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私わたくしも凝じっと考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が後おくれてしまったという気も起りました。なぜ先さっ刻きKの言葉を遮さえぎって、こっちから逆襲しな

かったのか、そこが非常な手て落ぬかり[90]のように見えて来ました。せめてKの後あとに続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまったら、まだ好かったろうにとも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こっちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕し切きりの襖ふすまを開けて向うから突進してきてくれれば好いいと思いました。私にいわせれば、先刻はまるで不ふ意い撃うちに会ったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下した心ごころ[91]を持っていました。それで時々眼を上げて、襖を眺ながめました。しかしその襖はいつまで経っても開あきません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内うち私の頭は段々この静かさに掻かき乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になって堪たまらないのです。不断もこんな風ふうにお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開ける事ができなかったのです。一いっ旦たんいいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外ほかに仕方がなかったのです。

しまいに私は凝じっとしておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄てつ瓶びんの湯を湯ゆ呑のみに注ついで一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、

こんな風に自分を往来の真中に見み出いだしたのです。私には無論どこへ行くという的あてもありません。ただ凝じっとしていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻まわったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振ふるい落す気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀そ嚼しゃくしながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解かいしがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいられないほどに、彼の恋が募つのって[92]来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真ま面じ目めな事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもっていると信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝じっと坐っている彼の容よう貌ぼうを始終眼の前に描えがき出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底できないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に祟たたられたのではなかろうかという気さえしました。

私が疲れて宅うちへ帰った時、彼の室は依然として人ひと気けのないように静かでした。

38

「私が家へはいると間もなく俥くるまの音が聞こえました。今のように護ゴ謨ム輪わのない時分でしたから、がらがらいう厭いや

な響ひびきがかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

　私が夕ゆう飯めしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴はれ着ぎが脱ぎ棄すてられたまま、次の室を乱雑に彩いろどっていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取ってほとんど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素そっ気けない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡か言げんでした。たまに親おや子こ連づれで外出した女二人の気分が、また平へい生ぜいよりは勝すぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利ききたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追つい窮きゅうしました。私はその時ふと重たい瞼まぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し顫ふるえていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしか思われないのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうといいました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

　その晩私はいつもより早く床とこへ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎そ麦ば湯ゆを持って来てくれました。しかし私の室へやはもう真まっ暗くらでした。奥さんはおやおやといって、仕切りの襖ふすまを細目に開けました。洋燈ランプの光がKの机から斜ななめにぼんやりと私の室に

差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕まくら元もとに坐って、大おお方かた風邪を引いたのだろうから身体からだを暖あっためるがいいといって、湯ゆ呑のみを顔の傍そばへ突き付けるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻かい転てんさせるだけで、外ほかに何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思い出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るという簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押おし入いれをがらりと開けて、床とこを延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何なん時じかとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈ランプをふっと吹き消す音がして、家うち中じゅうが真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴さえて[(93)]来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今け朝さ彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこっちから切り出しました。私は無論襖ふすま越ごしにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻さっきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素す直なおな調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはっと思わせられました。

39

「Kの生なま返へん事じは翌よく日じつになっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気け色しきを決して見せませんでした。もっとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃そろって一日宅うちを空あけでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私わたくしはそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗あんに用意をしていた私が、折があったらこっちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙って家うちのものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素そ振ぶりにも、別に平へい生ぜいと変った点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝かん心じんの本人にも、またその監督者たる[94]奥さんにも、まだ通じていないのは慥たしかでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵こしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思って、例の問題にはしばらく手を着けずにそっとしておく事にしました。

こういってしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮しおの満みち干ひと同じように、色々の高たか低びくがあったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑うたがってもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械

が、時計の針のように、明めい瞭りょうに偽いつわりなく、盤ばん上じょうの数字を指し得うるものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚あげ句く[95]、漸ようやくここに落ち付いたものと思って下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内うち学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅うちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなったのです。けれども腹の中では、各てん自でんに各てん自でんの事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極きめなければならないと、私は思ったのです。すると彼は外ほかの人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵かなわないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養よう家かを三年も欺あざむいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白についで、実際的の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出しま

す。私は彼に隠かくし立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判はっ然きり断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一いち言ごんの返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まって底そこまで突き留める訳にいきません。ついそれなりにしてしまいました。

40

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引ひっ繰くり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他ほかの人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所しょ作さは誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心こころ持もちがしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちょっと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかというのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っているといったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は気きが散ちって(96)急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一いち

物もつがあって、談判でもしに来られたように思われて仕方がないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏ふせて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、竜たつ岡おか町ちょうから池の端はたへ出て、上うえ野のの公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜そう合ごうして考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引ひっ張ぱり出だしたらしいのです。けれども彼の態度はまだ実じっ際さい的てきの方面へ向ってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵ふちに陥おちいった彼を、どんな眼で私が眺ながめるかという質問なのです。一いち言ごんでいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平へい生ぜいと異なる点を確かに認める事ができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他ひとの思わくを憚はばかるほど弱くでき上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度ど胸きょうもあり勇気もある男なのです。養よう家か事件でその特色を強く胸の裏うちに彫ほり付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向って、この際何なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄しょう然ぜんとした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより外ほかに仕方がないといいました。私は隙すかさず(97)迷うという意味を聞き糺ただしました。彼は進んでいいか退し

りぞいていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渇かわき切った顔の上に慈じ雨うの如く注そそいでやったか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもって生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

41

「私はちょうど他た流りゅう試じ合あいでもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体からだ、すべて私という名の付くものを五分ぶの隙すき間まもないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明あけ放はなしと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要よう塞さいの地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺ながめる事ができたも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷ほう徨こうしてふらふらしているのを発見した私は、ただ一ひと打うちで彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚きょに付け込んだ(98)のです。私は彼に向って急に厳げん粛しゅくな改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相そう応おうするくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑こっ稽けいだの羞しゅう恥ちだのを感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬ば鹿かだ」といい放ちました。これは二人で房ぼう州しゅうを旅行している際、Kが私に向って

使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口く調ちょうで、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復ふく讐しゅうではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一いち言ごんでKの前に横たわる恋の行ゆく手てを塞ふさごうとしたのです。

Kは真しん宗しゅう寺でらに生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗しゅう旨しに近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男なん女にょに関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精しょう進じんという言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁きん欲よくという意味も籠こもっているのだろうと解釈していました。しかし後で実際を聞いて見ると、それよりもまだ厳げん重じゅうな意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠ぎ牲せいにすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂せつ欲よくや禁きん欲よくは無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨さま害たげになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころからお嬢さんを思っていた私は、勢いきおい[(99)]どうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同どう情じょうよりも侮ぶ蔑べつの方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかったのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折せっ角かく積み上げた過去を蹴け散ちらしたつもりではありません。かえってそれを今まで通とおり積づみ重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いませ

ん。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利り害がいと衝しょう突とつするのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利り己こ心しんの発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影えい響きょうするかを見み詰つめていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留どまったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎょっとしました。私にはKがその刹せつ那なに居い直なおり強盗[(100)]のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏とぼしいという事に気が付きました。私は彼の眼め遣づかいを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、徐々そろそろとまた歩き出しました。

42

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗あんに待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙だまし打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍そばへ来て、お前は卑ひ怯きょうだと一ひと言こと私さささ語やいてくれるものがあったなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であったなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘たしなめる[(101)]には余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに

敬意を払う事を忘れて、かえってそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打うち倒たおそうとしたのです。

　Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やっとKの眼を真ま向むきに見る事ができたのです。Kは私より背せいの高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼おおかみのごとき心を罪のない羊に向けたのです。

　「もうその話は止やめよう」と彼がいいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちょっと挨拶ができなかったのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向って残ざん酷こくな答を与えたのです。狼おおかみが隙を見て羊の咽の喉ど笛ぶえへ食くらい付くように。

　「止めてくれって、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚かく悟ごがなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

　私がこういった時、背せいの高い彼は自然と私の前に萎い縮しゅくして小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗すこぶる強ごう情じょうな男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質たちだったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒そつ然ぜん「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子は独ひとり言ご

とのようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小こ石いし川かわの宿の方に足を向けました。割合わりあいに風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋さびしいものでした。ことに霜に打たれて蒼あお味みを失った杉の木こ立だちの茶ちゃ褐かっ色しょくが、薄黒い空の中に、梢こずえを並べて聳そびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ噛かじり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本ほん郷ごう台だいを急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡おかへ上のぼるべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃ころになって、ようやく外がい套とうの下に体たいの温あたたか味みを感じ出したぐらいです。

急いだためでもありましょうが、我々は帰り路みちにはほとんど口を聞きませんでした。宅うちへ帰って食卓に向った時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上うえ野のへ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにといって驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平へい生ぜいから無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌ろくな挨拶はしませんでした。それから飯めしを呑のみ込むように掻かき込んで(102)、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へやへ引き取りました。

43

「その頃ころは覚かく醒せいとか新しい生活とかいう文もん字じのまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一いち意いに新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考

えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊たっとい過去があったからです。彼はそのために今こん日にちまで生きて来たといってもいいくらいなのです。だからKが一いっ直ちょく線せんに愛の目的物に向って猛進しないといって、決してその愛の生なま温ぬるい事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾し烈れつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝しょう動どうが起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちょっと踏み留とどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路みちを今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強ごう情じょうと我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

　上うえ野のから帰った晩は、私に取って比較的安静な夜よでした。私はKが室へやへ引き上げたあとを追い懸けて、彼の机の傍そばに坐すわり込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝しょう利りの色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響ひびきがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳かざした後、自分の室に帰りました。外ほかの事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもっていたのです。

　私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ましました。見ると、間の襖ふすまが二尺しゃくばかり開あいて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵よいの通りまだ燈火あかりが点ついているのです。急に世界の変った私は、少しの間あいだ口を利きく事もできずに、ぼうっとして、その光景を眺ながめていました。

　その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起

きている男でした。私は黒い影かげ法ぼう師しのようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思って、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈ランプの灯ひを背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえって落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗くら闇やみに帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌よく朝あさになって、昨夕ゆうべの事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思いました。それで飯めしを食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといいます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判はっ然きりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちょうど同じ時間に講義の始まる時じ間かん割わりになっていたので、二人はやがていっしょに宅うちを出ました。今け朝さから昨夕の事が気に掛かかっている私は、途中でまたKを追つい窮きゅうしました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押して[103]みました。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日きのう上野で「その話はもう止やめよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭するどい自尊心をもった男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑おさえ始めたのです。

44

「Kの果断に富んだ性格は私わたくしによく知れていました。彼のこの事件についてのみ優ゆう柔じゅうな訳も私にはちゃんと呑のみ込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかり攫つらまえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何なん遍べんも咀そ嚼しゃくしているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺うごき始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと思い出したのです。すべての疑惑、煩はん悶もん、懊おう悩のう、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳たたみ込んでいるのではなかろうかと疑うたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺ながめ返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもって、もう一いっ返ぺん彼の口にした覚悟の内容を公平に見み廻まわしたらば、まだよかったかも知れません。悲しい事に私は片めっ眼かちでした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発はっ揮きされるのがすなわち彼の覚悟だろうと一いち図ずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決けつ断だんが必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間まに、事を運ばなくてはならないと覚悟を極きめました。私は黙って機会を覘ねらっていました。しかし二日経たっても三日経っても、私はそれを捕つらまえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風ふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらし

ました。

一週間の後のち私はとうとう堪え切れなくなって仮け病びょうを遣つかいました。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生なま返へん事じをしただけで、十時頃ごろまで蒲ふ団とんを被って寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなって、家の内なかがひっそり静まった頃を見み計はからって[104]寝床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕まくら元もとへ運んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。身体からだに異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯めしを食いました。その時奥さんは長なが火ひ鉢ばちの向むこう側がわから給仕をしてくれたのです。私は朝あさ飯めしとも午ひる飯めしとも片付かない茶ちゃ椀わんを手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈くっ托たくしていたから、外観からは実際気分の好よくない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終しまって烟草タバコを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍そばを離れる訳にゆきません。下げ女じょを呼んで膳ぜんを下げさせた上、鉄てつ瓶びんに水を注さしたり、火鉢の縁ふちを拭ふいたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかといって、私の顔を見ました。奥さんの調ちょう子しはまるで私の気分にはいり込めないような軽かるいものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好いい加か減げんにうろつき廻まわった末、Kが近ちか頃ごろ何かいいはしなかったかと奥さんに聞

いてみました。奥さんは思おもいも寄よらない[105]という風をして、「何を？」とまた反問はんもんして来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか」とかえって向うで聞くのです。

45

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ」といってしまった後で、すぐ自分の嘘うそを快こころよからず[106]感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といって、後あとを待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでしたが、それでも少時しばらく返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺ながめていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓とん着じゃくなどはしていられません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰もらいたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然とつぜんでないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありましたが、私はそれを忘れてしまいました。男のように判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し

上げるなんて威い張ばった口の利きける境遇ではありません。どうぞ貰って下さい。ご存じの通り父親のない憐あわれな子です」と後では向うから頼みました。

　話は簡単でかつ明めい瞭りょうに片付いてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分とは掛かからなかったでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山たくさんだといいました。本人の意い嚮こうさえたしかめるに及ばないと明めい言げんしました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘こう泥でいするくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得うるのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」といいました。

　自分の室へやへ帰った私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、かえって変な気持になりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這はい込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定さだめられたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

　私は午ひる頃ごろまた茶の間へ出掛けて行って、奥さんに、今け朝さの話をお嬢さんに何い時つ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承しょう知ちしていれば、いつ話しても構わなかろうというような事をいうのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引ひき留とめて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽けい古こから帰って来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしてもらう方が都合が好いいと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙って自分の机の前に坐すわって、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落

ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被かぶって表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子を脱とって「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病気は癒なおったのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水すい道どう橋ばしの方へ曲ってしまいました。

46

「私は猿さる楽がく町ちょうから神じん保ぼう町ちょうの通りへ出て、小お川がわ町まちの方へ曲りました。私がこの界隈かいわいを歩くのは、いつも古本屋をひやかす(107)のが目的でしたが、その日は手て摺ずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さっきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或ある時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万まん世せい橋ばしを渡って、明みょう神じんの坂を上がって、本ほん郷ごう台だいへ来て、それからまた菊きく坂ざかを下りて、しまいに小こ石いし川かわの谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨またがって、いびつ(108)な円を描えがいたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかったのです。今その時の私を回かい顧こして、なぜだと自分に聞いてみても一いっ向こう分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得うるくらい、一方に緊張していたと

みればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格こう子しを開けて、玄関から坐ざ敷しきへ通る時、すなわち例のごとく彼の室へやを抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとはいいませんでした。彼は「病気はもう癒いいのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹せつ那なに、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなったのです。しかも私の受けたその時の衝しょう動どうは決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠こう野やの真中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝しゃ罪ざいしたろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然(109)はすぐそこで食い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復ふっ活かつしなかったのです。

夕ゆう飯めしの時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛なまりのような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只ただ今いまと答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大おお方かた極きまりが悪いのだろうといって、ちょっと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追つい窮きゅうしに掛かかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔かお付つきで、事の成なり行ゆきをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるため

に、私のいる前で、それを悉ことごとく話されては堪たまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひや(110)したのです。幸いにKはまた元の沈ちん黙もくに帰りました。平へい生ぜいより多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いだいている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一ひと息いきして室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵こしらえてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑ひ怯きょうな私はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったのです。

47

「私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ(111)何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ッつくように刺し戟げきするのですから、私はなお辛つらかったのです。どこか男らしい気性を具そなえた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素すっぱ抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙きょ止し動どう作さも、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断だん言げんできません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。しかし倫りん理り的てきに弱点をもっていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至し難なんの事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのま

まを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面めん目ぼくのないのに変りはありません。といって、拵こしらえ事ごと[112]を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰きつ問もんされるに極きまっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝さらけ出さなければなりません。真面目まじめな私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分ぶ一厘りんでも、私には堪たえ切きれない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路みちを歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡こう猾かつな男でした。そうしてそこに気のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑った事をぜひとも周囲の人に知られなければならない窮きゅう境きょうに陥おちいったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟はさまってまた立たち竦すくみました。

五、六日経った後のち、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰なじるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾わたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平へい生ぜいあんなに親しくしている間柄だのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んで

もっと細こまかい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固もとより何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

　奥さんのいうところを綜そう合ごうして考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一ひと口くちいっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障しょう子じを開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐すわっていた私は、その話を聞いて胸が塞ふさがるような苦しさを覚えました。

48

　「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超ちょう然ぜんとした態度はたとい外観だけにもせよ、敬服に値あたいすべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥はるかに立派に見えました。「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦うず巻まいて[(113)]起りました。私はその時さぞKが軽けい蔑べつしている事だろうと思って、一人で顔を赧あからめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かかせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進もうか止よそうかと考えて、ともかくも翌あくる日ひまで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然ぞっとします。いつも東ひがし枕まくらで寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床とこを敷いたのも、何かの因いん縁ねんかも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切ってあるKと私の室へやとの仕し切きりの襖ふすまが、この間の晩と同じくらい開あいています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突いて起き上がりながら、屹きっとKの室を覗のぞきました。洋燈ランプが暗く点ともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛かけ蒲ぶ団とんは跳はね返かえされたように裾すその方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突つッ伏ぷしている[(114)]のです。

私はおいといって声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体からだは些ちっとも動きません。私はすぐ起き上って、敷しき居い際ぎわまで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈ランプの光で見み廻まわしてみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一ひと目め見るや否いなや、あたかも硝子ガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒ぼう立だちに立たち竦すくみました。それが疾しっ風ぷうのごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策しまったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物もの凄すごく照らしました。そうして私はがたがた顫ふるえ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はす

ぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名な宛あてになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛つらい文句がその中に書き列つらねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽けい蔑べつされるかも知れないという恐怖があったのです。私はちょっと眼を通しただけで、まず助かったと思いました。（固もとより世せ間けん体てい[115]の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄はく志し弱じゃっ行こうで到底行ゆく先さきの望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりとした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片かた付づけ方かたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜よろしく詫わびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一ひと口くちずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回かい避ひしたのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨すみの余りで書かき添そえたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は顫ふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆みんなの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖ふすまに迸ほとばしっている血潮を始めて見たのです。

49

「私は突然Kの頭を抱かかえるように両手で少し持ち上げました。私はKの死しに顔がおが一ひと目め見たかったのです。しかし俯うつ伏ぶしになっている彼の顔を、こうして下から覗のぞき込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄ぞっとしたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触さわった冷たい耳と、平へい生ぜいに変らない五ご分ぶ刈がりの濃い髪の毛を少時しばらく眺ながめていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺し激げきして起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽こつ然ぜんと冷たくなったこの友達によって暗あん示じされた運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分ふん別べつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻まわり始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならないと思いました。同時にもうどうする事もできないのだと思いました。座敷の中をぐるぐる廻まわらなければいられなくなったのです。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行って奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮さえぎります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑おさえつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈ランプを点つけました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒らちの明あかない[116]遅

いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜よ明あけに間まもなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻まわりながら、その夜明を待ち焦こがれた私は、永久に暗い夜が続くのではなかろうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下げ女じょはその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だといって注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちょっと私の室へやまで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不ふ断だん着ぎの羽織を引ひっ掛かけて、私の後あとに跟ついて来ました。私は室へはいるや否いなや、今まで開あいていた仕切りの襖ふすまをすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顋あごで隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」といいました。奥さんは蒼あおい顔をしました。「奥さん、Kは自殺しました」と私がまたいいました。奥さんはそこに居い竦すくまったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かったのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫あやまりました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそういってしまったのです。Kに詫ほこまる事のできない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫わびなければいられなくなったのだと思って下さい。つまり私の自然が平へい生ぜいの私を出し抜いてふらふらと懺ざん悔げの口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかったのは私にとって幸いでした。蒼あおい顔をしながら、「不ふ慮りょの出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるよう

にいってくれました。しかしその顔には驚きと怖おそれとが、彫ほり付けられたように、硬かたく筋肉を攫つかんでいました。

50

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立って今閉めたばかりの唐から紙かみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、室へやの中はほとんど真まっ暗くらでした。私は引き返して自分の洋燈を手に持ったまま、入口に立って奥さんを顧みました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗のぞき込みました。しかしはいろうとはしません。そこはそのままにしておいて、雨あま戸どを開けてくれと私にいいました。

それから後あとの奥さんの態度は、さすがに軍人の未び亡ぼう人じんだけあって要領を得ていました。私は医者の所へも行きました。また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行ったのです。奥さんはそうした手て続つづきの済むまで、誰もKの部屋へは入いれませんでした。

Kは小さなナイフで頸けい動どう脈みゃくを切って一ひと息いきに死んでしまったのです。外ほかに創きずらしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯ひで見た唐紙の血ち潮しおは、彼の頸くび筋すじから一度に迸ほとばしったものと知れました。私は日にっ中ちゅうの光で明らかにその迹あとを再び眺ながめました。そうして人間の血の勢いきおいというものの劇はげしいのに驚きました。

奥さんと私はできるだけの手て際ぎわ[117]と工夫を用いて、Kの室へやを掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲ふ団とんに吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後あと始し末まつはまだ楽でした。二人は彼の死し骸がいを

私の室に入れて、不断の通り寝ている体ていに横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕まくら元もとにもう線香が立てられていました。室へはいるとすぐ仏ほとけ臭くさい烟けむりで鼻を撲うたれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨さく夜や来らいこの時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気き分ぶんに誘われる事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛くつろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一いっ滴てきの潤うるおいを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙って二人の傍そばに坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれといいます。私は線香を上げてまた黙って坐っていました。お嬢さんは私には何ともいいません。たまに奥さんと一ひと口くち二ふた口くち言葉を換かわす事がありましたが、それは当とう座ざ[(118)]の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余よ裕ゆうがまだ出て来なかったのです。私はそれでも昨ゆう夜べの物もの凄すごい有あり様さまを見せずに済んでまだよかったと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折せっ角かくの美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖こわかったのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度ど外がいに置いて行動する事はできませんでした。私には綺き麗れいな花を罪もないのに妄みだりに鞭むちうつと同じような不快がそのうちに籠こもっていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋うめるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑ぞう司

しゃが谷や近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑じょう談だん半はん分ぶんに、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬ほうむったところで、どのくらいの功く徳どくになるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪ひざまずいて月々私の懺ざん悔げを新たにしたかったのです。今まで構い付けなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあったのでしょう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

51

「Kの葬式の帰り路みちに、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があって以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁えん故こもない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白はく状じょうしてしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛あてで書き残した手紙を繰り返すだけで、外ほかに一ひと口くちも附け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐ふところから一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭えん世せい的てきな考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を畳たたんで友人の手に帰しました。友人はこの外ほ

かにもKが気が狂って自殺したと書いた新聞があるといって教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠かいていましたが、腹の中では始し終じゅう気にかかっていたところでした。私は何よりも宅うちのものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪たまらないと思っていたのです。私はその友人に外ほかに何とか書いたのはないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引ひっ越こしたのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭いやがりますし、私もその夜よの記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極きめたのです。

移って二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目め出で度たいといわなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随ついていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導どう火か線せんではなかろうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻さいといいます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓はか参まいりをしようといい出しました。私は意味もなくただぎょっと(119)しました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃そろってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしけじけ眺ながめていましたが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気

が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑ぞう司しヶが谷やへ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香せんこうと花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顚てん末まつを述べてKに喜んでもらうつもりでしたろう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫なでてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行って見み立たてたりした因いん縁ねんがあるので、妻はとくにそういいたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋うずめられたKの新しい白はっ骨こつとを思い比べて、運命の冷れい罵ばを感ぜずにはいられなかったのです。私はそれ以後決けっして妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

52

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたといえばいえない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると[120]あるいはこれが私の心持を一いっ転てんして新しい生涯に入はいる端いと緒くちになるかも知れないとも思ったのです。ところがいよいよ夫として朝夕妻さいと顔を合せてみると、私の果は敢かない希望は手て厳きびしい現実のために脆もろくも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒そつ然ぜんKに脅おびやかされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私をどこま

でも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映うつります。映るけれども、理由は解わからないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうとかいう詰きつ問もんを受けました。笑って済ませる時はそれで差さし支つかえないのですが、時によると、妻の癇かんも高こうじて来ます[121]。しまいには「あなたは私を嫌っていらっしゃるんでしょう」とか、「何でも私に隠していらっしゃる事があるに違いない」とかいう怨えん言げんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一いっ層そ思い切って、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間ま際ぎわになると自分以外のある力が不意に来て私を抑おさえ付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己おのれを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺ざん悔げの言葉を並べたなら、妻は嬉うれし涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗あん黒こくな一点を印いんするに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純じゅん白ぱくなものに一ひと雫しずくの印イン気キでも容よう赦しゃなく[122]振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経ってもKを忘れる事のできなかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆く逐ちくするために書物に溺おぼれようと力つとめました。私は猛烈な勢いきおいをもって勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公おおやけにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵こしらえて、無理にその目的の

達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋うずめていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今こん日にちに困らないから心に弛たるみが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐っていてどうかこうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差さし支つかえのない境遇にいたのですから、そう思われるのももっともです。私も幾いく分ぶんかスポイル[123]された気味がありましょう。しかし私の動かなくなった原因の主なものは、全くそこにはなかったのです。叔お父じに欺あざむかれた当時の私は、他ひとの頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他ひとを悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうあろうともこの己おれは立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのために美み事ごとに破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他ひとに愛あい想そを尽かした[124]私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

53

「書物の中に自分を生いき埋うめにする事のできなかった私は、酒に魂を浸ひたして、己おのれを忘れようと試こころみた時期もあります。私は酒が好きだとはいいません。けれども飲めば飲める質たちでしたから、ただ量を頼みに心を盛もり潰つぶそうと力つとめたのです。この浅せん薄ぱくな方便はしばらくするうちに私をなお厭えん世せい的てきにしました。私は爛らん酔すいの真まっ最さい中ちゅうにふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似まねをして己れを偽いつわっている愚ぐ物ぶつだという事に気が付くのです。すると身み振ぶるいと共に眼も心も醒さめてし

まいます。時にはいくら飲んでもこうした仮か装そう状態にさえ入はいり込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技ぎ巧こうで愉快を買った後あとには、きっと沈ちん鬱うつな反動があるのです。私は自分の最も愛している妻さいとその母親に、いつでもそこを見せなければならなかったのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛かかります。

妻の母は時々気き拙まずい事を妻にいうようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責せめなければ気が済まなかったらしいのです。責めるといっても、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例ためしはほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいってくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止やめろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃ごろ人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答えた事がありましたが、私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫あやまりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌あくる日ひの朝でした。妻は笑いました。あるいは黙っていました。たまにぽろぽろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪たまらなかったのです。だから私の妻に詫ほこまるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止やめました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭いやになったから止めたといった方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打うち遣やって

置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦く笑しょうしていました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂せき寞ばくでした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当とう座ざは頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありましょうが、私の観察はむしろ簡単でしかも直ちょく線せん的てきでした。Kは正まさしく[125]失恋のために死んだものとすぐ極きめてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向ってみると、そう容た易やすくは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝しょう突とつ、——それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋さむしくって仕方がなくなった結果、急に所しょ決けつしたのではなかろうかと疑い出しました。そうしてまた慄ぞっとしたのです。私もKの歩いた路みちを、Kと同じように辿たどっているのだという予よ覚かくが、折々風のように私の胸を横よこ過ぎり始めたからです。

54

「その内妻さいの母が病気になりました。医者に見せると到とう底てい癒なおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇こん切せつに看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありましたが、もっと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。私はそれまでにも何かしたくって堪たまらなかったのだけれども、何もする事ができないので

やむをえず懐ふところ手でをしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪つみ滅ほろぼしとでも名づけなければならない、一種の気分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなったといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不ふ断だんからひねくれた[126]考えで彼女を観察しているために、そんな事もいうようになるのだと恨うらみました。

母の亡くなった後あと、私はできるだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇こ人じんを離れてもっと広い背景があったようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀き薄はくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る気き遣づかいはなかったのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかといいました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖あい昧まいな返事をしておきました。妻は自分の過去を振り

返って眺ながめているようでしたが、やがて微かすかな溜ため息いきを洩もらしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲って来るのです。私は驚きました。私はぞっとしました。しかししばらくしている中うちに、私の心がその物もの凄すごい閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなかろうかと疑うたぐって[127]みました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎まい月げつ行かせます。その感じが私に妻の母の看かん護ごをさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路ろ傍ぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思った事もあります、こうした階段を段々だんだん経過して行くうちに、人に鞭むちうたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今こん日にちまで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容よう易いならん[128]この一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻さいに対して非常に気の毒な気がします。

55

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺し戟げきで躍おどり上がりました。しかし私がどの方面かへ切って出ようと思い立つや否いなや、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けるようにいって聞かせます。すると私はその一いち言げんで直すぐぐたりと萎しおれて(129)しまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他ひとの邪魔をするのかと怒鳴どなり付つけます。不可思議な力は冷ひややかな声で笑います。自分でよく知っているくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波は瀾らんも曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思って下さい。妻さいが見て歯は痒がゆがる前に、私自身が何なん層ぞう倍ばい歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢ろう屋やの中うちに凝じっとしている事がどうしてもできなくなった時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなった時、必ひっ竟きょう私にとって一番楽な努力で遂すい行こうできるものは自殺より外ほかにないと私は感ずるようになったのです。あなたはなぜといって眼をみはるかも知れませんが、いつも私の心を握にぎり締しめに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食くい留とめながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなったのです。

私は今こん日にちに至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻

に心を惹ひかされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇気は無論ないのです。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠ぎ牲せいとして、妻の天てん寿じゅを奪うなどという手て荒あら[130]な所しょ作さは、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻まわり合せ[131]があります、二人を一ひと束たばにして火に燻くべるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがいなくなった後の妻を想像してみるといかにも不ふ憫びんでした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったといった彼女の述じゅっ懐かいを、私は腸はらわたに沁しみ込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊ちゅう躇ちょしました。妻の顔を見て、止よしてよかったと思う事もありました。そうしてまた凝じっと竦すくんでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺ながめられるのです。

記憶して下さい。私はこんな風ふうにして生きて来たのです。始めてあなたに鎌かま倉くらで会った時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分に大した変りはなかったのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括くッ付ついていました。私は妻さいのために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になったらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐ついたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きっと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明めい治じ天てん皇のうが崩ほう御ぎょになりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、そ

の後に生き残っているのは必ひっ竟きょう時勢遅れだという感じが烈はげしく私の胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉じゅん死しでもしたらよかろうと調戯からかいました。

56

「私は殉死という言葉をほとんど忘れていました。平へい生ぜい使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐くされかけていたものと見えます。妻の笑じょう談だんを聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉じゅん死しするならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経たちました。御ご大たい葬そうの夜私はいつもの通り書斎に坐って、相あい図ずの号ごう砲ほうを聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃の木ぎ大たい将しょうの永久に去った報知にもなっていたのです。私は号ごう外がいを手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読みました。西せい南なん戦せん争そう(132)の時敵に旗を奪とられて以来、申し訳のために死のう死のうと思って、つい今こん日にちまで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折って、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年とし月つきを勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間あいだ

死のう死のうと思って、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人に取って、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一いっ刹せつ那なが苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑のみ込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時じ勢せいの推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは箇こ人じんのもって生れた性格の相違といった方が確たしかかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己おのれを尽つくしたつもりです。

私は妻さいを残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕し合あわせです。私は妻に残酷な驚きょう怖ふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間まに、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓とん死したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自じ叙じょ伝でんの一節を書き残すために使用されたものと思って下さい。始めはあなたに会って話をする気でいたのですが、書いてみると、かえってその方が自分を判然はっきり描えがき出す事ができたような心持がして嬉うれしいのです。私は酔すい興きょうに書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外ほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽いつわりなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとっても、外の人にとっても、徒労ではなかろうと思います。渡わた辺なべ華か山ざん[133]

は邯かん鄲たんという画えを描かくために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先せん達だって聞きました。他ひとから見たら余計な事のようにも解釈できましょうが、当人にはまた当人相応の要求が心の中うちにあるのだからやむをえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半なかば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃ころには、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市いちヶが谷やの叔母おばの所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間あいだに、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他ひとの参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己おのれの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯ゆい一いつの希望なのですから、私が死んだ後あとでも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

---

(1) どころ：（副助）岂止……，休说……，非但……。表示预想彻底落空，根本无从谈起。

(2) 無躾：不礼貌，失礼，冒失。

(3) 有体にいえば：据实而言，老实说。有体，实情，事实。

(4) 幾分：（名）一部分；（副）多少，多多少少，一点点，些微，少许。

(5) 不審：疑惑，怀疑，可疑，疑念。

(6) 鷹揚：得意，意气风发，大气，大方。

(7) 本筋：正题，中心，主要情节。

(8) しどろ：混乱，杂乱，胡乱，零乱，乱七八糟。

(9) マン·オフ·ミーンズ：man of means，有产者，有财产的人。

(10) 闊達：豁达，开通，豪爽，大度，心胸开阔。

(11) 余儀なく：よぎない，无可奈何，迫不得已。

(12) 気兼：客气，顾虑，顾忌。

(13) 布衍している：ふえんする，详细说明，解释，费唇舌。

(14) 取付：とっつき或とりつき，开头，开端，头一个。

(15) 東京の高等商業：全称为“东京高等商业学校”，位于东京神田区一桥一带，一桥大学的前身。

(16) べく：べし的连用形，此处表示意愿，相当于~（の）ように。

(17) 顛末：始末，过程，前后经过，来龙去脉。

(18) さぞ：（副）想必，有可能，估计。

(19) ちょくらちょいと：一般为ちょっくらちょっと，轻易、容易、简单。

(20) そぞろ心：亦作すずろごころ，随意，随心所欲，漫不经心，漫无目的。

(21) 趣：情趣，风情；旨趣，要点。

(22) 小ぢんまり：こぢ（じ）んまり（副·サ变自）雅致，小巧而舒适。

(23) 素性：来历，由来，根底；出身，血统，门第。

(24) 唐めいた：唐めく，带有中国风味，带有唐土情调。

(25) へどもど：（副·サ变自）（样子、表现）惊慌失措，慌乱，张口结舌。

(26) 込み入った：こみいる，复杂；混杂，拥挤。

(27) きょときょと：（副·サ変自）东张西望，左顾右盼。含贬义。

(28) 巾着切：小偷，扒手，毛贼，掏钱包的。

(29) 定めて：（副）亦作さだめし。想必，有可能，应该。

(30) さも：（副）非常，很，着实；俨然，仿佛，活像。

(31) きょろ付かなくなりました：きょろつく，仓皇四顾，慌慌张张四下打量。

(32) そわそわ：（副·サ変自）心慌意乱，六神无主，坐立不安，不知如何是好。

(33) 見縊っていた：みくびる，轻视，蔑视，瞧不起。

(34) 気高い：高雅，高尚，超凡脱俗。

(35) 絶体絶命：一筹莫展，穷途末路，寸步难移，四面楚歌。

(36) 食客：汉字一般写作居候，食客，寄食，吃闲饭，白吃饭。

(37) いらいら：（副·サ変自）焦急，焦躁，焦虑，心神不宁，坐立不安。

(38) 業腹：怒火中烧，气愤难耐。

(39) 大層：（副）很，非常，非同一般。

(40) 改まった：あらたまる，此处意为“郑重其事，正儿八经”。

(41) 真宗：即净土真宗，日本佛教的一个主要流派，创始人为真鸾（1173—1262）。日本和尚可以娶妻生子。

(42) 本願寺派：净土真宗十派之一，总寺院为位于京都的西本愿寺。

(43) しかるに：［然るに］（接续）然，然而，可是，但是。

(44) 意気組：或いきごみ，干劲，热情。

(45) 大観音：东京文京区光源寺中的十一尊观音像，亦是光源寺的代称。

(46) 変調：变化，情况反常，异常事态。

(47) 不埒：可恶，可恨，不像话，蛮不讲理，岂有此理。

(48) 払底：售罄，脱销，断货，卖光。

(49) 剛気：刚勇，刚毅，要强。

(50) 一存：个人意见，自己的看法。

(51) 意地：此处意为“固执，倔强，意气用事”。

(52) 酔興：亦作酔狂、粋狂，突发奇想，异想天开，想入非非；醉酒，耍酒疯。

(53) 気心：心情，脾气，禀性，底细。

(54) むっちり：むっつり的误用。むっつり：板着脸不出声。

(55) 幽谷から喬木に移った：语出《诗经·小雅》：“发自幽谷，迁于乔木”。

(56) なまじい：（副·形动）亦作なまじ、なまじっか，不上不下，半生不熟，囫囵吞枣，不彻底；多余，大可不必，多此一举。

(57) 弁えている：わきまえる，分辨，识别，知晓。

(58) じりじり：（副）一点一点，一步一步，逐步，逐渐；火辣辣地（晒）。

(59) 祟る：做祟，招致坏的结果。

(60) 取り繕って：とりつくろう，遮掩，打圆场，调停；修补。

(61) 価していた：亦作～に値する，值得，有价值，适合，适于。

(62) 何を措いても：一般作何はさておき，首先，无论如何。

(63) 厄介になっている：厄介になる，承蒙……照料、照顾、关照。

(64) 疳違：一般写作勘違い，误解，错觉。

(65) シュエデンボルグ：Emanuel Swedenborg（1688—1772），瑞典哲学家，神秘主义者。

(66) 萌していた：きざす，萌发；萌芽。

(67) 房州：千叶县房总半岛南部，日本旧时的安房国一带。

(68) どこもかしこも：（连语）到处，各处，处处，无处不……

(69) し甲斐：する的连用形し＋かい，做的价值。世話のしがい，关照的价值，关照的效果。

(70) 立ち入った：たちいる，深入；进入；干涉。

(71) 笑止千万：万分可笑，可笑至极。

(72) 間が抜けていて：まがぬける，糊涂，愚蠢，疏忽；走调。

(73) 上総のそこ一里：在上总问路，对方说就那里，而实际走起来，却有一里（一日里等于七八华里）。用来比喻乡下人距离感的谚语。

(74) 日蓮：镰仓时期僧人（1222—1282），日本佛教日莲始祖，生于小凑一贫寒渔夫之家。

(75) さも：（副）好像，仿佛，俨然；非常，极其，十分。

(76) 路々：一般写作道道。这里作副词用，一路上，边走边……

(77) 気取り過ぎた：过于装腔作势、装模作样。気取る：做作，矫揉造作，装腔作势。

(78) 軍鶏：军鸡，鸡的一个品种。可作斗鸡用或食用。

(79) それのみならず：不仅如此。のみならず（接续）而且，此外；不仅，不只。

(80) 捌けた：さばける，开通，开明，通情达理；井然有序，有条不紊。

(81) どろどろ：（副·形动）黏黏糊糊，泥泞；错综复杂，一团乱麻。

(82) 後生大事：至关重要，极为看重。

(83) 心持：此处作副词使用，稍微，略微，少许，一点点。下面的心持则作名词使用，心情，感觉。

(84) 癇癪持ち：脾气暴躁的人。かんしゃく，脾气暴躁，火气大。

(85) 否応なしに：或いやおうなく，不容分说，不管愿意不愿意，硬是，勉强，强行。

(86) 百人一首：日本一种纸牌（かるた）上写有古代一百个诗人的一百首诗（和歌），每人一首，故云。

(87) 朧気：模糊，朦胧，依稀。

(88) 疳付いた：かんづく，一般写作 [勘·感付く]。感觉到，察觉出，意识到，一下子明白。

(89) ぽつりぽつりと：（副）一点一滴，一字一句，断断续续。

(90) 手落り：疏忽，疏漏，失误。

(91) 下心：预谋，蓄谋已久，图谋。

(92) 募って：［募る］，激化，厉害，愈发严重；招募，募集。

(93) 冴えて：さえる，精神兴奋；清晰，明亮；寒冷。

(94) たる：文语助动词たり的连体形，是，为，系。相当于である。

(95) 揚句：结果，结局（一般指不好的）。

(96) 気が散って：きがちる，走神，精力分散，注意力不集中。

(97) 隙かさず：すかす，一般写作［透かす］，留出空隙。すかさず，すかさない，不留空隙。

(98) 虚に付け込んだ：きょにつけこむ，乘虚而入。

(99) 勢い：此处作副词用，势必，难免，理应，自然。

(100) 居直り強盗：小偷变强盗（潜入室内的窃贼被人发现时，立刻变成强盗）。

(101) 窘める：责备，责怪，斥责，训斥。

(102) 掻き込んで：掻き込む，扒拉，扒拢，匆匆吃饭。

(103) 念を押して：ねんをおす，叮问。

(104) 見計らって：みはからう［見計らう］，斟酌，酌情处理，看着办，随机应变；估计，算计（时间）。

(105) 思いも寄らない：想不到，没想到，出乎意料，意外。

(106) 快からず：こころよい的文语否定形。

(107) ひやかす：只看不买，只问价不买；奚落，戏弄，嘲笑。

(108) いびつ：［歪］，歪，变形，异形，压瘪。

(109) 自然：此处当指上面说的“冲动”。

(110) ひやひや：（副·サ变自）胆战心惊，提心吊胆；发冷，冷飕飕的。

(111) ただでさえ：（副）本来就……，原本就……

(112) 拵え事：虚构，编造，捏造。

(113) 渦巻いて：うずまく，打漩儿，卷起漩涡。

(114) 突ッ伏している：つっぷす，（迅速）趴下，伏下。

(115) 世間体：体面，面子。

(116) 埒の明かない：没有进展，原地踏步，无可救药。埒が明く，事情有了着落，问题得到解决。

(117) 手際：处理方法，方式，技巧。

(118) 当座：即席，当场；眼下，当下，暂时。

(119) ぎょっと：（副·サ变自）吓一跳，吃一惊，心里咯噔一下。

(120) ことによると：（连语）或许，说不定，有可能。

(121) 癇も高じて来ます：亢奋起来，发起火来。

(122) 容赦なく：ようしゃない，毫不客气，毫不迁就，无情。

(123) スポイル：spoil，宠坏，惯坏。

(124) 愛想を尽かした：あいそをつかす，厌恶，唾弃，心灰意冷。

(125) 正しく：（副）的确，确实，分明，恰恰。

(126) ひねくれた：扭曲，别扭，闹别扭，乖僻。

(127) 疑って：うたぐる，怀疑。うたがう。

(128) 容易ならん：容易ではない的文语表达形式，不容易，不易，不简单，不平常。

(129) 萎れて：しおれる，蔫，枯萎；气馁，灰心丧气。

(130) 手荒：粗暴，粗鲁，野蛮。

(131) 廻り合せ：命运，运气，气数。

(132) 西南戦争：1877年西乡隆盛领导的鹿儿岛士族起兵反抗中央政府，被政府军镇压，亦称西南之役。乃木因被敌军夺去军旗而欲引咎自杀，未果。

(133) 渡辺華山：渡边华山（1793—1841），日本江户后期画家，对政治亦有兴趣，后自杀。

上　先生与我

1

我经常称他为先生，所以在这里也只以先生相称，隐去真实姓名。这并非出于我对世人的顾忌，而是因为对我来说，如此称呼才是自然的。每当我从记忆中唤起他时，未尝不想叫一声“先生”。提笔时也是同一种心情，无论如何不想使用生分的套话。

我同先生相识是在镰仓。那时我还是个年轻的学生。一个朋友来了张明信片，叫我务必利用暑假去海边游泳。我决定筹措点钱就动身。筹措钱花了十二天时间。不料我到镰仓不到三天，把我叫来的朋友突然接到老家电报，让他赶快回去。电报上说是母病，但朋友不信。老家的父母很早就强迫他接受一门他不情愿的婚事。作为他，一来从现代习惯看来结婚还过于年轻，二来关键的是对对象本人没有看中，所以才来东京附近游玩，逃避暑假回家。他把电报给我看，问我怎么办好。我不知怎么办好，但如果他母亲真的病了，理应回去才对。他终归还是回去了，剩下特意赶来的我一个人。

到开学还有相当一些时日，留在镰仓也可以回去也可以。既然怎么都可以，我便决定暂且留在原来宿舍。朋友是中国一个富翁之子，钱方面不用愁。但毕竟在校学习，加之年龄的关系，生活境况和我差不了许多。这样，剩得孤身一个的我也就免去了另找宿舍的麻烦。

宿舍所在的方位，即使在镰仓也算是偏僻的。买个台球或一支雪糕那样的时髦玩意儿都要走很长一段田间小路，坐车要花上两角。不过点点处处建有很多私人别墅，离海又近，要洗海水浴，倒是个得天独厚的地方。

我每天都去海边。穿过烟熏火燎般古旧的茅草房来到海边，但见沙滩给前来避暑的男男女女晃得动来动去，想不到这一带竟有这么多城里人居住。有时候海面犹如一个大澡堂，蠕动着一层黑压压的脑

袋。我一个熟人也没有，只管搀杂在这熙熙攘攘的场景中，或舒展四肢仰卧在沙滩上，或任凭浪花打着膝盖到处蹦蹦跳跳，甚是开心惬意。

我就是在这片嘈杂中发现先生的。那时海岸上有两间小茶棚。一次偶然去了其中一间，便每次都去那里。除了在长谷边拥有宽敞别墅的人，一般避暑客并没有单用的更衣场所，所以无论如何都需要有这么一个公共更衣场。他们在此喝茶，在此休憩，在此洗游泳衣，在此冲净咸津津的身体，在此寄存帽子和伞。我没有游泳衣，但也怕东西被人偷去，每次下水前都在这小茶棚里脱得精光。

2

我在茶棚见到先生时，先生刚脱完衣服正要下水。我则相反，任海风吹着湿漉漉的身体从水里上来。两人之间隔着很多涌动的黑脑壳。若无特殊情况，或许我就把先生看漏了。我之所以在海滨那么混杂而我又那么漫不经心的情况下发现先生，是因为先生陪着一个洋人。

洋人皮肤白得非同一般，一进小茶棚就引起我的注意。他把地道的日本式浴衣往长凳上一甩，抱起双臂往水边走去。除了我们穿的那种裤衩，他身上再没别的。这点首先使我惊异。两天前我便跑到由井浜，蹲在沙滩上久久看洋人下水的情景。我屁股底下是略高些的沙丘，旁边就是一家旅馆的后门，所以在我凝望时间里，有不少男人出来冲洗身上的咸水，但都没有露出腰身、胳膊和腿。女的就更加注意掩饰，大多头戴橡胶头巾，或绛紫色或藏青色或天蓝色，在波浪间动来动去。在看惯如此光景的我的眼里，这个只穿一条裤衩站在众人面前的洋人实在稀奇得可以。

少顷，他朝自己身旁歪过头，对那里弯腰的一个日本人说了一两句什么。那日本人正在拾沙地上掉的毛巾。拾起后，马上包在头上，

朝海水那边走去。那个人就是先生。

出于单纯的好奇心，我目送两人并肩走下沙滩。他们一直走进波浪，穿过远浅矶附近吵吵嚷嚷的人群，走到比较开阔的地方，一齐游了起来。他们往海湾那边游去，脑袋越变越小。之后回过头，径直游回海滩，回到小茶棚，也不用井水冲洗，直接擦身穿衣，很快不知去了哪里。

他们离开后，我依然坐在长凳上吸烟，呆呆地琢磨先生。长相总好像在哪里见过，但就是想不起是何时何处见过的何人。

当时的我与其说是无忧无虑，不如说是正百无聊赖。这样，第二天我估算好见到先生的时间，专门到茶棚来看。这回洋人没来，只先生一人头戴草帽赶来。先生摘下眼镜，放在台上，随即用毛巾包起脑袋，三步并作两步走下沙滩。他一如昨日，从嘈杂的浴客当中穿过，独游起来。这时，我突然动了尾随追去的念头，遂扑扑通通趟过浅水，来到相当深的地方，以先生为目标开始拔手泳。不料和昨天不同，今天先生勾勒出一道弧线，从很奇妙的方向游回岸边，所以我的目的未能达到。上得岸，我挥着滴水的手走进茶棚，只见先生已穿戴整齐往外走，同我擦肩而过。

3

下一天我也在同一时间去沙滩见先生，再下一天也是如此。但两人之间没有出现打招呼或寒暄的机会。莫如说那时先生的态度很有些天马行空的味道。按一定时间超然而来，又超然而去。周围无论怎么热闹，他都没表现出多大的兴致。最初一块儿来的洋人，那以后再未露面，总是先生一人。

一次，先生一如往常从水里迅速上岸，来到老地方要穿脱掉的浴衣时，不知为什么，浴衣里满是沙子。为了抖掉沙子，先生背过身

去，把浴衣甩了两三次。这么着，放在衣服下面的眼镜从木板缝隙掉了下去。先生穿上白地蓝花浴衣，扎上宽布带。这才好像发现眼镜不见了，急忙东找西摸。我马上把脑袋和手伸到长凳底下，拾起眼镜。先生说声谢谢，从我手中接过。

第二天我跟在先生后面扑入海中，和他往一个方向游去。游了二百多米，来到海湾，先生回头跟我搭话。浩瀚的蓝色海面上，除了我们两人周围没有任何漂浮物。目力所及，只有明晃晃的太阳光照着水，照着山。我连肌肉都充满自由和欢喜，在海水中尽情腾跃。先生再次陡然停下四肢，仰卧在水面上休息。我也学他的样子。天空把它势不可挡的蓝色投掷在我脸上，只觉眩目耀眼。“好舒服啊！”我大声说道。

过了一些时候，先生像起床似的在水面改换姿势，催促我说：“该回去了吧？”我体质较为强壮，本想再游一会儿，但先生这么一催，我当即痛快回答：“嗯，回去吧。”两人于是顺原路折回海滩。

从此我和先生要好起来。不过还不知道先生住在何处。

记得隔两天的第三天下午，在茶棚见到先生时，先生突然问我：“你打算还在这里住些日子吧？”由于问得突然，我没有现成答案，便说：“我也不知道。”但看到先生笑眯眯的样子，我忽然不好意思起来，不由反问：“先生呢？”这是我叫他先生的开始。

那天晚上我去了先生住处。住处不同于一般旅馆，是很大寺院里的一座别墅样的建筑。我还看出住在那里的人并非先生家人。我一口一个“先生”，先生沁出苦笑。我解释说这是我称呼年长者的口头语。我打听上次那个洋人。先生介绍了他的与众不同之处，告诉我现已不在镰仓。这个那个说了一会儿，最后说自己也真是不可思议，同日本人都几乎没有来往，却和这洋人熟识起来。我最后对先生说好像在哪里见过他，却怎么也想不起来。年轻的我暗自以为对方也可能和我有

同样感觉，心里期待先生这样回答自己。可是先生沉吟片刻，说道："我对你没什么印象，你怕是看错人了。"我听了，不知为什么，生出一种失望。

4

月末我返回东京。先生离开避暑地比我早得多。同先生分别时，我问："以后去府上拜访可以吗？"先生只简单回答："噢，来好了。"当时我自以为已经跟先生相当要好，指望先生给两句分量重些的话。结果竟这么轻描淡写，我的自信多少受了损伤。

大凡这类事先生经常使我失望。先生既像有所觉察，又似乎浑然不觉。作为我，尽管屡屡品尝轻度失望，但又不想因此离开先生。或者不如说与此相反，每给不安摇撼一次，我就想往前跨进一步。我想，若再往前去，我所期望的东西就会迟早出现在眼前，让我心满意足。我年轻，但并非对所有人都如此有一腔热血，都如此以诚相待。我不知何以对先生有这份心绪。直到先生已不在人世的今天才明白过来：先生原来就不讨厌我的。先生对我不时流露的看似冷淡的态度和缺少人情味的举止，其用意并非要疏远我。那只是心灵遭受重创的先生向我发出的警告，警告企图接近自己的人立即止步，因为自己不是具有接近价值的人。看上去不理会别人好意的先生在蔑视他人之前，首先蔑视了自己。

我返回东京当然怀有去找先生的念头。到开学还有两个星期时间，便想尽快找先生一次。但两三天一过，在镰仓时的心情渐渐淡薄下来。灯红酒绿的大都市空气给我以强烈刺激，唤起我的记忆，染红我的心。每当路上见到同学那一张张脸庞，都不由对新学年燃起希望感到紧张，一时间我忘记了先生。

上课过了一个来月，我心里又出现一种懈怠。我开始怅怅地在街上游逛，带着饥渴感环顾自己的房间。先生的面容重新在我脑海里浮

现出来。我又想见先生了。

第一次去先生家，先生不在。记得第二次去是下一个星期天。天气很妙，晴空就好像要沁入自己整个身心。这天先生也不在。在镰仓时，听先生亲口说一般什么时候都在家的，说他不喜欢出门。想到这里，我感到无端的不满。我没有即刻离开，看着女佣的脸站在那里踌躇。女佣有印象，上次托交过名片。她叫我等着，退回门内。很快，一位太太模样的人继而走出，长得相当漂亮。

太太详细告诉我先生去了哪里。她说先生每月一到某日，习惯上必去杂司谷墓地为一座墓献花，“刚出门，不到十分钟——顶多十分钟的。”太太歉然说道。我点头离开，往热闹方向走了一百多米，心想自己也去杂司谷好了，权作散步。当然也是受好奇心的驱使，看能否看到先生。于是我马上掉过头来。

5

墓地前面有块秧田。我从秧田左侧沿一条两旁栽有枫树的宽路前行。蓦地，前端一家茶馆闪出一个很像先生的人。我径直近前，一直走到可以看到对方眼镜框上反射的日光时，冷不防大声叫了声“先生”。先生立时站定，注视我的脸。

“怎么回事……怎么回事……”先生重复问道。在这万籁俱寂的中午时分，话语带有很特殊的声调。

我一下子答不上来。

“是跟在我后面来的？怎么回事……”莫如说，先生的态度很镇定，声音也很沉静。但其表情有一种难以形容的阴翳。

我告诉先生我是怎么找来这里的。

“妻说我给谁扫墓？说出那个人的名字了么？”

“没有，这个她什么也没说。”

“是吗？——倒也是，不可能说什么，毕竟第一次见到你，没有说的必要。”

先生这才像是明白过来。我则完全不解其意。

先生和我从墓与墓之间穿行，准备上路。在依撒伯拉某某之墓和神仆罗金之墓的旁边，竖立着写有一切众生悉有佛性的塔形墓标。还有的写着全权公使某某。在雕有安德烈字样的一座不大的墓前，我问先生该怎么念。先生苦笑道：“大概该念作AN·Do·Re吧！”

看来，和我不同，先生对这些墓标各所不同的样式，丝毫不觉得有什么滑稽好笑。我指着或圆或长的花岗岩墓碑，一直说个不停。起始，先生默默听着。最后问我：“你还没有认真考虑过死这件事吧？”我没有做声，他也再没说下去。

墓地分界处，有一株遮天蔽日的大银杏树。来到树下，先生抬头看着高耸的树梢，说：“再过几天，可就好看了。满树金黄，周围地面都给金黄的落叶埋得严严实实。”先生每月都必从这树下走过一次。

对面一个平整凸凹地面做新墓地的男子，停下握锹的手看着我们。我们从那里往左拐，很快上了路。

往下我也不是一定想去哪里，只管随先生走去。先生比平时还沉默寡言。但我没觉得怎么别扭，一起慢慢悠悠走着。

“这就回家？”

“嗯，没什么地方要去。”

两人再度沉默，往南走下斜坡。

“先生家的墓地在那边吗？”我又开口了。

“不。”

“有谁的墓呢？亲戚的墓吗？”

“不。”

先生再不多答。我也就此打住。又走了一百多米，先生意外把话拉回：

“那里有我朋友的墓。”

“朋友的墓每个月都来看一次？”

“是的。”

这天先生只说到这里。

6

那以后我不时去找先生。每次去先生都在家。随着同先生见面次数的增多，我愈发频繁地出入先生家门。

但先生对我的态度，前后没什么变化，无论最初寒暄之时，还是后来熟识以后。先生总是静静的，有时静得近乎凄寂。我从一开始就觉得先生有些不可思议，让人不好接近，却又有一种感觉强烈地驱使我非接近他不可。对先生怀有如此感觉的，或许众人中只我这一个。这一直觉后来得到了证实。所以我为自己的先见性直觉感到高兴，感到自信，哪怕别人说我少不更事也好，笑我傻里傻气也好。一个能够爱别人的人，一个不能不爱别人的人，却又不能伸出双臂紧紧拥抱想

扑入自己怀中之人的人——这人就是先生。

刚才说了，先生始终静静的，不急不躁。但脸上有时候会掠过一丝奇特的阴翳，如黑色的鸟影从窗前划过，稍纵即逝。我最初从先生眉间发现那阴翳，是在杂司谷墓地下意识招呼先生的时候。那异乎寻常的一瞬间，使得我本来快活流淌的心脏血流陡然顿了一下。但仅仅是一时的迟滞，不到五分钟便恢复了平日的流势，把黯淡的云影完全忘却脑后。及至慢慢回想起来，已是阴历十月即将逝去的一天傍晚了。

同先生交谈当中，我眼前蓦然浮现出先生特别提醒我注意的大银杏树。算起来，先生每月照例去墓地的日子，正是那以后第三日。而第三日那天我的课中午就结束，别无他事。我向先生这样说道：

“先生，杂司谷那棵银杏，树叶掉光了吧？”

“还不至于光秃。”先生盯着我的脸回答，好一会儿都没移开视线。

我马上接道：

“下次去墓地，我陪您去可以么？我想跟您一起去那里散散步。”

“我是去扫墓，不是去散步。”

“顺便散步岂不正好？”

先生没再应声。良久开口道：

“我真的只是去扫墓的。”

看上去他无论如何都要把扫墓和散步区分开来，不知道是不是不愿与我同去的借口，总之那十分孩子气的态度使我觉得纳闷，也就更想去了。

“那，扫墓也行，就带我一块儿去好了，我也扫墓。”

实际上我觉得区别扫墓和散步几乎没什么意义。不料先生眉头略微一沉，眼睛闪出异样的光——既非为难、厌恶，又不是畏惧，而似乎是一种轻微的不安。这一下子唤起我在杂司谷招呼“先生”时的记忆：两个表情完全一致。

“我，”先生道，“我出于不能对你讲的原因，不愿意和别人同去那里扫墓，连自己的妻都没领去过的。”

7

我觉得奇怪。但我出入先生家门并非想研究先生，事情也就这样过去了。如今想来，我当时的态度莫如说是我人生途中很可珍贵的东西之一。惟其如此，我才得以同先生保持人与人之间那种温情的交往。假如我的好奇心是针对——哪怕一点点——先生的内心而带有刨根问底意味的，那么维系两人的同情纽带，当时就可能利利索索一分为二了。年轻的我根本没有意识到自己的态度，而可贵之处恐怕也就在这里。倘若错误地抄往后路，带给两人的结果可就非同小可了，这点想象起来都令人不寒而栗。即使没那样，先生都惶惶不可终日，生怕成为别人冷眼研究的对象。

我开始每月出入先生家门两至三次。就在我脚步越来越勤时的某一天，先生突然问我：

“你为什么总到我这样人的家里来呢？”

“倒也谈不上为什么。不过打扰吗？”

“没说打扰。”

先生也的确没显出任何怕打扰的样子。我得知先生的交际范围极

其狭窄，当时先生在东京的老同学不过两三个人。先生偶尔也和同乡的学生哥儿在客厅坐坐，但他们看上去都不似我对先生这么亲切。

“我是个寂寞的人。”先生说，“所以你来我很高兴，也才问你为什么总来。”

“那又为什么？”

先生没有回答我的反问，只是看着我的脸，问我多少岁。

这样的问答对我很是不得要领，但当时没有深究就回来了。不到四天时间我又去了先生那里。先生一进客厅就笑道：

“又来了！”

“嗯，又来了。”我也笑了。

若是别人这么说我，我想我肯定生气。但先生这么说时，情况恰恰相反，非但不生气，反倒开心。

“我是个寂寞的人。”那天晚上先生再次道出上次这句话，“我是个寂寞的人。不过说不定你也是个寂寞的人。我上年纪了，寂寞也能忍耐不动；可你还年轻，怕是很难做到，是想大动特动的吧？想和什么捉对厮打的吧？”

“我半点都不寂寞。”

“再没有年轻更叫人寂寞的了。不寂寞，你为什么常到我家来呢？”前几天的话在这里又被重复出来，“你即便见我怕也还是觉得哪里寂寞吧？我没有气力为你连根拔除寂寞，你势必朝其他方向施展拳脚。不久你就不会到我这里来了。”说着，先生凄然一笑。

所幸先生的预言没有实现。当时不谙世事的我，甚至对预言中明显的含义都未能领悟。我依旧去找先生。一来二去，开始在先生餐桌吃起饭来。其结果，自然也要同先生的太太开口说话。

作为一般人，我对女人并不冷淡。但从迄今我（年轻的我）所经历的境遇来说，还几乎不曾真正同女人打过交道，不知是否出于这个原因，我的兴趣更多地倾注在街头素不相识的女人身上。上次在门口见到先生的太太，得到的印象是她很漂亮。其后每次见面的印象无不如此。除此之外，我觉得太太没什么特别可说的。

这与其意味着太太没有特色，倒不如解释为没有表现其特色的机会更为妥当。对于太太，我总是觉得她仿佛是先生身上的一个附件。太太也似乎因为我是来找丈夫的年轻人才好意待我。所以，若无先生居中，两人便没了瓜葛。这样，关于相识初期的太太，除了漂亮以外别无感觉。

一次在先生家喝酒，太太出来在旁边斟酒。先生显得比平时高兴，对太太说“你也来一盅”，旋即递出自己喝干的酒盅。太太支吾着拒绝，随后又不无为难地接过。她蹙起美丽的眉毛，把我斟了一半的酒盅举到唇边。以下是太太同先生间的会话：

“稀罕事儿，您可是很少叫我沾酒的。”

“你不喜欢嘛！不过偶尔喝点有好处，心情可以变好。”

“一点也好不了，除了苦没别的。可您倒像是蛮开心，哪怕只喝一点。”

“有时是很开心，但不是次次都开心。”

“今晚呢？”

“今晚好心情。”

“以后就每晚都喝一点嘛！”

“那不成。”

“就喝吧！也好免去寂寞。”

先生家只有先生夫妇和一个女佣。差不多每次去都静悄悄的，从来没听到过高声朗笑。有时觉得房子里仅我和先生两人。

“有个孩子就好了。”太太转向我说。

“是啊。”我应道。但我心里全然没产生同情。我当时没有孩子，只觉得孩子很让人心烦。

“领养一个？”先生提议。

“养子？你看呢？”太太又转向我。

“千呼万唤，孩子硬是不来。”先生说。

太太默然。

“为什么呢？”我替太太问。

“天罚！”先生大笑起来。

9

据我了解，先生和太太是一对和睦夫妇。虽然我没有作为家庭一员一起生活过，内里情况自然无从知晓，但在客厅同我对坐时，先生不少时候不叫女佣，而招呼太太（太太名字叫静）——总是侧头朝隔扇唤一声“喂静”。那唤法在我听来相当亲切。应声出来的太太也显得甚为直率。偶尔款待我吃饭，太太上席的时候，那种关系就更加明显在两人间表露出来。

先生不时领太太去听音乐会或看戏。另外按我的记忆，两人外出旅行一个来星期的事也不止两三次。寄自箱根的明信片我现在还有。两人去日光时还给我寄来一封夹有一片红叶的信。

在当时我的眼里，先生与太太大致是这样一种关系。其间只有一次例外。一天，我一如往常去先生那里，刚要通过女佣进门，客厅那边传来说话声。细听，似乎不是普通谈话，而像是争吵。先生家的客厅紧挨房门，站在格子拉门前的我不难听得出是吵架声。其中一人是先生这点也从时而高扬的男子语声中听出来了。对方声音比先生低，听不清是谁，感觉上总好像是太太。还像在哭。我站在门前，一时进退两难，但很快打定主意，折身返回宿舍。

一股无端不安的心情朝我袭来，看书也根本看不进去。大约过了一个小时，先生来我窗下叫我的名字。我吃惊地打开窗。先生从下面邀我散步。掏出刚才包在布腰带里没动的表一看，已八点多了。回来后我还没有换掉裤裙，就那样马上走到门外。

这天晚上先生和我喝了啤酒。先生酒量原本不大，且不敢冒险，不敢在喝到一定程度而又不醉的情况下喝个一醉方休。

“今天不行。”说着，先生苦笑一下。

“不能开心了？”我不忍地问。

我心里边始终放不下刚才的事，如骨鲠在喉般的痛苦。我一时摇摆不定，不知直言相告好，还是作罢为妙。这使我分外心神不定。

“我说，今晚你怎么回事啊？”先生先开口了，“其实我也有点反常，你没看出来？”

我没办法回答。

“坦率地说，刚同妻吵了几句嘴，弄得神经——无聊的神经亢奋

起来。”先生继续道。

“为什么……”“吵架”两个字未能从我口中吐出。

“妻误解我。告诉她是误解她还是不通，禁不住发起火来。”

“误解先生什么呢？”

先生无意回答我的问话。

“如果我是妻所想的那类人，我也不至于这么痛苦。”

至于先生缘何痛苦，那不是我所能想象到的问题。

10

往回走时，两人沉默了一二百米。之后先生忽然开口：

“糟糕！生气出来，妻怕是要放心不下。想起来，女人也真是可怜。我的妻除了我根本没人依靠。”说到这里，先生略一停顿。但看样子并不指望我回应，很快继续下文：“如此说来，丈夫这方面倒一副信心十足的样子，很有点滑稽可笑。对了，我在你眼中怎么样？强者，还是弱者？”

“一般。”我回答。

对这个回答先生似乎有点意外。他又一次闭上嘴，默默走动。

回先生家，就从我宿舍旁边路过。到了那里，我觉得不大忍心在拐角处同先生分别，遂说：

“顺便陪您走到家吧！”

先生马上用手制止：

“晚了，快回去吧！我也得赶紧回去，为了妻君。”

先生最后补充的“为了妻君”，使当时我的心温暖下来。就因了这句话，我回去后得以安心躺下。那以后很长时间我都没有忘记这句“为了妻君”。

由此也可得知，先生同太太之间发生的事并非大不了的风波。其后仍不断出入其家门的我还大致看出，那种事是很少发生的。不仅如此，一次先生甚至还向我流露过这样的感想：

“在这个世上，我只知道一个女人，妻以外的女人对我来说几乎都算不上女人；妻那方面也以为我是天下唯一的男人。从这个意义上，我们应该是天生最幸福的一对。”

如今我已忘了前因后果，因此很难断定先生是出于什么目的让我听那段自白的。但先生态度的认真和语调的沉郁，至今仍留在我记忆里。当时在我耳内引起异常反响的，是最后那句“我们应该是天生最幸福的一对”。先生为什么不说是而说应该是“最幸福的一对”呢？这点令我费解。尤其先生在此用力的语气更让我不可思议。先生果真是幸福的呢，还是尽管应该是幸福的而实际上不那么幸福呢？我不能不在心中划个问号。而这问号也只是一时性的，很快不知遁去了哪里。

不久一次去时，先生不在家，我于是碰上一对一同太太说话的机会。先生那天是去新桥送一个从横滨乘船出国的朋友。当时的习惯，从横滨乘船的人，要乘早上八点半的火车从新桥动身。我因为要请先生给我谈一本书，便依照事先先生应允的时间，九点钟登门。先生去新桥是临时安排：头一天晚上那位朋友特意来话别，先生出于礼节前往送行。出门留下话说很快就回来，叫我等一等。于是我进入客厅，在等先生的时间里同太太交谈。

那时我已是大学生了，与第一次来先生家时相比，自以为成熟了许多。同太太也早已熟识了。在太太面前丝毫不觉得有什么别扭，只管面对面说东道西。但因为所谈内容无甚特别之处，如今全然记不得了。唯有一点留在我耳底。在说那一点之前，有个情况要交代一下。

先生是大学出身，这我一开始就晓得。但先生无所事事游玩度日，却是回京过一段时间后才知道的。当时心想何以能够游玩度日呢？

先生的名字完全不为世人知晓。对先生的学问、思想怀有敬意的，除了和先生来往密切的我以外不至于有其他人。对此我时常表示惋惜。先生则老调重弹，说像他这样的人不配到社会上说三道四，丝毫无动于衷。在我听来，这一回答因过于谦虚，反而像是对社会的冷嘲热讽。实际上先生也不时就如今已成名人的某某老同学横加指责。于是我毫不客气地指出他的这种自相矛盾。较之反驳，我的意思更在于为世间对先生漠然置之而遗憾。其时先生以低沉的语调说道："没办法啊，毕竟我这人横竖都不具有主动介入社会的资格。"先生脸上显然刻有某种深不可测的神情。至于那是失望、不平还是悲哀，我则不得而知。总之其中有一种令人惊愕的东西，使得我再也没有说下去的勇气。

同太太交谈时间里，自然归结到先生身上。

"先生为什么老是那么在家看书思考，不到外面做事呢？"

"他那个人不行，讨厌出去做事。"

"也就是看破红尘，认为做事纯属无聊了？"

"看破不看破，我一个女人家倒不明白。不过大概不是那样子的。恐怕还是想干点什么，但就是不成。所以怪可怜的。"

"可是从健康来说，先生不也好像没什么毛病的吗？"

“身体是结实，什么老病也没有。”

“那为什么不去施展呢？”

“就是不知为什么的嘛，跟你说。若是知道，我也不会这么担心。因为不知道，才觉得他真是叫人不忍。”

太太的语气充满同情，但嘴角仍挂着微笑。从外表看来，我倒更认真，满脸深沉，默然不语。这时，太太像陡然想起似的开口道：

“年轻时候他不是那种人来着，那时完全不一样，现在简直判若两人。”

“年轻时候，什么时候？”我问。

“学生时代。”

“学生时代就认识先生了？”

太太脸上骤然漾出红晕。

12

太太是东京人。这点从先生嘴里从太太本人那里都早已听说了。太太说实际上她是“混血儿”。太太的父亲大约是鸟取或什么地方人，母亲是东京还叫江户时在市谷出生的，所以太太这样半开玩笑说道。而先生则是方位完全不同的新潟人。这样，假如两人是在先生学生时代相识的，那么显然并非由于同乡关系。但脸泛红晕的太太看样子不愿多说，我便也没再深问。

同先生相识到先生辞世，我从相当多的角度接触了先生的思想和情操。但关于结婚当时的情况几乎什么也没问出。有时我善意解释，以为先生作为长辈，有意避免把风流往事讲给年轻人听；但又有时从

相反角度理解，认为无论先生还是太太，同我相比毕竟是在上一时代因循守旧的环境中长大的，因而在男女问题上没有开诚布公的足够的勇气。当然二者都不过是我的猜测罢了，并且假定两个猜测背后都有五颜六色的罗曼司存在于两人婚姻生活的纵深处。

我的假定果真没有错。但是我仅仅在脑海中描绘出了其爱情的一半。先生美好婚恋的背后，发生过可怕的悲剧。而作为对方的太太却根本不知——至今也不知道——那场悲剧对先生是何等惨痛。先生至死都瞒着太太。他在摧毁太太的幸福之前，首先摧毁了自己的生命。

就这场悲剧我现在什么都不说。至于不妨说两人的婚恋反源自那场悲剧这点，刚才已经说过。两人差不多都对我只字未提，由于太太的谨慎，由于先生更深刻的顾虑。

唯有一件事留在我记忆里。一次樱花时节我同先生一道去上野，在那里见到一对美丽的男女。两人十分亲密地偎依着在花下散步。也是由于场所的关系，较之赏花，很多人把视线投向两人那边。

“像是新婚夫妇。”先生说。

“够亲热的。”我应道。

先生甚至苦笑都未沁出，朝可以将两人排出视野的方向走去。然后这样问我：

“你可恋爱过？”

我说没有。

“不想？”

我没回答。

“不是不想吧？”

“嗯。”

“看见那对男女，你嘲讽了一句吧？那嘲讽中夹杂着不快，一种渴求爱而又得不到对象的不快。”

“听起来是那样子的？”

“是这样子的。在爱情上得到满足的人声音会更温暖些的。不过……不过我跟你说，爱是罪恶，明白吗？”

我陡然一惊，什么也没回答。

13

我们置身于人群中。每一个人都显得喜气洋洋。穿过人群，进入没有樱花没有人群的树林之前，我们没有谈论同一问题的机会。

“爱是罪恶吗？”这时我突然问道。

“是罪恶，千真万确。”先生回答时的语气同刚才一样斩钉截铁。

“为什么呢？”

“为什么？很快你就明白的。不，不是很快，应该已经明白了。你的心不是早就为‘爱’字跳动了么？”

我察看一下自己胸口，但那里意外一片空白，没有联想得到的东西，什么也没有。

“我胸中没有任何猎取目标。我想我什么也没对您隐瞒。”

“没有猎取目标心才动的。有了就会沉静下来，不再动了。”

“现在没怎么动。”

“你不是觉得不够充实才来我这里的吗？”

“那或许是的。但和爱情不同。”

“是爬往爱情的阶梯。你是作为拥抱异性的顺序而先来我这个同性家里的。”

“我觉得性质上完全是两码事。”

“不，一码事。作为男性我无论如何都不可能给你以满足。何况又有特殊原因，就更不能使你满足。实际上我很有些于心不忍。你离开我到别处去也是奈何不得的，或者不如说那正是我所希望的。只是……”

我分外悲伤起来。

“如果先生希望我离开，我也没办法不离开。但我还没有那样的念头。”

先生没有理会我的话：

“可是不注意不行，爱是罪恶。在我这里虽得不到满足，但也没有危险。——你，不知道被黑黑的长头发拴住时的心情？”

想象上知道，但作为事实不知道。但不管怎样，我不大明确先生口中罪恶的含义，也有点不愉快。

“先生，请把罪恶的意思说得再清楚些。若不然，这个问题就在此打住好了，直到我自己弄清罪恶的含义。”

“都怪我。以为把实质告诉了你，想不到实际上让你焦急了。是我做了件错事。”

先生和我从博物馆后面往莺溪那边静静走着。透过篱笆空隙往宽

敞院落里看去，一片山白竹显得那么幽邃。

“知道我为什么每月都给埋在杂司谷的朋友扫墓吗？”

话问得甚是措手不及，并且先生完全清楚我答不上来。我许久没有应声。先生这才好像觉察到似的这样说道：

“又是我错了。怕你焦急给你解释一下，结果这解释又使你焦躁不安。这个问题就到此为止吧。总之爱是罪恶，明白？同时又是神圣的。”

我愈发迷惑不解，但先生再不提“爱”字了。

14

年轻的我很容易钻牛角尖，至少在先生眼里怕是如此。较之学校的课，先生的谈话更有益处；较之教授的意见，先生的思想更为可贵。一句话，沉默寡言的先生看上去比站在讲台教导我的大人物还要伟大。

“不可头脑发热。”先生道。

“这是清醒的结果。”

我怀有充分的自信。对这自信先生没有首肯：

“你脑袋怕烧昏了，退烧后你就厌恶了。我为被现在的你这么认为感到痛苦。想到往后你将发生的变化，就更加痛苦。”

“你以为我那么轻薄吗？那么不可信任吗？”

“我是觉得不忍。”

“对不起，是说我不可信任吗？”

先生露出为难的神色，脸转向院子。院子里，前段时间左一朵右一朵沉甸甸点缀着的山茶花一朵都不见了。先生习惯上常从客厅打量那山茶花。

“不可信任？不是专门说你不可信任，而是大凡人都不可信任。”

此时，树墙外传来卖金鱼的叫声，此外便无任何声响了。距大街二百多米深处的小胡同格外安静。房子里一如平时了无声响。我知道太太在隔壁，知道默默做针线活什么的太太听得见我们的交谈。然而我全然忘了这个。

“那，太太也不可信任了？”我问先生。

先生多少显得不安，没有直接回答：

“我连我自己都不信任。就是说，因为连自己都不能信任，也就谈不上信任别人了。只能诅咒自己，别无他法。”

“那么深刻地考虑起来，岂不一个实在可信的人都没有了？”

“不，不是考虑，是做，做完才吃了一惊，才感到非常害怕。”

我本想往前深追一步。不料隔扇另一边两次传来太太招呼先生的声音。叫第二次时先生应了声“什么呀”，太太说“稍来一下”，把先生叫去隔壁。我不知道两人间有什么事。还没容我想象，先生很快折回客厅。

“反正不可太信任我，就要后悔的。而且，人被欺骗以后，肯定要狠狠报复的。”

“这是什么意思？”

“往日跪在其人脚前的记忆，必使你下一步骑在其人头上。我之所以摒弃今天的尊敬，是为了明天不受侮辱；之所以忍耐今天的寂

寞，是为了明天不忍耐更大的寂寞。生活在充满自由、独立、自我的现代的我们，作为代价恐怕人人都必须品尝这种寂寞。”

在有如此信念的先生面前，我不知说什么好。

15

那以后每次见太太都浮起这样的念头：先生对太太也始终是那样一副态度吗？若是这样，太太能满意吗？

从表面上看，看不出太太是满意还是不满意，因为我没有深入接触太太的机会，而且每次见面太太都没有变化。何况若无先生在场，我很少同太太对坐。

我的困惑还不止于此。先生对人的那种信念是从何处得来的呢？仅仅是冷眼反省自己和审视现实的结果不成？先生是坐而深思那类性质的人。只要有脑袋，即使坐思世事，也能自然得出如此结论不成？我认为并不尽然。先生的信念似乎是活的信念，不同于火烧后彻底冷却的石屋轮廓。我眼睛里的先生的的确确是思想家。而在思想家所构筑的主义后面，大约有极为有力的事实，并且不是同自己无关的别人的事实，而是自己有过切肤之痛的、几乎使热血沸腾脉搏止跳的事实。

这不是我想入非非，先生本人已这样告白过。只是那告白犹如一座云峰。告白给我的脑袋罩上了不明真相的可怕迷雾。至于为何可怕，我不得而知。告白虚无缥缈，却又显然让我的神经发颤。

我设想在先生此种人生观的基点发生过暴风骤雨般的恋爱事件（当然是在先生同太太之间）。结合先生曾说过爱是罪恶一事考虑，这多少是个线索。然而先生告诉我实际上他是爱太太的。那样，不可能从两人的婚恋中产生如此近乎厌世的信念。“往日跪在其人脚前的

记忆，必使你下一步骑在其人头上。”——先生的这句话大约应该用于现代一般人，而不适合用在先生与太太之间。

杂司谷那座不知何人的墓——这也不时闪现在我的记忆中。我已得知那座墓同先生有很深的因缘。我在不断接近先生的生活却又无法最后触及，便把那座墓作为先生脑袋中生命的断片同时印入自己的脑海。然而对我来说，那座墓完全是死物，未能成为打开两人间生命之门的钥匙，反而像是横在两人间妨碍自由交往的怪物。

如此一来二去，我又得到了同太太单独面谈的机会。那是白天越变越短的寒秋时节，人人都已感到肌肤发冷了。先生家附近连续三四天发生盗窃案，都发生在刚入夜时候。倒没偷走很像样的东西，但盗贼所去之处必有什么被盗。这使太太心情很不好。偏巧先生因故必须离家一个晚上。先生一位在地方医院工作的同乡朋友到东京来了，先生要在哪里同另外两三人一起请朋友吃饭。先生如此这般说了，求我在他回来前帮他看家，我一口答应下来。

16

我是黄昏去的，还没有上灯。但凡事认真的先生已经不在家了。

“刚出门，说迟到了不好。”说着，太太把我领进书房。

书房里有书桌和椅子，有很多书排开漂亮的书脊，隔着玻璃在电灯下泛光。太太让我坐在火盆前面的坐垫上，叫我随便看这里的书，然后离开了。我像是等待主人归来的客人似的不大好意思，正襟危坐吸着烟。茶室传来太太对女佣说话的声音。书房位于茶室檐廊尽头拐角，从房内位置来说，拥有比客厅还充分的安静。太太语声告一段落后，便无声无息了。我以静等盗贼进来那样的心情，凝神打量四周。

半小时后，太太又从书房门口探过脸，道了声“呀”，把略显诧异

的眼神转给我。大概是笑我太拘谨了，活像来做客的人。

“那样不舒服的吧？”

“哪里，没什么不舒服。”

“但无聊是吧？”

“不，不无聊，只是有点紧张，怕小偷进来。”

太太手拿红茶杯，笑吟吟站在那里。

“这里是角落，不适合看家。”我说。

“那，麻烦你过中间点来好么？担心你觉得无聊，拿了茶来。若是茶室可以的话，就在那边上茶。”

我跟在太太身后走出书房。茶室里，漂亮的长火盆上铁壶发出响声。我在这里喝茶、吃糕点。太太没碰茶杯，说怕睡不着觉。

“先生时常参加这样的聚会吗？”

“不是的，很少很少。近来好像连见人都渐渐不耐烦了。”

话虽这么说，但太太并没怎么现出困惑。于是我不由胆大起来：

“那么，只有太太例外了？”

“不，我也是他所讨厌的一个。”

“那是说谎。”我说，“您明知是说谎才那么说的。”

“此话怎讲？”

“让我说，先生是因为喜欢太太才讨厌人世的。”

“不愧是搞学问的，真会搬弄空道理。不是也可以说因为讨厌人世才连我也讨厌的么？同一个道理。”

“两种说法成立倒是成立，但在这点上我是正确的。”

“别争论了，男人动不动就争论，津津有味似的，拿空茶杯也能应酬个没完没了，我看。”

太太的话多少带刺，但还不至于刺耳，绝没有厉害到那个程度。太太不够现代，不至于想让别人承认自己有头脑并从中觅得一种自豪。太太所珍视的，似乎更是深藏不露的心。

17

往下我本来还有话要说，但我不愿意被太太看成一味挑起争论的人，只得作罢。太太见我觑一眼已经喝干的红茶杯底，为了不使我离座，遂劝我再来一杯。我马上把茶杯递到太太手里。

“几块？一块？两块？”

不知为什么，太太抓罢方糖，竟看着我的脸听落入茶杯的方糖块数。态度虽谈不上是讨好我，但充满亲切，试图冲淡刚才话语的强度。

我默默喝茶，喝罢仍沉默不语。

“你倒真能沉默。”太太说。

“觉得一说什么又要挨训，说我挑起争论什么的。”我应道。

“何至于。”太太又一次说。

以此为开端，两人又交谈起来，谈两人都感兴趣的先生。

“太太，再让我接刚才的话头说一点好吗？在您听来或许是空道理，可我并不是在空谈。”

“请说吧。”

“假如您这就不在人世，先生会像现在这样活下去吗？”

“说不清楚啊。这个，不是只有问先生才行的吗？可不是该拿到我这儿来的问题。”

“太太，我是认真的，所以别逃避，请老实回答。”

“是老实的。老实说，我是不清楚。”

“那么，您爱先生爱到什么程度呢？这个问先生就不如问您了——我这就问您。”

“不必突如其来地问这个吧？”

“您是说这是明摆着的事何必问得一本正经，是么？”

“啊，是的。”

“那么忠于先生的您若是一下子没有了，先生会怎么样呢？在这个世上，先生去哪里都好像觉得无趣，而您若是一下子不在了，他会怎么样呢？不是从先生的角度，是从您的角度来看。在您看来，先生是变得幸福呢，还是变得不幸呢？”

“在我看来是明明白白的——先生或许不那样想——离开我，先生只能变得不幸，活不下去都有可能。这么说好像自作多情，但我相信我现在是尽最大努力使先生作为一个人活得幸福的。我想任何人都不可能像我这样使先生活得幸福，所以才能这么坦然。”

“我倒是认为您这个信念完全传达给先生……？”

“那是另一个问题。”

“还是说被先生讨厌呢？”

“我不认为被他讨厌。因为没理由讨厌我。可先生不是讨厌人世吗？近来较之人世，更讨厌起世人来了。所以，作为世人里面的一个，我不也是不可能被他喜欢的么？”

我终于吃透了太太口中被讨厌的含义。

18

我很佩服太太的理解力。其态度中有不同于旧式日本妇女之处也激起我的兴致。她几乎一概不用当时开始流行的所谓新式语言。

我还是个冒失的青年，不具有同女人这一存在深入交往的经验。作为男性的我，出于对异性的本能，经常作为憧憬对象梦见女人。但那终不过是一种朦胧的梦境，一种类似遥望春日温馨云絮的情思。所以实际来到女人面前，我的情感时常发生骤变。一方面为眼前的女子所吸引，另一方面，身临其境反而产生一种奇异的抵触情绪。而面对太太，我全然没有那样的感觉，也没有觉出那种横亘在一般男女之间的思想落差。我忘记了太太是女子，只将她作为先生的诚实的评论家和同情者来看待。

“太太，以前我问过先生为什么不到社会上施展，当时您这样说来着：原本不是那样的。”

“嗯，说来着。本来不是那样子的。”

“什么样子的呢？”

“一个你所希望的，我也希望的大有前途的人。”

“为什么一下子变了呢？”

“不是一下子，慢慢变的。”

“那期间您一直在先生身边的吧？”

“当然，夫妻嘛。”

“那么，应该了解先生所以变化的根源吧？”

“头痛的就在这里。你这么一说，我心里更是难受得不行。可我怎么想都想不出头绪。这以前我不知求了他多少次，求他说个水落石出。”

“先生怎么说？”

“没什么可说的，没什么可担心的，我生来就这么个脾性——光是这么说，不把我的话当一回事。”

我默然。太太也中顿下来。佣人房间里的女佣没有一点动静。我早把小偷忘得一干二净。

“你认为责任在我身上吗？”太太突然问。

“不。”我回答。

“尽管直说好了。被人那么认为真比切肤割肉还痛苦。”太太继续道，“不过，我还是自以为是为先生竭尽全力了的。”

“先生也是那样承认的，没问题，请放心，我敢保证。”

太太熟练地拨着火盆里的灰，然后把水瓶的水倒进壶里。铁壶立时压下了声响。

“我再也忍受不住，问了先生。我说如果自己哪里不好，尽管指

出就是，能改的一定改。先生说，‘你根本没有什么不好，不好的是我，全是我。’给他这么一说，我难过极了，掉了泪。可我还是想问自己哪里不好。”

太太眼睛充满泪水。

19

一开始我是将太太作为有理解力的女性来对待的。如此交谈时间里，太太逐渐起了变化。她不再诉诸我的头脑，而开始叩击我的心脏。自己同丈夫之间没有也不应有任何隔阂，但还是有什么。然而睁眼细瞧时，却又什么也没有——太太的痛苦主要在这里。

刚开始，太太断言由于丈夫以讨厌的目光看人世，所以结果上必对自己也讨厌。虽然这么断言，但根本没有平心静气地接受。挑明了说，心里想的完全相反：由于丈夫讨厌自己，所以结果上变得讨厌人世。问题是无论自己怎么努力，都不可能使这一推测得到证实。先生的态度始终像个丈夫，温和、亲切。于是疑团被日复一日的爱情包拢起来，悄然深藏于心底。而这天晚上，太太在我面前打开了这个包裹。

“你怎么看？”她问，“他变成那个样子，是我造成的，还是你所说的人世观什么的造成的？只管说，别隐瞒。”

我无意隐瞒。但假如其中有什么我不知晓的东西的话，那么无论我怎么回答，都不可能使太太满意。而我相信其中必有我不知晓的什么。

“我不明白。”

太太顿时现出希望落空时那种可怜的表情。我马上继续道：

“但有一点可以保证：先生决不讨厌太太。先生不是说谎的人，是吧？”

太太什么也没回答。少顷，这样说道：

“我倒是有一点点心有所觉的事……”

“关于先生变成那样子的原因的？”

“嗯。如果是那个原因，那么至少就不是我的责任——仅此一点就可以使我大获解脱……”

“什么事呢？”

太太欲言又止，望着放在膝头的手。

“你来判断，我说。”

“只要我能够。”

“不能全说。全说了要挨骂的，只说不会挨骂的部分。”

我紧张地吞一口唾液。

“先生还读大学的时候，有一个非常要好的朋友。那位朋友马上就要毕业时死了，突然死的。”

太太以悄悄话般低小的声音说“死得很奇怪”。那是一种让人不由得想追问死因的说法。

“只能说到这里。问题是在那以后。那以后先生脾性渐渐有了改变。至于那位朋友是为什么死的，我不知道，先生恐怕也不知道。但如果认为先生的变化是从那时开始的，也不是无中生有。”

“是那个人的墓吧？杂司谷的。”

“那也不能说的。但一个人死了一个朋友就会变成那样子的吗？我非常非常想知道这一点，所以才请你来判断。”

我的判断莫如说倾向于否定回答。

20

我以我所掌握的事实为例，尽可能安慰太太。太太也一副已最大限度得到安慰的样子。于是两人就同一问题谈了很久很久。但我本来就没抓住事情的根本。太太的不安也来自其中如烟似雾的疑惑。谈到事情的真相，太太本身也所知无多。纵使知道的，也不能全部告诉我。所以，安慰的我也好，被安慰的太太也好，都像浮在水面上摇摇晃晃。太太一边摇晃，一边执著地伸手扑在我弱不禁风的判断上。

十时许，门口传来先生脚步声。太太陡然忘掉刚才一切似的，撇开对面坐着的我站起身，几乎同开拉门的先生撞个满怀。被撇下的我跟在太太身后迎去。只有女佣怕是正在打盹，没见出来。

先生情绪倒蛮好的。太太的情绪更好。记得就在刚才太太美丽的眼睛里还噙满泪花，黑色的眉根还蹙成八字，现在完全一变。我仔细观察着，觉得这种变化异乎寻常。倘若那不是假象（实际上我也不那么认为），那么太太刚才的倾诉便未尝不可以看成女性的一种游戏——特意选我为对象来把玩自己的感伤。不过，当时的我并不想这样责备太太。莫如说，在心情上看见太太突然如此满面生辉，反倒放下心来。转而想到，若是这样，就不必那么担忧了。

“让你辛苦了！小偷没有来么？”先生笑着问道，“小偷没来，够没劲儿的吧？”

临回去时，太太低下头说“真叫人过意不去”。听语气，与其说是为忙时占用我时间而过意不去，倒不如说像是在开玩笑——为我特意

来了而小偷却没来感到遗憾。说着，太太把刚才拿出来而没吃完的糕点用纸包了，放在我手里。我塞进袖兜，拐过行人寥寥的凉飕飕的小路，快步往热闹街衢那边走去。

我把当晚的事从记忆中抽出，将我认为有必要的部分详细写在了这里。不过说实话，以我当时拿了太太的糕点回来时的心情，谈不上怎么看重当晚的谈话。第二天从学校回来吃晚饭，看见昨晚放在桌上的糕点包，立即拿起一块涂着巧克力的茶褐色蛋糕，大口塞进嘴里，边嚼边在心里确认送给我糕点的一男一女终归是作为幸福的一对存在于世的。

秋天进入尾声，冬日即将来临。这段时间没有特殊事发生。出入先生家门，我顺便求太太浆洗或缝制衣服。过去从未穿过汗衫的我，开始在衫衣外面套上带黑领的汗衫。太太没有小孩，说这样照顾我反倒可以消磨时间，结果上对身体有好处。

“这是手织品，从没用这么好的衣料缝过衣服。只是缝得不够好，针根本扎不进去，弄断了两根针呢！”

即使这么诉苦的时候，太太也没露出不耐烦的神情。

21

入冬后，没想到我必须回老家一次。母亲来信，说父亲的身体情况不大妙。虽然眼下不要紧，但毕竟年纪大了，叮嘱我尽可能抽时间回去一次。

父亲一向肾不好。一如进入中年的人常见的那样，父亲的这个病是慢性的。因是慢性的，本人也好家人也好也就认为只要注意，便不至于急转直下。实际上，迄今为止父亲也是一味靠休养坚持过来的。本人在有客人来时就经常这样吹嘘。便是这样的父亲——母亲信上说

——一次去院子做什么时，突然晕倒在地。家人误以为是轻度脑溢血，马上做了处置。事后医生判断说，大概不是脑溢血，恐怕还是老病所致。全家听了，这才把晕倒同肾病联系起来。

到放寒假还有一段时间，估计等到学期结束也不碍事，便一天天拖了下来。但拖的时间里，眼前不时浮现出父亲卧床的样子和母亲焦虑的神情。而每一浮现，我心里都觉出一种痛苦。终于下决心回去。为了省去从老家寄旅费的麻烦和时间，我打算在先生那里打招呼的时候，顺便求先生暂时垫付所需费用。

先生有点感冒，懒得进客厅，让我到书房去。透过书房玻璃窗，冬日里少见的温馨和煦的阳光射在扶手椅上。先生在这光线充足的房间里放了一个大火盆，用火撑子上铁脸盆的水蒸气来防止呼吸困难。

“大病还好，这小小的感冒反而麻烦。”先生苦笑着看我的脸。

先生这人从未得过什么病。听他这么说，我有些想笑。

“我嘛，感冒倒可以忍受，再大的病可不愿意得。先生也一样吧？试一试您就知道了。”

“是啊。若是得病，我想还是得绝症好。”

我没怎么留意听先生的话。当即提起母亲来信的事，向他借钱。

“那怕是够受的。那点钱现在手头就有，拿去就是。”

先生叫来太太，让她把我需要的数目摆在我面前。太太从茶具柜式的什么柜的抽屉里把钱拿来，小心叠放在半纸上，说：

“够你担心的。”

“晕倒好几次了么？”先生问。

“信上没写多少次。是会晕倒好几次的吗？”

“是的。”

我这才知道太太去世的母亲得的也是我父亲这种病。

“总之很棘手是吧？”我说。

“是啊。我要是能代替就好了……有呕吐现象吗？”

“有没有呢……信上什么也没写。大概没有吧。”

“只要没来呕吐就还不要紧。”太太说。

当晚我乘火车离开东京。

22

父亲的病没有预想的严重。我到家时，他正盘腿坐在铺垫上，说：“大家都担心，只好这么忍着不动，其实起来走动都可以的了。”从第二天起，他再不听母亲的劝阻，到底起身下地。母亲一边老大不情愿地叠起粗绸被褥，一边说：“你父亲见你回来了，突然逞起能来。”我倒不觉得父亲的举止有什么虚张声势。

哥哥远在九州做事，不到万不得已的时候，难得见上父母一面。妹妹嫁到外地，她也同样，不到紧急关头，是不会被轻易叫回来的。兄妹三人中，最方便的就是我这个读书郎。而我遵照母亲吩咐，扔下学校的课不管，没放假就赶了回来，这点使父亲大为满足。

“抱歉，这点病就让你耽误功课，都怪你母亲，信写得也太夸张了。”父亲口头上倒是这样说。不光说，还让母亲把被褥收拾起来，表现出平时那种健康的样子。

“可别轻举妄动，不然病又回头了。”

对我这个提醒，父亲显得十分愉快而又漫不经心。

实际也好像不要紧。在房子里随意走来走去，既不气喘，又不眩晕。只是脸色比一般人差许多。但由于不是现在才出现的症状，我们都没怎么放在心上。

我给先生写信，就借钱表示感谢。并说正月回京时把钱带去。还一并写道，父亲的病情没有想的那么刻不容缓，眼下问题不大，眩晕和呕吐都没出现等等。最后补充一句，问先生的感冒好了没有。实际上我没把先生的感冒当一回事。

寄信时我绝没指望先生会回信。信寄出后，我一边和父母谈论先生，一边遥想先生的书房。

“这次回京带点香菇送去。”

“嗯。不过不知先生吃不吃干香菇。”

“谈不上多好吃，可也没什么人讨厌。”

把先生同香菇放在一起考虑，我觉得有点好笑。

先生来信时，我吃了一惊。尤其得知内容没说特殊事，就更吃惊了。我想先生给我回信只是出于好意。想到这里，一封简单的回信给了我大大的欢喜。当然，这是我从先生那里接到的第一封信。

说起第一，给人的感觉似乎我同先生之间常有书信来往，事实上绝非如此，这点我要交代一下。先生生前我仅仅收到他两封信：一封是现在这封短信，另一封是先生死前专门写给我的极长的信。

就性质来说，父亲的病必须小心行动。所以起床后他已几乎足不出户。一个天气极为平和的午后去了次后院。当时为防万一，我紧贴

紧靠地陪他一起走。我放心不下，叫他把手搭在自己肩上，父亲笑而不应。

23

我时常同百无聊赖的父亲下将棋。两人都是懒人，下棋也守着脚炉不动，把棋盘放在脚炉支架上。每次移动棋子，都特意把手从罩被下抽出。好几次弄丢了棋子，却直至下到胜负关头才发觉。甚至有一次母亲从炉灰里扒出棋子，用火筷子夹起，一时哭笑不得。

“围棋由于棋盘高，有脚，没办法在脚炉上；这方面将棋就正好，可以舒舒服服地下，正合懒人意。再来一盘！”

父亲赢时必定说再来一盘，而输了也要来一盘。总之赢也好输也好，都要守着脚炉下个没完。一开始觉得新奇，这种老人娱乐使我也产生了不小的兴致。但随着时间的推移，血气方刚的我便无法满足于这种程度的刺激了。我把攥着金将、香车的拳头举过头顶，不时放肆地打个哈欠。

我开始考虑东京，心脏里汹涌血潮的那一边，传来连续催战般的律动。不可思议的是，那律动声似乎因先生的力量而从某种微妙的意识状态中变得强劲起来。

我在心里将父亲同先生比较了一下：以世人看来，两人都是看不出是死是活的老实人。从被人认可这点来说，哪一方都是零。尽管如此，喜欢下将棋的父亲，即使仅仅作为娱乐对手，我也觉得不够满足；而从未在娱乐上打过交道的先生，却不知不觉给我的脑袋以影响，其程度已超出一同娱乐带来的亲近感。只是，“脑袋”这个说法过于冰冷，我想改为“心胸”。纵然说先生的力已吃进我的肌肤，先生的生命已流进我的血管，对当时的我来说也丝毫不为夸张。父亲是我真真正正的父亲，先生无须说是彻头彻尾的他人——当我把这个明白无

误的事实特意摆在自己眼前时，我才像发现一个伟大真理一阵愕然。

差不多和我开始坐立不安同一时候，在父母眼里原本珍稀的我也渐渐变得无足为奇了。我想这大约是暑假回家谁都同样体验到的心情，一个星期以内被娇生惯养待为上宾，而一旦按常规越过顶峰，往下家人的热情便渐渐冷淡，最后往往就不当一回事，甚至有没有似乎都无所谓了。我在家时间也已越过顶峰。加之我每次回家都从东京带回父母莫名其妙的怪味儿，就像过去把天主教味道带到儒者之家一样，我带回的东西也与父母格格不入。当然我是有意藏而不露的。但原本就是附在身上的东西，再隐藏也会在不觉之中给父母注意到。我终于没了兴趣，想快些返回东京。

所幸父亲病情稳定下来，一点也看不出朝恶化方向发展。为慎重起见，特意从远处找来相当不错的医生，请其仔仔细细诊察一遍，结果还是没有发现我所知道的以外的症状。我决定寒假即将结束前动身离家。人情这东西也真奇妙，一提动身，父母双双反对。

“这就回去？不还早吗？”母亲说。

“再待四五天也来得及吧？”父亲道。

我没有改变自己定下的动身日期。

24

回东京一看，松饰已经除掉了。街头寒风劲吹。一眼看去，竟丝毫也找不到正月气象。

我马上去先生家还钱。香菇也顺便带了去。只是不好直愣愣递出，便婉转说是母亲让我转交的，放在太太面前。香菇装在新糕点盒里。太太郑重道谢，要去隔壁时拿了起来，大概没想到竟这么轻，便问：“这是什么糕点？”熟识以后，太太流露出这种极为淡泊的小孩子

气。

两人都就我父亲的病情担心地问了很多。其间先生这样说道：

“按你说的情形，好像不至于马上如何如何，但病终究是病，万万马虎大意不得。”关于肾病，先生知道很多我不知道的事。“那种病的特点就是自身得病却又意识不到，满不在乎。我认识的一个军官，最终死在了这上面，死法简直令人难以置信，睡在身旁的妻子都几乎没来得及看护。半夜说有点难受，叫醒妻子，第二天早上已经死掉了。妻子还一直以为丈夫睡着呢。”

原本倾向于乐观的我突然担忧起来：

“我父亲的病会不会那样呢？不能说不会吧。”

“医生怎么说？”

“医生说治是治不了，可还说眼下不用担心。”

“那就不要紧吧，既然医生那么说。我刚才说的是粗心大意的人，而且是相当胡来的军人。”

我约略放下心。先生定定注视我表情变化，又这样补充一句：

“不过人这东西，健康也罢有病也罢，都是非常脆弱的。很难说死于什么时候什么原因什么方式。”

“先生也考虑这个吗？”

“我就是再健康，也不能完全不考虑。”先生嘴角浮起笑影，“不是常有人一下子就死了么，自然而然地；转眼间就死的人也有的吧，由于非自然的暴力。”

“非自然的暴力是什么？”

“是什么我也不清楚，但自杀之人采用的都是非自然的暴力吧？”

“那么被杀也是非自然暴力造成的了？”

“被杀倒从没想过。那么说倒也是的。”

这天说到这里就回去了。回来后父亲的病不再让我那么牵挂了。先生所说的自然死与非自然暴力之下的死当时也只是给了我淡淡的印象，稍后就无遗痕了。我想起我的毕业论文，过去想了很多次都没动笔，现在该正式开始了。

25

我预定这年六月毕业，无论如何必须按规定在四月内完成这篇论文。二、三、四，屈指计算所余时日之时，我多少怀疑起我的气魄。其他人很早就搜集资料，归拢笔记，即使在旁观者眼里都干得热火朝天。唯独我还什么都没着手。我有的仅仅是过了年大干一场的决心，只是以决心开始的，而这决心也很快烟消云散。迄今为止，我不过凭空勾勒出庞大的课题，自以为构筑起了基本框架。现在我开始抓耳挠腮起来。随后我缩小了论文要写的问题。为了节省系统归纳构思的时间，我决定只罗列书上的材料，然后加一个相应的结论上去。

我选的论题同先生的专业有血缘关系，选择当时就征求了先生意见。先生说“还可以吧”。现在，不无狼狈的我赶紧跑去先生那里，问必须读哪些参考书。先生倾其所有的知识慷慨给予了我，并说借给我两三本必读书。然而先生丝毫没有心思指导我。

“近来没怎么看书，不了解新东西，还是问学校的老师好。”

这时我蓦地想起太太这样说过：一段时间里先生十分喜欢看书，后来不知为什么不如以前那么有兴趣了。于是我撇开论文，不自禁地开口道：

“先生看书的兴趣为什么不像以前那样大了呢？”

“也谈不上为什么……就是说，大概是觉得读几本书也不至于变得多了不起吧。另外……”

“另外还有吧？”

“倒也算不上还有。以前嘛，如果在人前被人问到时说不知道，感到很不好意思，像是一种耻辱。近来发觉不知道也没那么丢人现眼，就不知不觉没了硬要看书的劲头。一句话，老啦！”

先生的话语毋宁说是平静的。由于并不带有悲观厌世之人的苦涩，没有给我多大的冲击。我既不认为先生老了，又未觉得先生很了不起，就这样告辞回去。

往下时间里，我几乎像个给论文搞得走火入魔的精神病患者，红着眼睛苦苦挣扎。我向一年前毕业的朋友打听了种种情况。其中一个告诉我是期限截止当天驱车赶到办公室，好歹应付了事；另一个说晚了十五分钟在五点十五分提交的，若非主任教授的好意，差点就被拒之门外了。我感到不安，同时又定下心来。每天坐在桌前一直干到筋疲力尽。或者钻进光线幽暗的书库，在高大的书架间东张西望。眼睛犹如好事之人发掘古董时那样掠过书脊的烫金字。

梅花开的时候，冷风渐渐往南吹去。大致忙完一阵后，有关樱花的消息断断续续传来耳畔。但我仍像驾车的马一样目视前方，被论文抽打着狂奔。进入四月下旬，终于写完要写的东西。这期间一次也没跨进先生家门槛。

26

我获得自由，已是初夏时节了，八重樱落花后的枝条已不觉之间伸出绿叶，迷迷蒙蒙的。我以小鸟出笼的心情，纵目四顾辽阔的天

地，自由地拍打翅膀。我立刻往先生家走去。沿途枸橘篱笆黑乎乎的枝头冒出胀鼓鼓的嫩芽，石榴树干巴巴的树干上那珠滑玉润的茶褐色叶片柔柔地反射着太阳光，它们一路吸引我的目光。我像有生以来初次见到一样感到新奇。

先生看我这么兴高采烈，说道："论文写完了？好嘛！"我说："托您的福，总算弄出来了，再没什么要干的了。"

实际上，当时的我也已了结大凡该做的事，心里一片晴空，恨不得马上尽兴游玩一场。对自己完成的论文怀有足够的自信和满足感。我在先生跟前就论文内容喋喋不休。先生以平时的语调哼哈应着，完全不置一词。我感到意犹未尽，或者不如说有点扫兴。但这天我浑身充满活力，简直足以对先生因循守旧的态度尝试反击。我打算把先生拉进即将满目苍翠的大自然中。

"先生，到哪里散散步好吗？去外头心情好得很。"

"去哪里？"

对我，哪里都无所谓，只是想把先生领去郊外。

一小时后，先生和我如愿以偿离开市区，在分不清是村庄还是城镇的幽静地带信步而行。我从光叶石楠树篱揪一片嫩叶做个树叶笛吹着。我有个鹿儿岛朋友，模仿他的时间里自然学会了怎么吹。所以树叶笛这玩意儿吹得很拿手。我得意地吹个不止。先生佯做不知地往别处走去。

不久，一座被新绿封锁般树木葱茏的高门楼下闪出一条小径。门柱钉的标牌上写着某某园，当即得知不是私人住宅。先生望着缓坡上的入口，说"进去看看吧"。我马上应道："是苗圃啊！"

往里走过一弯灌木丛，左侧有座房子。大敞四开的拉窗里空荡荡不见人影，只有檐下一个大鱼缸里养的金鱼动来动去。

“好静啊。擅自进去可以吗？”

“不要紧吧！”

两人又往里边走去。还是空无人影。杜鹃花燃烧一般盛开怒放。先生用手指着其中一株桦木色的高个子说：“是雾岛吧？”

芍药也栽了十多坪。因为还不到季节，开花的一株也没有。芍药圃旁边有一条旧长凳样的东西，先生在上面躺成个“大”字。我坐在余出的端头吸烟。先生仰望澄碧的天宇。我看围拢自己的嫩叶看得入迷。细看之下，嫩叶每一片都有所不同。即使同一株枫树，也没有一条树枝上叶片都呈同一颜色。先生随手挂在细杉树苗顶端的帽子被风吹下。

27

我赶快拾起帽子，用指尖弹去上面沾的几处红土。

“先生，帽子掉了。”

“谢谢。”先生欠起上半身接过帽子。随即以半起半卧的姿势问我一件怪事：“冒昧问一句，你家是有不少财产的吧？”

“算不上有。”

“能有多少呢？别见怪。”

“多少？也就有一点山林和田地，钱什么的分文皆无吧。”

先生正正经经问我家的经济，这是第一次。至于先生的生活境况，我还什么都没问过。刚同先生相识，我就纳闷先生何以能够终日优哉游哉。其后这个疑问也始终挥之不去。但我一再克制自己，觉得将如此露骨的问题捅到先生面前未免冒失。现在，嫩绿使我的眼睛消

除了疲劳，我的心又一下子触上这个疑问。

“先生怎么样？拥有多少财产呢？”

“看上去我像是财主吗？”

先生平时穿着莫如说很朴素。家里人口少，所以房子也绝对不大。但物质生活充裕这点，就连我这个不知内情的人也看得一清二楚。总之，先生的生活即或算不上奢侈，也绝不是紧巴巴死板板硬邦邦的。

“是吧。”我说。

“钱还是有一些的，但绝不是财主。财主要造更大的房子。”

这时先生直起身，盘腿坐在长凳上。如此说罢，用手杖头在地面画起圆圈样的圆形。画罢，将手杖笔直戳在地上。

“可原本该是财主来着。”先生半是自言自语地说道。

我思路未能及时跟上，遂未作声。

“可原本该是财主的，跟你说。”先生重复一遍，看着我微笑。我仍然什么也没反应，不知如何应答才好。

先生随即转到另一个问题：

“你父亲的病后来怎么样了？”

关于父亲的病，正月以后我什么也不知道。每月连同汇票寄来的短信照例是父亲的笔迹，但几乎不再提及病情如何。并且字体也很坚挺，全然没有此类病人手颤造成的潦草。

“什么也没说，大概还好吧？”

“还好就好……不过病毕竟是病。”

“还是不成吗？眼下怕是稳定下来了，什么也没说嘛。”

“是吗？”

先生问我家财产、问父亲的病情——我以为这是普通谈话，不外乎心里怎么想便嘴上怎么说罢了。然而先生的话里有很大的含义——将二者联系起来的含义。不用说，不是有先生亲身经验的我无从意识到这点。

28

“我想，既然你家有财产，是不是该趁眼下时间好好处置一下，倒是多管闲事。在你父亲还健在的时候，把该接受的东西接受下来如何？你父亲万一有什么，最麻烦的就是财产问题。”

“哦。”

对先生的话我没甚在意。我相信我家里没有一个人为这个担心，不仅我不担心，父母也是如此。而且，先生所说的——就先生来说——未免过于实际，使我有点意外。但对年长者一向怀有的敬意使得我没有做声。

“我是预想你父亲将要去世才说这种话的，如果惹你不快，就原谅我好了。可是，人终归要死的，即使再健康，也说不定什么时候死掉。”先生的口吻一反常态，令人难以忍受。

“这个我一点儿也没放在心上。”我争辩道。

“你兄弟几人？”先生问。

先生问我家几口人，问有没有亲戚，问我叔父叔母情况。最后这

样问道：

“全是好人么？”

“好像倒也没什么算是坏的人。差不多都是乡下人。”

“乡下人怎么就不坏呢？”

我被追问得透不过气来。然而先生甚至让我思考的余地都不留给我：

“乡下人反而比城里人还要坏。还有，你刚才说了，你的亲戚里边，好像没有可算是坏人的人。但你是认为世间存在坏人那种人的吧？世人不会有像是从坏人模子铸出来的坏人。平时都是好人，至少是普通人，而到了关键时刻，就摇身变成坏人，所以也才可怕。大意不得的。”

看样子先生无意就此打住，我也想说点什么。不料后来突然有狗叫起来，先生和我都吃惊地回过头去。

从长凳一侧往后栽植的杉树苗旁，有一片三坪左右的山白竹，茂盛得遮蔽了整个地面。狗便从山白竹里探出头和脊背，叫得很起劲。正叫着，一个十来岁的小孩跑来把狗喝住。小孩戴一顶带徽章的黑帽，转到先生面前敬个礼问：

“叔叔，进来时家里谁也没有吗？”

“没有啊。”

“本来姐姐和妈妈在厨房那边来着。”

“是吗，有人在的？”

“啊，您打声招呼再进来就好了！”

先生苦笑一下，从怀里掏出钱包，把五分镍币塞在小孩手里。

“告诉妈妈，说让我们在这儿休息一会儿。”

小孩显得伶俐的眼睛里涨起笑意，点了点头。

“我现在正当斥候长呢。”

小孩说罢，穿过杜鹃花丛跑去下面。狗高高卷起秃尾巴从后面追赶小孩。不一会儿，两三个年龄相仿的小孩出现了，也朝斥候长那边跑去。

29

由于这狗和小孩，先生的话未能进行到最后，我便最终未得要领。对于先生耿耿于怀的财产之类，当时我丝毫也没挂在心头。从我的性格以及我的成长环境来说，当时的我根本没有为利害之念伤脑筋的余地。想起来，这恐怕也是因为我还没有步入社会，没有实际身临其境的缘故。总之，不知为什么，对于年轻的我，钱财问题仿佛远在天边。

先生的话中，唯独一点我想刨根问底，就是到了关键时刻任何人都将变成坏人这句话的含义。单单作为词语，我不是不能理解；但我想把握它的内涵。

狗和小孩离开后，宽阔的新叶园重新归于静谧。我们像被人锁住嘴巴，半天都不说不动。眼前的树大约是枫树，那苍翠欲滴的新叶似乎渐渐黯淡下去。远处马路传来拉货车的隆隆声。我猜想是村里的人拉着花木什么的去赶庙会。先生听了，忽然像从冥想中清醒过来似的站起身：

“差不多该往回走了。天好像长了不少，不过这么闲逛当中，还

是很快就到了晚上。”

先生后背满是刚才在长凳仰卧留下的痕迹，我用双手拍打下去。

“谢谢。没沾上松脂什么的？”

“都拍掉了。”

“这个和服外套是最近刚做的。若是弄得一塌糊涂，回家要挨妻训的。谢谢。”

两人来到缓坡中间那座房子跟前。进来时像没人在的檐廊里，女主人跟一个十五六岁的女孩往线轴上缠线。我们从大鱼缸旁边寒暄说：“打扰了！”女主人说不客气，然后对刚才给小孩镍币表示感谢。

出门走了二三百米，我终于对先生这样开口道：

“刚才您说的人到关键时候谁都要变成坏人，是什么意思呢？”

“意思？没有多深的意思。就是说，是事实，不是道理。”

“事实也没关系，我想问关键时候是什么意思？到底指哪一种场合呢？”

先生笑起来，像是在说时过境迁的现在已没心思再好好解释了。

“钱！一看见钱，任何正人君子都马上变成坏人！”

我觉得先生的回答实在太平淡了。先生没有兴致，我也有点泄气，遂板起脸大踏步走了起来，先生自然有点落后。

“喂喂，”先生从后面招呼我，“嗬，你瞧你瞧！”

“瞧什么？”

“瞧你的心情嘛。因我一句答话不就马上变了？”先生看着我的脸——我停下来等他——这样说道。

30

当时的我在心里对先生很是不满。并肩而行之后，我也故意不问自己想问的事情。但先生方面不知意识到没有，对我的态度毫无介意的样子，一如往常默默迈着极为悠闲的步子。我有点恼火，想说句什么惩治一下先生。

“先生！”

“什么？”

“您方才有点激动吧，在苗圃院里休息的时候。我很少看见先生激动，今天倒是觉得领教了先生的罕见之处。”

先生没有马上回答。我感到有了效果，又觉得好像未击中，只好不再做声。不料先生忽地拐去路边，在修剪得整整齐齐的树篱下撩起衣服下摆小便。我怅然站在那里。

“啊，抱歉。”

说罢，先生又走了起来。我终于放弃惩治先生的念头。我们走的路渐渐热闹起来，左右两侧房舍井然相连，挡住了刚才晃晃闪现的宽阔的坡田和平地。但仍有不少人家房前屋后的院角有豌豆蔓爬在竹竿上，或用铁丝网围起来养鸡，看上去一片怡静。从市里回来的驮马不断相交而过。我看这些看得出神，刚才窝在心里的问题不翼而飞。先生突然折回话题时，我都已经忘了。

“刚才我看上去就那么激动吗？”

“倒也不至于‘那么’，多少……”

“啊，‘那么’也没关系，实际上也激动来着。一提起钱，我肯定激动。你怎么看我不知道，我可是个对有些事耿耿于怀的人。对于自己受到的屈辱和伤害，十年二十年我都忘不了。”

先生的语气比刚才还要激动。但我惊愕的绝非语气，倒是先生的话语诉诸我耳朵的含义本身。从先生口中听得这样的告白，即使熟识如我，也完全出乎意料。作为先生的性格特点，我甚至从未想象过他竟会如此计较前嫌。我以为先生懦弱得多，并对其懦弱而超脱的气质怀有由衷的亲切感。我曾试图——尽管一时——把矛头指向先生，但在这些话面前，我没有了勇气。先生还这样说道：

“我被人欺骗了，而且是被有血缘关系的亲戚欺骗的。这我绝不会忘记。在我父亲面前他们一副正人君子面孔，而父亲尸骨未寒，就变成了难以宽恕的不义小人。从小至今我始终背负着他们带给我的屈辱和伤害，恐怕要一直背到死。因为我死也不能忘记。但我尚未复仇。想起来，我现在做的事已超出对个人的复仇。我不单单憎恨他们，还对他们所代表的所有人怀有憎恨。我认为此即足矣，足矣。”

我竟连一句安慰话也未说出。

31

这天的谈话就到此为止了。我对先生的态度莫如说产生了畏惧，再没情绪向前推进。

两人从市区外围上了电车，车内几乎没有开口，下车很快就告别了。告别时先生又是一变，用比平日还开朗的语调说：“从现在到六月是最开心的时候，说不定是一生中最开心的，好好玩玩吧！”我笑着摘下帽子。我看着先生的脸，怀疑先生是否真在心里对一般人怀有怨恨。那眼神，那口气，哪里都没有厌世的阴影。

我坦白，自己在有关思想的问题上从先生那里得到很大教益。但必须说，也有时想得到教益而未能如愿。先生的谈话有时候不得要领。那天两人在郊外的谈话，便作为不得要领的一个例子留在我的脑际。

一次我终于不客气地跟先生挑明。先生笑了。我这样说道：

“脑袋迟钝而说话不得要领倒也罢了，伤脑筋的是明明知道却不清楚告诉人家。”

“我什么也没隐瞒。”

“隐瞒了。”

“你是不是把我的思想、意见一类东西同我的过去一锅粥搅和在一起了？我固然是个思想贫乏的思想家，但我没有把自己头脑里归纳出来的东西死活不讲给别人听，因为没有隐瞒的必要。至于一定要在你面前将我的过去全盘托出，那就是另一个问题了。”

“我不认为是另一个问题。先生的过去产生了先生的思想，我很看重这点。把二者割裂开来，对于我就几乎无价值可言了，我得到的仅仅是没有注入灵魂的偶人，没有办法满足。”

先生瞠目结舌地看着我，拿卷烟的手微微颤抖。

“你够大胆的了。”

“只是认真罢了，想认真从人生中接受教训。”

“即使揭露我的过去？”

“揭露”一词突然以一种令人恐惧的声韵叩击我的耳鼓。此刻坐在我面前的先生，仿佛成了罪人，而不是我平素敬重的先生。先生脸色发青。

“你真是认真的吗？”先生叮问，“我出于过去的经历，对人持怀疑态度，所以实际上连你也怀疑。可是我总感觉至少不该怀疑你。你好像过于单纯了，不足以怀疑。死之前我还是想相信人的，哪怕相信你一个也好。你能成为这唯一的一个吗？成为好么？你打心底往外是认真的吗？”

“假如我的生命是认真的，我现在说的也就是认真的。”我声音发颤。

“那好！”先生说，“讲给你好了！把我的过去毫无保留地讲给你。只是……也罢，那也无所谓。不过对你来说，我的过去可能没什么用处，也许不听更好。另外……现在不能讲，你先别急，因为不到适当时机是不能讲的。”

回宿舍后我也还有一种压抑感。

32

在教授眼里，我的论文似乎没有我自己评价的那么好。但毕竟顺利通过了。毕业典礼那天，我从柳条箱里翻出带一股霉味的旧冬服穿了。进会场排着队列，每个人都好像热得够呛。我整个身子被密封在厚毛呢里，难受得不行。站不多会儿，手里的手帕便整个湿透了。

典礼一结束，我马上回来脱光衣服。打开二楼窗口，我把毕业证书一圈圈卷成望远镜，从圆筒里环视这个世界，然后扔到桌子上，在房间正中躺成个“大”字。我躺着回顾自己的过去，想象自己的未来，觉得在二者之间划出一道界线的这张毕业证书似乎是一张很怪的纸，既好像有意义，又仿佛无意义。

这天晚间去先生家吃饭。早就讲定，若顺利毕业，当日晚饭不去外面，而在先生家餐桌上受用。

餐桌果然在客厅靠近檐廊的地方摆好。织有花纹的浆硬的厚桌布楚楚动人地反射着电灯光。在先生家吃饭，笃定在西餐馆方可见到的白亚麻布上摆上碗筷，而且必定刚刚洗过，雪白雪白。

“和衣领衣袖是一回事。如果脏了还用，就莫不如一开始就用带颜色的。白的就要纯白才行。”

如此说来，果然先生喜好清洁。书房都收拾得井井有条。我这人邋遢，先生这个特点不时给我极深的印象。

“先生有洁癖啊。”一次这样告诉太太。太太说：“不过穿着倒不那么讲究。”先生在一旁听了，笑道：“说实话，我在精神上有洁癖，一直为这个痛苦。想来这性格也真是傻气得很。”所谓精神上有洁癖，意思不知是一般说的神经质，还是道德上严于律己，我想不清楚。太太大概也稀里糊涂。

这天晚上我同先生对坐在白桌布前。太太则置两人于左右两侧，独自面对院子入座。

“祝贺你！”说着，先生朝我举起酒盅。这盅酒没有怎么引起我高兴的心情。当然，我自己的心不具有能与这句话相呼应的雀跃感也是一个原因。但先生的语气也绝不带有激起我兴致的欣喜之情。先生笑着举盅，我没从他的笑里感觉出半点不怀好意的讽刺，同时也未体味出衷心祝贺的真诚。那笑法仿佛在说：因为世人在这种场合都常这么来一句“祝贺你”嘛。

太太对我说：“不错啊，你父亲母亲肯定高兴的。”

我蓦然想到父亲的病，恨不得马上把毕业证书摆到他眼前。

“先生的毕业证书怎么样了？”我问。

“怎么样了……还藏在哪里吧？”先生问太太。

“呃，应该还放着。”

两人都不大清楚毕业证书的所在。

33

上饭时，太太让一旁坐着的女佣去隔壁休息，自己负责盛饭。这大约是先生家对待非正规客人的家规。开始一两次我也感到别扭，但随着次数的增多，把饭碗递给太太就好像顺理成章了。

“茶？饭？你真好胃口。”太太有时候会说得很不客气。但这天毕竟时候不早了，食欲没强到给太太开玩笑的地步。

“这就完了？你近来饭量也小好多了嘛。”

“不是饭量小，热得吃不下。”

太太叫女佣把餐桌收拾好，另外端上雪糕和水果。

“这是自家做的。”

看来太太没什么事干，有时间自制雪糕款待客人。我把杯递出两次。

“你也正式毕业了，往下打算干什么？”先生问。先生半边身子已移往檐廊，在门槛那里背靠木格拉门坐着。

我只晓得已经毕业，还没有下一步目标。见我不知如何回答，太太问：“当教师？”仍答不上来时，这回改问：“当官？”我笑，先生也笑。

“说实话，干什么还没考虑，对职业这东西从来没有设想过。问题首先是，什么好什么不好，要实际试干一下才知道，很难选择，我

想。”

“那倒也是。不过毕竟你家里有钱才得以这样说。若是家境差的人你试试，绝对不可能如你这样沉得住气。”

我有个同学没毕业就争取当中学教师，我在内心承认太太说的是事实。然而我这样说：

“多少受先生影响吧？”

“不受正经影响！”

先生苦笑。

“受影响也没关系，只是——上次也跟你说了——趁你父亲还在世，把该分得的财产分妥才好。这可万万疏忽不得。”

我想起在郊外苗圃宽敞的庭园深处同先生交谈的那个杜鹃花盛开的五月初。归途中先生以亢奋的口吻向我强调的话语再次在我耳底响起。不仅语气强烈，用词也非同小可。但对于不了解事实的我来说，同时也是不了了之的话语。

“太太，府上是相当有财产的吧？”

“怎么问起这个？”

“问先生，先生不告诉。”

太太笑着看先生。

“因为达不到可以告诉的程度吧。”

“可我想做参考，看要有多少才能像先生那样，回去好跟父亲谈判。”

先生脸朝院子，若无其事地吸烟。交谈对象自然非太太莫属。

“谈不上有多少，好歹这么过得下去罢了……先不说这个了，你往下不做点什么可是不成的哟，真的。像先生那样光是东躺西歪……”

“也没光是东躺西歪嘛。”先生稍稍转过脸，否定太太的说法。

34

离开先生家已经晚上十点多了。因两三天内要回老家，离座前我说了句辞行的话：

“短时间又见不到了。”

“九月份该回来的吧？”

我已经毕业，已没了必须九月份回来的必要。但也不想来东京度过正是热时候的八月。对于我，谋职的黄金时间已经过去了。

“怕是要到九月份吧。”

“那，一路平安。我们这个夏天也可能到哪里去一下，太热了。去时给你寄明信片。”

“大约是哪边呢，如果去的话？”

先生笑吟吟听我们一问一答。

“瞧你，去不去都还没定下来呢。”

要欠身离座时，先生突然冲着我问：“对了，你父亲的病怎么样了？”

我几乎对父亲的健康一无所知。既然信上什么都没说，估计不会恶化。

“那种病可不能太乐观哟。一旦出现尿毒症，就无可救药了。”

尿毒症什么意思我也不清楚。上次寒假回去见到医生时，根本没听得这个术语。

“真要好好注意才行。”太太也说，“毒一上脑，就没救了。可不是开玩笑。”

没有经验的我虽说有点怕，脸上仍带着笑：

“反正是治不了的病，再担心也不顶用。”

“能那么想得开，倒也罢了。”

太太大概想起自己往日死于同一种病的母亲，以低沉的声调如此说罢，低下头去。我也为父亲的命运感到十分不忍。

这时，先生突然转问太太：

“静，你会死在我前面吗？”

“怎么？”

“也不怎么，随口问问。或者我比你先报销也未可知，世间一般都好像丈夫率先，妻子殿后，理所当然似的。”

“也不一定。不过不管怎么说，男的比女的年纪大嘛。”

“所以理应先死。那么，我也势必先比你到那个世上去！”

“你例外。”

“例外？”

“你身体好啊！不是从来都没有过什么毛病？怎么说都是我在先。”

“是不是啊？”

“嗯，肯定。”

先生看我的脸。我笑。

“可是，假如我先去了，你怎么办呢？”

“怎么办……”太太一时语塞，大约被先生之死的想象性悲哀撞了一下胸口。但她重新扬起脸时，心情已改变过来。“怎么办？怎么办也不能怎么办，是不？老少不定嘛。”太太特意看着我，开玩笑似的说道。

35

已经站起的我又坐了下来，陪两人把话说完。

“你怎么看？”先生问。

先生早死还是太太先亡，这问题原本就不是我所能判断的，只好笑道：

“我也不知道，命数这东西。”

“的的确确是命数。活多少年是出生时就带来的，奈何不得。先生的父亲母亲几乎是同时——同一时辰去世的，是吧？”

“去世日期？”

“倒不至于同一天。反正差不多，相继去世的嘛。”

这对我属于新知识，觉得不可思议：

“怎么会一同死呢？”

太太试图回答我的提问，先生制止道：

“快别说那个了，没意思的。”先生故意啪啪啦啦摇着手里的团扇，回头看着太太说，“静，我若是死了，这房子给你。”

太太笑了起来：

“连同地皮。”

“地皮是人家的，没办法。这样吧，大凡我所拥有的全部给你。”

“多谢多谢。不过洋文书要也是没用的哟。”

“卖给古旧书店。”

“能值几个钱？！”

先生没说值多少钱。但先生的话轻易不离自己之死这个遥远的问题，并且假定自己必定死在太太前头。太太一开始也好像故意天真地一唱一和，但不知不觉之间，女性多愁善感的心变得沉重起来。

“我死了我死了——说多少遍了！求求您，快适可而止吧，别再说我死了，又不是什么吉利话。你死了，什么都按您的心愿办就是，这还不行吗？”

先生脸朝院子笑，但不再说太太不愿听的话了。我也待得太久了，当即起身告辞。先生和太太送到房门口。

“注意照看病人。”太太说。

“九月见。”先生道。

寒暄完毕，我迈步走到格子门外。房门与院门之间有一株郁郁葱葱的丹桂树，像要挡住我去路似的在夜幕下张开枝叶。我望着覆盖黑叶片的树梢走了两三步，想象它在秋日里的花朵和馨香。我将先生家的房子和这株丹桂树记在了一起，似乎二者从不曾在我心中分开。在我刚好站在树前想象今年秋天再度跨进先生家门的情景时，从格子门射出的门灯光倏然熄了。看样子先生夫妇进到里边去了。我一个人来到黑乎乎的院外。

我没有马上回宿舍。一来回老家前有东西要买齐，二来也得给塞满佳肴的胃袋一点机动时间，只管往热闹街道走去。街上刚刚入夜，大约无所事事的男女熙来攘往。在这里边我碰见今天和我一起毕业的一个人，他强拉硬扯把我领进酒吧，让我听了他啤酒泡一般的气焰。回到宿舍已十二点多了。

36

第二天我也冒着酷暑，到处物色老家托买的东西。信上受托时以为不在话下，可一旦买起来，觉得相当麻烦。我在电车上一边擦汗，一边恼恨完全不知他人时间和精力为何物的乡下人。

我不想虚度整个夏天。回老家后的日程我早已安排好，要把需要的书买好以付诸实施。我决意在“丸善”二楼消磨半天。我站在与自己关系密切的书架前，一册一册查看，任何边角都不放过。

要买的东西里边，最麻烦是女人的和服衬领。说给店里的小伙计，一股脑儿递出很多，都不知选哪个合适，让我伤透脑筋。而且价钱也变化无穷，以为便宜的，一问却贵得惊人；以为贵的，没问就被告知很便宜。还有的无论怎么比较，都看不出贵贱之差有何根据。我被折腾得一塌糊涂。心里后悔何不麻烦先生的太太帮忙。

我买个手提皮包。当然是国产的低档货，但金属部件等仍闪闪发光，吓唬乡下佬已经足够了。买这皮包是母亲的吩咐，信上特意交代毕业买个新皮包，回家时把所有礼物都装进皮包拎着。读到这里我不由笑了，主要笑的倒不是母亲的动机，而是说法叫人觉得滑稽。

如我向先生夫妇告辞时所说，我在第三天乘火车离京回乡。入冬以来先生一再提醒我注意父亲的病，作为我也应该最为担忧。但不知为什么，我并未怎么牵肠挂肚。想起来反倒更觉得父亲不在后的母亲可怜。这意味着，我心里某个地方早已为父亲的去世做了准备。写给九州哥哥的信中，我也说父亲无论如何不可能再如原来那样健康了，希望他这个夏天尽可能——只要工作允许——回老家看父亲一眼。甚至用了感伤字眼，说只两个老人在乡下相依为命难免感到不安，我们作为儿子也为之深感遗憾云云。实际我心中也是这么想的，但写完后的心情同写当时的不一样。

我在火车上思考这种矛盾。想着想着，觉得自己大约是个朝三暮四的轻薄儿。我有些不快，又想起先生夫妇，尤其记起两三天前晚饭桌上的谈话。

“哪一方先死呢？”我独自在口中重复那天晚间先生同太太之间出现的这个疑问。这个疑问我想恐怕任何人都没把握回答。不过若清楚知道哪一方先死，那么先生会怎么样呢？太太又如何呢？无论先生还是太太，想必都只能采取现在这样的态度（一如父亲在老家死期将近而又束手无策的我）。我感到人这东西真是脆弱，生下来便带有无可奈何的脆弱，不堪一击。

中　双亲与我

1

没想到回家一看，父亲的身体同上次见时没太大区别。

“噢，回来了？是吗，不管怎样，能毕业出来就好。等一下，这就洗脸来。”

父亲正在院子里侍弄什么，旧草帽后头挂了一块遮太阳的脏兮兮的手帕。他晃动着那块手帕往后院拐去。

关于从学校毕业，我觉得作为正常人是理所当然的事，而父亲却喜出望外。这使我感到惶恐。

“能毕业出来就好。”

父亲重复了好几遍。我在心里把父亲的欣喜和毕业典礼那天晚上在先生家餐桌上说“祝贺你”的先生神情加以比较。较之小题大做的乐滋滋的父亲，口头表示祝贺而内心不以为然的先生反而显得高尚。最后我对父亲这无知造成的乡巴佬味儿感到不快起来，忍不住这样说道：

“大学毕业也没什么可好的，每年都有好几百人毕业。”

父亲现出难以形容的神情：

“我也不光是说毕业了就好。毕业了好当然是好，但我说的有一点其他意思，只要这个你能理解……”

我想听父亲继续说下去。父亲显得有点难以启齿，但终于说道：

“就是说，是对我这下可好了。你也知道，我有病在身。去年冬天见你时，心想弄不好顶多活三四个月。不料竟幸运地活到今日，起

居也没什么不自如，正好这时候你毕业了，所以很高兴。作为父亲，熬尽心血培养起来的儿子能在自己还活着的时候跨出校门，当然比自己离世后毕业感到高兴，是吧？从考虑更大事情的你看来，也许觉得无非大学毕业罢了，值不得一口一个好。但从我的角度想想看，情形就有所不同。也就是说，毕业对我比对你更好，明白了？”

我无言以对，低下头，比请罪还要狼狈。看来，父亲早已坦然做好了死的精神准备，并认定将在我毕业前死去。而我竟全然没有考虑到自己的毕业对父亲是多么大的慰藉，真是愚蠢透顶。我从皮包里取出毕业证书，郑重递给父亲。证书已被什么挤得失去了原形。父亲小心打开。

“这东西应该卷起拿在手上的。”

“里边放什么撑着就好了！”母亲也从旁提醒。

父亲注视了好一会儿，然后起身走到壁龛那里，放在任何人进来都可马上看到的正面。若在往日，我又要马上说什么了，但此时的我与平时完全不同，对父母没有半点反抗情绪。我默不作声，任凭父亲摆放。用鸟子纸制作的证书一旦有了折痕，很难由父亲摆弄，刚摆在合适位置，便立即要恢复原状倒下。

2

我把母亲叫到别处问父亲的病情。

“父亲那么大劲头在院子里干这干那，那能行吗？”

“好像没什么了，怕是好转了吧。”

母亲意外镇定。作为生活在远离城市的山野间的一般妇女，母亲在这类事情上完全处于无知状态，然而上次父亲晕倒时却又那么惊慌

失措，那么忧心如焚。我心里不由诧异。

“可医生那时不是断言很难治好的么？”

“所以我想再没有比人的身体更叫人纳闷的了。医生说得那么严重，可直到现在都结结实实的。一开始我也担心来着，尽量不让他动。可他不那个脾气么，休养是休养，但脾气犟。一旦自己认为好了，就怎么也不听我劝。”

我想起上次回来时父亲硬是起床刮胡子的情形，想起自己当时的话——“不要紧的，妈也说得太过分了”，于是觉得不好一味埋怨母亲。我本想说还是要在旁边提醒一下，也终于没说出口。只就父亲病的性质，把自己知道的全都讲给她听。大部分无非是从先生和先生太太口里得来的。母亲看样子没怎么被打动，只是说：“呃，也是同一种病啊，真是不幸。死时多大年纪，那位？”

没办法，我便撇开母亲直接找父亲。父亲要比母亲听得认真，说道：“有道理，你说得不错。不过，病毕竟长在我身上，我有多年的经验，自己的身体怎么养生，我自己最清楚不过。”母亲听了，苦笑道：“还不是！”

“别看父亲那么说，其实他心里早都有数。我这次毕业回来他那么高兴，也完全是因为这个。他说他以为活着的时候恐怕看不到我毕业，结果他还好好的我就拿了毕业证回来，所以感到高兴。这可是父亲自己这么说的。”

“噢，跟你说，他嘴上倒是那样说，可肚子里觉得自己还硬实着哩。”

“是那样的吗？”

“打算再活上十年二十年的呢。当然，有时跟我说起来也好像心里没底——‘看样子我长远不了啦，我死了你怎么办？一个人在这房子

里住下去？’”

我立刻想象父亲不在只剩母亲一个人时的这座又大又旧的农舍。这个家没了父亲还能维持下去吗？哥哥怎么办呢？母亲会怎么说呢？考虑到这些的我能够离开这块土地去东京心安理得地生活吗？面对母亲，我陡然想起先生的提醒——趁父亲还在，把该分得的东西分妥！

“不怕，还没见过自己一口一个死的人真的死去，放心好了。你父亲也一样，嘴上是死呀死呀的，往后说不定活多少年呢！老不吭声的结实人才危险呢。”

不知母亲这些陈词滥调是来自道理还是出自统计，我只管默默听着。

3

父母商量为我煮红豆饭请客。我回来那天便料到会出现这样的事，心里暗暗害怕。我当即拒绝：

“别那么铺张了！”

我讨厌乡下的客人。他们的最终目的就是来吃来喝，全都是唯恐天下太平那样的人。从小我就不愿意和他们坐在一起，觉得难受。何况这次他们是为自己而来，恐怕就更让我难受得不行了。但当着父母的面，又不好说不要让这些乡巴佬聚众喧闹，所以只能以铺张为由。

“铺张铺张，一点也不铺张，一辈子就这么一回，理所当然要请客，用不着躲躲闪闪。”

母亲好像把我大学毕业看得同娶媳妇一般重要。

“不请也未尝不可，但不请会给人说什么的。”这是父亲的说法。父亲担心他们背后议论。实际也是如此。在这种情况下，他们若不能

如愿以偿，便立即说三道四。“和东京不同，乡下琐事多。”父亲又说。

“也还有父亲的脸面。”母亲补充道。

我不便固执己见，只得由父母安排，只要对他们好就行。

“我只是说，如果为了我的话，就别办了。但目的若是不愿意让人家在背后说三道四，那么另当别论。对你们不利的事我也不强坚持。”

“这个道理讲不大通。”父亲现出苦涩的表情。

“你父亲没有说不是为了你。不过就你来说，也该懂人情世故了吧？”

在这种事情上，母亲到底是女人，讲起话来很不得要领。就话语数量来说，父亲和我加在一起也敌不过她。

“人这东西一旦做起学问，就动不动抠死理。”

父亲只此一句。但在这简单的一句中，我看出父亲对我一向怀有的全部不满。当时我没意识到自己话语的棱角，只是觉得父亲的埋怨没有道理。

晚上，父亲换了情绪，问我请客定在哪天合适。我整天在这旧房子横躺竖卧无所事事，本无所谓合适不合适——父亲这样问我，无非是父亲让步求和的表示。我在如此温厚的父亲面前低下头去，不再计较，同父亲商定了请客日期。

日期到来之前，发生了一件大事：上面通告说明治天皇病危。报纸把此事迅速传遍全国，一户农家略经曲折定下来的祝贺我毕业的请客活动也就彻底告吹了。

“噢，还是自觉些好吧。”戴眼镜看报的父亲这样说道，然后沉默下来，似乎同时想到自己的病。我记起最近毕业典礼上天皇照例驾临学校的情景。

4

因人口少而显得过于宽大的旧房子里一片寂静。我打开柳条箱，找出书本翻动。不知何故，总是心神不定。还是在眼花缭乱的东京那座宿舍二楼耳听远处电车的轰隆声一页一页翻动书页更叫人学得来劲，学得开心。

我时不时靠着桌子打盹。有时候甚至特意拿出枕头正正规规大睡午觉。醒来听蝉鸣。意识清醒时就频频传来的鸣声，很快把耳底搅得喧嚣不堪。我一动不动地听着，时而涌起一股伤感。

我提笔给同学甲某乙某写信，或写明信片，或写长函。同学中，有的留在东京，有的返回遥远的故乡，有的回信，有的音信全无。一开始我就没忘记先生，遂以回乡的自己为题，用小字写了三张原稿纸。封口时，我不无担念，不知先生是否还在东京。按惯例，若先生和太太一起离家不在，一个五十光景的梳发髻的妇人便不知从哪里赶来看家。我曾问先生那人是什么人。先生反问：“你看像什么人？”我误以为是先生的亲戚。先生回答：“我没有亲戚。”先生同老家那边有亲属关系的人概不通信。我觉得纳闷的这个女人，是同先生无关的太太方面的亲戚。给先生寄信时，我蓦地想起这个扎一条细腰带并随便在后背打个结的妇人。我想，如果信是在先生夫妇去哪里避暑后寄到的，那个发髻婆婆大约马上转寄出去，这点脑筋和好意想必还是有的。不过信上并没写什么非写不可的事，这我十分清楚。我只是寂寞罢了，并期望先生回信。然而回信到底没有。

父亲不像我上次回来时那样喜欢下将棋了。将棋盘落满了灰，靠在壁龛一角。尤其陛下病重以来，父亲更好像陷入沉思。每天报纸一

到，便迫不及待地第一个读了起来。读罢，还特意拿到我这里。

“喂，你看，今天也很详细报道天子的事。”父亲总把陛下称作天子，“说来真是不应该，天子的病和我的病大概是同一种病。”这时父亲的脸上布满担忧的阴影。

经父亲这么一说，我心里掠过不安：不知父亲何时再次躺倒。

“不过不要紧吧。我这样无用之人都还这么活着呢。”

看来，父亲一边自我保证他还健康，一边预感到了即将降临自己头上的危险。

“父亲真的害怕自己的病了。看样子不像您说的，打算活上十年二十年。”

母亲听了，露出困惑的神情：

“劝他下下将棋什么的怎么样？”

我从壁龛拿下棋盘，擦去灰。

5

父亲的身体逐渐衰弱下去。那顶让我吃一惊的挂着手帕的旧草帽自然闲置起来。每次看见那个放在烟熏火燎的板架上的草帽，我都为父亲的不幸感到不忍。若是父亲以前举止灵便的时候再多注意些就好了。及至父亲静坐不动了，觉得还是原来那样子是健康的。我常向母亲谈起父亲的身体。

“全是心理作用。”母亲说。

母亲认为父亲把陛下的病同自身的病扯在了一起。我认为不完全

是这样。

“不是心理作用，是身体真的不好了吧？同心情比，总好像身体更糟糕。”说着，我在心里盘算：是不是把远处那位相当了得的医生再请来看一次？

“今年夏天你也够没意思的吧？毕业一回，却没庆祝得成；父亲的身体又那个样子；天子又病了……索性刚回来时就请客该多好！”

我回到家是七月五六日，父母提出请客祝贺我毕业是过一个星期之后，定的日期又推了一个星期。回到这不受时间束缚的凡事慢吞吞的乡下的我，因此等于免除了一场社交上的苦难。但不理解我的母亲似乎全然没有觉察到这点。

天皇驾崩消息传来时，父亲手拿报纸，口中“啊、啊”两声。

“啊，啊，天子到底没有了，我也……”父亲再没说下去。

我上街去买黑纱。用黑纱把旗杆头包起来，再往旗杆前端系上三寸来宽，朝路边斜插在门上。大旗也好黑纱小旗也好，在无风的空气中颓然下垂。我家院门上边苫着稻草，雨打风吹，草早已变色，有些发灰，凹凸之处也触目可见。我独自走到门外，望着黑色的小旗和白毛纱布及其中间染出的红太阳色，望着那颜色映在脏兮兮的稻草房顶的光景。我想起先生曾问我：“你家房子是怎么个样子？和我老家大异其趣吧？”我不想让先生看见自己出生的这座房子，觉得很不好意思。

我又独自进入宅内，来到放有自己桌子的地方，一边看报一边想象东京这个日本最大的都会。我的想象集中在它在怎样的黑暗中怎样蠕动这一画面上。倘若它不那样在黑暗中蠕动，它也就寿终正寝了。便是在这嘈杂不安的场景中，我看见了先生家那恍若一点灯光的屋宇。此刻我没觉察到那灯火将被自然而然卷入无声的漩涡中，全然没

觉察出不久那灯火也势必倏然消失的命运将出现在我自己眼前。

我想就这一事件给先生写封信。我拿起笔，写不到十行便放下了。我把写出来的撕得粉碎，扔进废纸篓（这种事写给先生也没什么用，先生绝不可能回信，一如上次）。我寂寞。寂寞才写信，并指望回信。

6

八月过去一半的时候，我接到一个同学的信，说有个地方中学教员职位，问我去不去。这个同学由于经济上的需要，一直自己在谋求这样的职位。这个职位原是找到他自己头上的，后来有了更好的地方，遂打算把剩下的这个让给我，特意打了招呼来。我当即回信推掉了。我说熟人中有一个正千方百计想当教师，转到他那边如何。

回信发出后，我跟父母讲了。两人都好像对我的拒绝没有异议。

“不去那种地方，也还有更好些的工作吧？”

从这样的说法里，我读出两人对我怀有的过分希望。糊涂父母看样子期待刚毕业的我得到不相应的地位和收入。

“好些的工作？近来还真少有那么可心的工作。尤其我跟哥哥专业不同，时代也不同了，把两人同样看待可有点不好办。”

“不过既然毕业了，那么总该自立才是，不然我们也不好办。别人问起你家二小子大学毕业干什么呢，若是回答不上来，我也脸面上过不去。”

父亲脸上现出愁苦。父亲的想法还没有超出这久已住惯的乡下。乡下邻里之间问起大学毕业一个月能挣多少钱，一般都说总有一百多元吧。父亲就是想把这个刚毕业的我处理得对这些人好交代一些。在

父母眼里，以大城市为根据地思考问题的我无异于腾云驾雾的怪物。事实上连我自己也不时有这样的感觉。我没有做声，因为我没有办法如实说出我的想法，那同父母的距离实在太大了。

“你时常先生先生称呼的那位——求求他怎么样？毕竟这种时候。”

母亲只能这样解释先生。那是劝我回乡后趁父亲在世快点分好家产的先生，不是毕业后想为我谋取社会地位的先生。

“那位先生是做什么的？”父亲问。

“什么也没做。”我回答。

记得很早以前就对父母说过先生什么也没做，父亲也应留在记忆里才是。

“这什么也没做，可又是怎么回事啊？既是你那么尊敬的人，总该做点什么吧。”

父亲如此挖苦我一句。按父亲的想法，大凡有用之才总该在社会上施展本事获得相应地位，而游手好闲者必是不三不四之流。

“就是我这样的人，月薪诚然没领，可也不是成天闲着无事嘛！”父亲又加了一句。

我还是缄口不语。

“既然像你说的那么了不起，肯定能给找个事做的，求下试试。”母亲叮问。

“不成。”我回答。

“那不就没有办法啦！为什么不求？写封信什么也好嘛。”

“噢。”我支吾一声，起身离开。

7

父亲显然害怕自己的病情。但每次医生来，他又不问这问那让人家为难。医生方面也客气地什么都不说。

看样子父亲在考虑身后的事。至少在想象没有了自己的这个家。

“让小孩求学，也好也不好。好歹送他完成学业，小孩就绝对不再回来。这岂不是说为了把父子母子隔离开来才供小孩读书的吗？”

读书的结果，如今哥哥远在他乡，由于受了教育，我又坚定了留京的决心。培育如此孩子的父亲，发牢骚并非没有道理。想到多年居住的这座旧农舍里只剩得母亲一人，父亲肯定感到凄然。

父亲坚信我们家是不能搬迁的，只要住在里面的母亲还活着，就不可能搬迁。想到自己死后，把孤独的母亲孤单单留在空荡荡的房子里，父亲自然万分不安。尽管如此，又要我在东京谋个好职位——父亲脑袋里有矛盾。我在为这矛盾感到好笑的同时，又为之庆幸：我又可以去东京了。

在父母面前，我必须装出为谋职竭尽全力的样子。我给先生写信，详细讲了家里情况，求他想想办法，表示凡是能做的，什么工作都可以。我边写边担心先生恐怕不会理会我的请求。即使理会，先生交际面那么窄怕也无可奈何。但我相信先生肯定回这封信。

封口前我对母亲说：

“给先生写信了，按您说的。您不看看？”

不出我所料，母亲没看。

“是吗，那就赶快寄走。这种事哪怕别人不提醒，也该自己抓紧的。”

母亲还把我当孩子。实际上我也觉得自己像是孩子。

“光是写信是不够的。反正九月份我还要去东京。”

“那或许是的。不过也不一定就没有好工作，还是早点相求才好。”

“嗯。怎么样都会有回信，到时再说吧。”

我相信在这类事情上一丝不苟的先生，盼望先生回信，我的期待还是落空了。过了一个星期，先生仍只字未回。

“估计是到哪里避暑去了。”我只好向母亲这样不无辩解意味地说道。这不仅仅是对母亲辩解，也是对自己内心辩解。即使觉得勉强，我也要假定某种情况来为先生的态度辩解，否则我会感到不安。

我不时把父亲的病忘在一边，恨不得赶快返回东京。父亲本人有时也忘了自己的病。虽然为将来担心，却未对将来采取任何措施。我终归没有得到机会按先生的忠告向父亲提起分家产的事。

8

到九月初，我准备动身进京。我请父亲一如往常寄学费过去。

“待在这里，毕竟待不出您所说的职位。”我这话说得好像是为了得到父亲希望的职位才回东京的。“当然，等找到工作就不用了。”我补充一句。

我心想哪里会有工作落到自己头上。但不了解情况的父亲想的完全相反。

“反正时间短暂，想办法筹措就是。只是，长了可不行哟。一得到相当职位就一定得自立。按理，现已跨出校门，从离校第二天起就不该再让人照顾。如今的年轻人只晓得如何花钱，完全不去想如何挣钱。”

此外父亲还发了不少牢骚。其中有这样两句话：“过去父母吃儿子，如今父母被儿吃。”我只能默默听着。

见他牢骚已告一段落，我悄悄站起身来。父亲问什么时候走，我说宜快不宜迟。

“让你母亲看个日子去。”

“这就去。”

当时的我在父亲面前格外老实。我的想法是：离家前尽可能不惹父亲生气。

父亲又挽留起我来了：

“你这一去东京，屋子里又要冷清了，毕竟只有我和你母亲两个。我身体结实倒还好办，可这个样子，很难说一下子会出什么事。”

我尽量安慰父亲，然后回到放有自己书桌那里。我坐在扔得到处都是的书本中间，反复回味父亲不安的神态和话语。这时我又听到蝉鸣。这回和近来听的不同，而是寒蝉的鸣声。夏天回乡在这沸腾般的蝉鸣中静坐不动，不知什么缘故，我屡屡悲从中来。我觉得我的悲哀时常同这激烈的蝉鸣一起沁入心底。每当这时候我总是静止不动，独自盯视一个人。

今夏回乡探亲以后，我的悲哀逐渐变了情调。如同秋蝉鸣声变成寒蝉鸣声，我觉得困扰我的人的命运仿佛正在巨大的轮回中缓缓移

行。我一边回味父亲不安的神态和话语，一边再次在脑海中推出去信也不回信的先生。先生和父亲给我的印象截然相反。在这点上，无论比较还是联想，两人都很容易一起浮上心头。

我几乎知晓父亲的一切，离开父亲，感到的只是父子间的眷念之情；而先生的大部分我尚未了解，讲定告诉我的他的过去也还没有听的机会，总之，对我来说，先生是扑朔迷离的。我无论如何必须越过那里而到达光明地带，否则不会甘心。同先生断掉关系对我是极大的痛苦。我请母亲看了日子，定下返京日期。

9

快要动身的时候（大约是动身前两天吃晚饭时），父亲又一次晕倒，当时我正在捆塞满书和衣物的柳条箱。给父亲冲洗脊背的母亲大声叫我。过去一看，全身赤裸的父亲由母亲从后面抱着。但把他扶回客厅时，父亲仍说不要紧了。我放心不下，坐在枕边用湿毛巾敷在父亲头上，到九点才好歹吃一口晚饭。

第二天，父亲比预想得好些。不听人劝阻，自己走去厕所。

“不要紧了。”

父亲把去年末晕倒时对我说的话又重复一遍。当时确实如他嘴上说的，是不要紧了。这次我以为说不定也会那样。医生仅仅提醒关键要小心，具体没说什么，再三问也没说。由于不安，应动身那天我也没心绪动身去东京。

“看看情况再说吧。”我跟母亲商量。

“那样好那样好！”母亲求之不得。

父亲有精神去前院后院走动时母亲那么满不在乎，而父亲一旦晕

倒了，便一副心急如火的样子。

“你今天不是该去东京的吗？”父亲问。

“噢，稍微推迟了。”我答道。

“为我？”父亲又问。

我有点踌躇。如照实回答，无非等于说父亲病重，我不愿意让父亲神经过敏。但父亲似乎看出了我的心思。

“难为你了。”说罢，脸转向院子。

我进入自己的房间，望着扔在这里的柳条箱。柳条箱仍紧紧捆着，以便随时可以带走。我呆呆站在它面前，考虑该不该解开绳子。

我坐立不安地过了三四天，父亲又晕倒了。医生命令绝对安卧不动。

“怎么办好呢？”母亲用低得父亲不至于听得见的声音对我说。母亲的表情甚是焦虑不安。我准备给哥哥和妹妹打电报。但躺着的父亲几乎没有痛苦的样子。从谈话的情形看，和感冒没任何区别。食欲也比平日旺盛，别人提醒也很难听进去。

“反正要死，总得吃点好的死才行。”

吃点好的这句话听得我既觉得滑稽又有些心酸。父亲没有住在能吃上好东西的城市。晚上还让母亲烤年糕片，咔嚓咔嚓嚼个不停。

“怎么这么渴呢？或者骨子里还有抗得住的地方也不一定。”情形不妙的时候母亲反而不放弃希望，却又把只在病时使用的“渴”这种旧式讲法作为什么都想吃的意思使用。

伯父来探望时，父亲再三挽留不放。主要是说感到孤单。另外，

抱怨母亲和我不让他吃尽兴也像是一个目的。

10

父亲的病情就这样持续了一个多星期。这时间里我给九州的哥哥去了封长信。妹妹那边是母亲写的。我心里思忖，这恐怕是就父亲身体状况寄给两人的最后的信了。信上都有这样的意思：最后关头打电报去，届时务必回来。

哥哥工作忙，妹妹有身孕，父亲的病情不到刻不容缓的时候不会轻易把两人叫回。但另一方面，好不容易回来却又未赶上见最后一面——落此埋怨也不是个滋味。在打电报时机上面，我感到一种人所不知的压力。

“太具体的我也说不准确，但这点你要心里有数：已经到了随时都有可能的地步。”

从有汽车站的镇子请来的医生这样告诉我。我同母亲商量一下，请这位医生帮忙从镇上医院请个护士。看到来枕边寒暄的穿白大褂的女子，父亲脸色变了。

父亲早已知道患了不治之症，但并未意识到死亡正向自己逼近。

“这回病好了，再去东京玩上一次，人不知什么时候死。要做的事一定得趁活着的时候抓紧才行。”

母亲只好随声附和：

“那时把我也一块儿带去。”

有时候父亲又满脸凄寂：

“我若是死了，可要好好待你母亲！”

对这句“我若是死了”，我有一种记忆。离开东京前，先生向太太反复这样说了好多遍。那是我毕业那天晚上的事。我记起先生带笑的面容和太太捂住耳朵说“又不是什么吉利话”时的样子。那时的“我若是死了”纯属假设，而现在我听到的是随时可能发生的情况。我学不来太太对先生的态度，但口头上又必须搪塞父亲。

“别说得那么消沉。不是病好了还要去东京游玩的吗，和妈妈一起？这回去肯定吃一惊，都变了。光是电车就增加了好多新线路。一通电车，街道自然像模像样，市区也重新划过了。可以说，一天二十四小时东京一分钟都安静不下来。”

我是没办法才这么随口说了一通，而父亲好像听得很满意。

由于有病人，出入家门的人自然多了。附近的亲戚轮流前来探望，大致每两天有一个人来。其中也有离得较远平生很少往来的人。有人说道：“以为怎么样了，这样子不要紧。说话没问题，况且脸都一点也没瘦。”我回来时家里静悄悄的，现在渐渐嘈杂起来。

其中卧床不动的父亲的病，只是朝不好方向发展。我和母亲、伯父商量，终于给哥哥和妹妹发了电报。哥哥回电说马上动身。妹夫也告知动身。妹妹以前流过产，妹夫早就表示这次务必小心静养以免成了习惯，因此很可能他代妹妹前来。

11

如此不安稳时间里，我仍有余暇静坐，甚至有时间翻开书持续看十几页。一度捆紧的柳条箱也不知什么时候打了开来。我从中取出凡是自己需要的种种东西。我回想离京前自己在心里制定的暑期日程，实际完成的还不足三分之一。以往我也有过好几次类似的不快，不过还很少像今年夏天这样不做事。虽然我认为这是世间常事，但心里终究郁郁寡欢。

我在这不快当中坐着考虑父亲的病，想象父亲去世后的情景。同时又在脑海中推出先生。我望着处于自己不快心情两端的这两个人——两个地位、教养、性格截然有别之人的面影。

正当我离开父亲枕边独自抱臂坐在散乱的书堆中间时，母亲探过脸来：

“稍午睡一会儿吧，你也够累的了。”

母亲不了解我的心情，而我也不是母亲所能预想的小孩子了。我简单道声谢谢。母亲仍立在门口不动。

“父亲呢？”我问。

“正好好睡着呢。”母亲回答。

母亲突然进来坐在我身旁，问：

“先生那边还什么消息都没有？”

母亲相信了我当时的话。当时我向母亲保证先生肯定回信，尽管我根本没指望会有父母所期待的回音。结果，我陷入了等于有意欺骗母亲的窘境。

“再写一封试试。”母亲说。

如果能给母亲以慰藉，写多少封无用的信我都不厌其烦。问题是用这等事逼迫先生使我痛苦。较之父亲的责备和母亲的不悦，我更害怕被先生瞧不起。我甚至推想，先生至今都未就我上次所托之事回信，说不定便是这个原因。

“写信是一点都不麻烦，只是这种事靠写信是很难有着落的，无论如何都得自己去东京当面相求才成。”

“可你父亲那个样子，不是不知道什么时候才去得成的么？”

“所以不去。病情好坏还看不清楚，我就先这么等着就是。”

“那当然。谁能丢开今天不知明天的重病人不管跑到东京去，不可能的。”

我开始在心里怜悯一无所知的母亲。可母亲为什么在这人心惶惶的时候特意提这个问题呢？我很难理解。我把父亲的病放在一边，而有闲心静静坐在这里看书——莫非母亲也像我这样忘掉眼前的病人而有闲心考虑别的不成？

“我是想，”这时母亲开口了，“我想如果你的工作能趁你父亲活着的时候定下，他也好定下那颗心。看来不管怎样都怕来不及了。不过，他现在说话清醒脑袋也清醒，若趁这时候想法让他高兴一下，也算尽尽孝心。”

然而情况不允许可怜的我尽这份孝心。终归，我一行字也没给先生写。

12

哥哥回来时，父亲正躺着看报。父亲平生有个习惯，无论多忙也要浏览一遍报纸。病卧以后，为了解闷更是必看不可。母亲也好我也好都没坚决反对，尽可能满足病人的愿望。

“这么精神就蛮好嘛。我还以为相当危急，这不像是挺好的嘛！”

哥哥这样跟父亲说话。那过于欢快的语调在我听来反而有些别扭。但从父亲跟前离开同我相对时，语气莫如说是低沉的：

“还看报纸，怕不合适吧？”

“我也那么想。但不让看父亲不答应，没办法。”

哥哥默默听我申辩。少顷，说：“能看懂吗？”依哥哥观察，父亲的理解力由于有病而比平时迟钝得多。

“脑袋还清醒。刚才我坐在枕边跟他聊了二十多分钟，混乱的地方一点也没有。看那样子，说不定还能坚持一大阵子。”

同哥哥相继赶到的妹夫，看法远比我们乐观。父亲这个那个向他打听妹妹的情况。“还是身体要紧，勉强来看望，我反倒担心。”父亲说，“放心，这回病好了，我去看小孩长什么样儿，好久没去了。”

乃木大将死时，父亲也是最先从报纸上知道的。

“不得了不得了！”父亲道。

我们还什么都不知晓，吃了一惊。

“那时以为父亲脑袋真出问题了，心里咯噔一下。”事后哥哥对我说。“我也吓了一跳。”妹夫也附和道。

那时期的报纸，上面全是让乡下人每天迫不及待的消息。我坐在父亲枕旁看得很仔细。看不完就悄悄带回自己房间，全部过目一遍。很长一段时间我眼前总是出现身着军装的乃木大将和女官装束的乃木夫人。

当凄凉的秋风吹遍乡间每个角落、吹得昏昏欲睡的草木瑟瑟发抖的时候，我突然接到来自先生的电报。在这狗一看见穿西服的人就叫的地方，一封电报都是大事。接得电报的母亲果然一副惊慌的样子，专门把我叫到没有人的地方。

“看是什么？”说着，站我身旁等我开封。

电报很简单，只说想见我，问我能否赴京。我歪头沉思。

“肯定是为你托找工作的事。”母亲断定。

我也觉得不是没有可能，同时又觉得有点奇怪。但不管怎样，特意把哥哥和妹夫叫来的我，不可能置父亲的病不顾而去东京。我同母亲商定，回电说去不成。并以尽量简洁的词句补充说了父亲的病危。之后我仍放心不下，当天又把详细情况写在信里寄了出去。母亲一门心思以为是为托找工作的事，怅然说道：“时候不巧，没办法啊！”

13

我的信相当之长。母亲也好我也好都以为先生这次肯定有信来。不料信发出第二天，又有一封我的电报，只说不赴京也可以。我给母亲看了。

“大概会写信来说点什么的吧。”

看样子母亲仍一厢情愿地以为先生是在为我衣食着落想办法。我也不是没有这样的看法，但从先生平时表现来看，总好像不大对头。先生给我找工作——不可能有这等事。

“反正我的信还没寄到那边，电报肯定是那之前打来的。”我对母亲说这本来无须说的话。母亲又一本正经地思考起来，应了声“是吧”。我很清楚，用电报是在接信之前打来的这点来解释先生，是什么也解释不了的。

这天正好主治医生要从镇上领院长来访，母亲再没机会谈论此事。两位医生会诊后，给病人灌完肠回去了。

自医生命令安卧以来，父亲大小便都躺着靠人帮忙。父亲素爱干净，开始时厌恶得不行，但毕竟身体不便，只好在床上进行。或许病情使脑袋渐渐变得麻木的关系，时间一长，竟对床上排泄不以为然起来。偶尔弄脏被褥垫布，别人皱起眉头，本人却满不在乎。当然，出

于病的性质，尿量是少而又少的，医生很担心。食欲也一天不如一天，偶尔想吃什么，也只是舌头想，只有一点点通过喉咙。爱看的报纸也没力气拿在手里了。枕旁的老花镜总是收在黑眼镜盒里不动。小时就跟父亲要好、如今住在七八里之外的一个名叫阿作的朋友来探望时，父亲叫一声“阿作”，把浑浊的眼珠转往阿作那边。

“阿作你可来了。你还结实，羡慕啊！我不行了。”

“哪儿的话。你两个孩子都大学毕业，闹点儿病也没什么遗憾。瞧我，老婆先死了，孩子又没有，只这么喘气活着罢了。结实又有什么意思！”

灌肠是阿作来后第三四天进行的。父亲高兴地说，医生让他舒服多了，情绪恢复不少，对寿命好像有了信心。旁边的母亲大概受到感染——也可能为了安慰病人——提起先生拍来电报的事，说得就好像我的工作一如父亲期望的那样已在东京虚席以待了。我在身旁听得心里不知什么滋味。但又不好打断母亲的话，只得默默听着。病人露出高兴的神色。

“那就好。”妹夫也说。

“什么工作，还不知道？”哥哥问。

话说到这里，我早已没了否定的勇气。自己也不知所云地含糊一句，故意离开。

14

父亲的病看样子来到了只待最后一击的危急关口，眼下不过在此关口稍事徘徊。家人惶惶不可终日，不知命运何时作出最后判决。

父亲全然没有表现出足以让身旁人难受的痛苦。在这点上，看护

倒也容易。出于慎重，轮流有一个人看护，其他人即使各自回去睡上很长时间也不碍事。我一次因故睡不着，误以为耳边微微传来病人的呻吟，半夜起身到父亲枕旁看望。那天夜里轮到母亲守护。但母亲已在父亲身旁枕着胳膊睡得熟熟的。父亲也好像堕入梦乡，纹丝不动。我蹑手蹑脚折回自己被窝。

我和哥哥睡在同一个蚊帐里。唯独妹夫大约受客人待遇，独自睡在离开些的客厅。

“关也够受的，这么好几天都拖在这儿回不去。”

关是妹夫的姓。

“不过也不是怎么太忙的人吧，所以才肯那么住下来。相比之下，哥哥你倒更不好办吧，这么长时间。”

“不好办也没办法，不同别的事。”

我和哥哥便这样躺在一起聊着。哥哥脑袋里也好我心里也好，都有这样的念头：父亲反正好不了。甚至有既然好不了……这样的一闪之念。我们作为儿子，竟好像是在等待父亲死去。然而作为儿子的我们又忌讳直接说出口来。双方都心照不宣。

“父亲好像以为还能好起来。”哥哥对我说。

实际上也不是没有哥哥所说那样的表现。附近有人来看时，父亲无论如何都见人家。每次见都必然为未能请对方来庆祝我的毕业表示遗憾，有时还补充一句，说自己病好了如何如何。

“你毕业没请客祝贺也好。我那时候多狼狈！”哥哥捅起我的记忆。想起当时被酒精掀翻的混乱场面，我不由苦笑。父亲四下劝吃劝喝的举止也让人哭笑不得。

我们并非那么要好的哥俩。小时候常常吵架，年龄小些的我总是受哥哥的气。上大学所选专业的不同，也是由性格不同造成的。在大学期间，尤其同先生接触后，从远处观望哥哥，总觉他带有动物味道。我长时间见不到哥哥，又天各一方，无论从时间上还是从空间上，哥哥任何时候都离我不近。尽管如此，这么久违而重逢，兄弟之情还是自然而然涌出。场合的特殊也是一大原因。在两人共同的父亲——生命垂危的父亲枕旁，哥哥和我握手了。

“往下你怎么办？”哥哥问。

我把全然不同的另一个问题抛给哥哥：

“家产到底怎么处理呢？”

“我不知道。父亲还什么都没说。不过就算有财产，作为钱也没有多少吧。”

母亲终究是母亲，总惦记先生的来信，催问我说：

“还没来信？”

15

“老是先生先生的，到底说的谁？”哥哥问。

“最近不是说了么？”我说。我对哥哥有点儿不快：他自己问过的，却马上就把人家的答话忘掉了。

“问倒是问过。”

哥哥的意思是说问了也没理解。依我看，也没有必要非要哥哥理解不可。但我还是生气，他以往特有的表现又冒了出来。

哥哥以为，既然我一口一个先生加以尊敬，那么必是一位著名人物，至少该是大学教授一级。既没有名，又什么也不做，有何价值可言呢？在这点上，哥哥的想法同父亲如出一辙。不同的是，父亲当即断定因为一无所能才无所事事；哥哥流露的口气似乎是说，有某种能力却游手好闲——此种人纯属无聊之辈。

“egoist可不成哟。活着什么也不做，未免太我行我素嘛。人要最大限度发挥自己的才华才行。”

我真想反问哥哥一句，问他懂不懂自己使用的egoist的意思。

“不过他能帮你弄到一个职位也好，父亲也像是蛮高兴嘛。”哥哥随后这样说道。

既然没有来信明说，我便不能信以为真，也没有如此道出的勇气。在母亲那么自以为是地四下放风的现在，我就更不可能断然否定了。不用母亲催，我自然盼望先生来信，但愿信上能交代我的衣食着落，一如大家所期待的那样。在奄奄一息的父亲面前，在想以此来让父亲多少感到欣慰的母亲面前，在似乎在说不劳作便不是人的哥哥面前，在妹夫、伯父、伯母等人面前，我必须为我原本毫不介意的问题大伤脑筋。

当父亲吐出黄色异物时，我想起从先生和太太口里听来的险情。目睹一无所知的母亲——母亲说躺这么久怕是把胃躺坏了——不由眼角一阵发热。

哥哥和我在茶室碰上时，问我听见没有。意思大概是问我听见医生临走时对他说的话没有。这不用他解释我也很清楚。

“你不想回来管家里的事么？”哥哥回头看我。

我没有回答。

“母亲一个人，什么也做不来的吧？”哥哥又说。

看来我即使嗅着泥土味烂在这里，哥哥也不可惜。

“光看书的话，乡下也完全可以。再说又不用做事，岂不正好？”

“哥哥回来才顺理成章。”我说。

“岂有此理！”哥哥一口拒绝。哥哥胸怀大志，正要在世上大干一场。“你若不愿意，就请伯父帮忙。不过母亲可是得有一个人领走才行。”

“母亲愿不愿意离开这里就是个大问号。”

父亲还没死，兄弟俩便这样谈论起父亲身后事来。

16

父亲开始不时地说胡话。

“对不起乃木大将，实在丢人现眼。我也这就跟去。”

时不时有这样的话从口中出来。母亲心里有点怕，尽可能让大家聚在父亲枕边。这样对于清醒时总感到寂寞的病人也是个安慰。尤其环顾房间看不到母亲的时候，父亲必定问：“阿光呢？”即使不问，眼神也是这个意思。我常起身去叫母亲。“什么事啊？”母亲放下手中正干的活儿来到病房。父亲却只是定定地看着母亲的脸一言不发。或者突然没头没脑冒出一句什么。也有时候言词亲切，对母亲说：“没少让你操心费力啊！”母亲听了，每次都眼泪汪汪。之后肯定对比回忆起往日健康时的父亲来。

“现在说这可怜人的话，过去可凶着哩！”

母亲讲起给父亲用扫帚打脊梁骨时候的事。我和哥哥以前不知听多少遍了，但此时听起来心情完全不同，觉得母亲的话仿佛是对父亲的怀念。

父亲注视自己眼前隐约的死亡阴影，仍未道出类似遗嘱的话来。

“现在是不是该问点什么才好啊？”哥哥看着我的脸说。

“好不好呢？”我考虑主动提起对病人是否合适。两人拿不定主意，去找伯父商量。伯父也犹豫不决：

“想说的话没说就死了，固然遗憾，但主动催问恐也不够妥当。”

于是拖延下来。不久开始昏睡。母亲仍然不知实情，误以为一般睡觉，反而高兴地说：“能睡得这么好，守在旁边的人也舒口气。”

父亲时而睁开眼睛，忽然问某某怎么样了。所问某某只限于刚才还坐在这里的人的名字。父亲的神志出现明暗两部分，唯独明的部分犹如在黑暗中游走的一条白线，以一定间隔连在一起。母亲把昏睡状态错当成普通睡眠也情有可原。

后来口齿渐渐不灵便了。每次说什么语尾都往往含糊不清，让人不得要领。然而一旦开口，声音却很有力，看不出是濒危病人。我们要用高于平时的声音对他耳朵说话。

“用水敷一敷脑袋会好受些吧？”

“嗯。”

我让护士把父亲的水袋拿下，换上装有新冰块的冰囊。等咔嚓咔嚓砸得尖尖的冰块在囊中安稳了，我把它轻轻按在父亲的秃额头上。这时哥哥从走廊进来，不声不响递过一封信。我伸出空着的那只手接过，顿觉信不一般。

同普通信相比，这封信重得多，信封也不是普通信封，普通信封也装不进去。用“半纸”包着，封口用糨糊封得很仔细。从哥哥手中接过时，我就发觉是封挂号信。翻看背面，工整写有先生名字。我腾不出手，没办法开封，遂揣进怀里。

17

这天病人情况尤其不好，我起身去厕所时，在走廊碰见哥哥，他用哨兵样的口气问我去哪里。

“情况好像不妙，要尽量留在旁边才行。”哥哥提醒我。

我也有同感，仍怀揣那封信折回病房。父亲睁开眼睛，向母亲问周围人的姓名。母亲一一告诉他那个是谁这个是谁。父亲一次次点头。不点头时，母亲便提高音量，重复说这是谁谁，知道了吧。

“叫你们费心了。”

如此说罢，父亲又陷入昏睡状态。围在枕边的人默默注视一会儿病人。稍后，一个人起身去隔壁房间，接着又一个起身。我也终于作为第三个离开，回到自己的房间。我有个目的，想打开刚才揣入怀中的那封信。本来这在病人枕旁也很容易做到，但里边东西分量太多，没办法在那里一口气看完，只好偷专门时间看。

我撕开纤维很强的包信纸。里面出来的，是端端正正写在纵横线方格里的原稿样的东西。为包装方便，打四折叠在一起。我把有折痕的西洋纸反折过来压平，以便容易阅读。

我心里惊诧，这么多纸张和墨水将向我诉说什么呢？同时也放不下病房那边。我预感，在我看这份东西时间里，父亲肯定有什么，至少哥哥、母亲或者伯父要叫我。我无法沉下心看先生写的东西，只是匆匆看了最初一页。上面是这样写的：

> 你问起我的过去时，我没有勇气回答。现在我相信我已获得自由，可以说个水落石出了。但这自由只不过是在等待你回京时间里又将失去的世俗自由。所以，如果不在可以利用时加以利用的话，我将永远失去把我的过去作为间接经验输入你脑袋的机会。而那样一来，当时那么一口许下的诺言便将化为谎言。不得已，我只好以笔代口来向你诉说。

读到这里，我才明白先生何以写这么长的东西。一开始我就相信先生没有心绪就我的衣食着落之类给我来信。但是，笔都懒得提的先生为什么竟会将那件事写得如此之长给我看呢？为什么不能等待我回京呢？

“自由到来自会说，但那自由又将永远失去。”——我心里这样重复着，苦思其含义而不得其解。突然一阵不安袭来。我想接着往下看。但这时病房那边传来哥哥大声呼唤我的声音。我又是一惊，起身跑也似的穿过走廊，赶往大家在的那边。我意识到父亲的最后瞬间即将来临。

18

不知何时医生来到病房，正再次尝试给病人灌肠，以便让病人多少好受些。昨天累了一夜的护士在另一个房间休息。做不习惯的哥哥站在那里手忙脚乱。见我到了，叫我帮一下手，自己坐了下去。我替哥哥把油纸垫在父亲臀下。

看情形父亲多少舒缓下来。医生在枕旁坐了大约三十分钟，确认灌肠结果之后，说声还来，便走了。临走时专门交代有什么随时叫他。

我看病房不至于马上有什么，又退出来准备看先生的信。但我心情全然放松不下来。刚坐在桌前，就觉得哥哥又要大声叫我。而一旦

叫我便是临终这一恐惧感使得我双手发抖。我心不在焉地一页接一页翻动先生的信。我只是眼睛看着整齐嵌在方格中的笔画，而没心思读下去。甚至跳着读都无法做到。我从最初一页依序往后翻动。正当我准备照样放回桌面时，结尾一行字忽然闪入我的眼帘：

> 这封信落到你手上时，我恐怕已不在世上了，恐怕早已死了。

我心头一震，一直七上八下的心仿佛一下子僵住不动。我开始倒翻信页，一页看一句地倒看。我用眼睛穿刺似的掠过一晃一晃的字句，试图一瞬间把握住我想知道的事项。此时我想把握的，只是先生的安危。至于先生的过去——先生曾许诺告诉我的昏暗的过去，那玩意儿对我毫无用处。我继续倒翻信页。然而这封长信轻易不肯告诉我所需要的消息，我焦躁地折起。

我再次到病房门口观察父亲。病人身边意外安静。母亲一脸疲劳，心里空落落似的坐在那里。我向母亲招手，问情况怎么样。母亲说好像多少稳定下来。我把脸凑到父亲眼前，问他怎么样，灌了肠是不是心情好点。父亲点下头，并清楚说了声“谢谢”。想不到父亲还没有迷糊。

我又退出病房回到自己房间。我看着手表查了火车时刻表。我马上立起扎好裤带，把先生的信投进袖袋。然后从厨房门走到外面，忘我地往医生家跑去。我想明确问医生父亲能否坚持两三天，想求医生无论如何想办法，打针也好什么都好。不巧医生不在家。我没有时间静等他回来，心慌意乱。我当即叫人力车往火车站赶去。

我往车站墙上按一张纸片，用铅笔给母亲和哥哥写了封信。信非常简单，但我想总比不打招呼跑掉为好。我让车夫赶紧送到我家去，而后一头扎进开往东京的火车。我在轰轰隆隆的三等车厢中重新从袖口掏出先生的信，总算得以从头看完。

下　先生与遗书

1

……这个夏天我接到你三封信。托我在东京给你找一个合适的位置，记得是第二封信上的事。看信时我打算尽量想想办法。至少觉得不回信是对不起你的。但坦白说来，我根本没有为你托的事做任何努力。如你所知，我交际范围很窄，或者不如说遗世独立更为确切，没有做努力的余地。不过问题还不在这里。坦率地说，我当时正为自己的事焦头烂额，不知如何处置自己才好。是一如被世人抛弃的木乃伊这样存在下去呢，还是……当时的我每当在心底重复“还是”一词的时候，无不悚然一惊，就好像一个人跑到悬崖边缘突然俯视万丈深渊。我很怯懦，同大多数懦夫一样苦闷不堪。遗憾的是，当时的我，心目中几乎没有你这个存在——这样说并不夸张。进一步说，什么你的地位、你的生计，这东西对我毫无意义，怎么都无所谓，我已完全顾不上那么多了。我把你的信往信袋里一插，照样抱臂沉思。一个有相当家产之人，何苦刚毕业就一口一个地位急得团团转呢？莫如说，我仅仅是以极其不快的心情向远处的你投去如此一瞥而已。我这样直言相告，也是为了辩解——辩解未给你回信，而不是故意出言不逊来激怒你。我相信你往下看的过程中自会理解我的本意。但不管怎么样，我毕竟没有发出任何回响，要请你宽恕怠慢之罪。

其后我给你打了电报。老实说，那时我真有点想见你，想按你的希望把我的过去告诉你。你回电报说无法马上赴京，我失望地看那电报看了很久。你大概也为只发一封电报过意不去，随后寄来了长信。我因而明白了你不能来京的缘由。我绝对不至于认为你这人失礼或什么。你怎么能置敬爱的父亲的病于不顾而出远门呢？我这种忘掉你父亲生死的态度才是不地道的。实际上打电报时我也忘了你父亲的病，尽管你在东京时我再三说那种病难治，提醒你务必好好注意。我就是这样一个自相矛盾的人。较之脑髓，或许更是我的过去压迫我，使我变成如此自相矛盾之人。在这点上，我也必须充分承认我的本性，请

求你的原谅。

看你的信——你最后一封信——时，我意识到自己做了一件错事。于是提笔想给你回信，表明我的意思。但一行也未写成。既然写，就要写这样的信。而写这样的信为时尚早，只好作罢。我所以简单回电说不来也无妨，原因就在这里。

2

之后我写了这封信。平生不动笔的我，动笔是很大的痛苦，因为很难把事件或思想写得满意，以致我几乎放弃这项我对你的义务。我几次灰心丧气，掷笔于案，但终究未能作罢——不出一个小时我又想写了。依你看，也许认为是注意履行义务的我的性格使然。我也并不否认。你知道，我几乎是与世无涉的孤独之人，环顾自己的前后左右，无论哪里都找不出一棵义务之树。有意也好无意也好，我所过的是尽可能削减义务的生活。但我并非因为对义务冷淡变成这样子的。莫如说由于过于敏感而缺乏忍受刺激的精力，才如此消极打发时光。所以，许诺而不履行，会使我十分厌恶自己。纵使为了在你身上回避这种厌恶自己的心情，我也必须拿起放下的笔。

何况我是想写的，想把我的过去写下来，这与义务无关。不妨说，我的过去仅仅是我自己的经历和体验，仅为我一人所有。若至死都不把它给予别人，未免有些惋惜——我多少有这样的心情。只是，与其给予不能接受的人，还不如把那段经历和体验同我的生命一起埋葬，我想。实际上，假如没有你这样一个人，我的过去势必仅仅以我的过去而告终，而不会成为他人的知识（即使间接的）。在几千万日本人之中，我只愿意对你讲述我的过去。因为你认真，因为你说你想认真从人生本身吸取活的教训。

我准备将人世的暗影毫不顾忌地往你头上掷去。不得害怕。一定要定睛逼视阴暗物，从中抓取对你有参考价值的东西。我所说的阴

暗，当然是伦理上的阴暗。我是在讲究伦理的环境中出生又在同样条件下长大的人。或许我关于伦理的思考同今天的年轻人大相径庭。但即使再荒谬，也是我自身的一部分，不是暂且借来一用的衣物。所以我想，对于即将展开人生的你或许有几分参考价值。

记得吧，你经常向我谈起现代思想问题，也看得出我对这个问题的态度——即使我不蔑视你的意见，也绝对无法使我尊重。因为你的思想没有任何背景，而且你过于年轻，不具有自己的过去。我不时发笑。你每每现出不够满足的神情，以致最后逼我把我的过去像画卷一样展现在你面前。这时我才在心中对你生出敬意。因为你让我看到了决心——你要肆无忌惮地从我腹中抓住某种活的东西，要割开我的心脏，啜吸涌动的热血。那时我还活着，不愿意死，遂拒绝你的要求，许诺改日告诉你。而我现在就要自己抓裂自己的心脏，把鲜血溅到你脸上。倘若我的心跳停止时你胸中诞生了新的生命，我死而无憾。

3

我失去父母，是我还不到二十岁的时候。记得一次妻跟你说过，两人死于同一种病，并且可以说几乎是在同一时间相继去世的（妻说时你曾为之惊奇）。实际上父亲得的是可怕的伤寒，传染给了在身旁看护的母亲。

我是两人唯一的男孩。由于家境宽裕，成长过程中可谓相当春风得意。回顾过去，假如父母当时不死，或至少有一方活着，那春风得意的心情我想未尝不可以保持到现在。

两人死后，我一个人茫茫然剩了下来。我既无知识，又无经验，亦不谙世事。父亲死时，母亲未能在身旁；母亲死时，连父亲的死讯都没告诉她。不知母亲意识到没有，还是如旁边人所说相信父亲正在康复。母亲只是把一切委托给了叔父，指着在场的我说“请关照这个孩子”。那以前我就得到父母允许，准备去东京。母亲也似乎顺便提

起，简单补充说“东京”。叔父马上接道：“放心，不必挂念。”母亲大约属于耐得住高烧的体质，叔父向我夸奖母亲，说她“刚强得很”。但这是否就是母亲的遗嘱，如今想来也不得而知。母亲当然晓得父亲所得之病的可怕名称，也知道自己已被传染上。但她是否相信自己肯定被此病夺走性命，我想总还是有怀疑余地的。而且，母亲高烧时说出的话纵使再明晰再有条理，也时常说完就忘得一干二净，所以……不过问题不在这里。只是，如此把事物拆开来寻根问底或转来绕去看个没完的毛病，从那时便已完全形成。从一开始我想就应该向你交代一下：这种作为实例同眼下问题无甚关系的叙述，反而可能有些作用。你也这样看下去好了。这一禀性想必在伦理上影响到一个人的行为、动作，使得我日后愈发怀疑起别人的道义之心。它极力推动我走向烦闷、苦恼的深渊。这点毋庸置疑，请你记住。

话一跑题，难免不易明白，还是言归正传吧。我所以还能够写这封长信，大约是因为较之处境与我相同的人，我心里还多少有所余裕。世人睡下时应该听得的电车的轰隆声已经杳然远逝，木板套窗外不觉之中微微响起忧郁的虫鸣，使人凄然想起银露生凉的寒秋。一无所知的妻在隔壁睡得那般恬适和天真。我拿起笔来，笔尖刷刷有声地一笔一画地写着。此时此刻，心情莫如说是平静的。笔尖或许因久不握笔而滑出格外，但似乎并非头脑混乱而信笔乱写的。

4

总之，落得孑然一身的我，只能依照母亲吩咐依靠这个叔父。叔父也负起了所有责任，照顾得无微不至，并按我的愿望，安排我去了东京。

我来东京上了高中。那时的高中学生远比今天野蛮粗暴。我认识的一个夜里同工匠吵架，拿木屐打伤了对方脑袋。因是酒后闹事，忘我厮打时间里，给对方抓去了校帽，而校帽里的一块菱形白布分明写

有本人姓名。于是事情麻烦起来，险些被警察告到学校。在朋友百般努力之下，总算没有公开闹出乱子。如此野蛮行径，在你们这些在今天文雅风气中长大的人听来，想必觉得荒唐傻气。实际上我也觉得荒唐傻气。但反过来，他们具有时下学生所不具有的质朴之处。当时我每月从叔父手里领得的钱，比你父亲寄给你的要少得多（当然物价也不同）。尽管如此，我一点也没感到不满足。就经济这点来说，在几个同级生中我绝未处于羡慕他人的可怜境地。如今回想起来，恐怕倒是受人羡慕的对象。因为每月除了固定汇款，我还时常向叔父讨书本费（那时我就喜欢买书）以及临时费用，可以随心所欲地花掉。

不谙世事的我，不仅相信叔父，还常以感谢的心情敬重叔父，庆幸有这样一位亲人。叔父是个实业家，还当过县议会的议员。或许由于这个关系，记得他同政党也有交往。虽是父亲的胞弟，但在这点上，其发展方向看上去完全不同于父亲。父亲是个珍惜祖传家业的老实厚道的人。兴之所至，以茶道或插花自娱，还喜欢看诗集。对于书画古董之类，也好像有浓厚的兴趣。叔父虽然房子在乡下，人则住在十五六里外的市里。常有古董商专门从市里拿来挂轴香炉等物给父亲看。总的说来，父亲可以说是个man of means，一个情趣颇为高雅的乡间绅士。所以，从性格来说，同豪放的叔父相差很大。但奇怪的是，两人又很要好。父亲时常说叔父远比自己有能耐，堪可信赖。并说自己这样继承父母财产的人，固有才华无论如何都将收敛锋芒——因为用不着与世相争，而这是不可取的。这些话母亲听见了，我也听见了。听起来父亲莫如说是在表达自己的心得。“你要好好记着才行。”父亲当时特意看着我的脸说，所以我至今未忘。对于受到父亲如此信任和赞赏的叔父，我怎么能够怀疑呢？有这样的叔父，我甚至引以为自豪。在父母去世后，对于一切都需人照料的自己来说，叔父不单单是我引以为自豪的存在了，更成了必不可少的亲人。

5

放暑假我第一次回乡时，叔父叔母已作为新的主人轮流住在自己没有了父母的家里了。这是我赴京前就已讲定的。既然只剩得一人的我还不在家，也只能采取这个办法。

那时叔父好像同市里各种各样的公司有了关系。从业务上来说——他笑道——较之搬到相距十五六里的我家，还是住在原来自己家里便利得多。这是父母去世后我同叔父商量如何处置房子才能赴京时从叔父口中流露的话。我家房子很有年代，在那一带多少为人所知。我想你老家也是如此，在乡下，有来历的房子在有继承人时却被其毁掉或卖掉，那可不是件小事。现在的我固然不以为然，但当时我还小，又要去东京，而房子又不能扔在那里不管，实在很伤脑筋。

迫于无奈，叔父答应住到我家里来。但市里的房子毕竟不能总是空着，便提出要让他两头跑。我当然不可能有异议，甚至想，只要能去东京，什么条件都无所谓。

孩子气的我离开故乡后，心里的眼睛也还是依依遥望故乡，有一种游子情怀，觉得故乡仍有自己的归宿。虽说我那般迷恋东京，但思乡之情也很强烈，准备一放假就回去。我用心学习，尽兴游玩，夜晚时常梦见放假即可回去的故乡。

我不知道自己不在期间叔父是怎样两边跑来跑去的。我回到家时，叔父一家全都聚集在这边我的家中。上学的小孩想必平时住在市里，但由于也放假了，便被领来这里，也算是来乡间玩一玩。

见我回来，大家都很高兴。看见家里反倒比父母在时还要热闹，我也很欢喜。叔父把占据我原先所住房间的一个男孩赶走，把我让了进去。因为客厅也有好几个，我谦让说其他房间也没关系，但叔父不允，说这是我的家。

除了不时想起去世的父母，我没有任何不快地同叔父一家度过一个夏天，重返东京。那个夏天唯一给我心里投下淡淡阴影的事，就是

叔父叔母异口同声劝刚刚上高中的我结婚。前后大约劝了三四次。由于事出突然，一开始我唯有吃惊而已。第二次明确拒绝了。第三次，我不得不反问为什么结婚。两人的理由很简单：快些娶媳妇回到这里来继承父亲留下来的家业。我原以为只要放假回来就可以了。两人却说继承家业需要娶媳妇。二者听起来都有其道理。尤其晓得乡下习俗的我很能理解，也不绝对讨厌。但我刚赴京求学，对我来说，那只不过是像用望远镜看到的远景而已。我没有按叔父的希望答应下来，就这样再次离开了家。

6

提婚的事我再也没有记起。看我四周年轻人的面孔，没有一个像是拖家带口的，都好像自由自在，单身一人。其实即使如此无忧无虑的人当中，若深入其中，也可能已有人由于家庭原因而被迫娶妻。但不谙世事的我没有意识到这点。再说，纵使处境果真如此特殊的人，也恐怕因顾忌周围而尽量不说那种与学生关系不大的私事。事后想来，我自己便已是其中一员。而我却没有这种意识，只管欢欢喜喜在求学路上行进。

学年结束，我又捆起柳条箱，回到父母坟墓所在的乡下。并且又像去年那样，在父母生活过的自己家中见到了叔父、叔母及其子女熟悉的面孔。我再次嗅到了故乡的气息。这气息依然撩人情怀。这肯定也是因为故乡给我一年单调的学习生活带来刺激的缘故。

可是，在这块养育自己的土地上，在同样的气息中，叔父突然再一次把婚事捅到我鼻端。叔父无非重复去年的劝诱，理由也一如去年。只是上次相劝时没有任何目标，而这次手中有了明确对象，愈发使我左右为难。对象就是叔父的女儿即我的堂妹。叔父说，娶这个堂妹双方都方便，父亲在世时也这样说过。我也认为这样方便，觉得父亲对叔父说这样的事也是可能的。然而这是叔父如此提起之后才意识

到的，提起之前我并没有想到，所以我吃了一惊。虽然吃惊，但也因此得以理解叔父的希望亦在情理之中。或许我粗心大意，也可能真是那样——我拒绝这门婚事的主要原因恐怕在于我对堂妹的不注意。从小我就总去叔父家玩。不光玩，还时常住在那里。从那时就跟这个堂妹很熟。你怕也知道，兄妹之间从来不曾发生恋情。也可能是我随意演绎这个众所公认的事实，我总觉得朝夕相处、耳鬓厮磨的男女之间，已经失去了激发恋情所需要的新鲜感。嗅得香气只限于刚焚香的那一瞬间，品出酒味只在于乍饮酒的那一刹那。同样，爱的冲动也在时间上存在这么间不容发的一点。一旦心无所觉地通过了那里，那么相互越熟便只是越亲密，爱的神经则渐渐变得麻木不仁。无论怎么思来想去，我都没心绪让堂妹成为自己的妻子。

叔父说，若我一定坚持，推迟到我毕业再结婚也可以。但正如俗话所说，好事不宜迟，可能的话，至少先把交杯酒喝了。而我是对堂妹本人没有兴致，因此怎么都是一回事。我又一次拒绝。叔父脸沉了下来。堂妹哭了。毕竟求婚被拒对女人是件难堪的事，而不是为没我陪伴而感到伤心。如我不爱堂妹，堂妹也不爱我，这我十分清楚。我再次动身赴京。

7

第三次回乡，是又过了一年的初夏时节。每次都好歹捱到学年考试结束就逃离东京，我便是这样思念故乡。你怕也有感受，自己出生的地方，空气色调不同，泥土气味不同，浓浓荡漾着关于父母的记忆。一年之中，把七八两个月包在这里边，像入洞蛇一样静止不动，对我比什么都舒坦和温馨。

在同堂妹的婚事问题上，单纯的我觉得没有必要那么伤脑筋。不愿意就拒绝，拒绝也就了结了，我是这样认为的。所以，尽管我没按叔父的希望改变主意，仍旧不以为然。过去的一年时间里我也从未对

此耿耿于怀，照样兴致勃勃返回故乡。

不料回来一看，叔父的态度变了，再不似以往那样和颜悦色地像要把我拥入怀中。但一帆风顺长大的我，回来四五天时间里并未觉察出来。是一个偶然机会使我一下子意识到的。结果发现，莫名其妙的不光叔父，叔母也莫名其妙，堂妹也莫名其妙。就连初中毕业很快要去东京读商业高中——来信问过那里的情况——的叔父的儿子也变得莫名其妙。

出于禀性，我不能不动脑思索：为什么自己的感觉变了呢？不，为什么对方变成这样子了呢？我怀疑是不是我死去的父母突然擦亮我模糊的眼睛，使我顿时看清这个人世。我在内心深处相信父母辞世之后也依然像在世时那样爱着我。当然，即使那时候我也绝非不明事理之人。但先祖遗传下来的迷信念头，的确根深蒂固地潜伏在我的血液中。现在恐怕也如此。

我独自一人进山跪在父母墓前，半带悼念的意味，半怀感谢的心情，并且以自己未来的幸福仿佛仍掌握在安卧于眼前冰冷石块之下的父母手中那样的感觉，祈求两人保佑自己的命运。你可能发笑。我也觉得你笑得有理。但我就是这样一个人。

我的处境风云突变。不过对我来说，这不是第一遭。大约十六七岁的时候吧，当我第一次发现世上存在那般美好的东西时，心头也曾为之一震。我不知多少次怀疑自己的眼睛，不知多少次擦拭自己的眼睛，并在心中叫道啊漂亮啊。十六七这个年龄，男的也好女的也好，正是所谓常言道情窦初开时节。情窦初开的我第一次发现女子乃是世间美的代表。在迄今浑然不觉的女性面前，就好像眼睛突然失而复明。自那以来，我的天地彻底焕然一新。

我注意到叔父的态度，与此完全是同一种体验。可谓豁然开朗。没有预感，没有准备，如风而至。在我眼里，叔父及其家人陡然成了

别人。惊愕之余，又为自己的前程担心，不知如何是好。

8

我开始觉得，若不详细把握这以前委托给叔父的家产，便对不起父母。叔父说他很忙，每晚都不睡在同一地方。两天回这边，三天去市里，两头跑来跑去，天天一副行色匆匆的样子，“忙”成了他的口头禅。没起任何疑心的时候，我也以为他真的很忙，或者不无挖苦地理解为恐怕只有忙才显得合于时流。然而在有了想找时间谈财产的目的的现在，见到那匆忙的样子，便只能理解为不过是躲避自己的口实罢了。我很难抓住机会同叔父摊牌。

风闻叔父在市里有个妾，是从初中一个同学口里听得的。作为叔父，有个妾也不足为奇。但我还是感到意外，因为父亲在世时我从未听到过这等风声。那个同学此外还讲了叔父好多传闻。其中一个是说叔父的公司原本一时看上去濒于破产了，而这两三年竟骤然起死回生。这也是加重我疑心的一个因素。

我终于同叔父开始谈判。说谈判或许有欠稳妥。但事情的进展已自然而然到了这一步，只能用“谈判”一词来表达。叔父自始至终都把我当小孩看待，而我又从一开始就对叔父投以怀疑的目光，不可能顺利解决。

遗憾的是我现在急于往下讲，无法详细叙述谈判的始末。坦率地说，有比这更重要的事情等着我。我勉强控制自己，才没有使笔锋马上跑到那里。永远失去同你见面细谈机会的我，不仅提笔不习惯，还因为要节省宝贵时间，而不得不对想写的事项忍痛割爱。

你大概还记得，一次我对你说过世上没有天造地设的恶人，而大多是由善人在关键时刻摇身一变生成的，所以马虎不得。当时你提醒说太激动了，并问什么情况下人会由善变恶。我只答一个钱字。你现

出不满的神色。那神色仍历历在目。现在我把实话告诉你，那时涌上我心头的就是叔父的事。我以憎恶的情感看待这个叔父，把他视为普通人突然见钱变坏的一个典型，视为世上不存在堪可信赖之人的一个例证。对于急欲突入思想纵深处的你来说，我的回答也许不够充分，也许是陈腐之见，但它是我活的回答。实际上我不也在激动么？我相信，较之以理性的头脑讲述新的问题，倒不如以炙热的唇舌诉说平凡的事实更为生动有力。身体因血的作用而动。语言不仅仅振动空气，还可以强有力地作用于强有力的物体。

9

一言以蔽之，叔父在我的财产上做了手脚。这在我三年赴京时间更可以轻而易举地做到。一切都委托给叔父而不以为意的我，让世人说来，简直是个傻瓜；而若以超乎世人的眼光来看，也可以称为淳朴可敬之士。回顾当时的自己，真是悔恨交加：自己为什么那么迂腐，而没有生得奸诈些呢？我恨不得重新回到初生之时。请记住，你所知道的我是污染后的我。若将污染年头多的人称为前辈的话，之于你，我的确当之无愧。

假如我遵照叔父的意愿同他的女儿结婚，其结果，物质上想必对我有利，这是无须多想的。叔父把女儿推给我是一种谋略。与其说是出于为了两家方便的好意，不如说是利欲熏心使然。我只是不爱堂妹，并不讨厌。不过事后想来，还是拒绝多少让我开心。在被蒙混这点上两人固然彼此彼此，但从被推上场的我来说，不娶堂妹便等于没按对方意愿行事，而有些我行我素。不过这几乎是不成为问题的琐事。尤其以与此无关的你看来，未免意气用事，傻里傻气。

其他亲戚介入到我和叔父之间。对这些亲戚我也根本不信任。不仅不信任，还有敌视情绪。我在发觉叔父欺骗自己的同时，认定别人也肯定欺骗自己。我的逻辑是：就连父亲那般赞不绝口的叔父都这

样，何况别人呢！

尽管如此，他们还是把大凡属于我的东西给我归拢在了一起。以金额估算，比我预料的少得多。作为我，或者默默接受，或者同叔父对簿公堂，此外别无他法。我既气愤，又困惑。若打官司，又怕拖很长时间才出结果。毕竟尚在求学，如此被夺去宝贵时间，作为学生是非常痛苦的。思来想去，最后求市里一个初中老同学把我接受的东西统统变成现金。老同学劝我作罢，但我不听。那时我已打定主意，永远离开故乡，并在心里发誓再也不见叔父。

动身之前，我又一次来到父母墓前。那也是最后一次，恐怕永远不会再有机会了。

老同学按我说的办了。当然，办好已是我回京很久以后的事了。在乡下，卖地不是一件容易事，又要提防别人趁机会压价。所以我取得的金额较之时价要少许多。坦白说来，我的财产不外乎自己离家揣在怀里的若干公债，和后来老同学寄来的钱。作为父母遗产，无疑一开始就大打折扣，加之又不是我故意造成的，心里就更不愉快。不过作为学生，维持生活已绰绰有余。说老实话，我连利息的一半都没用完。而这优裕的学生生活使我陷入了始料未及的境地。

10

手头阔绰的我准备搬出嘈杂的宿舍，自己单独住一座房子。但一来我懒得买家具，二来势必请老婆婆。而这老婆婆又必须可靠，以便离家外出也能放得下心才行。这么着，就犹犹豫豫拖延下来。一天，我心血来潮地想找找房子，半是散步地从本乡台往西下，然后沿小石川坡路径直往传通院那边爬去。如今通了电车，那一带已面目全非了。但当时左边是炮兵工厂的土围墙，右边是一片既非原野又非山丘的空地，空地上满目杂草。我站在草丛中，漫不经心地朝远处山崖望去。现在风景也不算坏，那时西侧更是别具一格。举目四望，到处百

草葳蕤，绿意盎然，令人神经为之舒缓。我蓦然想道，这一带会不会有合适的房子呢？于是一直穿过草地，顺一条小径往北走去。现在仍未成为一条像样的街道、房屋吱呀作响的那一地段，当时更是又脏又乱。我穿街过巷，到处转来转去。最后向一家粗点心铺的老板娘打听这一带有没有不太大的好些的房子可租。“这个……”她歪头想了一会儿，“那样的房子怕是……”看样子完全没有目标。我看无望，正要回去时，老板娘问道：“在一般人家寄宿不可以吗？”我主意有点改变，心想一个人住在安静的一般人家里，省去了独住孤房的麻烦，倒也蛮好。于是我在这粗点心铺里弓身坐下，请老板娘详细说了情况。

老板娘说，那是一个军人家属或者不如说是军人遗属之家。主人大约是日清战争（日清战争：我国称“中日甲午战争”）时或什么时候死的。一年前住在市谷军官学校旁边。因房子过大，又有马厩什么的，便卖了搬来这里。但家里仍人少，冷冷清清，便托老板娘找个合适人住进来。我从老板娘口里确认，那户人家除了遗孀、独生女和一个女佣，再无别人。我心中思忖，如此安安静静再好不过。问题是那样的人家，突然闯进我这样一个对方不知底细的学生，很可能被拒之门外。我想还是算了。但转念一想，作为学生，自己衣着并不寒伧，并戴着大学里的校帽。或许你笑大学校帽有什么了不起。但那时的大学生与现在不同，在社会上很有信誉，以至于我在那种情况下从这四角帽中觅出一种自信。于是按粗点心铺老板娘的指点，没人引见便找到军人遗孀家里。

见遗孀讲明来意，遗孀就我的身份、学校、专业等问了许多，随后像是有了什么把握，当场答应我，说什么时候搬来都可以。遗孀是个地道人，又是个果断的人。我很佩服，以为军人之妻大约无不如此。佩服之余，又有些愕然。甚至想如此性格的人哪里会感到什么寂寞呢。

我马上搬进这户人家。租住的是最初来时同遗孀交谈的起居室。这是整座房子最好的房间。当时本乡一带已零星出现高等宿舍楼样的房子，对于作为学生所能占据的最好房间自是心中有数。我以新主人身份入居的这个房间要比那里的漂亮得多。迁入之初，我甚至觉得作为学生未免有些过分。

房间有八张榻榻米大，壁龛旁边有错落式搁板，迎檐廊那面墙带一个壁橱。窗口虽一个也没有，但从南面檐廊常有明亮的光线射进。

搬来那天，我见壁龛里有插花，旁边靠着琴。哪一样都不合我心意。我是在喜欢诗书烹茶的父亲身边长大的，从小就熏染上了中国情趣。或许因为这个，不知不觉之间形成了鄙视这种华丽装饰的倾向。

父亲在世时收集的古物之类，给那个叔父弄得七零八落，但仍多少剩一点，离开老家时放在中学同学那里保管，只从中挑出四五幅似乎蛮有意思的挂轴去了包装放在柳条箱底带来。一搬来我就打算取出挂进壁龛欣赏。但现在看见琴和插花，顿时没了勇气。后来听说花乃是出于对我的好意插在这里的，我不由心中苦笑。至于琴，却是一直放在那里，因为没别的地方可放，姑且继续立着不动。

说到这里，你脑海里自然会有年轻女子的姿影掠过吧。我在搬来之前这种好奇心便已经萌动了。或许这种不应有的念头事先损害了我的天性，也可能由于我还不习惯见人，总之第一次见到这家小姐寒暄时，我竟至语无伦次，而小姐那方面也红了脸。

这以前我根据遗孀的风度举止，就这小姐想象了许多。但所有的想象都对小姐不太有利。军人之妻是那个样子，那么其妻的女儿该是这般光景——我的推想便是以此逻辑步步展开的。然而在见到小姐的一瞬间，这推想便土崩瓦解。迄今从未想象过的异性风韵活鲜鲜涌入我的脑海。从此我再不讨厌壁龛当中的插花了，旁边靠着的琴也不再觉得碍眼了。

花更换得也按部就班，快要凋谢时，便有新的插来。琴也不时被搬去直角拐过的斜对面房间。我在自己房间手臂拄着桌面，支颐听那琴声。听不出琴弹得好还是不好。不过从弹得并不很复杂这点来看，想必相当一般，也就是插花这个程度。插花我也懂，知道小姐绝对算不得上乘。

尽管如此，小姐还是很坦然地用各种各样的花装点我的壁龛。当然，插法总是一个模式，花瓶也从未变过。若论音乐，就更等而下之了。只是一味砰砰拨弦，全然不闻真腔实调。倒也不是不唱，但声音太小，悄悄话似的。而且一受责备，便彻底哑然了。

我欣欣然看一会儿拙劣的插花，听一会儿不悦耳的琴声。

12

离开故乡时我的心情便已变得消沉厌世了。人是不可信赖的这一观念似已无可救药地沁入骨髓。我把自己敌视的叔父、叔母及其他亲戚简直看成了人类的代表。甚至乘火车都不由小心邻座人的举动。偶尔对方搭话，更加有了戒心。我郁郁寡欢，心里有时像吞铅一般沉重。然而神经却如我刚才说的那样十分敏锐亢奋。

来京后所以想退出宿舍，我想这也是一个重要原因。如果说有了钱就想另立门户倒也罢了，但以往的我，就算手头宽裕，恐怕也不至于讨此麻烦。

搬来小石川之后，也未能很快使我这紧张的心情缓解下来。我鬼鬼祟祟，东张西望，自己都为之羞耻。不可思议的是，乐此不疲的仅限于我的脑袋和眼睛，嘴巴则与此相反，渐渐懒得动了。我默默坐在桌前，像猫一样仔细观察房子里的情况。我把紧绷绷的视线倾泻在她们头上——有时我也觉得对人不起——简直成了不偷东西的贼。如此想着，甚至厌恶起了自己。

你或许觉得奇怪，如此状态下的我怎么会有心情喜欢那里的小姐呢？怎么会津津有味地观赏小姐那蹩脚的插花呢？怎么会喜滋滋倾听她同样差劲儿的琴声呢？你若这么问，我只能告诉你，两方面都是事实，只能如实相告。而如何解释，你脑袋好使，悉听尊便。我仅补充一点：在钱财上我固然怀疑人类，但在爱情上我还没有怀疑。所以，别人看来觉得奇怪的东西，并且我自己想来也觉得矛盾的东西，都可以在自己心中相安无事。

我经常以夫人称呼那位遗孀，所以往下不再称遗孀，改称夫人。夫人说我是个安静的人，一个老实人。还夸我用功。至于我不安的眼神、鬼鬼祟祟的样子，却绝口不提。不知是浑然未觉，抑或出于客气，总之看上去夫人对此根本没有理会。不仅如此，有时还说我落落大方，口气里颇有尊敬意味。老实说，当时我一阵脸红，说自己并非那样。结果夫人一本正经地解释道："你自己没意识到，所以才那么说。"一开始夫人似乎不打算招学生进门，而像是求附近的人帮忙介绍在官府或什么地方做事的人，将起居室租出去。大概夫人脑袋里早就有这样一个想法，认为那类人薪水不多，只能租住民房。夫人将自己心中描绘的房客同我加以比较，夸我落落大方。诚然，较之节衣缩食之人，在花钱方面我也许算大方的。但这不属于性格问题，同我的精神生活几乎没什么关系。而夫人毕竟是妇女，力图将其扩展到我的所有方面，全部以此一句话来概括。

13

夫人这种态度自然影响到我的心情。过不多久，我的眼神也没那么贼溜溜的了。感觉上仿佛自己的心整个落回到了其应在的地方。总之，恐怕是夫人及其家人对我不正的眼神和充满狐疑的样子全然不予理会这点，给了我巨大的幸福。由于没有对方反射过来的光照，我的神经逐渐得以平复。

夫人是个有教养的人，不妨认为她是特意这样对待我；或者如其明确说的那样，果真把我看成落落大方的人亦未可知；也可能我的疑神疑鬼只是我脑袋里的活动，没怎么显露于外，以致夫人未能看穿。

随着心情的趋于沉静，我开始逐渐同两人接近，无论夫人还是小姐，我都可以与之开玩笑了。有时候我被叫去那边房间喝茶，也有时候我买来糕点，晚上把两人请到我这边来。我觉得交际范围好像一下子扩展开来。有好几次我因此浪费了宝贵的学习时间。奇怪的是，对这样的妨碍我全然不以为意。夫人本来就是闲人。小姐要上学，还正在学插花学琴，以为大概很忙，不料看上去好像时间任凭多少都有。于是三人一见面就聚在一起谈天说地。

过来叫我的，大多是小姐。小姐有时拐过檐廊直角，站到我房间前面；有时穿过茶室，从邻室隔扇闪出身来。到得跟前，小姐稍停一会儿，然后叫我的名字，问道："用功呢？"通常我在桌面上摊开一本很有难度的书，所以从旁看来我俨然一副用功架势。其实我没有怎么钻进去。眼睛虽盯着书页，心里却等待小姐来叫。若等也不来的时候，就只好站起身，走到那边房间跟前，由我问："用功么？"

小姐房间同茶室相连，六个榻榻米大。夫人有时在茶室，有时在小姐房里。就是说，两个房间的间隔有也等于没有，母女两人你来我往，共同使用。我从外面打招呼，应道"请进"的必定是夫人，小姐即使在里边也极少应声。

后来，小姐开始偶尔单独因事来我房间，就势坐下来一聊很久。这种时候，我心里便奇异地涌起不安。我不认为这不安完全来自同年轻女子的对坐，总好像有什么使我心神不定，一种自我出卖般的不自然的态度折磨着我。而对方却坦然自若，全无羞涩的样子，以致使我怀疑这是否就是那个弹琴而连声音都发不明白的女子。坐得太久了，母亲从茶室那边喊她，她也只是答应一声，而不轻易离座。但小姐绝对不是小孩，这点我完全看得出来。小姐有的举止甚至显然想让我看

出这一点。

14

小姐离开后，我舒了一口气。同时又有一种既像意犹未尽又像歉疚不安的心情。也许我有些女人气。在当今年轻人的你看来恐怕更是如此。但那时候的我们差不多都这个德性。

夫人很少外出。偶然离开家一次，也不曾把小姐和我单独留下，不知是巧合还是有意。从我口中说出可能不大好：仔细观察夫人的表现，大概也有点想让自己的女儿同我接近。不过在某种情况下，还是对我暗暗怀有戒心的。而每当这时，我便心生不快。

我很想让夫人把态度或此或彼明确下来。因为从大脑功能来看，显然自相矛盾。但我受叔父蒙骗的事还记忆犹新，不能不抱有更深一层的疑念。我想判断夫人的态度哪个是真哪个是假，但很难分辨。不仅如此，我还未能弄清如此奇妙做法有何意义，想理由也想不出，于是将罪过一概归于这个“女”字，以此勉强说服自己。女人就是这样子的，女人这东西反正就是蠢。每当我想不下去时，思维便落到这个地方。

如此看不起女人的我，却无论如何也不能看不起小姐。我的逻辑在她面前完全派不上用场。对她我怀有一种近乎信仰的爱。见我把这只适用于宗教的字眼用在年轻女子身上，你或许为之惊诧，但我至今仍这样深信不疑，深信真正的爱同宗教信仰没有什么不同。每当瞧见小姐的面容，我便感到自己变得美好起来；每当想到小姐，未尝不觉得自己顿时变得超尘脱俗。假如爱这个神奇的东西存在两端，高的一端涌动神圣感，低的一端鼓涨性欲，那么，我的爱的的确确捕捉住了高的一端。作为人，我原本是肉体凡身，但我面对小姐时的眼睛、念及小姐时的心境，丝毫不带有肉欲气息。

我一边对夫人抱有反感，一边日甚一日地思恋其女儿。于是三人的关系较我刚入住时日趋复杂起来。当然，变化几乎仅限于内心，没有形诸于外。不久，一个偶然的机会使我觉得自己以前恐怕误解了夫人，转而认为夫人对我的矛盾态度，二者大约都不是虚假的。并且二者不是交替支配夫人的心，而是任何时候都双双存在于夫人的胸际。也就是说——我觉察出——夫人一方面想尽量使小姐接近我，一方面对我增强戒心。看起来似乎矛盾，但在增强戒心的同时，并未忘记以至推翻另一种态度，依然想让两人接近。只是有所顾忌，即不想让两人密切的尺度超过自己的允许，我是这样解释的。对于小姐，我从未萌生过从肉欲方面接近的念头，认为夫人的担心纯属多余。不过我对夫人抱有的厌恶感倒是很快消失了。

15

综合分析夫人的种种态度，我得出结论：自己在这户人家里受到了充分信任。甚至找出了从一开始见面便受到信任的证据。这一发现对于已开始疑神疑鬼的我是一个不无奇异的震动。我想，较之男人，女人恐怕正因其是女人而更富于直觉。而女人所以为男人欺骗，其原因也可能在这里。如此看待夫人的我，对小姐也怀有同样强烈的直觉。如今想来有点好笑，自己虽在心里发誓不相信别人，却绝对相信小姐，而对信任我的夫人又有点神经兮兮。

我不太愿意多谈老家的事，那场风波更是只字未提，连让它掠过脑海都觉得不快。我尽可能只听夫人说话。但对方不答应，一有机会就想了解我老家的情况。终于，我全盘托出，并说我再也不回故乡了，回去也什么都没有了，有的只是父母坟墓。夫人听了，露出十分感动的样子。小姐哭了。我庆幸自己说了出来，心里很是痛快。

听我说出一切后，夫人的态度有所变化，像是在说其直觉果然命中。那以来就像对待她一个年轻亲戚或什么人一样待我。我没有气

恼，莫如说有些高兴。不料，我的疑心又很快冒了出来。

我开始怀疑夫人，是鸡毛蒜皮小事引起的。但随着这类小事的增多，疑惑也就渐渐扎下根来。一个偶然的情况，使我突然怀疑夫人说不定以叔父那样的用心来促使小姐接近我。这样一来，原本看起来和蔼可亲的夫人，突然在我眼里成了狡猾的阴谋家。

起始，夫人明确说过因为家里无人、寂寞才招人入住。我也不认为这是说谎。在相互熟悉起来听她坦率讲了很多以后，我也仍有这个感觉。但经济情况一般，算不上怎么宽裕。从利害角度考虑，同我有特殊关系，对方绝不吃亏。

我又多了戒心。但对于小姐仍怀有上面说过的那种强烈的爱。这样，再对其母亲抱有戒心又能怎么样呢？我暗暗嘲笑自己，也骂过自己是傻瓜。但这种程度的矛盾，即使再是傻瓜我也没怎么为之痛苦。我的苦恼是从遇上小姐会不会也是她母亲那样的阴谋家这个疑问才开始的。想到两人可能凡事都是事先在背后策划好了的，我就一下子变得痛苦不堪。并非不愉快，而是一种身陷囹圄般无可逃遁的感觉。另一方面，我又坚信不疑。所以，我站在信念与迷惘的夹缝中全然动弹不得。对我来说，哪方面都是想象，又哪方面都是事实。

16

我照样去学校上课。但讲台上那个人讲的课，听起来仿佛相距很远。看书也是如此，闪入眼帘的铅字没等沁入心底便烟消云散了。我变得沉默寡言。两三个同学误以为我耽于冥想，又讲给其他同学。我无意去解释。有人借给我求之不得的假面具，我反倒暗自庆幸。不过仍有时心理不平衡，以致突如其来地发起脾气，弄得他们目瞪口呆。

我住的这户人家很少有人出入，亲戚也似乎不多。小姐的同学倒是偶尔来玩，但一般说话声音极小，几乎分不清有人还是没人，如此

说了一会儿便回去了。连我自己都没意识到那是对我有所顾忌。来我这里的人，固然没有胡闹的莽汉，但顾忌房东的人却是一个也没有的。到如此地步，我这个房客俨然一家之主，举足轻重的小姐倒沦为寄人篱下者了。

但这些只是随想随写，实际上怎么都无所谓。并非无所谓的事只有一件，那就是茶室或小姐房间忽然传来的男人语声。语声不同于我的客人，音量相当低沉，根本听不清说的什么。而越是听不清说什么，越是给我的神经带来一种亢奋。我开始心烦意乱，坐立不安。是亲戚，还是熟人呢？我首先这样推想，继而猜测是年轻人还是年长者。当然，坐在这边怎么想也无从得知，却又不可能打开隔扇看个究竟。我的神经阵阵发颤，进而卷起波浪拍击着我。客人走后，我肯定一次不忘地打听来人姓名。小姐和夫人的回答又总是那么简单。我自然不够满足，但又没有勇气刨根问底。无须说，自己没有那个权利。我在两人面前同时表现出来的，一是来自教育——来自必须注意自己品格这一教育的自尊，一是背叛这种自尊的私欲。两人笑了。不知是并非嘲笑的善意的笑，还是装出的善意的笑，我已失去镇静，没办法当场觅出答案。事情过后，我便在心里无数遍重复：自己又遭奚落了，大概又给愚弄了。

我是自由之身。中途退学也好，去何处生活也好，同何处的何人结婚也好都无需同任何人商量，这以前我好几次下决心请夫人把小姐嫁给我，但每次话到嘴边，我都犹犹豫豫未能出口。不是我害怕遭到拒绝；若遭拒绝，自己的命运发生怎样的变化我固不晓得，但也会使我有机会站在与现在不同的方位来展望新的世界。所以这点勇气若拿也还是拿得出来的。但我讨厌被人诱惑，受骗上当比什么都令我恼火。我已被叔父骗了一次，无论如何不能再让人骗！

见我光是买书，夫人劝我多少买点衣服。实际上我只有乡下织的棉布衣服。那时候的学生身上不沾丝绸之类。我一个同学出身横滨商家，家里生活甚是富裕，一次给他寄来一件白纺绸做的衬袄，结果大家见了，都笑了起来。这个同学狼狈地辩解一番，索性投进箱底。但大家围上来偏让穿在身上。不巧，那衬袄生了许多虱子。本人大概求之不得吧，把那件给他惹麻烦的衬袄团团卷起，出去散步时随手扔到根津一条大脏水沟里去了。同他走在一起的我从桥上目睹其所为，心中全然没有产生惋惜的念头。

从那时看来，我也已是大人了，但还不晓得自己应该有一套出门穿的衣服，莫名其妙地认为在毕业留胡子之前，用不着操心什么衣服。所以我对夫人说要书不要衣服。夫人知道我买了不少书，遂问买的书都要看么。买的书里边也有辞典，本来应该翻看，但一页没动的多少也是有的，于是我不知如何回答是好。但我意识到，反正是买不必要的东西，那么书也好衣服也好岂不一回事。随即以没少受其关照为由，说想给小姐买她中意的衣带、衣料之类，一切拜托夫人。

夫人不说她一个人去，令我同行。还叫小姐也跟着。我们是在与现在不同的空气中长大的，作为学生不太习惯同年轻女子一路走来走去。当时的我比起现在还是习俗的奴隶，迟疑一会儿，才咬牙跟出门去。

小姐打扮得花枝招展。原本皮肤白皙，又涂了一层白粉上去，愈发引人注目。来往行人都直勾勾看她。奇妙的是，看罢小姐的人肯定把视线转到我脸上。

三人去日本桥物色想买的东西。买的时候又见异思迁，比预想的多费不少时间。夫人特意叫我的名字问我看怎么样。有时还把衣料由肩到胸贴在小姐身上，叫我退两三步端详。每次我也都像模像样发表意见，诸如“不成”“满合身嘛”之类。

如此花时间买完往回走时，已到晚饭时间。夫人说要招待我吃东西表示感谢，把我领进有一家名叫木原店的有说书场的小巷。小巷很窄，吃饭的地方也很窄。我对这一带全然不知东南西北，不由佩服夫人的经多见广。

入夜时分我们回到家里。第二天是星期天，我整天闷在房间没动。星期一上学，一大早便有一个同学拿我开玩笑，很做作地问我什么时候结婚，还夸说我的妻真是绝代佳人。估计三人一起去日本桥时对方在哪里瞧见了。

18

回来我把此事讲给夫人和小姐听。夫人笑了，说："给你添麻烦了吧？"说完看我的反应。我心里想，男人恐怕就是这样给女人试探心意的，夫人的眼神充分含有让我如此认为的意味。当时或许应直言相告才是。但我心里还有所谓"狐疑"没有解开。本想直言相告，却犹豫了一下，故意把话岔开。

我把关键的自己这一存在从问题中刨了出去。我就小姐婚事揣度夫人的想法。夫人明确告诉我提婚的事有两三桩，但小姐年轻，又在上学，并不怎么急的。我看得出来——夫人倒是没说——对方都很看重小姐的姿色。夫人甚至透露说，想定任凭什么时候都定得下来，所以不轻易放手，只有小姐这一个孩子也是一个原因。听语气，似乎连嫁出去还是找上门女婿都没拿准主意。

如此说着，我觉得从夫人口中了解到不少情况。但因此得到的结果却是同样：坐失良机。我竟至一句也没提到自己。我适可而止地准备返回自己房间。

小姐刚才还在一旁笑道"别欺负人了"，却不知何时去了对面角落，背朝这边。起身时看见她的背影。只看背影无法看出人心里想的

什么。我未能摸清小姐对这个问题的想法。小姐脸朝衣柜坐着。衣柜打开一尺来宽空隙，小姐似乎从中拉出什么放在膝头上看。我在空隙的一端发现了前天买的布料。原来我的衣服她的衣服都叠放在衣柜的一角。

我不声不响离开时，夫人突然换上郑重其事的语气，问我怎么想。问得很让我意外，我差点儿反问我就什么怎么想。当我明白是在问我是否把小姐快些安顿了为好时，我回答最好尽可能往后拖一拖，夫人说她也那么想。

夫人、小姐和我的关系处于如此状态时，另一个男人要加入进来。他成为这一家的一员后，给我的命运带来极大的变化。假如没有他切断我生活的行程，我恐怕也就没必要给你留下这么长的文字了。就好像我呆愣愣站在恶魔的通道前，而未意识到其瞬间的魔影将使我一生黯然失色一样。老实说，是我自己把他拉来的。这当然需征得夫人同意。我一开始便毫不隐瞒地说出一切，求她允许。不料夫人叫我“算了”。我有不得不领来的缘由，夫人却让我“算了”——简直不讲道理。于是依自己的判断一意孤行。

19

在这里我把这个朋友称为K。我和K从小就很要好。说从小，我不解释你怕也知晓，两人有同乡之缘。K是真宗和尚之子。但不是长子，是次子。所以送到一个医生家当养子。我出生的地方本愿寺派的势力很强，所以真宗和尚生活上似比一般人充裕。举个例子说吧，如果和尚有女孩，等女孩长大时，施主便会上门商量，把女孩嫁到合适的地方去，费用当然不用和尚自掏腰包。这样，真宗寺院大多都较富裕。

K的生身父母之家也过得不错。但有无财力把次子送去东京上学，我不得而知。或者是不是因为供其去东京上学，养子之事才得以

谈妥的，这个我也不清楚。总之K去医生家当了养子。那还是我们上初中的事。现在我还记得老师在讲台点名时，我为K突然换姓感到吃惊。

K当养子的人家也很有财产。K是从那里拿得学费来京的。出来时不是和我一起，来京后马上住进了同一栋宿舍。那时候一个房间常有两三个人桌对桌一块儿起居。K和我也是两人一个房间。好比山里活捉来的两个动物，在笼里相互抱着瞪视笼外。两人畏惧东京和东京人。而在六个榻榻米大的房间中，却可以口吐狂言，睥睨天下。

但我们是认真的，我们确实打算出人头地。K尤其厉害。出生于寺院的他经常使用“精进”一词。在我眼里，他的所有举动行为均可以此“精进”来形容。我在内心常对K怀有敬畏之感。

K念初中时就曾用宗教或哲学等复杂问题把我难倒。不知是他父亲的感化，抑或其生身之家即寺院那种特殊场所特有的气氛的影响使然。总之，看上去他远比一般僧人还具有僧人气质。本来K的养父母送其来京是想把他培养成为医生，但顽固的他决意不当医生。我责问他那岂不等于欺骗养父母。他倒也坦荡，回答说是的。并说为道之故，这点欺骗并无不可。当时他口中的所谓“道”，恐怕他本身也不甚明了。我当然不能说我明白。但对于年轻的我们，这个抽象字眼有一种卓尔不群的高贵韵味。纵使不解其意，而只要心怀凌云之志朝那方面身体力行，也不至于现出猥琐。我赞成K的说法。至于我的赞成对K有多大作用，则不得而知。他只认死理，哪怕我再反对，我想他也还是要贯彻自己的想法。但在个别情况下，给予声援的我多少是有责任的，这点尽管我不谙世事也很清楚。纵使当时我没有那样的思想准备，而在需要以成人眼光回顾过去的时候，我也要理所当然地负起分到我头上的责任。对此我毫无异议。

K同我进入同一个系。K以满不在乎的神情把养父母寄来的钱用来走自己喜欢的路。K心里同时有两种东西：一是觉得对方绝不会知道的释然，一是认为知道了也无所谓的勇气——我想只能这样分析。K比我还要镇静。

第一年暑假，K没有回乡，说要在驹込一座寺院租一间屋学习。我回京已是九月上旬了，他果然整天闷在大观音旁边一座脏兮兮的寺里。他的房间紧挨正殿，很窄小，但他很高兴，像是庆幸可以在此尽情学习。我觉得那时他的生活看上去逐渐像个僧人了。他手腕挂一串念珠。我问何用，他用拇指数了一两个给我看。大概他便是这样一天数好几遍。只是我不解其意何在。穿成一串的东西一颗颗数下去，任凭数到哪里都数不完。K将以怎样的心情在什么地方停下手呢？我时常这么想来想去，尽管想不出名堂。

我还在他的房间发现了圣经。记得以前屡屡听他道出经文名称，而基督教则从未有过问答。我有点愕然，不能不问个中缘故。K说无缘无故。并说这般难得可贵的书，看一看是理所当然的，而且表示有机会还打算看一看《古兰经》。看来他对穆罕默德与剑这句话大感兴趣。

第二年暑假，老家催他回去，他才动身。回去后大约也绝口不提所学专业的事。家里也没有察觉。你受过学校教育，这方面情况想必十分清楚，社会上对学生的生活、学校的规章无知得惊人。而我们对于无关紧要的事又概不透露给外界。由于我们呼吸的尽是相对属于内部的空气，以致养成一种毛病，总以为校内情况巨细无遗地为世人所知。在这点上，K恐怕比我了解社会。结果他又若无其事地回京了。离乡时我和他一起，一上火车我就问K怎么样。K答说怎么样也不怎么样。

第三个暑假是我决心永久离开父母长眠之地那年。那时我劝K回乡一趟，K不应，说年年回去干什么。看样子他又想留下用功。没办

法，我独自一人启程离京。至于我回乡两个月时间在我的命运上掀起了怎样的波澜，前面已经写过，不再重复了。我满怀不平、忧郁和孤独感，九月又见到了K。不料，他的命运也和我同样急转直下。原来他瞒着我给养父母写了封信，主动坦白自己的欺诈，他一开始便有这种精神准备的。大概是想让对方说事已至此别无他法随你去吧。总之他好像没打算上大学还一直欺骗下去，也可能看出欺骗也骗不了很久。

21

养父看了K的信，大发雷霆，当即回了一封措词严厉的信，说再不能给欺骗父母的混账东西寄学费。K给我看了信，相继从生父家接到的信也给我看了，信上责备得同前一封信一样严厉。或许亦是出于对不起养父母家的情理，后者也表示再不理睬K。由于这一事件，K或者复籍回到生父生母家，或者设法达成妥协继续留在养父母处，而那却是往后的问题，当务之急是筹措月月少不得的学费。

我问K就此有什么想法。K回答准备当夜校老师什么的。较之现在，当时世上意外宽松，临时性工作并不像你想象的那么绝望。我以为K完全可以支撑下去。但我有我的责任。K违背养父母的希望准备走自己的路时赞成的是我，所以我不能袖手旁观。我当场提出生活上可以由我补贴。K马上一下拒绝。从其性格上说，大概觉得自食其力要比处于朋友的保护下快活得多。他说，既然上了大学，就要靠自己奋斗才行，否则便算不上男人。我不能为尽自己责任而伤害K的感情，遂任他自行其是，撤下身来。

K没甚费事就找到了自己中意的临时性工作。可想而知，对于珍惜时间的他来说，工作是多么难以忍受。但他一如既往，丝毫没有放松学习，身负新的重担向前冲击。我担心他的健康。但刚毅的他一笑置之，全然不以为意。

与此同时，他与养父家的关系渐渐复杂起来。他已失去机动时间，没有机会像以前那样同我交谈，我终归未能详细听得来龙去脉。但事情愈发变得难以解决这点我还是知道的。也知道有人居中调停。那个人写信催K回乡一趟，可是K无论如何都不应允。大约这种固执之处——K自己是说学年没有结束回去不得，但在对方看来，怕是一种固执——使得事态进一步恶化。他既伤害了养父家的感情，又惹得生父家动怒。当我担心地写信给两家撮合时，已经毫无效果了。连一句话的回信都没有收到。我也恼火了。这以前我同情K是出于势之所趋，而往下我觉得反正就是要站在K一边，不管他有理没理。

最后，K决定复籍。养父家出的学费由生父补偿回去。但此外概不负责，由K自便。用一句老话说，也就是“勘当”[1]吧。也可能没这么严重，但本人是这样理解的。K从小没有母亲。他性格的一面，的确可以视为由继母带大的结果。假如生母活着，我想未必出现如此大的裂痕。无须说，其生父是僧侣。但在讲究义理这点上，可能更近乎武士。

22

K事件告一段落以后，我接到K姐夫的一封长信。K告诉我，他去当养子的那家是此人的亲戚，介绍他去的时候和他复籍的时候，此人的意见都占很大的比重。

信上打听K后来情况如何，叫我回信过去。并补充说K的姐姐放心不下，求我尽快回信才好。较之继承寺院的兄长，K更喜欢这嫁出门的姐姐。虽说两人一母同胞，但年龄相差很大。K小的时候，同继母相比，大约这个姐姐反倒更像真正的母亲。

我把信给K看了。K没表示什么，只是交代自己收到了姐姐两三封意思大同小异的来信，K每次都答复说不必担心。不巧的是，姐姐嫁的人家生活拮据，实在无法在经济上帮助弟弟。

我写了一封大致和K同样的信寄给他姐夫。并信誓旦旦地表示，有个万一时由我全力相助，只管放心。这固然是我单方面的想法，其中当然含有不让这位姐姐担心弟弟处境的好意，同时也有些意气用事：就是要做给只能理解为对我不屑一顾的K的生父养父两家看看！

K复籍时是一年级。此后至二年级中期约一年半时间，他独自支撑过来。但有情况表明，过度的体力消耗已开始影响他的健康和精神。当然同养父家脱离关系与否这一头痛问题怕也从中作怪。他渐次趋于感伤，不时说仿佛自己一个人背负了世间所有不幸，却一转念又立刻激奋起来。他还觉得自己前途上的光明似乎正一点点从视野中遁去，并为此烦躁不安。求学伊始，任何人都胸怀远大志向踏上新的旅途，但一两年过去，临近毕业时，便突然觉察出自己脚步的迟缓，以致大半心灰意冷。这本是人之常情。K也不例外。只是他的焦躁远比一般人严重，我终于认为当务之急是使他的心情稳定下来。

我让他把不必要的工作立即停下，忠告他考虑到更长远的将来，眼下须休息一下身体，玩一玩才是上策。K生性倔犟，我早已预料到他不会轻易听进去。实际一说，比预想还要难以说服。K强调光搞学问不是自己的目的，自己的想法是要磨炼意志，使自己成为坚强的人，而为此必须尽可能置身于逆境。在普通人看来，这一结论纯属异想天开。何况置身于逆境的他的意志压根儿就没坚强起来，反倒像是得了神经衰弱。无奈，我向他做出深有同感的样子，明确表示自己也打算朝同一方向推进自己的人生（不过，这对我也并非全是空话。听K说起来，难免一步步向他靠近——他有这个力量）。最后，我提议和K住在一处，一起奋发向上。为了使固执的他改变主意，我甚至不惜跪在他的面前。这么着，总算把他领到我的住处。

23

我的起居室带有一个候客间样的四张榻榻米大的房间。从房门去

我的住处，此房间为必经之地。因此，从实用角度看，委实不便至极。我把K安顿在这里。本来我想在我的大房间里摆两张桌子，两人住在一起。但K说还是想一个人住，房间窄小也没关系，自己选住那里。

前面也已说过，起初夫人是不赞成我这个安排的。夫人说，若是一般出租屋，两个人比一个人方便，三个人比两个人有利可图，但自己不是做买卖，最好别招人进来。我说那人绝不给人添麻烦，不要紧的。夫人应道，就算不添麻烦，也不乐意招不知根底之人。我反驳说现在承蒙关照的我不也一回事。夫人又辩解说我的心她一开始就一目了然。我不由苦笑。夫人随即话锋一转，改口说领那样的人进来于我不利，快算了吧。我问如何不利，这回轮到夫人苦笑不语。

说实话，我也没必要非和K住在一起不可。只是，若把每月费用以现金形式摆在他面前，我想他肯定难以接受，他就是独立意识如此之强的人。所以我才把他安置到我的住处，把两人的伙食费瞒着他偷偷交到夫人手里。至于K的经济情况，我准备只字不向夫人挑明。

我只就K的健康介绍一番，说若让他一个人住，人将愈发变得古怪。并补充说了K同养父家关系不好，同生父家也疏远了等等。还告诉夫人和小姐，自己把K接收过来，心情上就好像怀抱一个即将溺水的人，情愿用自己的体温来温暖对方，拜托两人务必热情对待。话说到这里，总算说服了夫人。但什么也没从我口中听说的K根本不知晓这个过程。对此我反而感到心满意足，若无其事地把悄然搬来的K领进房间。

夫人和小姐都很亲切地帮他整理行李或做其他什么。我理解为一切都是出于对我的好意，心里暗暗欢喜，尽管K依旧绷着面孔。

我问K觉得新居如何，他只简单说不坏。若让我说，地方不止不坏。这以前他住的是个朝北的房间，潮乎乎脏兮兮的。食物也同房间

一样粗糙。搬到我这里来，好比从幽谷迁于乔木。他所以没有那么形之于色，一是由于他的倔犟，二也有其他信仰方面的原因。他深受佛教哲理的熏陶，认为衣食住等所有的奢侈，简直就是不道德的。囫囵吞枣浏览过一些古代高僧和圣德传记的他有个坏毛病：动不动就想把精神和肉体割裂开来。甚至可能觉得越是鞭打肉体，灵魂才越放光辉。

我采取尽量不刺激他的方针——我需要做的是把冰块搬到向阳的地方使之融化。一旦融为温水，自我觉醒那一天就一定到来，我想。

24

被夫人如此对待的结果，我慢慢快活起来。意识到这点之后，我试图把同样东西用在K身上。K同我在性格上大相径庭，这点通过长期交往我非常清楚。但我想，正如我的神经在进入这个家庭后多少得到平复一样，K的心情也迟早会在此镇静下来。

K的决心要比我坚强，用功也在我之上。而且脑袋天生比我好使得多。后来专业不同，无从进行比较。但在同一年级期间，无论初中还是高中K都名列前茅，以至于同K相比，无论做什么我都自愧不如。不过在我硬把K拉来这里时，我相信还是我更明白事理。依我之见，他似乎不理解勉强与忍耐的区别。这点也是为你补充的，请你听一下。肉体也好精神也好，大凡我们的能力恐怕无不因外界的刺激而发达、而损坏。无须说，无论哪方面都需要逐步增强。因此，若不深思熟虑，便有可能尽管朝险恶方向发展自己（旁人自不用说）却浑然不觉。据医生介绍，再没有比人的胃更须小心侍候的。若一味喝粥，消化硬东西的能力就会不知不觉丧失。所以医生说不管什么都要吃。但这恐怕不仅仅说的是习惯问题，真正的意思是说消化功能的抵抗力随着刺激的逐步增加而渐次变强。假如胃的作用相反一点点弱化，那么会怎么样呢？结果可想而知。K虽然比我伟大，这一点却全然没有注

意到。只好像一门心思地认定只要习惯了困难，困难终归也就无所谓了；只要反复经受磨难，经受本身便是一种功德，而迟早会有视磨难为等闲之物的那一天。

我很想在说服K时一针见血指出这点，但这无疑会遭到K的反驳，他肯定又要搬出古人为例。而那一来，我势必明确指出那些人与K如何不同。如果K予以首肯倒还好，但按他的脾气，争论到那个地步便很难后退，必定执意向前，并要用行动来体现说出口的东西。而这样一来，他这人就可怕了，就非同一般了。从结果来看，他的伟大不过表现在亲手毁掉自己的成功这一意义上而已。然而这绝非平凡之举。我深知他这个脾性，所以终归什么也没说出。加之在我眼里——前面也已说过——他似乎多少有点神经衰弱。纵然我说服了他，他也一定很冲动。我并不怕和他吵架，而是不忍心让这个好友陷入我一度有过的那种不堪孤独的境地，更不愿意把他推进比我还孤独的深渊。这样，在他搬来之后，我暂且还没有向他提出算是批评的批评，决定静观周围环境影响他的结果。

25

在背后我求夫人和小姐尽可能同K说说话。因我认为他这个样子是以前的无言生活造成的。铁不用便要生锈，他的锈生在心里——我如此深信不疑。

夫人笑他这人无法搭茬儿。小姐特意举例给我听：问K火盆有火吗？K答没有；那么拿火来吧？K说不要；问不冷吗？K说冷也不要，之后再不应声。我也只能苦笑，因其可怜而设法敷衍过去。当然，春天也没必要勉强烤火。但他那样子，给人说无法搭茬儿也是无可奈何。

于是我尽量以自己为中心来促使两个女子同K联系。或者把两人叫到我和K说话的地方，或者把K拉到我同母女俩相聚的房间，总之尽

量采取相应的办法让双方接近。K当然不大情愿。有时突然起身离去，又有时怎么叫也不露面。K说那种闲聊有何意思可言。我只管笑。但我心里明白K因此而蔑视我。

从某种意义上看，实际上我也可能值得他蔑视。不妨说，他的着眼点比我高得多。这我绝不否认。但若眼高手低，显然同残疾无异。我想眼下无论如何得先使他成为一个正常人。我发现，不管他脑袋有多少伟大形象，而只要他本身尚未成为伟人，也一切都是空的。作为使之成为正常人的第一手段，我想应首先让他坐在异性身旁，置身于异性挥发的空气中，从而更新他开始生锈的血液。

这一尝试大获成功。起初有些东西似很难融合，后来渐渐聚拢。看来他开始一点点觉悟世间尚存在自己之外的天地。一天他对我说，女人并非那么应该加以轻蔑。一开始K要求女人也具有和自己同样的学识。若无从发现，便顿生不屑之念。过去的他不晓得根据性别调整立场，只管以同一视线扫描所有男女。我对他讲，倘若交谈永远只在我们两个男性之间进行，结果不外乎两人直线型延伸下去。他说言之有理。想必当时我多少有些给小姐迷得魂不守舍，所以才自然冒出这样的话来。不过内幕却是半点儿也未透露给他。

迄今以书筑城并固守其中的K的心，慢慢舒展开来，我见了比什么都愉快。因为一开始我就是以此目的行事的，自然品尝出自己的成功带来的喜悦。对K本人我没说，但对夫人和小姐我一吐为快。两人也现出满意的神情。

26

K和我虽同在一个系，但专业不同，自然出门时间和回家时间也有早有晚。我若早归，穿过他的房间即可；晚了，一般简单寒暄一句便走进自己房间。K每次都把眼睛从书本抬起一下，看我打开隔扇，说一句：“回来了？”我有时不应声只点头，有时“嗯”一声走过了事。

一天我去神田办事，回来比平日晚得多。我快步来到门前，见格子门大敞四开。与此同时，听得小姐的语声。我想声音应该是从K房间传来的。从房门一直走，迎面是茶室、小姐房间，左拐是K房间、我的房间。住得久了，谁在哪里说话自是一清二楚。我马上拉合格子门，不料小姐语声也戛然而止。脱鞋时间里——那时我已开始穿时髦而费事的系带鞋——弯腰解鞋带时间里，K房间谁的语声也没有。我感到纳闷，心想也可能听错了。然而在我像往常那样打开隔扇要从K房间穿过时，两人分明在那里坐着。K照例道一声：“回来了？”小姐也坐着寒暄一声：“您回来了。”或许我神经过敏，这简单的寒暄听起来有点发硬。耳膜上的感觉像是跑腔走调了似的。我问小姐：“夫人呢？”问话没有任何别的意思，只是因为家里总好像比平日安静随便问一声而已。

夫人果然不在，女佣也随夫人外出了。所以剩在家里的，只K和小姐两人。我有点诧异：我虽然住这么久了，夫人却从不曾把小姐和我单独留下自己出门。我又问小姐是不是有什么急事，小姐笑而不语。我讨厌女人这时候笑。说是年轻女子共同特点倒也罢了，这小姐也是个为无聊小事笑个没完的女子。但小姐瞧见我的脸色，马上恢复平常表情，认真答道倒不是急事，出去办点事。我作为一个借宿人，无权追问下去，遂不再做声。

我换上衣服要坐还没坐下时，夫人和女佣回来了。不久到了大家在晚饭桌上见面的时间。刚住进来的时候，凡事都被当成客人，每次吃饭都由女佣把饭端来房间。后来不知何时变了规矩，而把我叫到那边去，并成了习惯。K刚搬来时，因我再三坚持，他得以受到和我同样的对待。作为回报，我送了一张薄板制作的式样别致的折脚餐桌。如今倒好像家家都用，而当时很少有全家围着餐桌吃饭的光景。我专门跑去御茶水的家具店，按我的构思订做一张。

餐桌上，夫人解释说这天鱼铺伙计没有按固定时间送鱼来，只好出去买我们吃的东西。既然家里有房客，这倒也在情理之中。正这么

想着，小姐又看着我笑起来。但这回马上给夫人骂了回去。

27

大约过了一周，我再次通过K正同小姐说话的房间。当时小姐一看见我就笑了起来。我若马上问有什么好笑的就好了，然而我一声没吭，径直走进自己房间。这么着，K未能一如往日问一声“回来了”，小姐好像当即拉开隔扇进了茶室。

晚饭时，小姐说我是个怪人，我没有像往常那样问是何故，只是注意到夫人瞪也似的看了小姐一眼。

饭后我领K出去散步。两人从传通院后头往植物园那边转了一圈，又来到富坂下面。作为散步时间并不算短，但路上话说得极少。就性格来说，K比我还要寡言少语，而我也不是能说的人。但我还是边走边尽量引他开口。我提的话题大多是关于两人借宿这户人家的。我想了解他对夫人和小姐的看法。但他的答话完全不着边际不得要领，却又简单至极。看样子，较之两个女人，他更关心专业学习方面。当然，第二学年的考试迫在眉睫，在一般人眼里，恐怕他更像是地道的学生。而且他道出Emanuel Swedenborg如何如何，使得不学无术的我吓了一跳。

我们顺利通过考试后，夫人很高兴，说两人都剩一年了，可视为夫人唯一骄傲的小姐也很快就要毕业。K对我说，女人这东西什么也没学居然就能毕业。小姐除书本外学的裁缝、琴、插花等等，大约他根本就没放在眼里。我笑他迂腐，对他重复了几次过去的老话：女人的价值不在这里。他没怎么反驳，但也没现出首肯的样子。这点使我心情愉快。因为他那一声“唔”依然带有蔑视女子的意味，似乎并不把我视为女性代表的小姐当一回事。如今回顾起来，我对K的嫉妒那时便已明显萌芽了。

我跟K商量暑假到什么地方去。K口气像是说哪也不想去。当然，他并非想去哪里就能去哪里之身。但只要我相邀，去哪里又都并无不可。我问为什么不想去，他说也没什么原因，就是想在屋子里看书。我说还是去避暑地，在凉快地方看书对身体有好处，他说那么你一个人去好了。然而我不愿意把K一个人留在这里。本来目睹他和这家人关系逐渐亲密就没什么好心绪，尽管这原本是我所希望的。我不知道自己何以因此而心绪变糟。我一定是个糊涂人。见我们两人僵持不下，夫人看不下眼，便进来调停。终于，两人决定去房州。

28

K这人很少出去旅行。去房州我也是初次。两人对房州一无所知，从船最先靠岸的地方上了陆——大概叫保田吧。如今什么样子不知道，当时是个十分荒凉的渔村。首先是哪里都一股腥味儿，其次一下海就被浪头掀倒，手脚全给擦破。拳头大小的石块在汹涌而来的海浪的冲刷下，不停地滚来滚去。

我立即厌了。K不说好也不说坏，至少脸上一副不在乎的样子。然而每次下海他都弄得遍体鳞伤。我横竖说服他，由那里前往富浦，又从富浦转到那古。当时那一带海岸主要是学生去的地方，到处都有正适合我们的海水浴场。K和我常常坐在岸边石崖上，观望远海的色调、近水的沙底。从石崖下视，海水格外漂亮，红色的蓝色的——一般市场上见不到的颜色的小鱼，在透明的波浪中亮晶晶游来游去。

我坐在那里常翻开书。K大多时候什么也不做，只管默默不语。至于他是沉思默想，还是为景色陶醉，抑或在想象的天地里驰骋，我全然不得而知。我不时抬起眼睛问K干什么呢，K只管说什么也没干。我时常想，假如这么静静坐在自己身旁的不是K而是小姐，心里保准快活。光是这样倒也罢了，而有时我倏然心生疑念：莫非K也和我心怀同样希望坐在这石崖上？而这样一来，我便没办法在这里安心看下

去了，突然站起身，肆无忌惮地大嚷大叫。我做不来吟诗弄赋那种悠然自得的事，只是如野蛮人狂吼一通。一次我猛然从后面抓住K的脖子，问他就这么把他推进海去他怎么办。K不为所动，仍背着身子，答说正好就推下去好了。我马上放开按他脖子的手。

K的神经衰弱此时好像已好许多了。与之成反比，我这方面却渐渐神经过敏起来。看K比我镇定自若，我既羡慕，又恼恨。因为他无论如何都没有理睬我的表示。在我看来那无异于一种自信。可是，纵使在他身上看出自信，我也是绝对无法满足的。我的怀疑又向前一步，想弄清自信的性质。想必在学问或事业上面K已经重新看到了自己前途的光明。若只是这样，K同我之间不至于发生任何利害冲突，我反倒应该为之欢欣鼓舞，毕竟自己的关照有了效果。问题是倘若他的释然实因小姐而起，我就绝对无法原谅他。不可思议的是，他似乎全然没有察觉出我爱小姐的迹象，当然——尽管如此——我也有意做得不使K察觉。在这点上K原本就是迟钝之人。我所以特意把他领来，也是因为一开始就觉得K令人放心的缘故。

29

我很想向K表明自己的心迹。当然这也并非始于此时，旅行之前我就做好了这样的打算。但我未能巧妙地抓住或制造出表明的机会。如今想，当时我周围的人都很奇妙。没有一个人深谈女人。不少人大约没有话题好谈。即使有，一般也都保持沉默。在呼吸较为自由空气的你看来，想必觉得奇怪。至于那是道学的余习还是一种羞赧，由你判断好了。

K和我是什么都谈得来的。爱啦恋啦这类问题也不是就没有说出口，但每次都堕入抽象的理论，并且这也是偶一为之。大多情况下谈的都是书、学问、未来事业、抱负、修养之类。哪怕再亲密都这么拘拘板板，因此情况不可能急转直下。两人只是拘拘板板地亲密而已，

我在动了向K挑明小姐事的念头之后，不知为自己的优柔寡断苦恼了多少次。我恨不得在K脑袋上砸开一个洞，把柔软的空气吹将进去。

你看了觉得滑稽透顶的事，对当时的我也是不可逾越的难关。旅途中我也仍像在家时那样畏首畏尾。我始终观察K以求抓住时机。但在他那高蹈的态度面前，我实在无可奈何。仿佛他的心脏被黑漆硬硬地涂了一层又一层，我企图注入的热血全被反弹回来，一滴都休想进入。

有时见K那么刚毅脱俗，我反而一阵释然，暗暗为自己的疑心后悔，并暗暗向K道歉。与此同时，觉得自己为人非常低劣，陡然自我厌恶起来。然而过不一会儿，疑心又气势汹汹卷土重来。一切皆因疑心而生，一切均于我不利。K长相也好像更讨女人欢心，性格上也不似我这样小里小气，想必更合女人的意。那种粗线条的富有主见的男子汉气质，似乎也在我之上。至于学力，专业固然不同，但我自知不是K的对手——对方所有的长处统统在眼前迸射开来，约略安心的我又马上变得不安。

K见我心神不安，提议先回东京也可以，如果不满意的话。给他这么一说，我顿时不想回京了。实际上也可能是不想让K返回东京。两人绕过房州鼻端，往另一侧走去。俗话说“那里即七里”，我们便是这样吭哧吭哧地走个不停。我半开玩笑对K说，走得我全然不解走的意义。K回答因为有腿，所以要走。走热了便下到海里，不分场所地在水里泡一阵子。之后因为又受到日光的强烈照射，致使身体倦怠，简直要瘫痪似的。

30

如此行走起来，又热又累，自然弄得身体一塌糊涂。不过和患病不是一回事。就好像自己的灵魂突然钻进他人体内。我一如平时跟K说话，却又觉得同平时的心情有所游离。我对他怀有的亲切也好怨恨

也好，都开始带有旅途特有的性质。也就是说，由于炎热，由于海潮，又由于步行，我们得以进入与以往不同的新的关系。当时的我们就好像结伴而行的流动商贩，讲话再多也不比平时，不接触动脑筋的复杂问题。

就这样，我们终于走到铫子。途中有个至今未忘的例外。还在房州时，两人在一个叫小凑的地方观看鲷浦。事情过去好些年了，加之我原本就不甚感兴趣，所以记不大清楚。好像是说那个村庄是日莲（日莲：镰仓时期僧人（1222—1282），日本佛教日莲始祖）出生之地。据传日莲出生那天，有两尾鲷鱼冲上岸来。于是自那以来渔民便不再捕鲷，直至今日。因此海湾里鲷鱼很多。我们雇了一叶小舟，特意去看鲷鱼。

其时我一心一意看那海浪，看海浪里游动的约略泛紫的绸鱼颜色，觉得这现象蛮有意思，看得津津有味。但K好像没有我这么大兴致。较之鲷鱼，他反倒像是在脑海里想象日莲。正好那里有座寺叫诞生寺，大概因是日莲诞生的村庄之故而如此命名的吧。寺院很漂亮。K提出去见住持。老实说，我们的衣装相当狼狈。尤其是K，帽子给风吹跑了，买顶草帽戴着。衣服就更不用说，满是污垢，汗味熏人。我说就别见和尚了。K执意不听，说若我不愿意，他一个人去，叫我等着。无奈，两人一同来到寺门。我估计肯定吃闭门羹。不料和尚这种人真够热心的，居然把我们让进蛮气派的客厅，立即见了我们。那时的我想法同K很不相同，没什么心思倾听和尚同K的谈话。K则好像很起劲儿地询问日莲。和尚说日莲草书极好，致有草日莲之称。K字迹拙劣，现在我还记得他那一副不屑的表情。K想了解的，恐怕更是深层意义上的日莲。在这点上和尚能否满足他恐怕是个疑问。不过他走出寺院时，一再向我说日莲如何如何。我又热又累，哪里顾得上这个，顺口应付了事。后来声也懒得出了，索性彻底沉默。

记得是第二天晚间的事。两人回旅店吃罢饭，临睡觉时突然就一个很难的问题争论起来。K大概为昨天自己提起日莲而我没有搭理感

到不悦，说精神上没有上进心的人是渣滓，像要把我说成轻薄之人。但我心里满满装着小姐，无法对他近乎侮辱的言词付诸一笑，也还是辩解一番。

31

当时我再三使用“像个普通人”这一说法。K说这一说法隐藏我的全部弱点。事后想来，K说的确实不错。但我是为了让K理解“不像普通人”的意思而采用这个说法的，一开始便带有逆反意味，所以没有余地自我反省，仍然坚持自己的主张。结果K问我他什么地方不像普通人。我这样告诉他：“你像个普通人，或者像得过分亦未可知。可是你口头上说的却不像普通人，做的也不像普通人——你故意这样表现。”

我如此说罢，他只应道可能是自己教养不够才给人以如此印象，而完全无意反驳我。我有些泄气，甚至觉得于心不忍，当即中止争论。他的语调也渐渐低沉下来，怅怅地说假如我知道他所知道的古人，就不会这样攻击他了。K口中的古人不是英雄又不是豪杰，而指的是为了灵魂而虐待皮肉、为了道而鞭打身体的所谓苦行之人。K明确说他十分遗憾，遗憾我不晓得他为此吃了多少苦头。

K和我随后躺下休息。第二天又像普通流动商贩那样流着汗闷头赶路。但路上我时不时想起昨晚的事。我十分懊悔：那本来给了我再好不过的机会，可自己为什么佯作不知地失之交臂呢？较之使用像个普通人那种抽象说法，直截了当向K一吐为快岂不更好！坦率地说，我道出那句话，也是以我对小姐的感情为基础的。因此，与其蒸馏掉事实而将杜撰的理论灌进K的耳朵，还不如原封不动摆在他眼前对我有利。我必须坦白，自己所以未能做到，是因为自己缺乏勇气排除两人间以学识交流为基调的友情所自然形成的惰性。说是过于装模作样也好，说是虚荣心作祟也好，反正都是一回事。只是我所说的装模作

样和虚荣心同其一般含义略有不同，只要你能理解，我就满足了。

两人黝黑黝黑地返回东京。回来时我的心情又变了。像普通人也罢不像普通人也罢，这些小道理反正在我头脑里几乎荡然无存。K也完全没了俨然宗教学家的面孔。当时他心里恐怕也不再有灵魂如何肉体如何这类问题。两人以异种人的表情四下打量着匆匆然的东京城。到得两国，尽管很热，两人还是吃了鸡肉串。K说要乘势走回小石川。体力上我比K强，当即表示同意。

走到家，夫人给我们吓了一跳。两人不光皮肤黝黑黝黑，而且奔波得很瘦很瘦。但夫人夸奖说还是像变得结实了。小姐又笑了起来，说夫人的说法矛盾。旅行前不时气恼的我，这时也觉得很是愉快。毕竟好久没听见小姐笑了，何况场合也不一样。

32

不仅如此，我还注意到小姐的态度较以前略有不同。旅行好久回来的我们在恢复日常状态之前，有很多事情需女性帮忙。给予照料的夫人自不必说，就连小姐看上去都先我后K。若太露骨，或许我也为难，有时反而为之不快；但小姐在这点上做得甚是滴水不漏，我自是欢欢喜喜。就是说，小姐把天生的亲切多分给我，做得只有我心里明白。所以K很平静，并没有不悦的表示。我在心中暗暗对他奏起凯歌。

不久，夏天过去，九月中旬我们必须回校上课了。由于各自时间安排不同，我们进出门又有了早晚之分。每星期我有三次比K晚些回来，而再没在K房间里发现小姐身影。K照例抬眼道一声“回来了”，我几乎机械地点下头，简单而又索然。

记得大约十月中旬，一次因睡早觉，没换和服就赶去学校。鞋也如此，系带鞋系起来费时间，脚往人字拖鞋一插就奔出门去。按课程

表，那天该我比K先回来。于是我一返回就咣啷一声拉开格子门。不料却一忽儿传来本以为不在的K的说话声。同时小姐的笑声也响在耳畔。因我没穿平时那双脱起来费事的鞋，得以当即进去打开隔扇。我看见照例坐在桌前的K，小姐却不见了，只一晃儿瞥见她逃也似离开K房间的背影。我问K干吗早回来，K说心情不好，没去。我进入自己房间直接坐下，不一会儿小姐端过茶来。这时小姐才寒暄说“您回来了”。我不是那种痛快人，没办法笑着问她刚才为何逃跑，只是在心里费思量。小姐很快起身顺檐廊往那边走去。中途停在K房间前，一人在里一人在外交谈了两三句，似乎是刚才的继续。但我没听到前面内容，完全摸不着头脑。

一来二去，小姐的态度渐渐变得坦然起来。K和我都在家里，也时常来K房间外的檐廊叫他的名字，进去久久不见出来。当然，有时是送信，有时是放洗好的衣服。两人同住一处，这点交际本应视之为理所当然。而我在务必将小姐据为己有这一强烈欲念的驱使下，怎么都没办法这样看待。有时候甚至觉得小姐有意避开我的房间而只去K那里。你或许要问那为什么不将K扫地出门呢？问题是那一来我强行把K拉来的初衷也就无从成立了。这在我是做不到的。

33

那是十一月一个冷雨飘零的日子的事。我穿着淋湿的外套，一如往日穿过阎魔殿，沿狭窄的上坡路走回住处。K房间空空无人，火盆里刚填的木炭倒烧得很旺。我也想在红通通的炭火上烤烤冰冷的手，急切切拉开自己的房间的隔扇。不料我的火盆只剩下冷冷的白灰，火种都烧尽了。我陡然不快起来。

此时听得我脚步声出来的是夫人。夫人默默看着站在房间正中的我，有些不忍似的帮我脱去外套，换上和服。之后问我冷不冷，马上从隔壁把K的火盆端来。我问K回来没有，夫人说回来又出去了。这天

K也该比我晚归，遂感到有点蹊跷。夫人说大概有什么事吧。

我坐下来看了一会儿书。房子里静悄悄的，不闻任何人的语声，感觉上唯独初冬的寒冷与凄清深深嵌入我的体内。我很快合上书，站起身来。蓦地，我很想到热闹地方去。雨好歹像是停了，天空仍如冰冷的铅块沉沉低垂。出于慎重，我肩扛油纸伞，沿兵工厂后面的土围墙往东走下斜坡。当时路还没有拓建，坡度比现在陡得多。路面也很窄，又不直。而且下到谷底后，由于南端给高楼挡住，排水不畅，路面泥泞不堪。尤其过得狭窄的石桥到柳町大街之前那一段，更是一塌糊涂。就算穿高齿木屐或长筒靴也随便迈步不得，任何人都必须小心翼翼地从路面正中一小条自然没了烂泥的地方通过。由于其宽度只有一二尺，情形同踩着路上铺的一条细带行走无异，行人全都排成一列慢慢通过。就在这细带上，我同K不期而遇。我因只注意脚下，直到同他照面才发觉是他。自己突然被挡住去路，偶一抬眼，原来是K站在那里。我问K去哪了，K只说出去一下，仍是平素那种不冷不热的调子。K和我在细带上擦身而过。旋即发现紧挨K身后站一个年轻女子。近视眼的我刚才未能看清，等错过K往女子脸上一看，竟是房东家的小姐，着实吃了一惊。小姐有点脸红，寒暄一声。那时的西式发髻和现在不同，前边并不探出，而是在头顶正中像蛇一样团团盘起。我怔怔看着小姐的头，下一瞬间才想到必须有一方让路。我一咬牙一只脚踩进泥里，留出较易通行的空间让小姐走过。

之后我来到柳町大街，自己也不晓得去哪里好，且觉得去哪里都没什么意思。我任凭泥点四溅，在泥水里不管三七二十一乱走一通。然后直奔家门。

34

我问K是不是和小姐一块儿出去的，K说不是，是在真砂町偶然碰上，搭伴回家的，而再往深问就不合适了。但吃饭时，我又控制不住

自己，同样问了小姐。结果小姐做出我所讨厌的那种笑法，并让我猜去了哪里。那时我火气还很旺，很恼火给年轻女子如此不认真对待。但同桌人里面只有夫人注意到了这点。K反倒若无其事。至于小姐的态度，不知是佯作不知，还是天真烂漫，我一时无从判断。作为年轻女子，小姐算是有头脑的了，但年轻女子共有的那种我所讨厌之处，若说有也不是没有。而且那讨厌之处是K来了之后才进到我眼睛里的。不知该归于我对K的嫉妒，还是应视为小姐针对我的演技，对此我迷惘不解。即使现在我也绝对无意否认我当时的嫉妒。因为我已重复过几次：我在爱的反面明确意识到了这种情感的作用。而且，这种情感笃定在由旁人看来不值一提的琐事上表现出来。说句题外话，这种嫉妒不就是爱的另一面吗！结婚之后，自觉这一情感渐渐淡薄下去。而与此同时，爱情也绝不如原来那般炽热了。

我开始考虑是不是该把自己这颗迄今迟疑不决的心一咬牙朝对方胸口掷去。我说的对方不是小姐，是夫人。想向夫人明确摊牌，让她把小姐给我。决心倒是这样下了，实施却日复一日拖了下来。说到这里，你或许觉得我这人真是优柔寡断——这样看也无妨——我所以裹足不前，实际上并非由于意志力的不足。K来之前，是担心受骗上当。这种自我强制心理束缚了我，使我寸步难移；K来之后，万一小姐对K有意这一疑念开始不断左右我。我已断然告诉自己：倘若小姐真的更倾心于K，那么我这份爱恋也就失去了说出口的价值。这和害怕蒙羞不是一回事。自己再爱恋，而若对方向他人暗送秋波，我也不情愿同这样的女人在一起。世上是有强行讨得自己中意的女子而沾沾自喜之人，但我当时认为那或者是远比我辈老于世故的滑头，或者是未能充分理解爱情心理的蠢货。我是那样地一往情深，不能接受一旦娶来总会磨合妥当这样的逻辑。换言之，我是个极其高尚的爱情理论家，同时又是至为迂腐爱情的实践者。

面对再重要不过的小姐，尽管长期相处当中常有直接向她表白心迹的机会，我却故意避开了。那时我有一种很固执的念头，认为作为

日本习惯是不允许那样做的。但绝不能说束缚我的仅仅是这个。我估计，日本人尤其日本年轻女子——在那种情况下，缺乏无拘无束向对方倾吐自己心曲的勇气。

35

由于这个缘故，我陷入左右为难的困境。你知道，在身体不适的情况下午睡，有时醒来后但觉周围东西历历在目，手脚却横竖动弹不得——我有时便默默咀嚼这样的痛楚。

不久，一年过去，春天来临了。一天夫人要打纸牌，让K领个朋友来，K当即回答一个朋友也没有。夫人吃了一惊。如此说来，K的确没有一个堪称朋友的朋友。走路时倒有几个人见面打招呼，但绝对不是足以一起打牌那样的关系。于是夫人改问我能否找个熟人来。不巧我也没心绪凑这个热闹，随口应付一声，便忘在一边了。但到晚上，K和我还是硬被拉了过去。没有一个客人，只家里四个人玩，倒也并不吵闹。K不熟悉这种游戏，简直同袖手旁观差不多。我问K可知道百人一首？K说不大清楚。小姐听了，大概理解为我瞧不起K，随即明显站在K一边。最后，几乎两人合起来对付我一个。换个对手，我很可能忍不住吵起架来。所幸K的态度同一开始全无二致，看不出任何得意之处，我才得以平静地坚持到终场。

此后过了两三天吧，夫人和小姐说要去市谷一个亲戚家，一大早走出家门。学校还没开学，K和我便看家似的留下来。我既不愿看书又懒得出去散步，只管怅怅地将臂肘拄在火盆沿上支颐沉思。隔壁K也无半点声息。双方都静得不知在与不在。不过，从两人关系来说，这种情况早就习以为常，我也没怎么介意。

十点左右，K突然拉开隔扇，和我面面相觑。他站在隔扇拉槽上，问我想什么呢。我无所谓想什么。若说想，或许像往常那样琢磨小姐的事。琢磨小姐无疑附带夫人。近来K掺和进来，在我脑袋里团

团打转，使问题变得复杂。看着K的我，虽然隐约意识到他一直像是个障碍物，但不可能如此直言相告。我仍然看着他默不做声。想不到K三两步闯进，坐在我烤火的火盆前。我马上把臂肘从火盆沿撤下，稍微把火盆往K那边推了推。

K一反常态地说起话来。他问夫人和小姐到市谷什么地方去了，我答说怕是去叔母那里。K又问是怎么个叔母，我告诉他估计是军人家属。K问年初刚过十五，为何这么早出去呢，我只能表示那我就不知晓了。

36

K谈夫人和小姐谈个没完没了，后来竟问起我也答不上来的复杂问题。较之麻烦，我更觉得不可思议。想到以前我主动提及两人时他的表现，无论如何都不能不觉察到他的反常。我问他何以选在今天专门说这个，他顿时沉默。但我注意到他紧闭着的嘴角的肌肉似乎颤抖不已。他本来沉默寡言，此外还有个毛病，平日每当要说什么，嘴巴常蠕动片刻。他的唇大概有意不服从他的意志，不肯轻易张开——他话语的重量想必压在这里。而一旦开口，其声音比普通人还要铿锵有力。

注视他嘴角时，我预感他又要冒出什么。而到底是什么，我全然猜测不出，也就格外震惊。请你想象一下他向我表白他何等深切爱着小姐时我是什么样子。我简直给他的魔棍一下子打成化石，就连蠕动嘴巴都无从做到了。

说是恐惧感的结晶也好，说是痛苦的块体也好，总之那时的我就是一个物件。从头到脚骤然凝固，如石，如铁，硬是连呼吸的弹性都已失去。所幸这样的状态没持续很长时间。我很快找回正常心态，心中暗暗叫苦：失策！给人抢先了！

但往下怎么办，我全然理不出头绪，恐怕也没有理出头绪的余裕。腋下沁出的冷汗湿透衬衫，我只管忍住，一动不动。这时间里，K像平日那样不时启动滞重的嘴巴，一会儿一停地表白自己的心。我痛苦得不得了。那痛苦想必如巨幅广告赫然贴在我脸上，即使K也不至于觉察不到。但他非比往常，正如醉如痴谈自己的事，怕也无暇顾及我的表情。他的表白自始至终贯穿同一调门。给我的感觉是：滞重、迟缓，然而轻易改变不了。我的心一半听他的表白，一半为如何是好这一念头搅得七上八下，细节等于几乎没进入我的耳朵。但他口中出来的语调仍强烈震撼着我的心胸，我因此而愈发痛苦。不仅痛苦，有时还感到一种恐慌——一种觉得对方强于自己的恐慌。

K大体表白完时，我什么也说不出来了。我的沉默倒不是因为在考虑利害关系，即考虑是同样表白好还是不说为妙，而单单是说不出来，而且也没心思说。

午饭时，K和我隔桌对坐。女佣给我们上饭，吃了一顿从未如此难以下咽的饭。吃饭当中两人也几乎没有开口。夫人和小姐什么时候回来的也浑然未觉。

37

两人就此折回各自房间，没有见面。K静静的，和早上一样。我也陷入沉思。

我想自己本来应该向K表明心迹的，后悔没有先发制人。刚才为什么就不打断K的话而反戈一击呢？我觉得这实在是莫大的失误。起码接在K后面当场畅所欲言也好。在K的表白告一段落的现在再旧话重提，怎么想都不自然。而我又不知如何战胜这个不自然。我悔恨交加，脑袋一阵发晕。

我盼望K再次打开隔扇从对面闯进。若让我说，刚才简直等于遭

遇突袭，自己全无应战准备。我盘算如何捞回上午的失地。我不时抬眼看一下隔扇，然而隔扇偏偏不开，K永久安静。

如此时间里，我的脑袋好像给这安静搅乱了。想到K正在隔扇那边想什么，我顿时心烦意乱。其实平日两人一直这么隔着一层隔扇默然无语，一般K越是安静，我越是忘记他的存在。所以这时候的我，脑袋一定相当反常。然而我又不能主动拉开隔扇过去。既已错过说话时机，便只能等待对方找上门来。

最后，我再也坐不住了。勉强坐下去，难免闯进K的房间。我无可奈何地起身出到檐廊。由檐廊来到茶室，漫不经心从铁壶倒一杯水喝了。之后走到房门外。我有意避开K房间，让自己出现在路的正中。我当然不是要去哪里，无非坐立不安罢了。于是，我不管东南西北，在正月的街头盲目走来走去。怎么走都满脑袋K。本来我也不是为了抖落K，莫如说为了咀嚼他的表现才四下徘徊。

我首先觉得他这人真是令人费解。他为什么突如其来向我表白这个呢？他的恋情难道强烈到非向我表白不可的地步了不成？平时的他被风吹去哪里了呢？一切都是我所难以理解的。我知道他的刚毅，也了解他的认真。我相信在决定自己往下采取何种态度之前有很多事要向他问。同时心里又格外不是滋味，不愿意以他为对手。我一边忘我地东走西窜，一边在眼前推出他静静坐在房间里的样子。而且听见一个声音在说无论我怎么行走都全然奈何他不得——大约我把K当成一种什么妖魔了。甚至觉得可能终生都将笼罩在其阴影中。

走累了回来时，他的房间依然静得仿佛空无一人。

38

进屋不久，传来人力车声。那时不同现在，还没有橡胶车轮，车声咣咣唧唧很刺耳，很远距离都听得到。

三十分钟后，我被叫去吃晚饭。夫人和小姐的出门衣服仍扔着未收，不规则地装点着隔壁房间。两人说怕晚了对不住我们，急匆匆赶回做晚饭。但夫人的亲切对K和我几乎毫无效用。我坐在桌旁，如惜话如金之人哼哼哈哈地应着。K比我还要沉默。偏巧一起外出归来的母女两人比平时开朗快活，使得我俩的态度愈发引人注目。夫人问我怎么了，我说心情不太好。实际上我也心情不好。接着小姐同样问K，K没像我这样答说心情不好，而说只是懒得开口。小姐穷追为何懒得开口。这时我蓦地撩起沉甸甸的眼睑看K的脸。我生出好奇心，想看K如何回答。K的嘴唇照例微微颤动。在不知情的人看来，只能以为他苦于回答。小姐笑道大概又考虑什么深奥问题了。K脸上隐隐泛红。

这天晚上我比往常躺得早。夫人惦记着我吃饭时说心情不好，十时许端一碗荞面汤过来。但我房间已一团漆黑。夫人“哎哟”一声，把隔扇开条细缝，灯光从K桌子上淡淡地斜射进我的房间。看来K还没有睡。夫人坐在我枕边，说怕是着凉感冒了，喝了暖暖身子，遂把汤碗靠在我脸旁。我只好在夫人注视下把稠乎乎的汤面喝进肚去。

我在黑暗中想得很晚很晚。当然无非围绕一个问题转来转去，毫无成效可言。蓦地，我心想K在隔壁干什么呢，半是下意识地“喂”了一声，对面回一声“喂”。K还没睡。我隔着隔扇问还不睡，K简单应道这就睡。我又问干什么呢，这回K没有回答。过了五六分钟，真切听他“咣”一声拉开壁橱，铺展被褥。我问几点了，K答一点二十。稍顷“噗”一声吹熄灯，房子里四下漆黑，寂无声息。

然而我的眼睛在黑暗中愈发精神。我再次以半是下意识的状态“喂”一声向K打招呼，K仍以平日那样的声调回应一声。终于，我主动说想就今早从他口里听到的事详谈一下，问他方便不方便。我当然不是想隔着隔扇交谈，但以为K的回答总可以马上得到。不料刚才我叫了两声“喂”，K冷漠地回了两声“喂”之后，这回他再不应声，只是低声含糊道“是啊”。我心头不由再次一震。

39

第二天第三天，K也没有给我明确的答复。看情形他绝对不想主动接触这个问题。当然也是没有机会。因为夫人和小姐若不一齐离开家一天，两人是不可能从从容容谈这种事情的，这点我十分清楚。尽管清楚，但还是莫名其妙地心焦意躁。这么着，起初暗暗等待对方开口的我，转而决心由自己伺机提出。

与此同时，我默默观察所有人的反应。但无论夫人的态度还是小姐的举止，都跟平时并无不同。既然两人的表现在K表白之前和表白之后没有现出差异，那么无疑是说K的表白只限于我这一个对象，而关键的小姐及其监护者即夫人都尚未得知。想到这里，我略微安下心来。我思忖，与其勉强找机会煞有介事地旧话重提，还不如设法不让自然给予的东西跑掉为好。于是我决定暂且不理会那个问题。

这么说听起来甚是简单，而如此过程中的心情却如潮涨潮落，起伏不平。我见K按兵不动，便从各个角度加以解释。观察夫人和小姐的举止言行，我怀疑两人的心是否真的就同其外在表现相一致。人心中安装的那架复杂机器难道会像时针一目了然地如实指在表盘数字上吗？总之，对同一件事我一会儿这么看，一会儿那么看，终归在这个地方落下脚来——你就这么想好了。说得再难一点，或许在情理上那时绝对不该使用落脚这个说法。

不久，学校开学了。课时相同时两人一起出门；可能的话，回来时也结伴而归。在外人眼里，K和我一如从前那样要好。但肚子里无疑自己打自己的算盘。一天，我突然在路上同K短兵相接。我首先问他上次的表白是只对我一个人，还是夫人和小姐那边也已通风了。因我觉得往下自己应取的态度必须根据他对这点的回答来决定。结果他表明除我以外还未向任何人透露。情况不出自己所料，心中暗喜。我清楚K比我刁钻，胆量也非我所能比。但另一方面，我又分外相信

他。尽管在学费上他欺骗养父家三年之多，但对于我，他的信用丝毫没有减损。我反倒因此而更信任他。所以，纵使我再疑神疑鬼，心里也绝对没起否定他这一明确回答的念头。

我又问他打算怎样处理自己的爱恋，是仅仅限于表白呢，还是准备使这表白收到实效。然而在这点上他只字不答。我催促他不要隐瞒，怎样想怎么说就是。他明确表示没必要瞒我，但对我想知道的这点还是一句回答也没给。毕竟是在路上，我也不便停下脚步刨根问底，就这样不了了之。

40

一天，我走进久违的图书馆。我坐在宽大桌子的一角，上半身沐浴着窗口泻进的阳光，东一页西一页翻阅新到的外国杂志。我的任课老师要求就所修专业查阅一个问题。但我怎么也找不出我需要的内容，不得不两三次换借杂志。最后总算找到自己所需论文，专心读了起来。正读着，宽大桌子的另一侧突然有人低声叫我的名字。蓦然抬眼，见K站在那里，K上半身俯在桌面把脸朝我探来。如你所知，图书馆里不便大声交谈，以免影响他人。因此K的做法大家也都那样做，而那时我却产生一种奇异之感。

K小声问我看什么呢，我说查点东西。但K还是不把脸移开，以同样小的声音问一起散散步可以么，我说等一会儿是可以的。他说那好，旋即坐在我对面空座位上。而这一来，我注意力分散，杂志突然看不下去了。我总觉得K好像心里有什么打算，来找我谈判的。我不得已合上杂志，站起身来。K泰然自若地问我查完了么，我说无所谓，还回杂志，同K一道走出图书馆。

两人没别的地方可去，便从龙冈町走到池端，进入上野公园。这时他突然主动提起那件事。综合前后情况分析，K大约是为这个特意把我拉出散步的。不过其态度一步也没朝实际方向迈进。他问我大致

怎么想的。所谓大致怎么想，是问我以怎样的眼光看待陷入恋爱深渊的他。一句话，大约是就眼下的自己征求我的意见。我觉得自己得以确认了他与往常不同之点。我几次说过，他生性绝不懦弱，并不顾忌别人怎么想，也有勇气朝自己认定的目标勇往直前，养父事件鲜明凸现了他的这一特点。对此印象很深的我，明显地意识到他现在的样子不同以往。

我问K这种时候为何征求我的意见，他以往日不曾有过的消沉语气，说自己是个软弱之人，为此深感羞愧，现已迷失了自己，不知如何是好，所以只好征求我的意见，别无他法。我不失时机地追问迷失自己是什么意思。他解释说不知是进好还是退好。我马上逼近一步，问他想退就能退得了么。他只说很苦恼。实际他脸上也真切沁出痛苦的神色。假如对方不是小姐，我不知会怎样将他求之不得的回答如甘霖般倾注在他那焦渴至极的脸上。我自认为自己生来就具有如此美好的同情心。但此时此刻的我另当别论。

41

我就像和他派比武之人那样紧紧盯视K。我——我的眼睛、我的心、我的身体，大凡冠以我这一字眼的所有器官都被我调动得无懈可击，以用来对付K。无辜的K岂止漏洞百出，简直可以说是城门大开，毫未设防。我无异于从他手中接过由他保管的要塞图，并在他眼前从容地打开审视。

发觉K在理想与现实之间往来彷徨，我着眼的只有一点：我可以一拳将其打倒在地。于是我当即乘虚而入，迅速摆出一副一本正经的态度。这当然是出于计谋，但由于心情上也有与此相应的紧张，自己无暇感到滑稽或羞耻。我首先来了一句：“精神上没有上进心的人是渣滓！”这是两人在房州旅行时K用在我身上的话语。现在我以同样的语调一字不差地掷还给他。然而我绝不是报复，坦白说，我的用意比

报复还要残酷。我企图以此一言封死K前面的爱之路。

K出生在真宗寺。但从中学时代起，他的倾向绝不接近其出生寺院的宗旨。不甚清楚教义区别的我自知没有资格谈论这个。我只是在事关男女这点上有如此认识。K很早就喜欢“精进”这一说法。我以为其中大约含有禁欲之意。但后来实际问他，才知道其含义比禁欲还要严厉，心里吃了一惊。他说他的第一信条是应该为道而牺牲一切。节欲、禁欲自不消说，即使离开欲的爱本身也是道之障碍。K自己谋生的时候，我时常听他讲起这一主张。那时我心里已经有了小姐，难免对他持反对态度。每次反对，他都现出不无恻隐的神情。其中较之同情，似乎轻蔑的意味更要多些。

由于两人间有这样的过去，精神上没有上进心的人是渣滓这句话肯定触及K的痛处。但是——前面也已说过——我不想以此一言将他辛苦构筑的过去彻底摧毁，相反，希望他一如既往构筑下去。至于达道也好通天也好，都和我不相干。我只是害怕K突然扭转生活方向而同我的利害发生冲突。总之，我用这句话不过出于利己之心罢了。

“精神上没有上进心的人是渣滓！”我又重复一遍，并注意看这句话给予K以怎样的影响。

“渣滓。”片刻，K应道，“我是渣滓。”

K一下子站在那里，再不移动。他定定看着地面。我不由一惊，觉得K好像刹那间索性由毛贼变成了明火执仗的强盗。但我还是觉察到他的语声是那样有气无力。我很想参考他的眼神，可他直到最后也没看我的脸。他开始缓缓移步。

42

我一边和K并肩行走，一边暗暗等待——也许说伏击更为恰当

——他下一句话出口。当时的我，即或说谋害K也不为过分。但我也有与所受教育相应的良心，假如有人来我身旁骂我一句“卑鄙”，我很可能幡然醒悟。倘若其人即是K，我恐怕在他面前满脸通红。问题是K不会责怪我，因为他太正直了，太单纯了，太善良了。而鬼迷心窍的我根本顾不上对此致以敬意，反而落井下石，急于趁机击败对方。

过了一会儿，K叫我的名字看着我。这回我止住脚步，K也随之站定。这时我才得以正面看K的眼睛。K比我个高，须仰视他的脸才行。如此心态下，我好比一只狠心狼注视无罪的羔羊。

“这话就算了吧。”他说。无论他的眼睛还是他的话语都沁出难以言喻的哀伤。我一时语塞。“算了好么？”这回他像求我似的说道。而我此时给了他一个残酷的回答，如狼乘隙撕咬羊的喉结。

“算了？事不是我提起的，本来不是你提起的吗！不过你说算了，算了也未尝不可。只是，口头上算了也不顶用。如果骨子里没有算了的决心，那你打算如何解释你平生的主张呢？”

我这么说时，感觉上高个头的他自然而然在我面前萎缩变小起来。我几次说过，他这人虽然刚强倔强，但同时又分外诚实耿直，所以在这种矛盾受到谴责的情况下，性格上他绝不会不以为然。目睹他的反应，我终于放下心来。旋即，他猝然问：“决心？”没等我回答，又补充道：“决心？决心倒不是没有。”语调很像自言自语，又近乎梦呓。

两人就此打住，闷声往小石川住处那边走去。这天虽然算是风和日丽，但毕竟冬天，公园冷冷清清。尤其回望经霜后失去绿意的杉树那茶褐色的枝梢一排排伸向阴沉沉的天空时，仿佛一股寒流扑咬脊背。我们大踏步穿过暮色中的本乡台，走下小石川河谷往对面高坡爬去。这时我才在外套下觉出体温。

也许因为急于赶路，归途中两人几乎没有开口。回到房东家坐在

餐桌前时，夫人问怎么回来晚了，我说被K拉去上野了。夫人道了声“这么冷”，现出惊讶的神情。小姐追问上野有什么，我回答什么也没有，只是散步。平时就沉默寡言的K，此时更不做声了。夫人搭话也好，小姐笑也好，都不好好应和。狼吞虎咽地吃罢，没等我起身就退回自己房间了。

43

那时候还没有所谓觉醒啦新生活啦这类字眼。不过K所以未能抛弃旧的自己而锐意奔向新的方向，并非因为他缺乏现代人的意识，而是因为他有着尊贵得无法抛弃的过去。不妨说，他是为此而活到今天的。所以，他没有朝爱的对象勇往直前，并不能证明他爱得不深不透。无论感情燃烧得多么炽烈，反正他就是寸步难移。既然没有给予足以使之忘乎所以般的冲动，他就不可能不停下来回顾自己的过去。这样，他就只能义无反顾地走过去指引的路。何况他又有现代人所不具有的刚毅与坚忍。在这两点上，我以为我清楚看透了他的心。

从上野回来的晚上，对我是一个比较安谧的夜晚。K回房间后，我追也似的跟过去坐在他桌旁，故意天南海北同他闲聊。看样子他有点不耐烦。我的眼睛大概闪烁着胜利的喜悦吧，至少声音里确有得意的韵味。同K在同一火盆烤了一会儿手之后，我回到自己房间。其他方面概不如他的我，唯独此时清醒意识到他不足为惧。

我很快安稳地睡了过去。突然叫我名字的声音使我睁眼醒来。一看，隔扇拉开二尺来宽，K的黑影立在那里。他的房间一如傍晚点着灯。情况急转直下的我一时竟开不得口，呆愣愣注视眼前光景。

K问我睡了没有。K总是睡得很晚。我反问黑影般的K有什么事。K说也没有什么事，只是趁上厕所顺便问一声睡了还是没睡。由于K背对灯光，我完全看不清他的脸色和眼神，但我听出他的语声反倒比平时镇定。

稍后，K一下子拉合隔扇，我的房间立时回到刚才的黑暗。我闭上眼睛，想在黑暗中做一个静静的梦，往下便什么也不晓得了。但第二天早晨想起昨晚的事，总好像不可思议，心想那一切说不定不是梦。于是吃饭时我问了K。K说的确开隔扇叫我名字来着，却不明确解释为什么那么做。待我兴头过时，他反过来问我近来睡觉可睡得稳。我总觉得有点异常。

这天正好上课时间相同，不一会儿两人一起出门。我一大早就对昨晚的事耿耿于怀，便在路上继续盘问。但K仍未回答得使我满足。我叮问是不是想再说一下那件事，K以坚定的语气说不是的。语气好像是提醒我昨天不是在上野说过算了么。K在这点上自尊心强得很。蓦然意识到这一层的我旋即联想到他使用的“决心”一词。于是，从未放在心上的这两个字开始以奇异的力量钳住我的头。

44

我很了解K富于果断性的性格。他在这件事上所以优柔寡断的原因我也了然于心。就是说，我擅长在理解一般的基础上紧紧把握特殊场合。但在反复咀嚼他所说的“决心”的时间里，我的擅长渐渐光彩黯然，最后竟动摇起来。我想到，同样情况对于他恐怕也不例外。我开始怀疑他已胸有成竹——已经充分准备好了一举解除所有困惑、烦闷、懊恼的最后手段。而当我以新的目光回眺“决心”二字时，不由心头一震。倘若我带着这一震惊再次公平地环顾他口中的“决心”的含义，结果可能还好。可悲的是我瞎了一只眼。我仅仅将其含义理解为K将对小姐积极采取行动，执着地以为他的决心大概就是在爱情上面发挥他果断的性格。

我的心耳听到一个声音：我也须做出最后决断。我应声鼓起勇气。我打定主意，务必抢先于K并在K不知晓时间里把事情办妥。我静静窥伺时机。但两天过去了三天过去了，时机还没到来。我打算在K

不在小姐也外出时跟夫人谈判。然而不是仅一人不在便是两人都在，天天如此。无论如何也找不出“此其时也”的良机。我惶惶不可终日。

一星期后，我终于按捺不住，装起病来。夫人也好小姐也好K本人也好，一再催我起来，而我只是支支吾吾，蒙被躺到十点。瞅准K和小姐都已不在，房子里悄无声息，我爬出被窝。夫人见了，问我哪里不舒服，劝我再躺一会儿，饭端到枕边来。身体好端端的我再没心思躺着，洗过脸，进茶室吃饭。夫人在长火盘对面给我盛饭。我手端既不算早饭又不是午饭的饭碗，心里一直琢磨如何开口。从外表看，或许真像是心情不快的病人。

吃罢饭，我开始吸烟。我不起身，夫人也不好从火盆旁离开，便叫女佣把碟碗撤下，自己往水壶里注水，擦火盆沿，配合我坐着。我问夫人可有什么特殊事，夫人说没有，反问我为什么问这个。我说有件事要说。夫人看我的脸问何事，语调很随便，根本对不上我的心绪，我有些难以启齿。

没办法，我随便找话兜了一阵圈子，最后试问夫人K近来说了什么没有。夫人显出意外的神情，再次反问：“什么？”没等我回答，又问我：“向你说了什么？”

45

我不想把K对我的表白告诉夫人，遂答道“没有”。之后马上为自己的谎言怏怏不快。无奈，改口说K没有托过自己，不是要谈K的事。夫人道声是吗，等待下文。我无论如何都必须开口挑明了。我突然道：“夫人，请把小姐给我！”夫人的表情没有我预料的那么愕然，但还是未能马上回答，默默看我的脸。一旦说出口的我，任凭她怎么看都顾不得了：“给我，请一定给我！一定给我当妻子！”夫人终究上了年纪，比我沉着得多：“给也未尝不可，不过不是太急了么？”我马上接道：“我是很着急。”夫人随即笑了，叮问：“可想好了？”我强调说

提出是突然，但想不是突然的。

往下又问答了两三回合，具体的我已忘了。夫人不同于一般妇女，有男子汉那种干脆爽快之处，这种时候很容易沟通。“好的，就给你好了。”夫人说，“不是可以大言不惭说给你那样的家境——请收下好了。如你所知，是个没有父亲的可怜孩子。”最后竟求起我来了。

事情就这样三言两语谈妥了，从头到尾大概不出十五分钟。夫人什么条件都没有提。并说也用不着同亲戚商量，事后打个招呼足矣。甚至明言本人意向亦无须确认。这方面，有了学问的我反倒有些拘泥于形式。我提醒说亲戚倒也罢了，对本人恐怕还是事先征得同意为好。夫人说：“不怕的。我不至于把那孩子送到她不中意的地方去”。

回到自己房间，由于事情实在过于顺利，我反倒有点莫名其妙，甚至有疑念爬上心头：真能一帆风顺么？但是大体说来，自己未来的命运业已如此敲定的观念使我的一切为之一新。

午间我来到茶室，问夫人今早的事是否准备告知小姐。夫人表示，只要她本人同意了，小姐方面什么时候通话都无所谓。这一来，夫人倒好像比我还有男子气。我刚转身要走，夫人把我叫住，说如果我希望快些的话，今天也可以，等她学习回来立刻告诉就是。我答说还是这样为好，然后折回自己房间。但静坐在自己桌前想象听得两人在那边悄悄交谈的情景，不由觉得有些沉不住气，遂戴上帽子出门。走到坡下迎面碰上小姐。完全蒙在鼓里的小姐看见我，显出意外的样子。我摘下帽子说“回来了”，对方费解似的问道：“病好了？”我说：“好了、好了。”言毕大步流星往水道桥方向拐去。

46

我从猿乐町走上神保町大街，拐去小川町那边。我到这一带来，

目的一般都是逛旧书店。但这一天我无论如何都没情绪翻阅已经给人摸旧的书册。我边走边反复想房东家的情景。我脑袋里有刚才夫人的记忆，有小姐回家后的想象。就好像此二者在推我迈步。我时而不知不觉在路中间忽然站住，猜想夫人此刻恐怕正在跟小姐说那件事。又有时候想已经说完了。

我终于过得万世桥，爬上明神坡路，来到本乡台，之后又走下菊坂，最后下到小石川谷底。可以说，我走的距离横跨三区，画了一个不规则的圆。可是在这长距离散步时间里，我几乎没想到K。如今回想当时的自己，问自己何故我也全然不解，百思不得其解。若说我的心紧张得致使我忘了K倒也罢了，然而我的良心又不可能允许我那样。

我对于K的良心的复活，是当我打开格子门进入起居室即照例穿过他房间那一瞬间。他一如往常从书上抬眼看我。但没像往常那样说“回来了”，而问：“病好了？找医生看了么？”刹那间，我真想跪在他面前谢罪，而且我当时的冲动绝不为弱。假如只K和我两人站在旷野的正中，我肯定依照良心的命令当场向他请罪。然而里面有人。我的冲动就此打住，更可悲的是永远未得复活。

晚饭时K又和我见面。一无所知的K只是郁郁寡欢，丝毫没向我投以狐疑的目光。不知内情的夫人显得比平日兴奋。唯独我知晓一切。我吃着铅一样的饭。当时小姐没有像往日那样一同上桌。夫人催促，也只在隔壁应道就来。K不无诧异地听着。最后问夫人怎么回事。夫人说怕是不好意思吧，说着朝我看了一眼。K更觉诧异，追问有什么不好意思的。夫人微笑着看我的脸。

从一上餐桌，我就从夫人脸上猜出个八九分。但我怕夫人为了回答K而当着我的面全盘托出。毕竟夫人对这类事情全然不以为意。我真个胆战心惊。好在K又恢复了沉默。夫人虽比平日兴致高些，也总算没把话推进到我惶恐不安的那点上去。我舒口气返回房间。但我不

能不考虑自此以后应对K采取怎样的态度。我在心里设计了好多种辩辞。然而在K面前都不堪一击。于是卑怯的我懒得再试图向K解释自己。

47

这样过了两三天。不用说，两三天时间里那种对K怀有的不安一直压在我胸口。我本来就觉得对不起他——如果不想法为他做点什么的话——而现在夫人的语调和小姐的态度又一直强烈刺激着我，于是我愈发痛苦。夫人有一种男人气质，说不定什么时候在餐桌上把我的事一股脑儿捅给K。并且自那以来小姐对我显然不同以往的举止言行也很难说一定不会成为怀疑的种子而使得K心头布满阴云。我的处境促使我无论如何必须把我同这对母女间形成的新关系告诉K。但我已意识到自己有伦理上的弱点，这件事对于我实在比登天还难。

无奈，我考虑是否求夫人告知K，当然是趁我不在的时候。但若如实相告，我无疑没了面子，区别无非直接间接罢了。而若请夫人巧言粉饰，夫人势必追问缘由。假如将所有情况一一坦白之后相求，我必须宁愿把自己的弱点暴露在自己所爱之人及其母亲面前。而我认为——拘板的我只能这样认为——这将涉及我将来的信用。结婚前便失去恋人对我的信用，哪怕失去一分一毫对我都像是不堪忍受的不幸。

总之，我是个准备走正路却不由失足的傻瓜或者滑头。而觉察到这点的，眼下唯独天和我的心。但若退回去重新起步，必然陷入现在的失足为周围人所共知的窘境。我想把自己的过错一瞒到底，同时又必须往前移步——如此左右为难，进退不得。

过了五六天，夫人突然问我那件事跟K讲了没有，我回答还没有。夫人责问为什么，我立时呆若木鸡。至今我仍记得夫人道出的令人震惊的话：

“怪不得我说时他一副奇怪的样子。你也够不好的了，平时那么亲密，怎么好闷声装得没事似的呢！”

我问夫人K当时说什么来着，夫人答也没说什么。但我不能不进一步细问。夫人本来也没什么好隐瞒的，便道一句“的确没太说什么”，随即把K的反应一一讲给我听。

综合分析夫人所言，K似乎是以最为平静的惊愕迎接这最后一击的。K就小姐同我之间结成的新关系，一开始只说一句“是吗”。当夫人说“你也高兴高兴”时，这才看着夫人沁出一丝笑意，说了一句“恭喜恭喜”，随即欠身离座。拉开茶室隔扇前，又回头看着夫人问：“结婚什么时候？”然后说：“很想送点贺礼，可我没钱送不成。”坐在夫人面前的我听到这里，顿觉胸口一阵堵塞。

48

算起来，夫人跟K说完已有两天多了。两天多时间里K对我的态度同以前毫无差异，我也就完全疏忽了。K那超然的态度纵令只限于外表，也是值得敬佩的，我想。我在脑袋里将他和自己比较，似乎他远比我地道。我胸间翻腾这样一种感觉——我虽用计取胜，但作为人却是失败了！想到K那时大约很不屑，我独自一阵脸红。然而时至如今再到K面前自取其辱，对我的自尊心是极大的痛楚。

我反复举棋不定，而决心等到第二天再做计较是在星期六晚上。没想到K这天晚上自杀了。现在想起那情景我还为之战栗。平时枕头朝东躺下的我，唯独这天晚上枕头朝西铺下褥子也可能出于一种什么因缘。一股由枕头吹入的冷风突然把我吹醒。一看，K和我房间之间平时拉得严严实实的隔扇，此时和上次那个晚上同样开着。但K的黑影却不像上次那样立在那里。我仿佛得到了暗示，一边撑臂爬起，一边定睛往K房间窥看。灯火苗若明若暗点着，被褥也铺着。但棉被像被蹬开似的在脚部堆在一起，K本人头朝那边脸朝下伏着身子。

我叫了一声“喂”。但毫无回音。我又招呼K，问他怎么了。K的身体仍然一动不动。我一跃而起，跑到隔扇拉合处，借着昏暗的灯光从那里环顾他的房间。

这时我得到的感觉同突然听到K向我表白心迹时的大同小异。我的眼睛往他房间里一扫，顿时如玻璃球做的假眼一样停止了转动。我木棍一般定在那里。这一感觉如疾风掠过我之后，我又暗叫失策。一道无可逆转的黑色光柱贯通我的未来，一瞬间把我的整个生涯可怖地展现在我眼前。我浑身瑟瑟发抖。

尽管如此，我还是没忘记我自己，我的目光很快落在桌面放的一封信上。不出所料，上面是我的名字。我不顾一切地撕开信封。然而我预料的事里边一句也没有写。我本来猜想信上不知排列多少使自己难堪的词句，害怕给夫人和小姐看了受到两人莫大的轻蔑。我只看一眼，便舒了口气（当然只是就面子而言，而面子此时对我来说是至关重要的）。

信的内容很简单，甚至有些抽象。只说自己懦弱无能，前途无望，故而自杀。此外，以极简单的语句对此前我给予的关照表示感谢；顺便委托我处理后事；给夫人添了麻烦，让我代他道歉；委托我通知老家——必要事项分别交代一句，唯独小姐名字哪里都没出现。我读到最后，立即意识到K是有意避开了。但我感觉最沉痛的是最后似以余墨补写的一句话：本该早日死，为何活至今。

我以颤抖的手将信叠起，重新装进信封。按原样放回桌面，以使大家触目可见。之后回过头，这才看到溅在隔扇上的鲜血。

49

我猛然抱住K的头略微往上提。我想看一眼K的脸。但从下面看到他伏着的脸后，我当即松开了手。不光是战栗的缘故。他的头好像非

常沉重。我从上面望了一会儿刚刚摸过的他变冷的耳朵和他一如平日的浓密的分发头。我全然哭不上来，只感到恐惧。而且不仅仅是由眼前场景刺激感官引起的单纯的恐惧。我深深感觉到了这位倏忽变冷的朋友暗示给我的命运的恐怖。

我木然折回自己房间。在八叠空间一圈圈兜圈不止。我的脑袋命令我动起来，哪怕无功作业也好。我想我应该有所行动，却又不知如何行动。我不由自主地只管在房间里转个不停，犹如关在笼里的熊。

我几次想去里边叫醒夫人，但每次我都制止了自己：如此可怕的场面不宜给女人看见。夫人倒也罢了，而小姐无论如何不能让她受惊——这一强烈念头控制住了我。我又开始来回兜圈。

这时间里我点燃自己房间的灯，时而看一眼手表。那时的表真是慢得无以复加。我起来时间虽然说不准确，但无疑距天亮时间不远了。我边兜圈边等天亮。焦急的我真怕黑夜永远持续下去。

按习惯我们七点前起来，否则赶不上上课，学校大多八点上课。由于这个关系，女佣六点左右起床。但这天我去叫女佣还不到六点。夫人提醒我今天星期天——夫人被我的脚步声弄醒了。既然夫人醒了，我便求她来我房间一下。夫人在睡衣外披上便服，跟在我后面。一进房间，我赶紧把一直开着的隔扇拉严。然后小声告诉夫人出了大事。夫人问什么事，我用下颚指着隔壁说：“可不要怕。”夫人脸色青了。“夫人，K自杀了！”我接着说道。夫人蜷缩在那里似的默默看我的脸。此刻我突然跪在夫人面前，低头请罪：“对不起，是我不好！对不起您也对不起小姐。”在和夫人相对之前，我根本没打算说这样的话。但见到夫人时我不由脱口而出。无法向K道歉的我，不禁向夫人和小姐这样道起歉来——请你这样认为好了。也就是说我的冲动从我身上脱壳而出，摇摇晃晃启开了忏悔之口。值得庆幸的是，夫人没有体会出深层含义。脸色发青的夫人安慰我说：“既是意外之事，又有什么办法呢。”但她脸上的惊愕和恐惧紧紧钳住筋肉，恰如雕刻上

去的一般。

50

我虽然觉得不忍，但还是为夫人打开刚刚拉合的隔扇。想必K的灯油已燃尽，房间里一团漆黑。我折身拿来自己的灯，站在入口回头看夫人。夫人躲在我身后往里窥看，但无意进去。夫人叫我保持现场，把木板套窗打开。

到底是军人遗孀，夫人往下的态度委实深得要领。我去找医生，又去警察那里，但都是依夫人命令行事。在这类手续办完之前，夫人不让任何人进入K的房间。

K是用小刀切断颈动脉迅速死亡的。此外没有任何外伤。我在梦幻般幽暗的灯光下看到的隔扇血迹，原来是从他脖颈上一下子溅上去的。在白天的天光中我又清楚看了一遍，不禁为人血的势头之猛感到吃惊。

夫人和我尽可能巧妙、仔细地把K的房间洗扫干净。幸好血的大部分由被褥吸收了，草席没怎么脏污，打点起来还算容易。两人把他的尸体移入我的房间，按平时睡觉姿势放好。之后我给他生父家打电报。

回来时，K的枕边已经上香。一进房间，上香特有的味儿立即扑鼻而来。我看见两个女子坐在烟气中。昨晚以来我还是第一次见到小姐。小姐哭了。夫人眼睛也红了。出事后忘记哭的我此时终于悲从中来。我的心胸不知因悲哀而有多么宽释。被痛苦和恐惧紧紧攥住的我的心，终于因此刻的悲哀得到了一滴甘露。

我默默在两人身旁坐下。夫人叫我也上一炷香。我上完香又默默坐下。小姐什么也没对我说。偶尔同夫人交谈一两句，都是关于眼前

事的。小姐还没有余裕谈K生前如何如何。我心里到底庆幸，昨晚的惨状总算没让她看见。我害怕年轻漂亮的女子因目睹可怕场面而扭歪其花容月貌。甚至在恐惧感渗入我每一根发梢时，我都未能将这点置之度外。鲜花无罪而惨遭鞭打——我不愿意目睹这样的场面。

K的父兄从老家来时，我就K的遗骨埋于何处谈了自己意见。K生前我常和他一起去杂司谷一带散步，K很喜欢那里。记得我半开玩笑说过："既然那么喜欢，死后就把你埋在这里。"当然，现在即使履约把K埋在杂司谷也算不得什么功德之举。但只要我活着，我就要每月都跪在K墓前忏悔。也许出于迄今没人管的K凡事由我照料的情理上的关系，K的父亲和兄长都接受了我的意见。

51

参加完K的葬礼回来的路上，一个朋友问我K为什么自杀。事件发生后，我已不止一次受到同样问话的折磨。夫人也好小姐也好故乡来的K的父兄也好接得通知的熟人也好，以及和K毫无关系的报社记者也好，无不向我提出这同一问题。我的良心每次都像被针扎一般一下下作痛，甚至从问话的背后听出一个声音在说："快坦白是你杀的！"

我的回答对任何人都一样。我只重复他写给我的遗书，此外不多加半句。葬礼回来路上同样问我并得到同样回答的K的一个朋友，从怀里掏出一张报纸给我看。我边走边看他指给我的那个地方。上面写道K的自杀是由于厌世，而厌世是其父兄同他断绝关系造成的。我什么也没说，折起报纸还给对方。对方告诉我还有一家报纸说K是发狂自杀的。我忙得没时间看报，这方面的消息几乎等于零，但心里始终很介意。最怕出现给房东家添麻烦那样的报道。尤其受不了小姐的名字给捅出来。我问K的朋友此外还有别的写法没有，他说他见到的仅此两种。

搬到我现在住的房子是那以后不久的事。夫人小姐不愿意住在那

里了，我也为每天晚间都再现那天夜里的记忆感到痛苦，于是商量后搬了出来。

搬家两个月后我从大学顺利毕业，毕业不到半年就同小姐结婚了。在旁人眼里，一切都遂心如愿，须说可喜可贺才是。夫人和小姐也都显得十分幸福。我也是幸福的。可是，我的幸福总有黑影相随。我想，这幸福恐怕是最终将我引入悲剧的导火线。

结婚时，小姐——再不是小姐了，往下改称妻——妻似乎想起什么，提出两人一起给K上墓。我不禁心里一惊，问为什么突然想起这个。妻说两人一起上墓，K想必会高兴的。我定定看着完全蒙在鼓里的妻的脸，直到妻问我何以如此看她我才意识到。

依妻的愿望，两人相伴去了杂司谷。我往K的新坟上淋水清洗，妻在墓前上香、摆花。两人低头合掌。妻想必为使K高兴报告两人成婚的经过。我只在肚子里反复谢罪不止。

妻抚摸K的墓，说墓很不错。其实墓也并不出众，妻所以这样说，大概是因为我亲自去石铺看料挑选的关系。我把这新墓、新妻以及地下埋着的K的新骨连起来考虑，不能不感觉到命运对我的奚落。那以后，我决定再不同妻子一起给K扫墓。

52

我对亡友的这种感觉一直持续至今。事实上我也从一开始就害怕这点。就连盼望多年的结婚也未尝不可以说是在不安中举行婚礼的。可是我又想，人毕竟自己看不见自己的未来，在某种情况下这或者成为促使自己心情焕然一新从而进入崭新生涯的转机亦未可知。然而果真作为丈夫同妻朝夕相处，我这一线希望很快便被严酷的现实扫荡一空。同妻相对时间里，我会突然感觉到K的威胁。就是说，妻站在K和我之间，把两人紧紧连在一起。对妻没有任何不满意的我，只是在这

点上总想避开她。而这样一来，妻马上心有所觉。虽心有所觉，却不知所以然。妻时常追问我为何那么沉思默想，是不是有不顺心之事。若能一笑应付过去倒也罢了，但有时候妻发起脾气，以致最后抱怨道："你是讨厌我吧？"或者说："肯定有什么事瞒着我。"我每次都深感苦恼。

有好几次我都想一咬牙如实告诉妻。可一到关键时刻，就有一种自己以外的力量遏止自己。你是理解我的，没有必要解释，但有几句话我还是要说。那时候的我完全没有在妻面前粉饰自己的念头。如果我以对待亡友那样的善良之心在妻面前陈词忏悔，妻肯定流着欢喜的泪水原谅我的罪过。我所以未能做到，并非由于我有利己打算，只是我不忍心给妻的记忆抹上一个黑斑。在纯白色的物品上毫不留情地甩上一滴黑墨，这对我是极大的痛苦——请你这样理解。

一年过后我仍未能忘掉K，这使我常感不安。为驱逐这不安，我力图把自己埋进书本，开始发愤读书，等待将结果公诸于世那一天的到来。但是，勉强设定目标并勉强等待实现目标之日的到来终究是违心的，因而是不愉快的。我实在没办法再把心沉在书本之中，又开始抱臂观望这个世界。

妻似乎认为我心情所以能放松，是因为不为每日生计所迫。妻家的财产横竖可以维持母女两人的生活，我在经济上不工作也不碍事，所以妻这么看也情有可原。多少被宠坏的心情我也可能有的。然而我待着不动的主要原因并不在这里。当时被叔父欺骗，我无疑深切感受到人的不可信赖。但那只是觉得别人不好，至于自己还是地道的，心里边有这样一个信念：世人如何且不论，反正自己是正人君子。而这一信念由于K而土崩瓦解，自己也同叔父同流合污了。当我意识到这点时，我陡然动摇起来。对他人厌了的我对自己也厌了，于是动弹不得。

53

无法将自己活埋在书本中的我，有个时期曾试图以酒浸魂来忘却自己。我不说自己喜欢酒，但由于我这人要喝就能喝，便尽可能靠量来麻醉自己的心。这浅薄的权宜之计不久使我变得更加悲观厌世。我在烂醉之中忽然意识到自己的位置，意识到自己是个故意出此下策来伪装自己的蠢货。于是我打了个寒战，同时眼睛清醒心也清醒过来。有时候甚至怎么喝都无法进入伪装状态而一味下沉不止。况且在以技巧购得愉快之后，必有抑郁的反动袭来。我必须在自己至爱的妻及其母亲面前无时无刻不暴露这样的自己。而她们自然从她们自己的角度来解释我。

妻的母亲似乎不时对妻说出不大中听的话，妻瞒着没告诉我。但我终归是我，不单独自己谴责自己便觉过意不去。谴责也绝不用粗言粗语，毕竟妻说我什么我都几乎没有发过火的。妻屡屡央求我有什么不如意的地方只管提出，并劝我为自己的未来把酒戒掉。一次哭道“你这人近来变了”。光这么说还算好，甚至还说“若是K活着，你想必不至于这个样子”。我曾答说有可能。但我回答的意思同妻的意思截然不同，我内心很是悲伤。尽管如此，我还是不愿意向妻做任何解释。

我时不时向妻道歉，大多是在喝醉晚归的第二天早上。妻或笑，或默然，偶尔也潸然泪下。但怎么样我都不快至极。所以，我的向妻道歉同向自己道歉说到底是一回事。终归，我把酒戒了。与其说是在妻劝说下戒的，莫如说自己喝厌戒掉的。

酒诚然戒了，却没心思做事，只好看书。但看完也就完了。妻时常问我为什么目的看书，我唯苦笑而已。但在心底，想到就连世上最爱、最信赖自己的人也不理解自己，不由一阵伤感。而想到原本有使其理解手段却无使其理解的勇气，就愈发黯然神伤。我很寂寞，经常

觉得自己已切断同周围的任何关系而在这世上顾影自怜。

同时我反复考虑K的死因。也许因为当时脑袋里只有一个爱字，我的观察莫如说简单的、直线型的：K百分之百死于失恋。但当我以渐渐趋于平静的心情面对同一现象时，又觉得问题并不那么容易定论。现实与理想的冲突——但这仍不充分。最后，我怀疑他是由于像我一样孤独寂寞得不行才突然采取最后措施的。这又使我不寒而栗——一种自己也同K一样走在K走过的道路上的预感，开始风一般不时掠过我的胸际。

54

后来，妻的母亲病了。请医生看，医生说无可医治了。我竭尽全力予以看护。这固然是为病人，为了爱妻，但从更大意义来说，乃是为了人。在这以前我也一定极想做点什么，却什么也做不来，不得已才袖手度日。与世无涉的我第一次主动伸手多少做点好事——得此自觉也是在那个时候。一种只能称为赎罪的心情支配着我。

妻的母亲死了，仅剩下我和妻两人。妻对我说，日后世上能够依靠的只我一个人了。而自己都不能依靠自己的我，看着妻的脸眼角不禁湿润了，心想妻是个不幸的女人，并且这样说出口来。妻问何故，妻不明白我的意思。我也无法解释。妻哭了。我很后悔，正因为自己平时总是以扭曲的念头观察她，以致竟说出这样的话来。

妻的母亲去世后，我尽量亲切地对待妻。这不单单是因为我爱她本人，而且还似乎有和她本人无关的更广阔的背景，这同我看护妻的母亲时的心情是完全一样的。妻看上去很满足。但满足的背后，似乎含有因不理解我而产生的朦胧的淡淡的疑云。不过纵然妻理解了我，这种美中不足之感也只能有增无减。较之来自广义人道立场的爱情，女人更喜欢只集中于自己一身的亲昵，哪怕偏离一点常理。我觉得女人的这种性质是甚于男人的。

一次，妻说男人的心同女人的心为什么就怎么也不能完全贴在一起呢，我敷衍道大概仅限于年轻时候吧。妻似乎回想一会儿自己的过去，之后轻轻叹了口气。

从那时开始，我胸间不时有可怕的阴影闪过。最初只偶尔袭来，我心头一震。但时过不久，我的心便同那可怕的一闪两相呼应起来。最后，即或外面不来，我也觉得那东西与生俱来似的潜伏在自己心底。每当我有如此感觉之时，我就怀疑自己脑袋是否出了问题。然而我没有心绪找医生或什么人看。

我只是深深感到人的罪孽。这个感觉使我每月都去看K的墓，使我看护了妻的母亲，使我好好对待妻。因了这一感觉，我甚至想让不相识的路人鞭打我一顿。慢慢在此阶段移行过程中，我开始觉得与其由别人鞭打，还不如自己鞭打自己；与其自己鞭打自己，还不如自己杀死自己。万般无奈，我决心以死掉的心情活下去。

下此决心后，至今过去多少年了呢？我同妻像以前那样和和睦睦。我同妻绝非不幸，而是幸福的。但我身上的一点——对我来说这非同小可的一点，在妻眼里似乎总是个暗影。每念及此，我未尝不觉得对妻有愧。

55

决心以活当死的我的心，不时因外界刺激而一阵雀跃。然而一旦我朝某个方面迈步时，便不知从哪里冒出一股可怕的力把我的心狠狠一攥，使我全然动弹不得。并且那股力分明对我说："你没有做事的任何资格！"闻此一言，我顿时瘫痪下去，而稍后我又要站起时，便又是狠狠一攥。我咬紧牙关，大叫为什么干扰人家。只听那股力冷冷笑道：明知故问！于是我重新瘫倒。

表面上生活得风平浪静的我，内心总是伴随如此惨烈的鏖战——

你就这样认为好了。在看着我干着急的妻面前，我本身不知有多少次更是干着急得火烧火燎。在我身陷牢笼而无法安静不动之时，在我无论如何都冲不出这牢笼之时，我开始认识到：对我来说我容易做到的终归只剩下自杀。或许你瞠目惊问何故。因为那总是来攥紧我的心的不可思议的可怕的力，尽管在所有方面把我的活动紧紧封住，却留下一条我可以自由进入的死之路。待着不动倒也罢了，而多少一动，就只能滑进那条路，别无他路可走。

迄今为止，我有两三次想走进这条命运指引的最容易的路。但每次都为妻所吸引未果。我当然没有勇气携妻同行。连向妻讲明一切都不能做到的我，怎么能作为自己命运的牺牲品而剥夺妻的天寿呢？这种野蛮行为，一想都让我惊恐，如同我有我的宿命，妻自有妻的命运。两人捆在一起付之一炬，在我看来何止勉强，简直是惨不忍睹的极端。

同时，想象我不在后的妻，每每不胜怜悯。母亲死时她说的日后世上能够依靠的只我一人了那句感慨，如沁入肺腑般留在我记忆里。我总是犹豫不决。望着妻的脸，也曾打消这个念头，木然伫立不动。妻不时以有所不满足的目光打量我。

请记住：我便是这样活过来的。第一次在镰仓见到你时也好，同你一起去郊外散步时也好，我的心情基本无大变化。我的身后无时无刻不有黑影相随。我是为了妻而拖曳着生命在世上踽踽独行的。在你毕业回乡期间也是如此。约好九月同你再见的我并非说谎。的的确确是想见你的。秋去冬来冬亦尽，而见你的念头是坚定不移的。

不料，夏天最热的时候明治天皇驾崩。当时我觉得，明治精神始于明治天皇终于明治天皇。受明治天皇影响最深的我辈再活下去毕竟也已落伍了——这一感觉剧烈撞击我的胸口。我向妻明确地这样说了，妻笑而不睬。不知想起什么，妻突然向我开玩笑道：那么殉死好了！

56

我几乎忘掉殉死这个词了，平时用不上，大约沉在记忆底部快要朽了，听得妻的玩笑我才记起。我回应妻说：假如自己殉死，就殉明治的精神。我的回答当然不过是开玩笑。但我当时觉得这个已经不用的老字眼里已有新义装了进去。

此外大约过去了一个月。大葬之夜，我一如往常坐在书房里，耳听葬礼开始的炮声。炮声仿佛告知明治已永远离去。事后想来，那同时也是乃木大将永远离去的通知。我手拿号外，不自禁地向妻连说殉死。

我在报纸上看到乃木大将死前写下的一段文字。当我读到“自西南战争被敌夺旗以来数次欲一死抵罪而竟活至今日”的时候，我不由屈指计算乃木决意自杀后活了多少年。西南战争发生在明治十年，至明治四十五年相距三十五载。三十五载乃木似乎一直伺机自杀。我在想，对于这样的人，是活三十五年痛苦呢，还是插刀入腹那一瞬间痛苦呢？

此后过了两三天，我终于决心自杀。正如我不清楚乃木的死因，你恐怕也难以理解我自杀的缘由。果真如此，那是时势推移造成的人之差别所致，自是奈何不得。也可能说是人之性格差别使然更为贴切。我自以为我已经为了使你最大限度理解这个莫名其妙的我而在以上叙述中尽了一切努力。

我留下妻而去。唯一令我欣慰的是，没有我之后妻也不至于为衣食住担忧。我不愿意给妻以残酷的惊吓。我打算死得不使妻见到血的颜色。我要在妻不知觉时间里悄然离开这个世界。我希望妻以为我是突发性死亡。即使以为我发狂而死我亦无憾。

从我决心一死了之已有十多天过去了。大部分时间用在给你写这

冗长自传的一节上面，但愿你这样认为。起始打算见面告诉你来着。但动笔之后，觉得还是这样更能清晰地描绘自己，不由暗自高兴。我不是心血来潮才写的。作为人的经验的一部分，我的过去除了我无任何人可以讲述。所以将其忠实留下来的我这个努力，在了解人上面，无论对你还是对其他人，我想大概都不是徒劳的。就在前几天我听说渡边华山为创作一幅名叫邯郸的画，而将死期推迟一个星期。在旁人看来或许多此一举，但本人心里自有本人特有的希求，怕也是迫不得已。我的努力也并非仅仅为了履行对你的诺言，而大半是应我自身需求的结果。

但我现在已满足了我的需求，再无事可做了。这封信落到你手里的时候，想必我已不在人世，早已死去了。妻十多天前就到市谷叔母家去了。叔母有病缺人照料，我劝她去的。这封长信的大部分便是妻不在家时写下的。妻有时回来，妻一回来我就赶紧藏起。

我将我的过去——无论善恶——供人参考，但只有妻除外，这点请你答应我。我什么都不想让妻知道。让妻对我过去的记忆尽可能保持清白是我唯一的愿望。所以既然我死后妻还活着，那么就请你把我仅对你一人如实公开的这一切，作为秘密永藏于心。

---

(1) 勘当：日语，意为断绝父子关系，逐出家门。